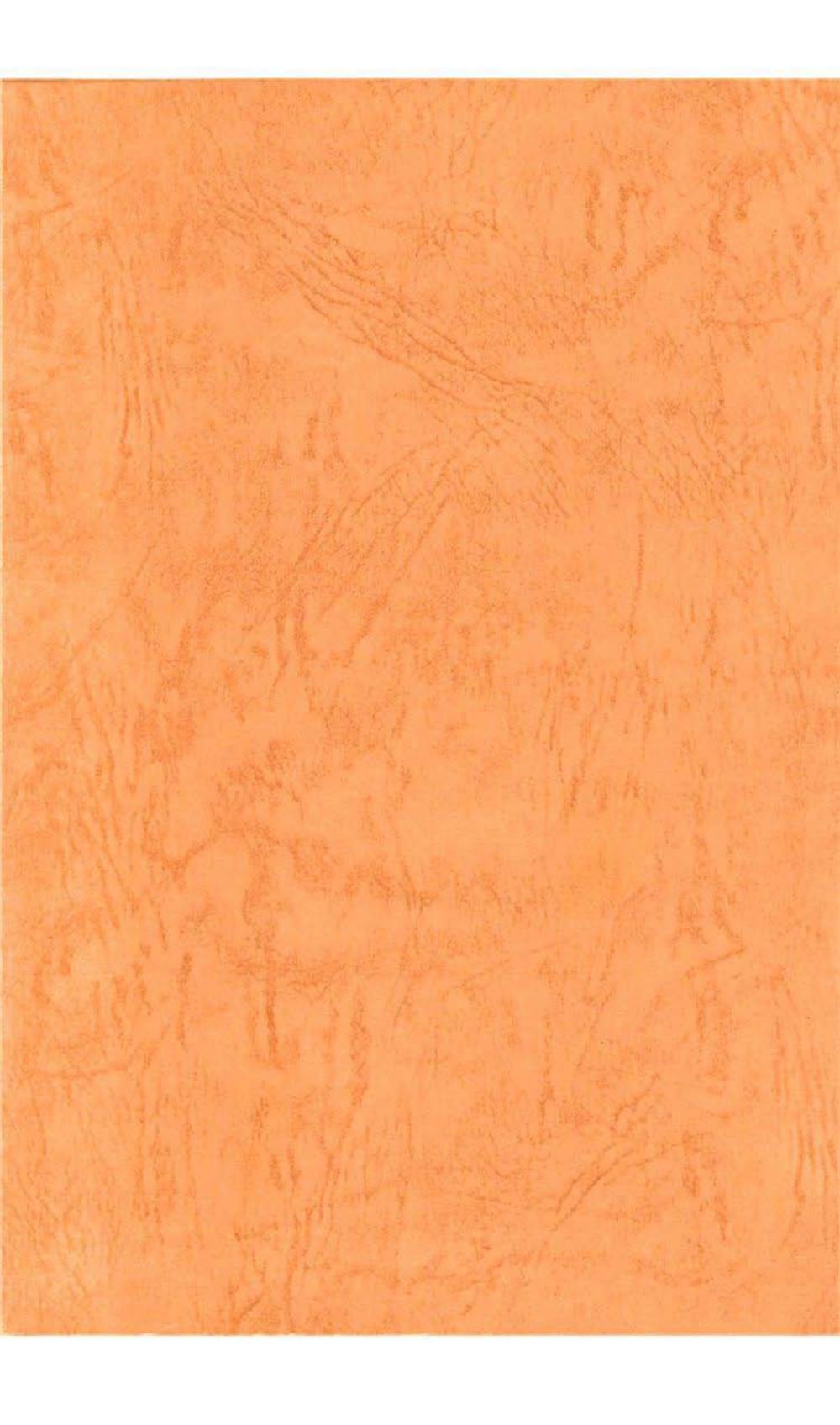


2013 RENKU NENKAN



連句年鑑

平成二十五年版

| 「第三十二回連句協会総会・全国大会の記」 | | |
|----------------------|--|--|
| | | |

「第二十七回国民文化祭・とくしま2012文芸祭「連句の祭典」 奮戦記」

俳諧の茶事……… 詩の言葉―「尾上の宮」の転生… なりゆきと座―連句の宇宙…… …大久保 本 奥 田 屋 喬 良 樹……21

評 論 エッセイ

顧

平成二十四年の連句界:

田 忠 勝……37

和

— 3 –

| - 11 | 伊豆芭蕉堂連句会 | 「庭の眺め」75 | 「潮の目は」 |
|-------------|--------------|-------------|--------------|
| 作品 | 「つばくらめ」58 | | 戸切子」 |
| 会津の会 | 「一文字」 | 「精 霊 舟」76 | 「江戸風鈴」94 |
| 「雪解水」43 | 伊勢原連句会 | 解纜 | 「胡瓜揉み」95 |
| 赤のままの会 | 「春まだき」60 | 「龍 の 玉」77 | 「焼 酎 の」96 |
| 「囀 や」44 | 市川俳諧教室 | 蛙の会 | |
| あした連句会 | 「半 夏 生」61 | 「男 梅 雨」78 | くさくき川口支部 |
| 「二日はや」45 | 「古楽器展」62 | 河童連句会 | 「連句碑を」98 |
| 「逃げ水の」46 | いなみ連句の会 | 「かごめかごめ」79 | くさくき北九州支部 |
| 「枯 蓮 の」47 | 「藤 二 尺」63 | 桂の会 | 「立夏かな」99 |
| 「生 身 魂」48 | 「庭の柚子」64 | 「山 雀」80 | 「飛鳥三山」100 |
| 「余花明り」49 | いわき文音連句の会 | 「竹 の 春」81 | 「鷺 - 羽」101 |
| あした梶の葉連句会 | 「雪 像 を」65 | 「飛 顨 の 里」82 | 「芝 桜」102 |
| 初 6 | WEBめぎつね座 | かびれ | 草笛句会 |
| あした芭蕉記念館連句会 | 「たのしい三句たち」66 | 「牧 牛」83 | 「山 法 師」103 |
| 「白 蔵 や」51 | NHK文化センター青山 | 「思惟仏」84 | 興聖寺連句会 |
| あした日比谷連句会 | 「初 鰹」68 | | 「生きざまに」104 |
| 「塵 劫 や」 | 桜花学園大学連句研究会 | 「山 葵 咲 く」86 | ころも連句会 |
| あしべ俳諧塾 | 「ハロウィン」69 | 其 角 座 | 「遙瀬かな」105 |
| 「ほととぎす」53 | 丘の上連句会 | 「ゆうだちや」87 | 「蚊帳の中」106 |
| 天の川連句会 | 「立春の風」70 | きさらぎ連句会 | 「初 懐 紙」107 |
| 「紅葉散る」54 | 「木 犀 の」71 | 「フェニックス」88 | 柴 庵 |
| 伊賀連句会阿保小菊会 | 岡山県連句協会 | 如月連句会 | 「日八日 夜八夜」108 |
| 「旅立つ朝」55 | 「わが地球」72 | 「銀 輪」89 | 栄連句サロン |
| 伊賀連句会いがまち座 | 桶川連句会 | 樹の会 | 「蒲公英の」 |
| 「罹災者を癒す」56 | 「冬 蜂 の」73 | 「小 晦 日」90 | さくら草連句会 |
| 石手寺連句会 | おたくさの会 | くさくき | 「巻 芭 蕉」 |
| 「六 尺 の」57 | 「北 斗 星」74 | 「汗 - 斗」91 | 「渇きの街」113 |

| 清の會なでしこ | 泗楽連句会 | 中央連句会 | 桃夭樹唫聚 |
|--------------|----------------|-------------|--------------|
| 「年 忘」11 | 「伊勢俳諧」134 | 「のうぜん高く」152 | 「新豆腐」171 |
| 佐久良連句会 | 駿河台白雲連句会 | | |
| 「神楽」116 | 「コスモスや」135 | 「旅の荷を」154 | 「クリスマス」172 |
| サザン | 裾野連句会 | 「機関車広場」155 | 徳島連句懇話会 |
| 「鈴 闌」117 | 「宗祇句碑」136 | 千代の会 | 「青 葡 萄」173 |
| 「冬立つや」118 | 成城連句会 | 「法 師 蝉」156 | 都心連句会 |
| 獅子門 | 「エンディングノート」137 | 「露ひとときを」157 | 「師を偲ぶ」174 |
| 「支考忌追善俳諧」119 | 「鬼 の 子」138 | 筑波・東京連句会 | 「涼 新 た」175 |
| 「翁忌追善俳諧」120 | せんだい座 | 「百人の美女」158 | 「雑 木 山」176 |
| 獅子門友楽社 | 「あぢさゐ」139 | 「慈恩春色」159 | 南草連句会 |
| 「初しぐれ」121 | 草門会 | 筑波・津幡連句会 | 「磯の香り」177 |
| 獅子門麗水社 | 「開店バーガー」140 | 「笑 い 皴」160 | 「松 虫 や」178 |
| 「ねぶかしろく」122 | 「迦陵頻伽」141 | つばさ連句会 | |
| 獅子門藜杖社 | 啐啄会 | 「ひねもす」161 | 「句を拈る」179 |
| 「初しぐれ」123 | 「秋 時 雨」142 | 天神連句会 | 白水台連句会 |
| 「薫風や」124 | 「枯枝の」143 | 「天神〜」162 | 「余白の水」180 |
| 下町連句 | 武生連句の会 | 「酢漿草の」163 | 白塔歌仙会 |
| 「木 戸 泉」125 | 「木 芽 雨」4 | 桃雅会 | 「京の雛祭」181 |
| 「煙水晶」126 | 館林連句会 | 「竹落葉」164 | 花音連句会 |
| 四宮会 | 「光の粒子」145 | 「八 咫 島」165 | 「水底に」182 |
| 「夏 袴」127 | 「雉 鳴 く」146 | 「金 環 食」166 | 巴世里連句会 |
| 樹氷連句会 | 遅刻坂連句会 | 刀水の宴連句会 | 「ペルセウス流星」8 |
| 「竹 の 春」128 | 「遅刻坂」147 | 「みちのく路」167 | 羽曳野連句会 |
| 湘南吟社 | 「雲 上 に」148 | 「片 陰」168 | 「ダモクレスの剣」185 |
| 「破魔矢」129 | | 稲門連句会俳諧西北の風 | 浜風 |
| 「彼 岸 花」132 | 「哟 よ」 | 「白 い 雲」169 | 「横浜といふ」186 |
| 「新盆に」133 | 明日はハレルヤ」151 | 「合 掌 し」170 | 「十二月八日」187 |

| 大久保風子/今村 苗/白根順子 | 大久保 | | <編集後記> |
|-----------------|------------|------------|----------------|
| 3 | | | 連句協会会員名簿 |
| 24 | | | 全国連句グループ概況 |
| | | 4と募集 | 「私の好きな一巻」発表と募集 |
| 1 | 「四万六千日」219 | 「達磨の忌」208 | 「明月記」197 |
| 若笹連句会 | ラピロス連句会 | 美晴連句会 | ひょんの会 |
| 「白 百 合」233 | 「捨 舟」 | 「花づくし」207 | 「日だまり」 |
| 連句ななの会 | 「老いの足」217 | 水無月連句会 | ひよどり連句鈴の会 |
| 「苔の花」230 | 横浜ベイサイド連句会 | 「松過ぎて」206 | 「陶祖の神」195 |
| 連句研究会 | 書 三 味」 | 「窓」連句会 | ひよどり連句会毎日 |
| 「検査入院」229 | 瑶沙連句会 | 「習 ひ 事」205 | 「火吹き竹」 |
| 「トロ箱の」228 | 「千 羽 鶴」215 | 勾玉連句会 | ひよどり連句会産経 |
| 「東京駅の」227 | 夢々連句 | 「長靴の闇」204 | 「投網打つ」193 |
| 「一朶の雲」226 | 「底砂の」214 | ほれぼれ座 | ひよどり連句会東京 |
| 連句会遊子座 | 悠の会 | 「霧 氷 林」203 | 「稲の花」 |
| 「流 鏑 馬」 | 「甲斐連山や」213 | 「パンダ二世」202 | ひよどり連句会KCC |
| 連句会「遊」 | 「青首大根」212 | ほほほ連 | 「網 糸」 |
| 「夏 怒 濤」224 | 「三歳の子」211 | 「ゼウス神」201 | ひよどり連句会 |
| 連句会未恋座 | 山梨県連句協会 | 「今日のかたち」20 | 「夏の夜や」190 |
| 「氷 面 鏡」223 | 「冷 酒」210 | 北杜連句塾 | B 面 |
| 連句会ひらめき | メロウ連句塾 | 「越路」 | 「寒 禽 や」189 |
| 「桜 守」 | 「見えぬもの」209 | 「虫の音や」 | 「初 霜 に」 |
| 竜神連句会 | 宮城県連句協会 | 風狂連句会 | 美々っと連句会 |



を行い、法人としての活動を行うことになる。 平成二十五年三月二十四日(日)、第三十二回総会・全 平成二十五年三月二十四日(日)、第三十二回総会・全 を行い、法人としての活動を行うことになる。

総会後の連絡事項では、「国民文化祭山梨大会」に向けを披露してみせた。 を披露してみせた。

での総会開催に道を開くことと思われる。 (小池正博)車の作品発表。当日の出席者百十八名のうち六割程度が関西・四国方面からの参加で、協会の会員以外にも十名の参での総会開催に道を開くことと思われる。 (小池正博)

第二十七回 国民文化祭・とくしま2012

文芸祭「連句の祭典」奮闘記

はじめに

るところから始まった。御存じのように、徳島県は第22回 第27回国民文化祭は異例のスタート・ラインに立たされ

2007年に国民文化祭を実施している。したがって、も

う40数年は当番県として回って来ないものだと誰しも思っ ていた。ところが、2011年の2月3日の朝刊には突如

国文祭来秋徳島で開催」という記事が発表されたのだ。

2012年の開催担当県が空白になって決定していない

から5年しか立っていない貧乏弱小県が再度の御勤めをし ということは知っていたが、まさか2度目の、しかも前回

徳島県の4大文化、阿波踊り・人形浄瑠璃・藍染・第九の

なければならないという理由が解せなかった。その上県は

合唱 であるということから)をメインとして取り上げ、あとは (ベートーヴェンの第九交響楽の本邦初演が徳島の地

それぞれの文化団体が工夫をしてやりなさい、故に財政的

にも事務上の労力にも県はノータッチであるというのだ。 に基づいて実施、徳島県連句協会はその運営を担当すると いう形で動き出したのである。 したがって、県とは関係なしに文化庁と連句協会の契約

実施内容

②実作を中心に据え、その外、付帯事業として ③ワーク ものにしなければならない。そこで、①作品の募吟と表彰 制約の多い今回ではあったが、やるからには意義のある

は ショップ 「阿波の国から始めよう 連句ルネサンス」とした。 ④交流会を行うことにした。キャッチフレーズ

8

連句作品の募集

品集を作るにしても、募集用紙を作るにしても半歌仙の倍 も歌仙をという声は多かった。しかし、考えてみると、作 のスペースが必要となる。そうかといって半歌仙にするの

募吟の形式は二十韻にした。前回は歌仙だったので今回

句数も少なく、しかも現代にふさわしい形式として生み出

はせっかくのキャッチフレーズの趣旨に合わない。そこで

に取り組むことによって、この形式の典型が生みだせない された二十韻を採り上げた。東明雅氏案の二十韻を全国的 かと期待したからでもあった。 た。 れ、高校生の作品にたい 文部科学大臣賞のほかにも、各種の賞10作品が選出さ

が、 出足が遅く、予定の50巻に達するかどうかが心配された 締め切り間際にどっと到着。 最終的には742巻になっ

そのうち、海外からの作品が4巻、

高校生の作品が3

受付期間は平成24年2月1日~5月10日。初めのうちは

卷。 蕉肝・鈴木千恵子・鈴木漠・鈴木了斎・二村文人・佛淵健 選者は、 浅沼璞・臼杵游児・狩野康子・小池正博・近藤

を8月4日、日本青年館において実施。協議の上、文部科 悟 和田忠勝 (敬称略・五十音順)の11名。最終の審査会

学賞を

「風の音符」の巻(服部秋扇捌)に決定した。

尊重したが、 て、それぞれの選者の、 最終的な決定は、選者それぞれが付けた点数の集計順を 一堂に会し、話し合い確認をすることによっ 連句に対する評価の基準、着眼点

唆される点も確認され、有意義な選者会議となった。

を加えて3座)

ップさせるとともに、これからの連句の評価のあり方を示

の差異などが理解され、

連句の評価の難しさをクローズア

入賞者にはハガキで連絡。

しては奨励賞 (3巻) が承認され

秋の「連句の祭典」に参加く

ださるようご案内した。

平成24年10月20日(土) ワークショップ(於 徳島グランヴィリオホテル) 13時~16時

前回は吟行を行ったのであるが、今回はそれに替えてワ

ークショップを行うことにした。 んだのは、 いるが、 自分たち個々のサークルでは、それぞれ研修が行われて 全国的な規模の大会の中で研修に正面から取り組 初めてのことであろう。「ルネサンス」の主張

実作 者が何人集まるか懸念された。しかし、やってみると大盛 況で、会場ももう一部屋増やさねばならなかった。 の研修をし、また、 翌日実作をするという熱心な参加

A句の付け方(初心者のグループ。児童生徒のグループ B和漢連句

(希望者多く3座)

にふさわしい企画だと自負していたものの、実作会の前日

9

Cソネッ

の6種類、延べ11座の活動を展開することが出来た。 Dテルツァ・リーマ Eオン 座六句 F非懷紙 $\widehat{2}$ 本駄右衛門の小林静司氏を筆頭に櫻田野老・鈴木了斎・二 村文人の方々&東條士郎の5人。

座

佐知子・

鈴木漠

·梅村光明

・浅沼璞・狩野康子・式田恭子

講

師

は竹内菊

・和田忠勝

·赤田玖實子·臼杵游児

・鵜飼

時期開催県山梨関係者からも「武田節」の御提案。また

1

見学された。 敬称略 順 不同) の10名。 参加者94名。 県知事も現場を

同 H 18時~21時

交流会 於 徳島グランヴィリオホテル)

か せられ 全国 連句人の懇親を図るためにも、 ない。また、 そこで行われるアトラクショ 交流会の楽しみはか ンも県

外から来られる方にとっては良き思い かし、 今回は運営資金のゆとりがない。 出になるはずだ。

ていただいた意味がないと、 徳島県連句協会では、 阿波踊りは出さなければ徳島へ来 無理をしてでも番組 のなかへ

組み込むことにした。が、それ以上の知恵は出なかっ その事情を察して、小林静司氏から有志のメンバー

をしては 川勢揃いの場」が誕生することになった。 いかがとご提案をいただき「歌舞伎白波五人男稲 出演者は、

瀬

県内から阿波人形浄瑠璃青年座の友情出演申し込みも頂い て「三番叟」の賑やかさを加えることが出来た。 宴最後 の阿波踊りは全員で踊っていただき、盛り上がり

0

なかで会を閉じることが出来たのは幸せであった。

会場を変えて、 平成24年10月21日 連句の祭典」 表彰式 いよ <u>E</u> いよメインの表彰式と実作会。 実作会(於 四国大学交流プラザ)

10

先ずは、 歓迎アトラクション「阿波木偶箱廻し」で寿ぎ

開会の幕を切っ た。

文化庁から市橋義史氏の御挨拶、続いて徳島県鎌田義人

氏・連句協会臼杵游児氏の御挨拶を頂いて表彰式に移っ

文部科学大臣賞(服部秋扇)()内は受賞者、敬称略。

で余興

た。

 \Box

島県知事賞

国民文化祭実行委員会会長賞(衆議判 代表服部秋扇)徳

(岡部七兵衛) 第27回国民文化祭徳島県実行委



実作会は座30席、

一十韻 昼食が実作会場では取ることが出来ず(大学の講義に用 て生まれた阿波関係俳諧書籍の書名から取った。 実作作品 箙 の形式は捌きにお任せし、歌仙・半歌仙のほか 短歌行 蜻 蛉・オン座六句など多彩であっ

が、

心配していたよりも

スムーズにゆき、ほっとしたのが

ればならない不便をお掛けした

そのため、会場外の道路を隔て

たホテルまで移動しなけ

られる建物で飲食禁止

正直なところだ。

時間が

十分取れなかったにもかかわら

講評が 和田 忠勝 狩野 康子・近藤蕉肝(敬称略)の選者

阪日向)

以上の方々が賞

を受けられた。

励賞

(富山県立南砺福野高校

高田実·神戸龍谷高校

田竹風

永禮未鬼

· 北野眞知子) 徳島県連句協会会長賞奨

(大月西女) 徳島県連句会長賞

長

徳島市教育委員会教育長賞

(渡部

葉月)

連句協会会長賞

員会賞

(福永千晴)

徳島県教育委員会教育長賞

(城依子)

徳島市長賞

(服部秋扇

からなされ、

入賞者を代表して服部秋扇氏からご挨拶があ

実作参加者156人、席名は、江戸期にお

ず、捌きの手際よさで、ほとんどの座が巻き終わったのも

おわりに

ありがたかった。

本大会が今までとは違った形で実施されたので、とまど をしました。ありがとうございました。 (東條士郎) を引き無事に終えることができたことを感謝して の御協力を頂き無事に終えることができたことを感謝して がる。特に臼杵会長、和田理事長そして国民文化祭担当伊 がしました。ありがとうございました。

詩の言葉―「尾上の宮」の転生

奥 田 勲

勉強しないで鴨が鳴いてる

この庭を必ず訪わんいつの日か

(二〇一一・一一・二二於コロンビア大学

NYの大学の日本文学専攻の大学院生に連句の話をした

時、ぜひ実作の体験をしてみたいというたっての希望で、

と心配していたのは全く杞憂に終わった。しかもこの付句の一付合である。日本語に通じているとはいえ、大丈夫かわずか三〇分のガイダンスで、いきなり半歌仙を試みた時

の作意を聞いて、さらに驚いた。鴨が鳴いているのは、か

おのずから口を衝いて出たのだろう。言葉に新しい、思いいでも「を」でもいいのだろうが、掛け言葉を学んでいて、という。日本の古典を学ぶ教室で、A先生が古典文法の助下に、なんと「このニは?」という仕掛けが隠されているという。日本の古典を学ぶ教室で、A先生が古典文法の助でも「を」でもいいのだろうが、掛け言葉を学んでいて、ののセントラルパークだという、そしてNYを去っても、必のセントラルパークだという、そしてNYを去っても、必のセントラルパークだという、そしてNYを去っても、必

*として紹介しておきたい。がけない命を吹き込む連句の醍醐味の一端が知られる断片がけない命を吹き込む連句の醍醐味の一端が知られる断片

界に遊弋しておられる方々に申しあげることではないかもご存じだろうか、とは日頃連句という高度の知的遊戯の世話題はがらりと変わる。「尾上(おのえ)」という言葉を

が、すぐさま「高砂の尾上の桜咲きにけり」という百人一しれない。現代の連句にはあまり歓迎されない言葉だろう

しかも辞典の類には、「山の上」とか「峰の上」、多少詳し首に取られた匡房の詠が口を衝いて出る向きも多かろう。

くて「山の峰つづきの高所」などと明快な語義が掲げられ

— 13

人がいかに好んだ歌語か分かる。 なども含む)を詠み込む古典和歌は一五○○首を超え、古 歌大観』CDで検索すると、「尾上」(「尾の上」、「をのへ」 された言葉なのに、何か違うな、何か説きおおせていない その時その時の気分や調子で「解釈」をほどこして、逃げ しれないが、そんな私にとって昨年うれしい(はずの)こ なという思いは払拭されないままであった。ちなみに、『国 る。そうか、と思いつつ、「オノエ」にはどうも単なる山 それの「上」の方のことだよと教えられたような記憶があ てきたという反省がある。古来の歌人・連歌師・俳人に愛 しているようで曖昧な語彙に対して、心が晴れないまま、 ないだろうと思う。私も、初め「尾根」の「尾」だろう、 の高い所ではない不思議な魅力を感じていた。近寄りがた ている。しかし、この短い語彙が指し示す本当のものが何 い異界や他界のように聞きとっていたのかもしれない。そ であるか、説明を求められていささか困惑する方は少なく このように大袈裟にいうことか、とお叱りを受けるかも 長年、この分かっているようで分らない、はっきり 載するのが一般であるから、『古語大観』が何故「敢えて」 分は歌舞伎の名跡の尾上家についてであるし、肝心の語義 大辞典』には一一行を費やして解説している。ただし、半 だがこの辞書の見出し項目の表記は「現代表音式」である が持てなかったから割愛したのかと邪推したくなる謎であ 識があってのことと考えたいが、ひょっとして語義に確信 項目を設けなかったのは、合成語の扱いとかしかるべき見 とにかく項目として存在する。ハンディな古語辞典でも掲 は「山の高いところ」とだけのあっさりしたものであるが、 る。既刊のものでは、サイズも匹敵するような『角川古語 然「尾上」は範囲内である。なお、古語辞典としては異例 ろう。全四巻の第一冊が「あ」から「お」までである。当 刊行である。この空前の古語辞典について贅言は必要なか の惹句による)が私のささやかな期待を裏切ったのであ から、「をのへ」は「お プロ仕様」の「理想の辞書」(いずれも函に掛けられた帯 四万語」の語彙数を誇る「構想三〇年、編纂二〇年」の そこを開いた私は驚いた。項目が見当たないのである。 のえ」に配列されることになる。

14

とがあった。

『古語大観』第一冊(東京大学出版会刊)の

る。

初めから脇道に紛れ込んだかのような話であるが、これ

以来「尾上」に過剰反応するようになってしまった私にと

って、 連歌作品として著名な『河越千句』(文明二年〈一

四七〇〉成る)の、

をりて見る花だにおしき真萩原

古 (道古・太田道真)

尾上の宮の爪木とる道

かはりゆく跡に昔の袖濡れて

敬(心敬)

雅 (中雅・道真侍者僧)

(第一百韻 五五・五六・五七)

は格好の材料になった。しかも尾上にあるのは宮である。

解説している「尾上の宮」を当てはめるのは簡単である。

ここですなおに、古典の注釈やら古語辞典やらがこぞって

いわく、 聖武天皇が奈良の高円山の上に設けた離宮は 「尾

上の宮」と呼ばれ美麗とロマンに象られていたが、やがて

退転して、今は賎の男が爪木を求めて入ってゆく山になっ てしまった。という時世の変化を悲哀の情感として表わす

句の流れである、 と。

七五)である。心敬はこの千句の宗匠という立場であり、 この三句続きのセンターにいるのは、心敬(一四〇六~

について何か発言していないかと、心敬の著作を点検して 孤高の中世詩人として名高い。その心敬自身が「尾上の宮」

みることにした。そして、『芝草句内岩橋』(本能寺本)か

ら次の行文を得た。

涙は袖にふる宮の内

爪木とる尾上となれる里は荒れて

ひとへに、水無瀬の宮の御跡のあはれを申侍り、皇居の

ほか のはるかの嶺に、 尾上の宮と名付け給ひて、 かたじ

けなく住ませ給ひし所も、遠嶋に御うつりの後は、ほど

なく民の賎屋どもの爪木の道となれる悲しさの心にて、

里は荒れてと申侍るは、 御製に

里は荒れて尾上の宮のをのづから

待ちこし宵も昔なりけり

あらましの解説を加えて置く。ある連歌の席で某が、「涙 理解しているのである。 要約すると、心敬は

「尾上の宮」の所在を水無瀬として

聖武天皇ゆかりの奈良の高円山で

は、 が袖に降る」と「古宮」をかけた表現である。それに心敬 は袖にふる宮の内」という句を詠んだ。「ふる宮」は「涙 「爪木とる尾上となれる里は荒れて」と付けたのであ

説明する。 る。 この付けどころについて尋ねられた心敬は、次のように 「爪木」は燃料にするために折りとった小枝をいう。

この付け様は、ひとえに水無瀬の宮の旧跡のあわれを申 したのだ。皇居とは別の遙かなる峰に、「尾上の宮」と

民の爪木を取るために入ってゆく山道になってしまった

御製というのは、このままでは不分明だが、後鳥羽院の詠 とあるのによっているのである。

(『新古今集』恋四) であることはいうまでもない。

待ちこし宵も昔なりけ

悲しさを表現したのである。「里は荒れて」というのは、 名づけられて、もったいなくも住まわれた所も、遠い島 (文脈から隠岐島である) に移られたのちは、間もなく 里は荒れて尾上の宮の自づから

御製に、

『芝草句内岩橋』は、奥書によれば、心敬が奥州会津の

はない。

興俊大徳の懇望によって書いて与えたものである。しか

ę' 『河越千句』と同じ文明二年の著作である。興俊とは

若年時の猪苗代兼載(一 その若い兼載が、心敬の句集『芝草』を読んで、付け方や 四五二~一五一〇)の名である。

作意についてなお知りたいと願い、心敬がそれに応えて自

というのは「磐梯」の古名で、 が、兼載の招きで会津を訪れた折のことで、書名の「岩橋」 注を加えて与えた書である。晩年に東国に流浪した心敬 磐梯山麓の住人猪苗代兼載

に与えたことを示唆している。

本題に戻る。水無瀬が後鳥羽院の故地であり、今に水無

*

瀬宮が存するのは周知のことに属する。連歌では特に、宗 祇・肖柏・宗長による名作「水無瀬三吟百韻」を生んだ場

所でもある。 しかし、水無瀬に「尾上の宮」があったこと

16

は管見に入らない。心敬は、「皇居のほかのはるかの嶺に、

しかし、ここには少し問題がある。この記事の末尾に引尾上の宮と名付」けられたと、ためらいもなく述べている。

る。この歌は、建仁二年(一二〇二)『水無瀬恋十五首歌る。この歌は、建仁二年(一二〇二)『水無瀬恋十五首歌

かれる和歌、「里は荒れて」は、確かに水無瀬での詠であ

にも収録されている。けれども、尾上の宮の主人が山麓で合』の後鳥羽院歌で、『新古今集』にも『後鳥羽院御集』

果てた高円山の尾上の宮で、わびしく帝の来訪を待つ官女

詠むとは考えられない内容である。この歌はあくまで荒れ

ろう。心敬は水無瀬の尾上の宮の解説をしつつ、適切でなの哀話も昔のことになってしまったという趣旨のものであ

なお調べてゆくうちに次の例に逢着した。

い挙例をしてしまったのであろうか。

たちかへりいつか水無瀬の春の暮

尾上の宮の桜ちる比

(宗長注) 水無瀬に尾上の宮あり。

(『愚句老葉』 一五四·一五五)

る。水無瀬の春の前句に、宗祇は尾上の宮の桜の句を付ける。水無瀬の春の前句に、宗祇は尾上の宮と反応したのを追認している注である。水無瀬の春の前句に、宗祇は尾上の宮があると注を加えた。

葉』の自注本で、のちに宗長がさらに注を加えたものであ

の宮、隠岐の国御うつりの後、桜ばかり残りけるをみて、水無瀬殿に、尾上の宮とて後鳥羽院の御隠居所あり、そ

(『老葉注』頴原文庫本・一二一・一二二)いつか院の御還御なりて御覧ぜんと思ひし心也

17

同様である。ほかにも同類の証跡があるが、結論として、と解説している。曖昧な点もあるが、基本的に心敬の説と

「尾上の宮」は室町時代に至って、連歌師たちの手で、南

都の高円山から摂津の水無瀬に移動させられたということ

になろうか。

.

『愚句老葉』は、宗祇(一四二一~一五〇二)の句集『老

ようやくここで本題に入る。高円山の「尾上の宮」は奈

聖武天皇の聖域に存し、 良時代に形成され、長らく愛された歌枕であった。 しかも ただし、 後鳥羽院自身に次の詠歌があることを付け加えて

かつその旧跡も悲哀とともに回顧

され、多くの歌に詠まれ、歌枕として確固たる地位を持ち、

体的な風景の中に描かれるようになった。 したがって、 「尾上」のイメージも高円山 という極め その印象が薄れ て具

悲劇 てい 0 の帝王が登場し、 た かどうかは確認できないにせよ、 水無瀬という新しい「場」が提示さ 後鳥羽院という

せ、 に構築され、 れるに及んで、 やが て連歌師たちの手によって後鳥羽院世界が水無瀬 高円山の 詩人たちは聖武天皇に後鳥羽院を重ね合わ 「尾上の宮」は水無瀬 0) 「尾上の

では本当に 「水無瀬の尾上の宮」は実在したのか。

後鳥羽

宮」として再生したのではないか。

正治元年 一九九) で、 今の水無瀬宮の 地である (明月

天皇によって水無瀬に建てられた最初

の離宮は、

記)。 の難 やがて、 遭い、 翌年新たな離宮が百山 建保四年(一二一六) (ひゃくざん、 に大雨によっ 現存 て流失

定家は 0) 麓 に造営された 「水無瀬殿の山 (明月記*注)。この離宮につい の上の御所」 と記している (拾遺愚 て藤原

草)。しかし、「尾上の宮」という呼称は同時代にはない。

おかなければならない。

水無瀬山木の葉あらはになるままに

尾上の鐘の声ぞちかづく

(最勝四天王院障子和歌・水無瀬川)

「水無瀬山」 である、「尾上」である。しかし不思議なこと

が二つある。 ひとつは、 最勝四天王院障子和歌は承元元年

(1:10七)

に詠まれて

いることである。山上に水無瀬離

18

宮が新営されたのは建保五年(一二一七)であり、それの この 鐘 十年 の音だから、 歌 も前のことである。 は、 「水無瀬川」 尾上にあるのは寺のはずである。さらに、 の絵に寄せて詠まれたにもかかわ もうひとつは、聞こえてくるのは

らず、 山と詠み替えたのには説があるがここではふれない。さら 可 歌は じく山上離宮建立前の承元四年(一二一〇)院三十 「水無瀬山」 であることも不思議である。 川を

歳 の詠、

水無瀬山入相の鐘に年をへて

みそぢあまりの冬ぞちかづく

後鳥羽院御集)

言葉だったからではない なく、詩人の想像力を刺激する山上の「異界」を暗示する う。それを可能にしたのが、「尾上」が単なる山の上では かとも思う。

ものとなり、水無瀬の山上に理想の離宮を新営した。後世 が最愛の地水無瀬に尾上の宮を構想し、そこに在る自身の にも同様の背景が読みとれる。これらから、若い後鳥羽院 仏道修行の姿を予見していたと考えるのはいかがであろう やがて水害という契機があったのせよ、それが現実の は、 だいた方々にどれほどお役に立てたか、不安なままにこの 稿を閉じることにするが、ここまで読んでくださった方に くない話題であったのではないか、またこれを読んでいた 『連句年鑑』に寄稿するには、連歌に傾き過ぎて相応し あらためて冒頭の「この庭」の付合を再読していただ

師たちが水無瀬に「尾上の宮」を仮想した淵源をこ きたいとお願いする次第である。

どんなものにも、栄光と衰退と交替の歴史がある。それ

こに求める余地があるのではないか。

の連歌

か。

宮は、 を如実に示している例ではないだろうか。水無瀬の尾上の 日本の詩の歴史から見れば、きわめて短い時間で姿

起こすのにどれほど意味があるか覚束ないが、私が長年気

を消してしまった歌枕である。それをこのような形で掘り

なく、外的な条件が変化すれば容易にそれを受け入れて詩 に貢献するエレメントだということが分かったように思 にしてきた「尾上」のイメージは決して一元的なものでは

【注】『明月記』建保四年二月八、二十四日の条

亜相又水無瀬山上造営新御所〈為眺望耳〉、此前後

惣尽海内之財力、又引北白川白砂云々〈遼遠

驚耳、 振件白砂運之云々〉、

(亜相 した 〈眺望の為だけの建築である〉、この前後の土 (源通光) は又水無瀬の山上に新御所を造営

木には、すべて海内の財力を尽くした、又北白川 の白砂を山上に引き上げるということだ〈距離の

· 亜相被造営新御所、山上有池、池之上被構滝、塞河

為引石云々、国家之費只在此事歟、

掘山、

一両日引水、又件滝為立大石、

兼遣取材木、

(亜相の造営された新御所は、山上に池があり、池

の上には滝を構え、河を塞ぎ山を掘り、

一両日水

を引いた、又件の滝の石を立てた、兼ねて材木を

取りに遣わしたが、それは石を引き上げる為だと

云うことである、国家の費えは只この事であろう

か

なりゆきと座―連句の宇宙

大久保 喬樹

学、 俳句の親である連句についてはそれほどの様子は見られな 広く注目され、論じられてくることが多かったのに比べ、 な短詩形式として、その詩表現としての独自性、可能性が 立した個人の作品としての文学、詩という通念が続いてき なものではないとされてきた気配があったのではないか。 とと見られて、文学だの芸術だのと正面切って論じるよう これは、いうまでもなく、正岡子規の近代俳句論以来、独 私は連句にはまったくの門外漢だが、専門とする比較文 どちらかといえば趣味人たちが集まって楽しむ遊びご 文化の立場から興味をもってきた。俳句が世界にも稀

> たいと思ってきたのである。 らためて連句という文化が内包している可能性を考えてみ

連句の楽しさはまずなんといっても付けあいの妙にある

く、誰にも予測のつかないその変化、つまり、なりゆきに らわれてくる眺めの変化を楽しむわけだが、ここで肝心な が決められているわけではない。次々に走者が代るごとに のはなりゆきということである。リレーといってもコース 転じて後続走者にバトン て先行走者の前句をにらみ、付かず離れず、微妙に方向を とは衆目の一致するとこ コースは転じていき、それに従って周囲の風景が変ってい を渡す、そのリレーから次々にあ ろだろう。全体の流れを背景とし

身をゆだねるのである。

たとえば、「猿蓑」巻の五ではこんな具合である。

鳶の羽も刷(かいつ 一ふき風の木の葉しづまる くろい)ぬはつしぐれ 去来 芭蕉

股引きの朝からぬるる川こえて

凡兆

史邦

たぬきををどす篠張の弓

初冬のしっとりとした風景を詠んだ発句、その余情をう

た結果といえるだろうが、この通念を外したところで、あ

うな、 くる。 いか。 続きでありながら微妙に趣きの違った眺めがあらわれてく えながら、 というこの菖蒲田はさして広いものでもなく、一見、ただ 通する文化原理とでもいうべきものが働いているのではな がら歩み出す気配が伝わってくるような滑り出しだが、こ 景が詠まれる。 それに応じるように、やはりとぼけた趣向の田舎暮らし情 けた脇句につづいて、第三句にいたると、いささか趣向を るのである。連句と庭と絵巻、それぞれ分野は別ながら共 れを追っていくと、あたかも回遊式庭園をめぐっていくよ 転じて、少々滑稽味をおびた人物描写に移り、第四句では、 の菖蒲田である。明治天皇が昭憲皇太后のために作らせた 面に様々な種類の菖蒲が植えられているだけのように見 たとえば明治神宮の内苑として設けられた旧代々木御苑 かにも芭蕉を囲んだ一門がたがいの呼吸を探り合いな 足を進めるごとに、あるいは目を動かすごとに、一 あるいは山水絵巻をたどっていくような気分がして その中をゆるやかに曲がりながら続くあぜ道を 菖蒲であっても花の種類が変わり、それを眺める角度、そ 質な美学を菖蒲田は示していることだろう。規模もささや 庭園美学で、その壮麗、 把握できるところにある。いかにも絶対君主にふさわしい とよばれるこの造園法のねらいは、見る者が一挙に全景を 渡されるように設計されている。「ビスタ」(通景、眺望) 並木の列、その間にはさまれた泉水などが一望のうちに見 集約したような豪壮な宮殿中央の鏡の間の外に設けられた 庭園などとは対照的なものだ。太陽王ルイ十四世の栄華を は微塵もなく、固定的で退屈とも感じられる。 倒的なものだが、その代わり、変化の妙というようなもの テラスから眺めおろすこの庭園は、左右対称一直線に続く まれている。数歩進み、 るうちに万華鏡のような効果を生み出すのである。 の周囲や背景のトーンも変わって、そうした変化が連続す かなら、そのささやかな庭の中を、小さな虫かなにかのよ それは、 これに対して、同じく一国の君主の庭ながら、なんと異 フランス式庭園を代表するヴェルサイユ宮殿の 整然と秩序づけられた有り様は圧 わずかな角度曲がるだけで、 同じ

22

進んでいくにつれて微妙に眺めが変化していくように仕組

うに、道なりに右へ左へ

と振り回されるように進んでいく

をゆだねることによって、まさに草むらの中で虫が出会う 化といっても大げさなものではない、ほんの陰翳の移ろい ような様々な変化の妙を楽しむことができるのである。変 ら眺めるというより、風景に入りこみ、風景の一部と化し る風景の変化をたどっていくうちに、しだいに風景を外か な感性があれば、盆栽のうちに深山幽谷の気配を感じとる のようなものにすぎないが、その微妙な相を味わう細やか のと同様、十分、壷中天地の境地を満喫することができる のだ。そうやって、道なりに進み、それにつれてあらわれ となる。この移り変わりを順に眺めていくのは、様々な風 会うものなのである。 る体験である。そして、 際の庭園をめぐる以上に森羅万象の変化を凝縮して味わえ りの中を通過していくことでもあって、その意味では、 景の中を旅していくと同時に、春夏秋冬という季節の て、明治神宮御苑菖蒲田の曲がりくねった小道をたどって いく時のように、絵巻の進行に沿って歩きながら次々に出 イユ庭園のように一挙に全体を眺めわたせるものではなく その森羅万象の変化は、ヴェルサ めぐ 実 23

という造りもまったくいじましいほどだが、その造りに身

繁華な市中家並みの背後に雪山がひろがる冬の眺めで結び

て行く……。 美学とでもいうべき文化原理によって動いていくのが連句

こうして回遊式庭園や山水絵巻にも共通するなりゆきの

ークな詩の形式の醍醐味はあるだ

一句ごとに作者が入れ替

帯のような巻き紙に自然の風景の移り変わりを描く山水

絵巻を眺める時にも同様の体験をすることがある。たとえ ば雪舟の代表作とされる「山水長巻」。全長十六メートル まってしばらく松の木が乱れ茂る山中の風景がつづいたあ ほどにもおよぶこの大絵巻は、隠者めいた人物が従者を連 れ険しい岩山の道を登っていく春先とおぼしい場面から始 ろう。とりわけ連句の場合には、 であり、そこにこのユニ

その間には、仏塔や高楼、民家、橋などが点在し、最後に

と、船が行き来する涼しげな水辺に転じ、再び山中、水辺、

わることにより、はるかに流動性、偶然性に富んだ展開と

リレーしていくのと同じような仕組みといえる。 ちょうど、ジャズで、参加した奏者が、 なる。次々に当意即妙の気合で方向が転じていき、 かけぬ眺めの移り変わりに身をゆだねて楽しむのである。 次々に即興演奏を 思いも

段取りに組み込まれたままで、それ以上広く、自由なとこ ただ、ひたすら、その瞬間瞬間のひらめきのままに遊び戯 ない。見通しをたて、段取りを考え、それを順にこなして れるのだ。ふだんの暮らしや仕事ではなかなかそうはいか る、ちょうど乗り合い船で川下りに興じるように。 身をさらしながら、なお、流れにまかせることによって次々 が、それでも連句本来の命は、やはり、そうした危うさに ているわけだが、それではもともと自分でたてた見通し、 にあらわれてくる思いがけない展開を楽しむところにあ ば、駄洒落めいた句や投げやりな句がつづいて連句の体を どでは、馴れ合いから一層この無責任さが増大し、しばし 間違えれば、無責任ということにもなり、仲間うちの会な かまわない、いや、むしろ見通しなどたたないほど面白い、 こうしたでたらめに堕する危険を防止するため、あれこれ なさないような醜態をさらすことも少なくない。それで、 いくというのが効率的で実際的であって、大抵はそうやっ の作法がもうけられたり、宗匠の指導があったりするのだ 当然ながら、このなりゆきまかせということは、ひとつ それこそはまさに遊戯の醍醐味である。先の見通しなど く。そして、主人と客という立場の差もなくなり、参加者 容はそれを見守るが、次は客が、脇句を付けるように、点 ない。まず初めに、主人が、発句を詠むように、茶を点て、 ら客へと茶をリレーしていく共同作業の仕組みにほかなら 特質が見られるだろう。 制作の仕組みにほかならないわけだが、このユニークな座 ある。つまり主客交代であり、この作業がくりかえされ、 かぎらず、同時期に発達した茶会の仕組みなどに共通する けなかった世界へ導かれる感覚を体感するのだ。 ことによって、自分を超える広く、自由な感覚、思いもか ひきつがれて、連句が巻かれていくように茶会は進んでい てられた茶を飲む役にまわって、主人はそれを見守るので りの枠を取っ払い、裸の自分を偶然の流れの中に放り出す の文化というものの意味合いについても考えてみたい。 でもなく、一同が円座を組んで応酬、合作するという共同 ろに出ることはなかなかできない。そうした見通しや段取 この仕組みの場合も、 さて、こうした連句の醍醐味を支えているのは、いうま 茶会とは、一口でいえば、主人か なりゆきの原理同様、連句だけに

とになる。連句のプロセスもまさに同様のものだ。これが 座の文化ということである。 全員が対等の立場でひとつのパーフォーマンスを演じるこ 理をあわせてみると、芸術家個人の主体的、自律的な表現 こうして連句を支えているなりゆきと座という二つの原 たが、上に述べてきたような連句や茶会に共通するなりゆ とどまらず、近代芸術、 評価されてよいのではないか、単なる過去の文化の継続に きと座という二つの原理についても、こうした視点から再 り落ち込んだ孤立性、閉鎖性を打ち破る新たな芸術、文芸 への展望を開く世界として見直してよいのではないか。し 近代文芸が個人性にこだわるあま

ることが多かった理由もそこにあるだろう。 それはそれでかまわない。無理に連句も芸術であるなど

を基本とする近代芸術一般の原理とはまるで対照的なもの

連句の真骨頂はあるだろう。 の枠組みから解放された、自由な遊びであるところにこそ と強弁する必要はない。むしろ、そうした窮屈な近代芸術

近年、近代芸術あるいは近代文化、近代文明全般の行き

詰まりを乗り越えようとするいわゆる脱近代(ポストモダ ン)文化の可能性を摸索する試みがさまざまな領域でなさ

れてきており、その中で、これまで過去の遺物として見捨

てられてくることの多かった近代以前の文化のありかたを

新たな視点から再評価する動きが見られるようになってき

いて、ひとつ洒落てみようということになるのである。日

での待ち時間などに、ふと無聊を慰める遊びとして思いつ

であることがわかる。連句が芸術よりは遊びと見られてく めた連詩の試みなどはその好例といえるだろう。

ばらく前から大岡信らの現代詩人が諸外国の詩人たちと始

の作法も知らなければ、 術はいくらでもそこらにあるだろう。私などは、初めに述 とした機会に思いついて真似事に興じることもたまにはあ べたように、もともと全くの門外漢で、きちんとした連句 会に出たこともない身ながら、ふ

屈をこねなくても、もっと気軽に、日常的に連句を楽しむ

いささか小難しい議論になってしまったが、そんなに理

25

る。とりわけ外国で友人たちと気楽な旅を続けたりしてい

る時にそんな気になることがある。長い汽車旅の間や、駅

う一泊懇親合宿の目玉として全員参加の連句制作をおこな をしたうえで、百名前後の学生たちをそれぞれ十名程度の ない。まず入学後、最初の顔合わせの際にこの企画の趣旨 作品例をまとめたパンフレットを配って簡単なレクチャー を説明し、連句の歴史、基本的な作法、過去の先輩たちの するのが一番だろうという趣旨からの企画なのである。 初めて出会う場でたがいに人柄を知り合い、仲間意識を培 どしく記した跡も旅中らしい記念となるだろう。 が深まっていく。あらかじめの巻き紙の用意もないので、 がらやりとりするうちに、仲間と旅をしているという思い 手近なトイレットペーパーを拝借し、ボールペンでたどた いるが、ここでは、毎年、新入生の歓迎行事としておこな 日常の暮らしを遠く離れた解放感と一抹の哀感をまじえな いような今時の大学新入生にいきなりやらせる訳にはいか い、また日本文学の伝統を実感するには一緒に連句を制作 っている。これは、全国各地から集まってきた学生たちが といっても、それまで連句という言葉も聞いたことのな また、私は都内の女子大学の日本文学科で教鞭をとって く。若干の例を紹介するとこんな具合である。 下、時には、見回りに寄る教員のアドバイスをうけながら、 号を決めるところからとりかかり、ついで班長の指揮の な場所に陣取って、持ち寄ったお菓子などつまみながらわ 分れて制作にとりかかる。合宿先は都心から電車で一時間 長たちだけを集めて連句制作の練習をさせて進行役の心得 よちよち歩きの保育園児の遠足のような具合に進んでい ほどの郊外田園地帯にある広々とした緑豊かな施設なの をのみこませてから本番となるのである。 いわい雑談まじりに始める。まず班のチーム名、各人の雅 で、各班はそれぞれ庭の一隅なり、屋内の座敷なり、好き 当日は昼頃、合宿現地に集合して昼食後、早速、各班に 春風にそよぐスーツの新しさ 初デート痛みをこらえ彼のもと ふたり見上げたかささぎの橋 チーム名 ヒールを鳴らす大学の門 クリームあんみつ さくらんぼ みかん 黒豆 みつ 26

本の季語にはないような物珍しい異国の風物を折り込み、

班に分け、班長を決める。ついで、日を変えて、今度は班

| | の領域がありそうである。 | にろうか。 | 統文化の雰囲気に感化されたというところだろうか。 |
|----|----------------------------|---------|----------------------------|
| | な茫漠とした宇宙にはまだまだ探訪すべきさまざまな未知 | それなりに伝 | しおらしい気配をみせるのがほほえましい。それなりに伝 |
| | 連句の宇宙は深く、広い。その融通無碍ともいえるよう | してはなかなか | くのは当然として、今時のモダンガールにしてはなかなか |
| | | の句ばかりが続 | どうであろう。年頃の娘たちとなれば恋の句ばかりが続 |
| | いだろうか。 | | |
| | う効用はありそうである。まさに座の文化のご利益ではな | みつ | 歳月越えて再び君と |
| | ちとけ、学科共同体の一員たる自覚をもつようになるとい | 黒豆 | 橋の上天の川の夜ふりかえる |
| | ようになるかはともかく、見ず知らずの間柄だったのがう | 寒天 | ポストに届く幸せの音 |
| _ | この行事で学生たちがどれだけ伝統文芸の世界になじむ | アイス | 桜舞うまた歩きたい井の頭 |
| 27 | 歓迎連句会はお開きとなる。 | 黒豆 | 冬芽ふくらむホワイトデー |
| _ | 票、上位得票チームには賞品が贈呈され、めでたく新入生 | きなこ | 届けたい気持ち詰まったチョコレート |
| | をふるう。これが一通り終わると全員で優秀作の判定投 | あんこ | ひいたおみくじ待ち人きたる |
| | か慣れているようで、どのチームも臆せず自作解説の弁舌 | さくらんぼ | 晴れ着着て帯のきつさに青ざめる |
| | を競うのである。こうしたプレゼンテーションにはなかな | 白玉 | 私の身体鏡餅かな |
| | 合してチーム順に成果を発表、それぞれのアピールどころ | みかん | 鐘が鳴る静かな部屋で蕎麦喰らう |
| | などで遊んだ後、翌朝第二ラウンドへ。大ホールに全員集 | さくらんぼ | サンタも来ない清しこの夜 |
| | 第一ラウンド終了。夕食後は、百人一首、花札、トランプ | 白玉 | 冬ひとり外の寒さが身にしみる |
| | か午後いっぱいかかってチームごとに半歌仙が仕上がると | 黒豆 | 君の想いも今は遠くて |
| | ともかく、一句ごとにキャーキャー騒ぎながらもなんと | 白玉 | 十五夜の月の明かりで文を書く |

俳諧の茶事

本 屋 良 子

の理念には相通じるものがあると思っていました。 私はかねてから利休の「わび茶」の精神と芭蕉の「軽み」

芭蕉が 「西行の和歌における、宗祇の連歌における、 雪

舟の絵における、 一なり」と『笈の小文』で述べている精神です。 利休が茶における、その貫道するものは

ありました。 利休の師である紹鷗は室町時代の連歌師であり茶人でも 彼はつねづね「連歌は枯れかじけて寒かれと

言います。 (山上宗二記)

言ふ。

茶の湯の果ても其の如くなりたき」と教えていたと

その辺のところを先ずは探ってみたいと思います。 連歌

のルーツは古事記の昔に遡るのですが、盛んになった室町

す。執筆は文台を前にして懐紙をのせ、右に硯箱を置いて

一方、

縁を背にして四人の連衆が描かれていま

《猿の草紙》

大英博物館の 絵柄といい、 「猿の草紙」というのが以前紹介されまし 絵の中に書き入れられた言葉といい、他

愛もない猿の世界を描いているのですが、当代の史実を踏

まえていると見られています。

すが、その時の一連の模様を描いたのが、この絵草紙なの し、その後しぶざねが婿を招待して、連歌会を催したので です。永禄年間の成立と考えられています。 これは比叡山の神官しぶざねの娘が横川弥三郎に嫁入り

あとは一首の長歌で終っ その連歌は一順、再扁も過ぎるころまでの描写がされ、 ています。登場するのは猿で、絵

も主要な猿に限って衣装を着せています。

主と並び、 とりそへ」それを背にして主客と客一人、執筆、宗匠、亭 かい合って着座し、 当日の連歌会は、 間 座 口三間、奥行二間の座敷に二列に向 敷をかざり、天神の名号に三具足

います。

に向って茶を点てている猿と、ほかに二匹の猿がいて、一 次に連歌会の座敷に連なる四畳半の図柄が描かれ、台子

匹は連歌の座敷に茶を運ぼうとしています。左の会記はそ

の時の茶の湯の道具立てを記しています。

おくの四でう半に茶の湯を仕、くろぬりのだいすになら

ふろそへ、こしきがましあはせ、ふたをきはほやかうろ、

水さしはだき桶、水こぼしにはがうし、絵は舜挙の花鳥、

上下は金地の小もんのきんらん、中はあかぢの鳥だす

を袋に入、黒台にすへ、茶は別儀をつくもに入、花は貨 風帯一もんじまでけつこうをつくせり。さがら天目

これは鎌倉時代に行われていた広間での茶の湯ではな 狄の船にいくべし。

また連歌と茶の湯が同時に行われていたことを示して 四畳半で茶が点てられるようになっていたことを物語

ここではあくまでも連歌会が主で、茶の湯は従の

扱いであることが分ります。

いて、会のあり方において、あるいはその道具と趣向にお このように鎌倉から室町にかけての茶の湯は、精神にお

もあります。

から急に衰えていったのは興行場所の寺社が、 鎌倉時代末期に盛んであった花下連歌が南北朝になって その喧噪を

いて、連歌から多くを学んで来たのではないかという見方

嫌って禁止したとする説も出されています。 そんな時代背景から、 歌僧正徹が現れ、その弟子の心敬

の発句を詠む身構えに「心の艶」があります。心敬は「ひ

え、こほり、寒く、やせたる」ことを句に表現しようとし ます。心敬の「雲はなをさだめある世の時雨哉」の句に唱

和して、その後宗祇が「世にふるもさらに時雨の宿りかな」

29

と詠み、これを踏まえて芭蕉は「世にふるもさらに宗祇の

宿り哉」と詠んでいます。こういう心敬僧都から芭蕉に至

ります。「冷、凍、寂、枯」 る「わび」の心は、利休の「わび茶」にも通じる心でもあ の中世美学は利休提唱の創作

茶の湯にも通じるものがあります。

茶事の記録として、名古屋の晩台が江戸へ赴く時に催され たものなど多々残っております。そんな俳諧の茶事を体験 室町時代を中心に書い てきましたが、江戸時代の俳諧 0

してみようというのがこれからの記録であります。

1 地歌舞伎》

寄付 広間

床 掛物 飯田明風 Mi

本屋良子 賛

文台 獅子門 藜杖社の二見形文台

私は昭和六十一年に故桃径庵式田和子宗匠の手引きで猫

蓑会に入り、故東明雅師の指導を受けていましたが、昭 和

六十二年に夫の転職で岐阜へ転居となり、芭蕉の弟子各務

支考を始祖とする獅子門に入門いたしました。連句一筋 平成七年に獅子門藜杖社の詞宗に推挙され、ま

すます連句の道に励むことになりました。

来まして、

平成 十二年の井波の全国連句大会で知事賞をいただいた

そのお祝いにと俳諧の茶事の亭主を奨められま

事により、

が昭和五年に作られた地方結社で、 藜杖社というのは獅子門以哉派二十九世の山田三秋宗匠 私はその結社の六世を

務 め、 現在は瀬尾千草さんが七世を継い でいます。

この文台はその山田三秋宗匠が作られた物で、表には二

「二見とは松の朝日に梅の月」という各務支考の句が書か 見浦と扇面に梅と月の絵が描かれ、裏面には三秋書による

れています。

控の 間である寄付には、この時の知事賞をいただいた巻

が掛けられています。 の良子発句 「地歌舞伎の主役大もてぬくめ酒」の俳画の軸 寄付に硯と筆、懐紙を載せた文台を

持ち出して、ここで表六句を巻きました。

半歌仙 「満ち足 るやし

捌 本屋 良子

満ち足るや添水の音の一つづつ

数寄者の庵に游ぶ月光

秋狂言大きな招き掲ぐらん

バスを待つ間の心はれやか

夏袴つけゆるり座りぬ

蓋取れば塗椀

の松瑞々し

でいただきました。にわか亭主の私はほとんどを茶の師匠 発句は現在の獅子門四十一世鴻々園大野鵠士宗匠に詠ん

の森崎宗由先生にゆだねることになりました。

鵠士

お茶事というのは茶道具から懐石に至るまで亭主が用意 炭斗 掛物 初座 小吸物 椀盛 菓子 汁 香合 釜 香の 預鉢 焼物 羽箒 八寸 酒 向 物 犬鷲 太鼓 唐物籠 栗 鳥丸 京芋万頭 風炉 淡々斎筆「露堂々」 まさり草 鯛と松茸のはさみ焼 久寿玉 ぶどうの和え物 合みそ ひらめ あわび 栗麩 切合鬼面風炉 大吟醸 もってのほか 豆腐団子 大根 松花堂 菊菜の炊き合せ 人参 大葉 ながら過ごしました。耳を澄まして居りますと、大小中中 懐石の席 る雰囲気そのものでした。 け、亭主の盃を次客が受けるという正に俳諧で一座してい 亭主と客の間で交わす千鳥の酒は、正客の盃を亭主が受 お世話になってしまいました。 大と銅鑼が鳴り後座の準備が整った報せがありました。 なのですが、 しなくてはならないのですが、 懐石をいただいている間はくつろぎの時間となり、特に 獺の髭見え隠れ川の岸 \mathbf{x} 誰にでも優しすぎるわ彼の癖 々のメダル争ひシドニーに 裹 シャンパンの盃高く祝ぎ歌 蒔絵の筥にしまひたる文 ひそひそ話交はす暗闇 の後でも付け合 お手洗いを済ませたり、付け句を案じたりし いました。中立は茶席の休憩時間 裏の一句目から十二句目までは この時は森崎社中の方々に 淳子 千草 桂月 鵠士

31

懐石

床

| 14 | 後座 | 便り申さん故郷の母 | 良子 |
|--------|----------------------------|----------------------------|------------|
| 床 | 竹の花入 丸葉まんさく 霜柱 | 井の口に天下の基夢の花 | 淳子 |
| 水指 | 伊賀 | 枝垂桜の淡き紅 | 文子 |
| 濃茶 | 閑松の昔 福寿園 | 平成十二年九月三十日 首尾 | |
| 茶入 | 古瀬戸 | 於 岐阜·鷺山 游石庵 | |
| 仕覆 | 竜紋緞子 | | |
| 茶杓 | 森田宗圓の銘「月皓々」 | 十三句目より十八句目は同座のまま、一気に巻き上げま | に巻き上げま |
| 茶碗 | 赤楽 小川長楽 | した。お茶事は普通二タ時(四時間)を越えるべからずと | るべからずと |
| 建水 | 曲物 | 言われていますが、この日の俳諧の茶事は、それに半歌仙 | それに半歌仙 |
| 干菓子 | 鳴子 雀 龟屋伊織 | の俳諧が加わり、二夕時半でお開きとなりました。 | した。 |
| 後座は四 | 後座は陽の席で游石庵の簾が上げられ、つづきお薄でお | | |
| もてなしさ | もてなしさせていただきました。卒業祝いに知人から贈ら | してなる | |
| れた茶杓に | れた茶杓に「地歌舞伎」の巻の一句より「月皓々」の銘が | 「七夕」の題を付けて俳諧の茶事「朝茶事」を行いまし | 」を行いまし |
| 森田宗圓師 | 森田宗圓師により付けられ、今日の茶会に花を添えていた | た。朝茶事は夏の朝の清爽な風趣を楽しむために催される | めに催される |
| だきました。 | 750 | もので「午前六時にお集り下さい」との案内状を亭主の雅 | 状を亭主の雅 |
| | | 羅素さんよりいただきました。その日のお茶事の仲間は、 | 事の仲間は、 |
| 寒月に | 寒月に向きを変へたる風見鳥 桂月 | 私が岐阜で親しく付き合っていたITCの仲間です。IT | 間です。 IT |
| みづ | みづうみ広く神の御渡 千草 | Cはアメリカに本部を置く団体でロバート議事法に基づき | 事法に基づき |
| 太刀の | 太刀の錵なほ鮮やかに匂ひたち | 議事を進め、三分間スピーチからディベートまで行うコミ | まで行うコミ |

— 32 —

ュニケーションの訓練をする団体です。

り、その仲間と連句やお茶事を楽しむことになりました。 の夫人である雅羅素さんから誘われてITCの仲間とな 昭和六十二年の夫の転職で岐阜に転居した時、夫の友人

「七夕」のご案内をいただいた七月十日の午前六時には游 石庵の待合に集合しました。待合の敷物は中国の猫 族の

刺繍。掛物は関口老雲和尚の「竹」。煙草盆はガラス四方。

火入れは誰が袖です。待合にて表四句を巻きました。

捌 本屋

二十韻 「乞巧奠」

裂糸に夢を結ばむ乞巧奠

裕

子

良子

雅羅素

子

弓張月の残る西空

竹籠に錆鮎数尾届けられ

孫を坐らせ爺の講釈

良

裂織作家の裕子さんが今日の正客です。連句では客が今

日の会の趣向に応じて発句を詠み、亭主がそれに答えて脇

事にちなんで私も裂織に夢を乗せた作品を作りたいと思っ を詠むことになっています。正客の裕子さんが「七夕の行

> 参りました」と挨拶すると、亭主の雅羅素さんが「星祭の 今日は皆さまのお出でくださるのを待つかのごとく弓張月 ています。それにつけても今日の七夕のお茶事を楽しみに

が西空に残っております」と答えます。 乞巧奠とは七夕のことで、女子が手芸に巧みになること

す。庭の苔も瑞々しい露地を通って席入りとなりました。 を祈るお祭です。裂織作家の裕子さんにふさわしい発句で ところで露地とは法華経の中の「三界の火宅を出でて白

世俗の埃を捨て、清めるために露地を必要とするとあり、

この枝折戸から内は茶の世界の聖地なのです。

露地に入る」という言葉から取られたものです。ここには

は妙心寺霊雲院住職の則武秀南老師筆「無心」。風炉は淡々 初座は陰の席。簾越しに見る朝顔がすがすがしい。掛物

斎好の金箔押し。釜は八角筒釜。炭斗は「波動」雅羅素作。 香合は東光寺古材「仙人憩」。羽箒は朱鷺。灰器「雲華」

宗元作。灰匙は浄益。

事が始まりました。これは朝一番に炭を起すという風習か ここで亭主と客が挨拶を交わし、炭手前から今日のお茶

ら来ています。昔の日本人はずっとそうして来たのです。

| | | 鮎一夜干 小オクラ | 八寸 |
|----------------------------|-----|-------------------------|-------|
| 暖炉の前に膝を寄せ合ひ 良子 | | 芽蓮根 梅肉 | 箸洗 |
| 吊り橋の揺れ止まずして寒の月 淑子 | | 落花生和え | |
| 杉の穂先に憩ふ仙人 | | 万願寺唐辛子 湯葉麩 ずいき | 預鉢 |
| 失言の走るスピード五頭立 宗 由 | | 胡麻豆腐 糸瓜 小メロン | 煮物椀 |
| しみじみ味はふ椀の味噌汁 愛子 | | 冬瓜 つる菜 からし味噌仕立 | 汁 |
| 叩出し銅の薬缶の匠技 | | 車海老 胡瓜おろし 花穂 | 向付 |
| 名残の表 | | | 懐石 |
| らの付けとなりました。 | 宗由 | さびたの花を御簾ごしに見る | さび |
| を巻きました。初座でのおもてなしの数々を思い出しなが | 良子 | 涼しげな風に笑まへるマリア像 | 涼しげ |
| うです。中立の後しばらく待合でくつろぎ、名残の表六句 | 裕子 | テールランプは細き影曳き | テー |
| 簡素にして香の物をたくさんもてなすことになっているそ | 美智子 | 逢引の合図は目と目消えゆきぬ | 逢引の |
| い、味噌汁の温かさに心を満たしました。朝茶事の懐石は | 淑子 | 同窓会の常連となり | 同窓 |
| だところから来ているようですが、私たちも朝早くから集 | 宗由 | 古里は小高い山に囲まれて | 古里は |
| 懐石とは修行する禅僧が温石を抱いて空腹と寒さを凌い | | | 裏 |
| 菓子 「七夕」松花堂製 | | | |
| 奈良漬 | た。 | もてなしの懐石を味わいつつ裏六句を巻きました。 | もてなしの |

香の物

沢庵

胡瓜

茄子

茗荷

西瓜

後座は陽の席で簾が上げられ一変して明るい席となりま

した。亭主により、続き薄茶でもてなされました。 濃茶 す。それまでの各服点てを改めて客全員で一碗の茶を喫す

花 蓮華升痲。花入 鵬雲斎大宗匠好の槍の鞘。長板「色

紙散し」雅羅素作。 水指 黄瀬戸 水野敬子作。

ロス織部 鈴木五郎作。 茶杓 「祭笛」加藤卓夫作。 茶

碗 瀬 戸黒 鯉江良二作。蓋置「蓮」十四代寒雉作。 建

薄茶

水

木地曲。

煙草盆 盤胎。 火入 志野 弥右衛門作。 煙管 ギヤマ

干菓子器「宇宙」 雅羅素作。薄茶器 沈金 前 田

安孝作。 茶碗の銘「喜法」山田無文老師絵付

原太楽作。

賛は鉄釉 流れるような続き薄茶のお点前の中、 木村盛和作。 名残の裏四句を巻

お茶には濃茶と薄茶があり、 一般的に濃茶の場

入れて練るようにして濃く点てます。 薄茶は抹茶をなつめ

合は抹茶を入れるのに小壺を使い、

一碗に人数分のお茶を

に入れておき、 一人一碗のお茶の量も少なめにして泡がた

濃茶は吸い茶とも言い、利休の提案により始まっていま

つように点てます。

れないことになっています。一座は平等であり、その世界 たものと思われます。 ることにしたのです。こ お茶事では一会の連客に貴賤は問わ れは一味同心という考え方から出

こそ真に超俗する美境であるという思想が吸い茶(濃茶) の風習を通じて透けて見えて来ます。このプロモーターが

秀吉であったのです。

名残の裏

東の間 の恋にときめくエーゲ海

白 亜 の城に燕飛び交ふ

花の精ひつそり宿る老大樹

雅羅素

子

良

子

裕

子

35

無心に遊ぶ原のかげろふ

平成十九年七月十日

首尾

於 游石庵

素さん。 これで四時間の朝茶事が終りました。今日の亭主は雅羅 忙しい日々の中、当日は午前四時に窯から出した

ての熱々のガラス器を持参してのおもてなしでした。即

踞に添えられて梶の葉を浮かせた器など。なかでも後座の 立派な物でした。炭斗が水色のガラス製であることも黒い 長板は長さ二尺半ばかりあり、金の短冊が散りばめてある 待合の煙草盆、初座の炭斗、菓子器、後座の長板、蹲 膳が出される頃にはお腹が温まり、なごやかな雰囲気にな と付句の関係と同じ精神なのです。炭手前が終り、懐石の がて亭主が現れ、客と挨拶を交します。これも連句の前句 室へと入ると一変して侘びの世界へと入って行きます。

や

うに思います。 当の熟練の技が必要なことで、この時は宗由先生がお手伝 い役の半東を務められたことにその成功の秘訣があったよ 考えてみると茶事をしながら連句を巻くということは相

き、

リラックスして、裏の六句はすらすらと口をついて出てく

っていきます。千鳥の酒で亭主と客が盃を交す頃には心も

るものです。後半はお茶事も連句も流れるままに過ぎて行

お茶事の終る頃には自然と二十韻も巻き上がるので

す。

炭との取り合わせの妙を感じさせました。

しました。正直言って最初は連句をしながらお茶事を催す 私はITCの仲間と十数回にわたって俳諧の茶事に参加

すから、初回は連句の表四句だけは、あらかじめ文音で巻 なんてとても考えられないことだと思っておりました。で いて準備したものです。だんだんと会を重ねるに従いまし

と亭主が発句と脇を交わすことが出来るようになりまし て、お茶事のテーマが決まると、そのテーマに添って正客

た。その日の連衆の顔ぶれ、寄付の床などを拝見している

内に連句の付合の雰囲気が出来上がっていきます。

待合から露地を通り、蹲踞で手や口を漱ぎ、躙口から茶

申し上げます。 す。杏花さんの偉業を称えると共にご冥福を心からお祈り

た松本杏花さんです。私の俳諧の茶事は杏花さんが平成十

っしゃいました。それは平成二十四の八月に故人となられ

一年に残心亭で催された俳諧茶式を頼りに催したもので

それもこれも気心の知れた仲間であればこそ出来たこと 36

それが俳諧の茶事の良い所であると思います。

た時もありましたが、雰囲気は全然変わりませんでした。

なのです。しかしこの中に一人二人と異った仲間が入られ

私が最初に俳諧の茶事を試みるにあたっては先人がいら

平成二十四年の連句界

和田忠勝

しつつあった。

な材料が山積みされていた。 さ材料が山積みされていたが、連句の吟詠の対象には充分 大震災と大津波、加えて派生した原子力発電所の事故のよ この年は、前年度の全話題を独占した感のあった東日本

等何れも連句の句間を賑やかす以上に、社会的に重大な問為替相場の変調、そして年末からは与野党逆転の政権交代的島や尖閣諸島をめぐる近隣諸国との関係悪化等、世界的東京の新名所となったスカイツリーの完成、賛否きわど

さて、わが連句界においても、その間の事情は同様であ況に戻ったと言えそうである。

題であった。

23年と比べて24年は、

やや落ちついた社会状

年であった。

この息吹を次年度以降にも是非引き継ぎたいものと考え

中で、徐々に本来の偏らない森羅万象への広がりを取り戻は、依然として社会の中心的課題であり、市民の脳裡の多り、大災害・津波・東北・原発・絆・復興等のキーワード

った山梨県では、立ち上がったばかりの地元山梨県連句協会の開催の準備に着手し、更に国民文化祭の開催地に決まとであった。また、東京以外の地方で協会の総会及び連句とであった。また、東京以外の地方で協会の総会及び連句とであった。また、東京以外の地方で協会の総会及び連句との開催の準備に着手し、更に国民文化祭徳島は、従来とは異なり、組織的には、先ず国民文化祭徳島は、従来とは異なり、

37

従来の守勢一方の現状から動き始めたという感触を示す一め、短期間にともかくもプレ大会の実行にこぎ着け、しっ会を中心とした地元勢が、地道に基盤作り実力養成に努

個別の活動状況は別表の通りであり、それらの記録とも

なっている出版関係の資料は以下の通りである。これらは

協会報の記事・報道・「俳海往来」等を整理したものであ

る。

ただし、完全プライベイトなものと、行事の方で紹介し

た分の報告書は、割愛した。

○「都心連句会湘南吟社二○一一年連句作品集」刊行。百

と伊勢流の正式俳諧」掲載

○豊田市文化振興財団 「とよた連句まつり2011全国

○拈華連句会 「手向草·九段連句会作品集」刊行。

○名古屋の桃雅会 「平成二十四年壬辰年歳旦帳」刊行。

熱田神宮に奉納。会員の三つ物を中心に会友からのもの

も併載。

)館林連句会 「城沼」第十一号刊行。

○武生連句会 「連句集 星の林」第五集刊行。

○富山県連句協会 「早稲の香」第十九号刊行。

○宮城県連句協会 会報第十二号刊行。

○あした連句会 「あしたの連句」第三号を刊行。

○神戸市ひょんの会 連句集「虚心」刊行。

四宮連句会 作品集九「新庵」刊行。

〇三重県連句協会編 「平成二十四年度みえ文化芸術祭連

○翻刻 「『八重山吹』―武州大谷村女流俳人五十嵐濱藻の

句大会作品集」刊行。

連句」が町田市民文学館より刊行された。

38

通信」、桃雅会「桃雅懐紙」、稲門連句会「西北の風」、解なお、いちいち掲載はしなかったものに、猫蓑会「猫蓑

「年覧」、うこうなりな「うこうな」、等々月川、扇月川、

季刊等の機関誌が多数刊行されている。 稱「解纜」、おたくさの会「おたくさ」、等々月刊、隔月刊、

平成二十四年 主要連句行事一覧表

| 月 | В | 協会行事 | 諸 行 事 |
|----|---------------|---|--|
| 1 | 28 | 常任理事会(日本青年館) | |
| 2 | 1 | 連句協会報184号発行 | 2/19 連句を楽しむ会 (浦和) |
| 3 | 3 18 | 理事会(日本青年館) 総会・全国大会(日本青年館) | |
| 4 | 1 | 連句協会報185号発行 | 4/14 山崎八幡宮歌仙奉納(山口) 4/29 えひめ俵口連句大会(松山) |
| 5 | 15 19 | 「現代連句集Ⅲ」発行 理事会(日本青年館) | 5/4 心敬忌連句大会(伊勢原) 5/20 茨城県連協連句大会(日立) 5/27 大山阿夫利神社正式俳諧興行 |
| 6 | 1 | 連句協会報186号発行 | 6/24 花袋連句大会(館林) |
| 7 | 7 | 理事会(日本青年館) | 7/8 青時雨忌追善俳諧興行 7/22 連句フェスタ宗祇水(郡上) |
| 8 | 1 | 連句協会報187号発行 | 8/1 夏休み子ども連句教室(徳島) 8/19 連句フェスティバルぎふ(岐阜) 8/25 協会千葉県支部連句会(市川) |
| 9 | 8 15 | 常任理事会(日本青年館) 平成24年版「連句年鑑」発行 | 9/9 笠置俳諧興行(墨田区) |
| 10 | 1 20 21 | 連句協会報188号発行 ワークショップ(徳島) 国民文化祭徳島連句大会 | 10/7 浪速の芭蕉祭 (大阪) 10/8 さきたま連句大会 (桶川) 10/11 しぐれ忌連句大会 (伊賀) 10/27 平和祈願連句大会 (松山) 10/28 茨城県連協連句大会 (水戸) |
| 11 | 10 | 理事会(日本青年館) | 11/5 山口県総合芸術文化祭連句大会(美弥市秋吉 台) 11/17 国民文化祭やまなし2013文芸祭「連句の祭 典」プレ大会(甲州市勝沼) 11/26 兼載記念連句大会(会津若松) |
| 12 | 1 | 連句協会報189号発行 | 12/16 俳諧時雨忌連句大会(王子) |
| | - | <u> </u> | |

(3.4%)

品品

―連句グループ五十音順

雪 解

付

子どもらに贈られ二人真珠 かたくなな心を流すセレナーデ シャル 保 丈は 護司篤志家今日も飛び入る 茶事客を迎うる ソンの食べ頃友にメー 湖 後の ウイ ダンス右手差出 寸 0 扇 彼岸に か ız さふ 拾 通 備えっ う 灯は やし 婚 田村昌 田中 一道

光昌捷雅春

よさにたつ蚊

ŋ

俯

る縁

の歳

時

井

種

核

0)

ほぐれ

ば

花の

咲き誇

平平

五月 五日校合

(文音)

ナオ 天ss 地言

を

色にしてしゃぼ

待合せ 6 所

前 は とはやされ て

焼けぼっ杭 き竜 門

同

期

防げぬことに怒る河 宮 豚

温

暖

ただ震 ŋ 四十七士の胸 えてる午 0) 後

か

思 命 です電子レンジも掃除 出 語 る 老 機 人内 B

寿 胡 麻 煎 餅 噛 る 爽 籟

陶 鉦 土 пП 突く小屋を き 等 は 秒 を 刻 ん屋を見回る小望 月 で

津 嶺を師とし友とし生きて来

りはかなり若いと主治医言 足 伸ば せる 名湯 の い中

室 にホッ コ 1 ヒ

落花の 行 かがやい

空黄

善光昌春直野光善雅捷昌捷雅春野光昌捷

— 43 —

囀 なぜか 石 ま 渦 た 巻く蕨 耳

鰈 いて送る 内藤秀

湿物 揺らす 風

ウ月 し旧姓呼ばるる心地

木に登り恋に遭はんと待つことも 手話を習ひし夏の 义 書 館

海彦山 中 の珠をあげやう愛しき人 彦 身を映す井 戸

ナオ木 ベーコンポトフとロゼのワインと 枯のバケツ転 がす夕まぐれ

落より男ぶり上 師 げ

寸でも触 づれもさまへ月の成 れ てごらんと栗の H

話

役

重

陽

に

服部秋 水禮未

徳住 羚 穂

山 b

穂

羚

鬼 穂 B 扇

> ナウよだれ 組 ポッ 種 替 蒔 か コーンのよくいと笑き へて急 頃 流 にく 雪 出る花 形

> 扇鬼羚穂

馬筏る歯

平平 成成 一十四四年 四三 月月 十二日日尾 (文音)

晴

歌仙『二日はや』

白根順子捌

国 暗 手 玻 月 みだれ髪直すうなじ 従 串 はるばると来し イクよりちゃりんこ便利アルバイト 短 ま 地 H 光に濡 境 璃 默 兄 なこの え 夜ともるスカイツ は 負 义 0) 窓 0) 妹 を 攻守か 寸 0) 0) 闇 れ しみ きうれし師 頼 駒 料 子 垣をつ 張 萩 を谺 月代 珈 0) りに近 ŋ 理 琲 実 動 みと 持 垂 0 涼 11 凛々し狭 の飛 ま ち 香 に越え 聴 れ 返 18 L 納 径を行 0) びや 0) 嫋やか は る 下 る 1) 町 0) \pm 旅 な る 2 は 松澤晴 高橋た 白根 た順晴た順晴た順晴た 順晴

サオ腐 裏 鬱 浄 枯 胃 起 瑠 Ш た 金 蓮 を を 璃 け 伏 色 怖 0) ŋ 7 0) 0) 道行心中 を 面 文字 か 差 む雪 真 ねもす しやさし ょ 縋 言 n 拝 天 0) た る す点 0 軽 モ け 風 領 幼 5 ーテ 享 あ な 本 前 保 ŋ わ 尊 にル 座 雛 里 妻 食 7 0

晴順晴た晴順た《晴順た晴順た晴順た

45 -

サゥ利き酒のしっとりと腑に沁みわたり 弾 母 尺 太 遊びたき夜のぬらりひょ 八に あ らば子は安ら 極 る 和 は 虹 拳 思い す琴 0) 立 谷 0) 流 音 渡 藍 に夢路 織 0) 線 0 月 る んかも に 海 花 0) と 宴 衣 秋 7

平成二十五年一月七日首尾

ょ

ŋ

<

る

白

晴

起両 逃 げ 水 0

起逃

で稼 ったば の手 眉 水 芸 船 を 打 0) 0) 0 0) VΦ 月 東 組 0) 人 果 に書きかけ 米 中 京 か 仙吟 b 百 に浮 た 大 12 モ ŋ 駅 敦 文 りと航 俵 遠 な 0) 話 考 煌 0 か のこころ パジ け 0) L コン び 描 校 か 0 き し月 < 近 ŋ け サ 置 秋 1 5 手 0) \$ 海 紙 れ 高尾秀四郎 渡部春 宇咲久 高尾秀四 春秀春秀春秀春秀 春 秀 捌 " サウ骨 ナオ新 最 月 花 逆 寒 7 轆 ン 底 早 板 稽 社 新 太 転 0 シ 1 冷え ログ 轤 は 員 0) 0 ョン ベル 0) 女流剣 0) 早 技 П 鯉 発 宮 虹 風 茶 の鍵をどこかに置き忘 0) 暮ら ル 術 起 る 賞 司 碗 想 0 0) 夜を 新 0) しが 0) ほ は き 泳 V 士と意気が合い 0) 粋 間 まひとつな 段 節 まま老 好きで世に遅れ 並 温 故 違いがミ な 駈 電 忙 避 追 む 8) š け 天 流 郷 あう 0 難 濁 上 道 境 訓 が 肌 れ n 12 " 橋も酒 ŋ 練 山け店 筋 器 ソ

秀春秀春秀春秀春秀春秀春秀春秀春秀春

- 46 -

後

朝

今

眠

ŋ

蚕

H

差

や

さ

平平成成

一十四年十十

三二 月月 十

四八 日日 尾首

(文音)

まの古刹に集

い花

汗

風

鈴

買

復

原

兀

華

白

湯

煙

歌 仙 「枯 蓮

川岸富貴捌

村 ビ 枯 手 夏 熱心な口説きはどこかぎこちな カメラ屋は新機種のビラ貼 アメリカの民意はオバマ再選 忘れ扇に余 短 地 人 いずくともなく浮か ル街の四角い空に鎌の 蓮 パンの娘を連れた腕 下の資源に世界目覚め 力 月 0) 0) の 主 河 影 の楷 秋 の末の今は弁 面 へと揚 韻き合う幾 0) にすっと落ち 役若いママさ 書行 狂 情 言賑 書 羽 0) 蝶 わ り出し š 何 護 翔 模 士: < 白 れ 月 栗原英 川岸富 綾 甫 富綾甫 綾 富 甫 富 " ナウ島瓜

ナオ、水 猿 断 燕 森 宮 さん 此 熱 ゆ 飾 血統かしらフィ 捨 参 H 0 蒸 離というフレーズの闊歩する り祖父母も共 か 事 0) 出 ŋ 0) 詰 菓 坩 る 棚 もう観ら 0) 子舗 め込ん 堝 男 峡に 樽 に を は季節 は 居 ギュアの選びへにつれだちつ お炬燵 れない て凜と直 で鈍行 灰 酒屋で 月煌 先 虜 釉 取 放浪 0) Þ 割 ŋ 手 記 旅 る 5 T 中 \mathbf{III} L

甫

平成二十四年十 (於・江東区立森下文化センター)一月二十四日首尾

花

ŋ

墨

東あ

た

b

V

綾

散

瑞

穂

の国を覆う

ほ

ど

らうつら

春

0)

縁

側

モ

ル

の右へ

傾き止

る

さへ

無

垢

淡

雪

甫

冨

足

踏みはずしか

すり

傷

負

う

破

れ

案

Щ

子と

引けばメロデ

イー奏で

初

8

綾

— 47 -

1/

甫 〃 冨 綾 甫 綾 冨

凝

ŋ

迷

う

労

働

祭

に

児

を

肩

車

甫

歌 仙 生 身 -141

| ≪埼玉・あした連句会─その四≫ | | ナオニャアニャアと子猫じゃれあう昼の縁 |
|-----------------|-------|-------------------------|
| li 『三 子 | | どの政党もみんないまいち |
| 歌 们 一 当 马 | | ゆっくりと豪華客船出航す |
| | 中野稔子捌 | オーガニックの野菜たっぷり |
| | | スケーターワルツ優雅に浅田真央 |
| 生身魂徳つむ道を一途なる | 中野稔 子 | 皮ジャンパーは彼のぬくもり |
| 後の団 | 江森京香 | 大絵馬に来世までもと誓う愛 |
| 月今宵胡弓の愁い流れいて | 竹本いくこ | 飾り棚にはベネチアガラス |
| りぢ | 稔 | 凜と立ち真向かいて享く丘の風 |
| 眠そうなふくら雀は電線に | 京 | 歴史の跡をたどる円墳 |
| マスクはいつもポケットの中 | V) | 影長く家並を照らす望の月 |
| 9弁当は彩とりどりの幕の内 | 稔 | うそ寒にしむ青春の日々 |
| のある | 京 | サッ╸蠢いてもののけのごと芒の穂 |
| 何処へ行く大和島根のありどころ | ŲΣ | アニメソングを流す駅あり |
| 夫婦きどりで波寄せる宿 | 稔 | 不確かなあしたに夢を持ちつづけ |
| 逆らいて阿修羅踏みしめ甘美なる | 京 | 畑焼く煙り野辺にただよう |
| | い | 爛漫の門をくぐれば花の城 |
| 滝壺に真夜中の月砕かれし | 稔 | 都心の階に残る淡雪 |
| 山あじさいをたっぷりと活け | 京 | |
| 喜寿祝う芸に語りし酒のあじ | ٧٠ | |
| 平和・戦争・敗戦・憂き目 | 稔 | |
| 花の窓スカイツリーを遠く見て | 京 | P. 成二十四年十一月二十四日省 |
| 雛人形のたおやかな笑み | ۲۷ | (於・江東区立森下文化センター) |

い稔京い京稔い京稔い京稔い京稔い京稔

— 48 **—**

か弁

仙 **『余花** 明り

次 Ш 和子捌

くかなを連らねる余花明 次山

姉妹それぞっちったの心にソナタソナチネ奏でいる。 妹それぞれ夢の大きく

月 満ちて次々生まる潮

き老 優 のさらりと処暑の町 0) 円 熟の 味古酒

銃 駅舎を飾る画像ジオ 窓

絶滅危惧種 絶滅危惧種人もいずれ口が狙い定めるビルの は

爆 女木男木のごと寄り添いて立 笑で終る法話にみななご み

閨 冬ざるる中遠のける

紅 の匂 いくるなり 漱 石

Ш

端

遊

Š

炎

相

秒

和艷和晶和艷晶和艷

サホ風に乗り凧の据わりつひと日暮 このごろの熊の出 兵 かり

ぐるぐる回るジ 1 没 知恵くら カーの 動 札べ

n

大太鼓小太鼓桴を新調したなごころにはむかごほろほろ と な で れ ば 砂 山 の 暑 と な ず れ ば 砂 山 の 暑 と な 数 小 太 鼓 桴 を 新 調 し た な 鼓 小 太 鼓 桴 を 新 調 し か み の 茂 み 踏 め る 百 段 キタロウに精根抜かる水中 し段 n

ろる景ずり 晶艷和晶和艷晶和艷〃和晶和〃艷晶艷晶

ナウ運 動会子等応 援 復 0 興 Ж 村 旗

鐘 圃 泥 語 ŋ 0) す

洞 へ花 吹

朧

平成二十四年十

(於・江東区立森下文化センター)一月二十四日首尾

- 49 -

関根雪子

捌

ヴ 山 服 初 寺の屋根の残雪そのままに 鶴 加 の 減よき 大 繙 きく する < お 舞え 長 濃 のど飴 袁 りしかと立 茶を頂き 閑 0) な 松 味 栗原英 白根順 高橋たかえ 子

学舎までをたどる片 マ友とテニスの後はランチへ ح 陰 三澤律 田口晶

出

勤

0)

亭主見送る付け

睫

毛

山司英

子

江森京

アベノミクスは風まかせな

ナオ頂 ゲルマニウムで癒やす肩凝 上の月を拝して干すビー

志

子

雷

合 垣 指よりこぼる砂 戦 始まる武士 0) 0) さらさら

鹿

笛

の波間に消える

角田 双 柿た京

双富

ナウ餅

花に華やぐ家系揺

る

ぎなく

妖

精

潜

結

氷

0)

湖

平成二十五年

月十日首尾

於·熊谷市徳樹庵

十八韻順候式雪月花

蔵

や

川上綾子捌

ッどか雪を下ろせどなおも止まぬ 剣 É 毛糸の帽子まぶかにかぶ 道 蔵 0) 羽 ラブ活 織で関 街に 動 遇 盛んに う稀 る 岸田芳 川上綾 松澤晴 芳

むせぶ三味の音若き瞽女ゆ

陸

奥のひと夜

契

り徒

戦 ついてはゆけぬ変る猫の なき縄文びとの安らけ

ナオ春 月の大屋 戸内海にかかるお 根覆 う甘茶

平らげる貴酒東風

の名残

矢倉澄

子

季

綾

焼けにつぶやく旅の山 乱

ナウ名 宝 とにもかくにもこころよせおり へと再生 0) 花 灯 叶うスクラ 籠 雅

中野稔

季

澄

晴

宇

宙

飛

行

爽や

か

平成二十四年十一月二十八日首尾

渡部春水捌

党 発 塵 白 時 天 見の土器に 劫 優 は 0) 今 限 後ろ姿に春 かと穴を h いろはの歌あり 知 ざる る 出 仙 竹本い 次山和 渡部春 宇咲冬 和

もろ肌のがたいの良さに目を見張 モデルに仕立て炎えるアトリ 砂 の浜 に返すさざ 波 n 佐々木彩 戸田徳

安物のワインの瓶のごろごろと 気 ま 工

和春和い彩

路 あ 地 Š の る 蟋 i P 蟀 Ш 途 S 切 の未来 れ 神 途 切

ナオ行

水の

盤

に映

る

月

徳

春

和

夏

巡

業

野

暮用

ばか

り増えしこの

頃

ナウメ

ヘンの中に

息

づく

絆

0)

文

字

0)

太

き

子

等の笑

顔

は駄

菓子屋の

平成二十四年十二月二十四日首尾

サォおもたせのオレンジプリン配り終

歌 『ほととぎす』山多迦夫先生追悼歌仙

士郎 捌

時経

ても持つて放さぬぬひぐるみ

蔵

書

間

に秘めし

面

影

美み奈

بح

けふは

朝から

不

機

嫌な猫

右 左 泊 瀬 を や II る 片山多迦夫

町 お ح し童 唱

園 児らの列 窓 越

前 Ш の上にぽつか ŋ

線 年 路のわきに揺れるコスモス 酒先生当ては何 しまし ょ

フォークダンスに新入りもゐて の子が無口になりて

末

肩に手を 置き愛 0) 白

仲 都 人は老人ホームの園長さ 説のまことしやか

繊 月 市伝 かはたまたあれは狐 食 ぜ 悪 だ

掛 雨 け 軸 ど花に 達磨 大師 て 0 ふ 船 横に

紙

魚

よ紙魚彼の写真はよけとくれ

汗

にま

みれて

瓦礫片づけ

奈真と

金城比呂子

ふ 祈¤る

さき事の幣神

に出て三億円

神

棚に置

<

る

印

真み美比郎

竹山美代子 もりともこ

選 庭 な ん ぞ 消 え て 調おごそかなバッハの曲に癒さる

に月を探すもまた楽

上山真而子 比

竹山みどり

と

ナウ板

前の鉢

巻に挿

す赤い

羽

根

節

漂

る

は

茸

飯

0)

香

53

松本奈里子

荷を負うてサンチャゴ目指す巡礼

者

小林順

子

に満

載

外

玉

旅

比

変声

期

真

枚の電埋めつ。やどかりを追ふ

海の青さ

花

٤

美

る

春

٤

平成二十四年六月十四日首尾

(於・大阪すし萬)

比

0)

雛

擂

餌

半歌仙 紅葉 散 る

大谷似智子捌

月 去る 何 夜長 \Box コンパクトル もかもネットで買物届くらん 今宵犬をお供に野原 ものは ひたすら版 追はず紅 な ーム単身者 葉も散りゆ 凩 阃 け 中 n 浜口泰 清川み 門出光 酒匂道 大谷似智子 朱鷺子 ゆき

朱

手

作

りの鉢に自家

製柚

餅子在

n

生

活

費稼いだげるとくどく

漢

の夢はピーターパンら

は

女

泰み光道光ヶ朱み泰み道

傘

寿でもエベレスト挑む冒険

お

地

花

春

袷

0)

躾

糸

取

復

辞

大

の

しぶき後に月を浴

姿

見

せ

ず

に昇る

龍

神

三味

色に

交す

酒

中

K

0)

無人機開

発ヒートア

縁は異なもの味なものと

平成二十四年十

(於·中央林間連合自治会館) 月十三日首尾

54

繰り返すドラマ飽き飽き興 凍ての月リ 晴れ着選 電光ニュ ル語の言葉足らずに逢いたく の「はい息止めて」はスピ の らの 寸 歌 力を借 戦 室 仙 東 白 び ース党 にて 靴 『旅立つ朝』 まぶ の母の 荷 ŋ 気 決まる て 分 月 宿 頑 で醒め 告 固 1 前 さ 峠 福森 と と ح 捌 美 美 美 サオ野にあそび草の名覚える機会と 清 踏 花 替 大 子 遥 握 寸 色 ッ 退 わ 水 柄 ん張って市民ランやかに続く向し 等ポケットに記りらぬは藩主迎、 と 作 等ポケット F 塊 りどりの手 スイーツ目 水着の タウン 飛 世 ぶ気 確 一代の恵温み高 里 箇 目立 話 所 由 らぎふと感じ の 果の 見 0 の無いメターの無の潜入し 記え市断鳴 日 風 0) 迫ら て 長 ŋ 葵 る 光 花 同 誕 る し叶の 盛 れ 窓 イ 会むじ栗月生て胸い畑にボ行

と美豊美豊と美豊と美と豊美と豊美と豊

— 55 **—**

球球

児

美

酒

就

が咲

ぱ

11

の入学

二月 三日尾

(文音)

復

元

集

秋

高

ナオ初

挑

戦フェイス

ブックに風光

る

仙 『罹災者を癒す』

梅 田とほる捌

今夕は 草 終 粋 街 狛 半 罹 メールからかわいい絵文字消えている 女社 チャームポイント鼻に付き出 樹氷の屹度 山を語 バレンタインにまた義理を欠く 伝 K 災者を 犬のごと肩ならべ畏ま 角にショパン 電に遅れて独 世 や子 球 網 決め角 花の 秋刀魚と決 熟 ども等 癒 間 す伊勢湾キャン 成 曳 飾 門越えホ れ 0) 張 0) 壁 ば雄 < 道 0) る は浮き輪片手 る客よ月の 樽 破 狐 調べ流 り月冴ゆ 開 浜 野 め よろし る ける 辿 ームラン 弁 て燗 0) れいて プイ ŋ 創 歓 用 ŋ す 声 て 森田満 町野正 梅田とほる 山村としお 森本よしひで としお 満 よしひで とほる 満 よしひで 満 よしひで IE. Œ. としお としお とほる 枝 子 笑い 朱 鬼 落 遊 場 原 日の 0) 爆 せ 0) 茶摘女

サゥそれぞれの秋思満たさん旅衣地獄から飛ぶうすばかげろう シャンゼリゼペアのカップをねだり勝ち話 は 尽 き ず 想 い 残 し て 個 惑 袁 迫 ケットで寝るごろり 棲む心の隈を照らす月末ダンサー暗い眼のまま 星 鳥居よそめに船 地 展 のホームに長い影二つ際忌また誓うノーモア地静もり返る炎暑午後 探 近 トロ 島 査砂礫くっきら付き忘る寝ぐ 煙 ツ ŋ 列 子沖を 田 車花 順 飴 漕 ず としお としお としお とほる 正子 と し お 枝 よしひで子 とほる とほる

— 56 —

下ろす

二十四年九月十六日尾二十四年八月 一日首

歌 仙 元 0

紀 伊 郁 子 捌

議

員

に

は金

と名誉

たつぷり

門

工

ネ

迫

る原

発の事

故

は

ごは

尺 規 0) 柿 0

き

初 鴨 話 時 伝 を違へずやつて来 は る 静 か

試 乗 電気 É 動 車 快

汗 ば 肌を 撫 で る そ 風

買 法 えくる 被 姿 に 祭 ひ 囃 ح に E う き 惚 う

手 作 ŋ 0) 婚 約 指 輪 光

人生は オを 水の流 畳 み れに 放 喩 牧 民

凍 運を 空に貼 掴 りつく月のまどか むも付きを 逃 す な B る

で 過ごす鰭 酒

咲く 放浪記 士: を待ち散るを惜みて花に暮 は 」演じ続 や つぱ ŋ けて H 本 女優 逝

紀伊郁

ほうたるを呼べば青

き火またたきて

数

知

れ

ぬ恋の未練

を如何にせ

む

明

H

は

京

へと

嫁ぐ身の

程

郁

風

狂

画

家の

ズッ

クは口を開

け

雨

後

0)

小

Ш

奔る

笹

舟

〃 洋 郁

才

カ

IJ

ナを吹き吹

き帰る大月

羽

根

募金

箱

には思ひや

植

0)

外

湯

る

つぺら

ぼう

と紛

提

灯

恵

西 女

念

願

市

ラ

完

走

大月

郁

洋 恵

はら

か

き

陽

は

る

旨き

拉

のあまねきて花の

どけなき児の

笑顔あたた

洋 西 恵

郁

ね

る

る

51

潮

愁 0) 遠きまな

ナオ春

抜

ける良の 像

執 筆 西洋 郁 恵 洋 郁 恵 洋 西 洋 恵 洋 西 郁 西 恵 洋

登

夜 録 1) 犀

十四年十二月 三日尾十四年 九月二十七日首 (於·石手寺)

— 57 **—**

更け ガ 味 仮 島 早 葉 曲 伊東・伊豆芭蕉堂連句会─その一》 ょ ラガラ こちにあ 寸. ゆ 居 を 0) 歌 を 猫 Ш 浮 て女 つと待 巣 か 白 0) 剥 求 ブ 0) 仙 か ば 作 磁 が が 祭 " ボ モ 8 盛 ば 月 n 書 0) ち れ ンと決 尚 が 辿 ŋ 励 『つばくらめ』 新 0) 波 旅 壺 流 口 涼 ぬ る を る む n 詩 12 返 酒 ょ 喚 霊 る にあこ 衣 抛 か め 数 h 月 奥 入れ る 派 知 手 万 軍 田中て 中根 石渡 渡辺日 次 出 子 て水 捌 美 男 美 男 H H 学 草 杖 花 IH 業 エプ K 捲 菊 溢 鄙 お ブリキ 平 親 友 生 庬 疲 クター ロンの 負試 る 音もとぎれと しろい 牛 れ 0) 0) 仕 H 便 た 0) 師 大 発 形 歩に りは カ メイド喫 種 記 涙 おもち 根 匂 を真 1 0) に リが 時 3 明るさ取り戻 鯉 踊 五四 けふも飛び交ふ ネオン 似て やセピア色な 月二十日尾 日十五日首 見に 計 茶に呼び込ま ぎれに震災 とり さ 朧 おふるま る 車 刻 お の月 凧揚げる 語 連 告 微笑 ぼろ 街行く げ 表 ŋ ね 仰 む 年 V る n 部 n 情 T

男て日水男て美日男て

— 58 —

男て

H

美

日水男

紅紅

朝

列

貧

飾

(於・八百栄庵)

ナオ春

愁

を

量

る

分

銅

0

機

嫌よ

骨

発

掘

歌 仙

次

男捌

放

浪

め

快

にまたぎもてなす牡

丹

鍋

5

笑

て感

心させ

る

名

ガ

K

新 庵 巡るきょうのジョギング月を踏 刊 休 字 のななめ 里 0) め 自 に 無 読 慢 う て みなど書 5 宅 師 コ 配 喝 1 店に K H 4 1 田中て 石渡蒼 谷川稔 渡辺日

連連 披 ミツコの香り抽 露 れ立ちて流行 宴三日 続 て寝 出 服 す

T 猫 P 0) Ρ いたずら 脱 原 鍵 0) か 1

月 ビ ル 0) 間 0) 稲 荷

ほ

ゆる になってデイサー は何 引 ŋ ゆらりとボンネ 処 き へ行って もジオ ビスの花 鮎 0) "

手

話

交え

早く速く

٢

繰

ŋ

返

す

カ

一終えて

急ぐ

天

出子 子 H

奥

座

敷

0)

を

照

5

す

月

美

しき言

由

紀さおり

聴

<

筆水て水日て日男て男美て男て美て男美

イに遂こ

3

9

眼

プ

は

别

嬪

いか

ず

0)

後

家

で

売

ŋ

み

前

線

ぐ伴

٤

ŋ

儘

酒

を

む

59 —

明 美

0)

漢

体

花

浦

道

足

0

列

執

葺き

替えの

根

揺

れ

る

陽

子

化

に届

か

躾

核

婆

す

族るし

中根

H

平平

伊東市中央会館)

都

踊

さ

歌 仙 『春まだ き

近藤 蕉肝 捌

[iii] 夫 か 利 籠 嶺 0) 厳田

ビジョン百万画素を超えもして 近藤蕉

月 取 上り「魔笛」の音を低くする 機 能 使 えな ど

怪 しく揺 れる 虫

が新 わんぱく小僧 蕎 麦があります札の定家 なま欠伸し

束 0) 間 の太平楽を 決め込まん

庭 向 番 0) たくましき腕 若 龍の 描 彫

う

隣

0)

後

家

を

<

粋がってクラッシュアイスジンリッキー お 互. いさまに遊 び 半 分

S アフガンの去る短 たすらに兵戈鎮めと無辜の 夜の 月

辿 石 秘境 が の地にも花の宿 記 す終

を

捲

る

うら

る

風

野

池田

飯田せつ子

茂田キ

佳

竹田竹 凡

遊 せ佳

竹

サオ高 ちょっと嗅 坏 を 棚 よ ŋ 下げ る桜

縄 張 ŋ \$ 獣 は後向く猫 も人間 t 餅

佳

せ

君を連れて は 越えられぬ Ш

ベテルギウスが ざらしを覚悟 燃え尽きるまで 0) 上の逃避 行

荒 ゴーヤジュースを 海も裂けて散 らせよ弦の月 ぐいと飲み干す

鎌 孤高を持する š るう枯蟷 螂 も打たれけり 村の 人

毎: 年の忠臣蔵に 飽 きもせ ず

ナウ お母さんまた乗っている体重 塩 汁 鍋 で 族 团 計 欒

訛 りのどかに続くスピー チ

婚 活 もお をただ楽し ぼろの で ご 夏 先 近 生

堀 口 明

桜

執 筆せ佳遊キ佳遊せ遊竹せ佳遊せ竹〃

平成二十四年一月二十二日首尾

— 60 **–**

仙 夏

晚

餐

は

7

ツター

ホ

ルン窓に置き

Ш

海

٢

立

届

ぶ濡れ

で

元

気

甲

性

親は優し

の増える一方

紅知佳

帰 月 草 何 温 玉 柿 ろ手に川 文字に花 かあ天下でルン 代も 子女レデ でも例外あるとうそぶ 柱 這 園 ŋ 宿 甘 いつく 児 家族 洗 が たる穴の 濯 原 お 揃い 物 月 変 フ ばう沙 手 御 7 わ 堤を一茶行 手 光 て寄 ٤ ス る バ 踊 振 りこ 汰 ト要求 世 せ 0 れ う る 片山李 相良知 新井秋 伊藤 知 静 秋 知 紅 右 子 紅

> 米 不 寿 を にて 運 呼 幸 š 読み 健 運 0) 脚 サ す 天 竺 守 り切って月しらじらと 神 か 母 響くヨーデル 慢の絵描さん のみぞ知 0) 声かす る 男貴男知貴紅佳紅秋知佳静秋〃

> > — 61 —

くは 両 保 ホ 酒に 険 ームペー いつつ夜を惜し ジに出ています 上げ 厳し

·千葉市若松公民館

くな 阿曾 松田 宏

御足=おあし…女房言葉天竺守り …唐辛子

П

馬

春

風

足

*** ***

注

め 詐

振

り込

7

巣 立ちの鳥

欺

を見てござる

ナオ春

0)

風おたまじゃく

しがダンスする

宏

歌 仙 -楽 展

伊 藤 貴子 捌

古 行 楽 器 展 琵 琶掻 戻 h き鳴 らし き秋 伊藤 新井

城 跡 赤とん ほ 群れ追いか 松田

折 込 んちゃ 2 紙 束 な子 0) 結 供 び たし H す な 弛 み

問 汁 手 種 K 霜 噂 そ

本 悲 恋 0 は て 奈 津 桃

埒 な ことに辞 書 を

サ 爺 3 が 掃 交 前

宏

敷

埋

め

尽

くす

ほど散り

0)

静

ま

ぬ

行

0)

11

保

河 童 土 俵 作 ŋ

面 白 お 伽 草 子 义 絵

11 通 しかに花 れ な の窓辺にうたた寝 义 書 館 に 行

忘

れ

え

ぬ

紅

な

王

妃

略

奪

砂

漠

さま

ょ

う

で見し

駆

けて

みたいよ天馬に

て

伊藤慶

代

議

1:

地

盤

看

板

戦

き

ざ

すさぶ

Er.

薇

アリランの歌しめや

かにしずやか

12

時化に

あ

たる

補陀洛行きが

男 右

慣

れ

つこ

に離

島

幕

らしの魚不足

月

仰

河

原

あるかし

5

う

か

新

走

な

ど

0

神

堂

1

1

屋根

0)

シー

サ

1

転げ落ちたる

れ

郷 に 貼 り札 猫 を上 げ す

ラ 金 0 貪る 暴利 取 ŋ 締 ま れ

蒲 池 あ あ V だに浮 か š 月

秋貴 佳

佳

子

知

相良

入 n

出

なる

巣 箱 0)

忙

ナウ粧 脚 並 山

貴 静 保 秋

才 カ ユ 掲 ボ

高

げ 主 演 賞

片山

慶佳知宏慶宏知保秋慶佳子保

沢木小

二月 九日尾十月十一日首

— 62 —

秋李紅雪

平平

成成

年年十

ナオお

b

せ

は

郷

0)

老

舗

0

蓬

餅

瀧澤尚

子

聰 捌

が故 黙 嫁 銀 蛍 ほ 弓 あ 鼻 志 か すでに子持ちと聞 水 奪 ŋ ろ 張 入 郷 々と雑 さり 緒 賀直 つて乗 族 0) 玉 ŋ 0) 0) ひの 深 0) 模 ٤ め 哉 赤 さくうかぶ 6 り込む 風 ιþ 草 噂 越 様 の鍋 僧 忌を修 が な に に栗落 掛 b 戻らるる 麻 揺 0) に ち け n 角 0) 茹 祓 き 揃 す る に気迫込 いて呆 を Ħ つるら で 座 ŋ 厳 を ŋ 長 孫 上 あ 藤 廊 週 細 れ 坂 子 下 る 团 め 末 鉢 面 1, ぬじま正 二村文 字野 川井城 大鳥朋 三谷貴志夫 沖田 杉本 貴 IF. E 志夫 聰 子 子

> あ 月 富 こつそりと買つて始めたiP 高 夜 蛇 山 豪だ K 明 は 活 所に再起を期 口はいつもき 角 ٤ か は とわ る を右 ŋ め メート 土 前 稜 あ ポ 近く 宿 雨 間に積 面 で に曲 かり器 0 ル知 置 る 0) する 直 酢 は 爺 に 北 が で囲 み上げ 驚 らぬ え 量は後まは れ つちりと締 欧 まる き ば煙 て塩を撒 んま む き花 足 盗 人か 湯豆 楮 救 草 地 急車 蟋 蒸 0) 屋 a 5 か す ず が 腐 蟀 酒 d 义 北野真. 貴志夫 真知子 尚 朋 知子 子 子 人子 子 子

> > -63 -

年年 八四 (月十七日尾)月二十日首

花

杂小指

の

爪は

切

り残

す

せ

朋

ぐいと伸びしてじやれる野良

ŋ

ちよいと気取つて春帽子載

南砺市藤橋公民館)

ナオ田

0)

神

0

腰

掛

H

ち

よいと

拝

借

聰

癒

え

た

る

爺

0)

健

脚

歌 仙 。庭 0 柚

捌

卒 坂 狛 肩 妻 で 色 デジ 喧 万 凝 r 鈴 小 付 で虫の が 業 犬 瞱 を りによく効きますと奨 JII ラ 羽根アナウンサーの 年 に 先 町 しながらい 鳴 ば カ 焼 半 筆 空 らして園 \blacksquare 夫 ペッ X 縦に横にと塀を 世 す に 0) 茫 で 向 は 紀 数 旗 見 茫 め け とてクラ を 後 Ŀ が 覚 ح る 追 児ら つか子福 えの 0) 月 V h 3 廃 新 5 庭 冴 魚 線 が 襟元 めら 0 人 月 者 賞 跡 5 れ n ぬじま正 大島朋 長谷豊 川井 沖田 字野 111 杉本 三谷貴志夫 本 貴志夫 城 城 聰 子

> ナウ白 逢い 花 野 名 疲 説 色 Š 後 柱 病 b 月 付 秋 法 さしくふうと つて たくてまた逢いたくて乱れ 歩をせがみ の出 いと飛び込 山 持 時 ż 朝 忌 宴 b 0 率 珍陀 更 計 父 積 0 0) に機 ぐっ 眠 水と嘯き酔ひつ 新 聴 0) は ほか もりに B る 器 通 遅 0) 真 織りの音止 ひと籠土間 で 知 酒を 積もる 吠え 下 む名画 映 蒲 按配はよ 気に ポ 中 がる週 公英の る る 黙 火 鈍 な 世 劇 伽 ん š 0) Щ 場 文 る で 色 隅 n 末 貴志夫 貴志夫 貴志夫 恭 正 朋 子 子 聰

> > 64

平平 一十四年十二月十四日尾一十四年十二月十四日尾一十四年 十月十五日首

花

線

き

0)

š

津

軽

0

海

を

越

H

周

箸

割

る

音

に

風

城

歌 仙 像

林 宗海 捌

爽 記 番 脚 白 避 雑 \mathbf{H} 念 無 机 H 犬連れ か 辺 を 魚 地 は 寝 秘 大 風 赴 0) 蔵 主 仕 破ぐて 0) 0) 縁 演 み 朝 過ぎ行 任 れより ワイン で が 灯 0) 違 酒 届 恋 ŋ 優 撓 酌 墨 く古 淡 覗 かたむけ 0) 0) 3 む く白 磨 き 始 ギ 夏 居 舞 ほ ま か 月 る 肌 ŋ 子 林 佐藤 山女糸山海糸女海山女糸山海糸女

> 温 短 脱 父 0 光ま と よ や か な か な 海

道 め b 堂 辺 ほ 夢 0) 明 ぬ け 渡 開くば断り ナ鳥る走る舟靴ル瓜く恋り原分肩

町 ゆ らりと ろす 筋

音

楽

こけら落

糸 女 海 山 女 糸 山 海 糸 女 海 山 女 糸 山 海 糸 女

め

て下

飲 鳴 活法なり山の町で 一に開くまれて に開くまれて を分ける新山に盛れ を分ける新山に盛れ を分ける新山に盛れ バ溢きふ

ば ふに野花

風

5年五月二日尾5年二月八日首

平平

Š

ŋ

— 65 —

| かよねこ | カラメルのプリンプルプル銀の匙 | 小町 | 年休チェックしてる死神 |
|--------------|-------------------|--------------|-------------------|
| (No. 104957) | 七月一日(日) | ゴロ | アンカーがスピード上げて追いついた |
| あずき | ルール違反の後だしじゃんけん | (No. 103545) | 三月三十日(金) |
| 蕗 | ユーロ圏離脱するのかしないのか | ザリ | この前の妻との喧嘩気になって |
| 唯 | 独りぼっちのあんたとあたし | いずみ | アインシュタインロケットに乗る |
| (No. 104782) | 六月十八日(月) | 兎 | 揚雲雀地球が青く見えるまで |
| いずみ | 一番赤い苺摘み取る | (No. 103519) | 三月二十八日(水) |
| ひわ | AKBどの子も同じ顔に見え | カンちゃん | 風になりたい雲になりたい |
| 和 | DNAをコピーし直す | 不用之助 | アッラーと夕焼け色のカルカッタ |
| (No. 104746) | 六月十六日(土) | しゅびZ | メイン料理はまだ来ないのか |
| 兎 | 墓 交 み お り 尼 寺 の 裏 | (No. 103236) | 三月八日(木) |
| 唯 | 何もかも灰色君を見送って | 天球 | 団塊という塊が行進す |
| 合 | 西の風です雨になりそう | カンちゃん | 地上に降りたノアの方舟 |
| (No. 104672) | 六月十一日(月) | みのり | もう少し君と長生きしましょうか |
| ちいばば | 何処よりきたりし君は我が子なり | (No. 103219) | 三月七日(水) |
| 鵣 | 月の出近い風のざわめき | おなすさん | よいこといっぱいありますように |
| 不用之助 | 竹藪の雀のお宿この辺り | ザリ | 富士山を真っ赤に染めて陽は昇る |
| (No. 104247) | 五月十一日(金) | あずき | 初春の夢紡ぐ魔女たち |
| ザリ | 蜻蛉の羽は美しく透け | (No. 102102) | 一月一日(日) |
| 雪 | 一寸の先も分からぬこの命 | | |
| 美句志 | 津波も怖い竜巻もまた | 二年ナセニ | FUSAFI デークしい三年かせ |
| (No. 104176) | 五月六日(日) | ニリこう | スリスリスリス でこう レイー |
| たつみ | 付き合いも程々がいい縄のれん | | ≪豊田・WEBめぎつね座≫ |

— 66 —

| | 句わーるど) | (於・矢崎藍の連 | | |
|----|--------------|--------------------------------------|--------------|-------------------|
| | 一日日 | (95602~102101より抜粋)平成二十三年一月一日~十二月三十一日 | キリマンジャロ | 秋の名残を求めクリック |
| | | | あづさ | ハングリーなぼくに林檎をくれたひと |
| | コロン | 力走の周回遅れに大拍手 | ちいばば | 仲間見る目は凄く正確 |
| | 合 | 何れが先と知らぬ老い先 | (No. 110642) | 十月八日(土) |
| | ゆめ | 冬至かと窓の雪みる月あかり | 少年E | 存在が消えてる今の現住所 |
| | (No. 107557) | 十二月二十一日(金) | あおゆき | あれは私の葬列の黒 |
| | ばび | 体勢の揺らぐ一瞬メンで勝ち | ザリ | 白川郷に雪は静かに降り積もり |
| | あおゆき | 頭が右に傾き過ぎよ | (No.105663) | 八月五日(日) |
| | 氷心 | お母さん僕は将来大臣に | あおゆき | 地獄もメンテナンスが必要 |
| _ | (No. 107715) | 十二月十六日(日) | ザリ | 今あなた大切なこと風呂掃除 |
| 67 | タヌ公 | 英傑もみな土となりしか | 唯 | 愛だの恋だのいつの話よ |
| _ | いずみ | そのむかし鯀の息子に禹のありて | (No. 105398) | 七月二十二日(日) |
| | ザリ | 治水工事は遅々と進まず | ひわ | くれぐれも甘い話にご用心 |
| | (No. 106978) | 十月二十六日(金) | 麦 | 初物西瓜糖度十一 |
| | 藍 | ALASあなたどうしてあなたは蛙なの | あずき | お菊さん大あくびする井戸の中 |
| | ゆづ | 夫の輪廻を待つ不死の妻 | (No. 105353) | 七月二十日(金) |
| | 少 | 妙薬のある訳でなし万病の | コロン | 暑すぎる!幽霊一人連れてこい |
| | (No. 106849) | 十月十八日(木) | 美句志 | 皇帝陛下今日も退屈 |
| | 天球 | 冬を越せるか虫の抜け殻 | ザリ | ペンギンが小走りしてる幼稚園 |
| | 产 | 着々と原発ムラの立て直し | (No. 105273) | 七月十五日(日) |
| | 不用之助 | ヒソヒソヒソヒソヒソヒソヒソと | ばらずし | 連なって 白鳥帰る青い空 |
| | (No. 106794) | 十月十六日(火) | とけた | リンゴの花を髪のかざしに |

仙 初

和 \mathbf{H} 忠勝 捌

柔らかき声のやさ

しい天使い

T

移

順

は

何

時

月 さや 佐 の境気功する人のびやか ほ か鉄路 鳴 0) 一筋光りい V 切 ŋ び 白杵 布田二

隣

玉

ح

何

故

に寸

屋根の雄

猫か底

孤

独

ız

育

納

涼

思

腕

組

む二人見

るも暑

く夜

大

欅

輪郭

K

昇

る

傷

を負

たる

新

酒

酌

み

鳥

鷺を

争

う月

年

精

魂込

菊

鉢

が林 旅 間 0) に猿 思 0) 出 腰 とろろ 掛 村井昭 小野幸

尼 鄙 御 にまれなる美女が声か 前 と老僧 いまだ修 行 け 中

和田

茶 あ エッフェル塔が背伸びしたとか 房にてフランスパンを焼く匂 0 無防備さ放ってお かれ ず

保游

永

つくり

巡

る

テ

左岸こもごも花の散り交わ

元

幸

元

眉

毛

ŧ

新

横

綱

沃

す

游

玉

神

社

お

披

目

0)

所

ŋ

見 下ろせば月を映して冬の 人はどうあ れ 伝う紙 漉き

花 とて笑顔あ 高 さ 千穂の Š 峰 れる家族 新 見えが

平成二十四年十月

ハ・NHK文化センター青山)日満尾

擬

宝

珠

を

帽

子

デー

0 歌 声

布あらため行

きつ戻り

宝

は

しと心

決

めつ

よそに特 売

H

英游保英昭元游元英游元昭富英保元幸游

68 -

連句十六『ハロウイン』 妖怪尽くし

矢崎 藍捌

山 ドラキュラが八重歯を立てる首筋に 雪女戸板を開ける隙 叶わない恋とは知らずウンディーネ 風の日は高笑いする土ころび やまんばが落とした栗の実追いかけて ハロウインの仮装集まれ窓明かり 炬 月下に遊ぶおおかみこども 河童の皿にメルティーキッス おんぶおばけはイケメンの背に 立ちはだかったおれは塗り壁 座敷わらしも消えたふるさと 小豆を洗うミネラルウォータ 空にひびくビオロン が割れ八岐の大蛇参上 眠 る 猫 娘です 花 間 す 風 みの虫アッパ みの虫アッパ ドリー 千 夢 草笛奏 ドリー 千

平成二十四年十

月三日首尾

一十韻 Ŀ. 『立春の風』

和 H 忠勝捌

立 春 座 風 は 西 同 北

1 に彼岸 桜 0) 便 ŋ 見 て 安楽明

か 島 先 岡山朱 藍

く大屋 根越えて鳥渡 宮 哲太郎

勝

隠 妻あるとの噂冷 魂 迎えす まじ 和田忠

一目会いたきオペラ座の つまでも飛行機雲は消えぬまま

石焼芋を追い かけて行 き

サォどやどやと来てラガー等の厚い ボランティアする震 災

龍

佳

藍

佳

明

佳

余 所者は陸奥の銘酒 が

覚 絶 め のと照らせる月 え 夢と る 知 鳴 ŋ 龍

> 東浦佳 円

餅 旅 花 の土産はルイヴィトンに同は 青 天 井 に 進 み ゆ を か

御 降 りも早や ρ早や上がる明ざし喜ぶ可愛 11 る 娘しき

佳明哲龍

平成二十四年二月四日首尾

九段生涯学習館)

− 70 **−**

半. 歌仙 术 犀 0

東浦佳子 捌

空蛮 ば 木 生サンマどうして人は焼くのかな 耳が ギタートレモロ草を靡 犀 族 が たんこ谺となりて響くら 0) 田 香にひとときの閑を U° 長の の稔 < りと動く り目つぶれば 桃 餇 在 せ 猫 大久保風 坂田酔さ 彦ば郎 東浦 竹崎梨 中尾 野

風

"

箱

庭も大

庭

園も

月

下

黄泉のくにへは我

次

第な

る

直ぐに路面

電車の

通

る

道

守

宮が

聞

た関の

する

眉

梨哲佳酔梨風酔梨 哲

蕎麦屋の隅で独り

酒

酌

2

ず

束

議会解散済さぬ約リスチャン安息日とて掃除せ

荒

で引かるる国は春を待

城

0)

孤高

に立てる花

大

樹

海

峡

温

る

色

ŋ

ど

りに

放

風

船

(於・三田 萬来舎)

0)

な

き世

を祈るガザの春

ツで甃ゆく

内田ひ

渋

う駅の改札

大倉連

魚

藤原みきよ

歌 仙

雷

鳴

旗のなきセンターポール高 ピアスがきらり司会の女 懐かしい!芳名録に名のあり スエーデンより もまた波穏やかに瀬 の藁 五人男の 君いまは外 間 お で青 を E うわ な す 訛 見栄 頼 ŋ が 朗 0) き わ 報 抜 地 縄 科 K け 0) ま 戸 球 沸 綯 医 0 る き 性 海 う 月 風 古田も 背山牛 中山緑 高橋 内藤秀 高澤 米林 简井 貴 つらら 渋 つらら 渋 議 え 穂 判 ナウ馬 夜 閉 長 曼 抽 思 パ 絶 働 横 茶 半にはろくろっ 鉱 江 わざり永久の別れになろうとは 肥 斗 ソコンゲームで今日も寝不足 ードコートの 景かなとゴヱモンの真似ーを下る舟から手を振れば 座のこぼるる 羅会意味わからずも有難く 店 ヤネ となるも止むなき山 ゆる私も肥 き 不 0) 恋 ル 蜂 抱 婆 文の 在 の大 き合 ス 0) 荒 1 束そのままに 花に気をとられ れる夏

あくびして

場

所

今村華

紅

景山かおり

ひ

わ

秋

0)

収

穫

杉原ひさ子

− 72 **−**

華

石見にゃんこ

つらら

月

真

安光青山

ゆる体重計

村

芝居

今年

ビルの谷

ほどに

お

詰

襟の

今

H

年

0

瀬

に感謝

0

一念

囲

鍋

ぎ足

0)

壷

漣

魚

遠きにぎわ

田中晴

首も宙に舞う

平平 成成 |十五年三月||十四日尾||十四年七月二十五日首

薄

く濃

く紅

をさした

る

端

0)

鳥の巣立ちかしま

「Uター

ン禁止」の標識

ひっこ抜

3

腄

魔

K

勝てぬ

午後

0)

月

ヌキが

名

物

里

里

は

僶

0)

ح

3

で

みにきてね」幼な手が書く花便 文 倫とう後ろめたさが邪魔をし 口説き言葉が 吹 けむりに女将も担ぐ秋まつ 性 士山にゴミ拾う人捨てる 萩 魂 画サイトのとんびぴい 化 いてグリムの森を抜け出し が のこぼれ今宵は 歌 0) 0) ざら 気さく プの道 Ш 瓦 遺 来 仙 と 指 風 礫 て 産 示 れて 窓 な笑 され につづ を 耳朶に優しく 夏 か か赤 甚 巡 顔 篭 5 散 蜂 地 る 入 月 ŋ 井 ひょ n n 万 る 旅 て 虫 福 田 福田 野村路 太 ろを捌 太 ろを 太三路 路 太 太 ナオふる ナウ 雁 背 ホー 首 応 陽 吾 伸 ゃんけんで勝 上げて片目 処へ人を吸 自 代 0 亦紅とうその文字が好呼びするごと月代の天字呼びする いいり 歌 壇 俳 に寝るなら情 ムレスヴィトンの財布ふところに ん か現か 慢 平平 Ħ は 冬季五 鉄 ろ 道 ŋ 地 鳴 乗 ŋ 唱 を 0 蔵 < 二月 十六日尾 輪 た る 歌 瞑 死も 軒 頃青む まど 岸 せれ 拝 私が先頭 0) る埴 最 む る 洗 花 花 後 年 い形 輪 ろ 石 守 ま 好

き

− 73 **−**

閣

壇

筆 三 太 路 三 太 路 三 太 路 太 三 路 太 三 路 太

む馬かに樽

ゥ湯

白

笛

冬

鎮

動

天

洗

富

段

朝

執

(文音)

に波と

不

短歌行 北斗

鈴木 漠捌

ゥ

積み上げる

奇書を洗ひて月の 猫 妖 流 押 チ 抜け駆けは止せ皆のマドン ョーク持つ女教師の指一輪挿しの露草がお の子は 社会鍋にもコインささやか 夜食摂るときもらす鼻唄行の衣裳でジムへ通ふらん されつつ仰ぐ北 艷 Pで聴くバッハ に枝垂れて眩 地 頻 やくバッハ弥撒りに鳴いて何処へ 春は 斗 や年 影 ナ 曲か ŋ れ b 辻 鈴木 山名 健まち子 安丸てつじ 三神あすか 中林ちゑ子 森本多 衣 中野百合子 百合子 漠

サッ粗朶跳ねる囲炉裏に客を招き入れペンキ剥げ落ちドラヱモン扉魔 園 に 芒 の 穂 波 瑞 々 し旅 は 道 連 れ 月 を 友 と す と気 きゃ :- というと 気 きい :- という は で と 気 きい :- という に が まい に ない まい が まい に ない まい ころ 家族 捨て 来し を 陛 を 映 して 磁器の 薄みどり ナオ緑 晴 赤い羽根鳥打帽で風を呼び逸りと気負ひ若さいとほし 琉 着にて野点楽しむ花の琉球絣の前掛けを取 掛けを取 下をり ま 百 て 洋 あ ま 多 多 ま 子 子 子 子 子 子 衣

— 74 **—**

平成二十四年一月十日首尾

る

明

盤

に汲

み

て菜を洗ふ

まち子

病

ひ早よ

癒えかし

ح

洋

子

蛉 『庭 0 眺 め

可 らんべら証城寺と囃す月の出に新豆腐盛る手捻りの碗 蒐 集 博 親 士: 鉦 号 鈴木 在問洋 三神あすか Ш 漠

に浮き浮きと独り

景

虎。梅は民 落りの話

くさ世に女性 聴くさい 讃美を貫き はて 安丸てつじ 中野百合子

千人針 に 情込 め 中林ちゑ子

サゥ死んぢや嫌でありんすと袖に縋 n 森本多

まち子

洋

囀りにしばし耳をすませバス待つてゐる花ひらを浴びながら 映 画 果て黄 塵 の街行 < 毽

8 半和音符 ども

優 駿 は

百合子

あすか

サ

サオ物

乞

風

景

秋

0)

セル

着

て自

転

車

漕

ぎ

鈴木 漠捌

花 模様 Н 肩 す П ぼめ 目の か 珈琲を点っつの雨戸閉 ぢ て

道

遊 驢 馬 出 0) 麺靤屋が緩やかに 帰らざる 兄

あすか てつじ

平成二十四年十 月四日首尾月四日首尾

創案・胡蝶形式のヴァリエーション。ナカ8句は自由律。トンボの4枚の羽根と胴体になぞらえた新形式。林空花完鈴形式

75

一〇周年記念展

ヤ

パ

ス

12

澎

湃

として受験

生

馬

な

が

らも綴

K

『精 霊 舟』
徳島県立文学書道館開館

歌

鈴木 捌

気 0) 紛 モス \mathbf{x} れ 0) 風 0 百 に 遠 さぞ 年 樹 0 鍋 計 幼 は 我 戯ぎ憩 流 梅村 永田 郎

孤 亡きひとの忘れ 島 ンプルラ 解 へは 紐の 聖 書 1 形見を あ 冊あ や 根 抱き締 差 れ す真 妖 ば め 3 圭 士 光 明介郎 明 治郎

ウ探

梅

妍

を

きそ

る

陣

漠

河 へに 忌 味 な 罪 b る 空 2 涼 罰 滝 薄 しき 0) 曇 床がり る 光

月

花

包

里

ユこ そ 終

ば

破

れ

て落

ちる

武

凧

英

平平

十十二年十十

-二月二十日尾-二月 一日首

(文音)

蝶ネクタ

漠

鼓

0

巡

圭

外色 竹 駆 刺が面で胸 広 け 串 場 抜 け 0 冷 る 像 し西 慢 ごと はい 0) 勿な彼 革 瓜 ま 彼に傍惚れた るレジェン ハートだっての手 b 9

英圭 光圭士光圭

蛇 砚 口 盃 青の竜に を からこぼれ に 洗 月 Ś を浮 イとて想 も澄みがの音も澄み H 酒るみ技よれに

ご指名 Š < れ 増える て襟の 釦**介 護夕 弾け クシ 雅 Si 1

は れ る ٤ ま 世 ず 12 趨 回り つつ立 逆ら の は ん嬌

花 旅 光英士光英士

治介漠明治郎明治郎漠治介漠明介郎明介

— 76 —

ナオ磯

開

き

江

電レ

ル

弧を

描

き

扇

仙 『初懐紙 0 玉

別所 真紀

京

はん

ŋ

と薄

は

で

監

視

カ

メラに

映る逢び

き

碧 毁 龍 月

ぶざぶと温 の み し水 語 を使 うらら か 川名将

双 椿いまも人住む武家屋 の嬰 喃

が留 香炉の灰を均らす半 蝋 纈 染の 襯衣で決 8

君に届い に生 けし 李白て š 酒

風 蓮華寺で待ってま 屋 に 蛇 0) す 本

仔 細不あ在 在の経緯. 知るは猫ばか

少 年 島 ・は月に向の大工 月に 向 0) かって疾走 墨 縄 を引 < す

ゲ バラ死 せるはうそ寒の 頃

花 路 地 流すバ われも宇宙 飛び翔つ裏街の ンドネオンの露しぐ の塵であ 根 n

別所真

獄

Ш

おんぶお化けに馮を出て耐へて刃

右

0)

手に茄子左の手に余

生

憑りつかれた

る

忍んで平和

賞

横山わ 小松知

不

確定

要素で定

理

揺らぎたる

玄武

白

虎を

匿す

緑

服部秋 扇

月

光の粒子恒河沙那田

他

ほ

ど

伝言

板に神

落

3

義竹扇祐紀晴雅哲奈代義わ扇知代義

鈴木美奈子

伊藤哲 田中雅

ナウ

ゆく

秋の抜身のごとき言を吐

<

蓮

0)

実飛ん

で父の

失

踪

77

渡辺祐

手

のひとを

気遣ふ雪明

n

込む

骨

寸

胴

福永千 長田竹 風

咲いお

い鬼太郎

せ散って魅せたる花大樹、鬼太郎早く来ないか

て魅

興

0)

弥

生

わ

祐

平成二十四年一

(於・千駄ヶ谷社会教育会館)月十九日首尾

海

市

は

る

か

に 菩

薩

顕

ち

在

す

三連 ·四韻定律 男 梅 雨

1 尾 宵 捌

b

ろ

0

都

わ

n

揚

げ

0

米

は

年

酒

0

用

玉芸野梓

め

て

呉

れ

祖

朝

霧

0)

III

面

盛

6

に

跳

ね

る

魚

梅 뒘 確 n III 41

桐

透

3

7

風

通

b

間

近

枚

見込む

男

を

男

11 は 譲 82 Ш 車 0) 検 中尾青

墨 鯉 0) 魚 が 跳 色 ね 0) 超 見 す え 水 漬 る 花

芸

姉

恨

2

を

いえば

君

が

代

0)

育

が

師

災 害 備 え 0) 教 村

無 線 ٤ X ル 誰 b 慣 曾根

放 課 0 ブ ラ ス K 大

弑に後 h 2 悠 2

塙

於

玉

凍

て

月

やぎざぎざの

刃

0)

Ø

る

み

み

危

う

芸

下 12 增 税 決 め る 阿 呆 5 さ

デ

フ

邪 悪 な 恋 は 罠 を 仕 掛 か

都 田 蛍 母 ば に せ せ む が 願 蜷 7

遅 羅 漢 厳 花

芸

城

山

0

背

に

0)

広

が

ŋ

T

にる。

香え霧

躇

な

か

ŋ

き

宵

汲

む

何

処

井

朽

ち

た

野

桑

実

色

む

頃

或

る

恋

を

せ

名

知

5

ぬ

花

が

そ

の

12

咲

<

後の

山

羊

時

怒

ŋ

柵

壊

宵

を

捨

0

逃 訓 青雪の

新

緑

は

葉

裏

0)

先

夏

兆

す

٤

て

白

0)

ス

玉

野

平平 成成

十四年六月二十七日尾一十四年五月 三十日首

(於・柴庵)

宵野芸宵野芸梓野

居着 き 意 の音たて 父 月 は 包み込 義 末 た 0) 嫁 0) Ш 放 面 入 解 鳥 12 野 む 影 ろ る

宵芸梓野芸梓

き れ 7

— 78 −

参面

スワンスワン 『かごめかごめ』 お化け&超常現象~

矢崎硯水捌

謎多き「かごめかごめ」や夏期

槌の子」の這ふここは 仙 三神あ すか

のんびりと釣糸垂らす「ぬらりひょん」

吉本芳

久我妙

挨 拶される「人 面 魚」か

望 月を「如意棒」以て 八尾暁吉女

スプー 曲 げ 佐藤ふさ子

弐面

振

り向け

ばキリスト

貌

の「だいだ坊」

あすか

裂け 女」口 説き巧み

新 婚 の旅は「魔法」をかけられて

つかりと艫綱むすぶ「夜泣き石」世にも勝手な間引き「国引き」

泳 げ 鯛 焼 月 の竜

フェアリー」は髪にカトレア弦鳴らし ブログに載せて「千里耳」で聴き

通せんぼして空までも「のびあがり」 熊 野古道にさがる「茶袋

すか

ふさ子

暁吉女

子

砚

野 迦か で雨雲刷 伽が が けば 初 しぐら H 現 0 れ

暁吉女

妙

子

香

ふさ子

鞭打ちに貼る「狸伝次馬も「片車輪」追ひまっ 0) 膏す

舞首」ら呑ん で絡んで花 見 酒

あすか

一反木綿 ぶる佐保

平成二十四年十月十六日首尾

二句から三句(弐面か参面)。三つの面による序破急。矢崎ら三句。夏冬一句から二句。二月一花一鳥(鳥は非定座)。アラビア数字22(句数)を二羽の白鳥に見立てる。春秋二句式「スワンスワン」について。 水創案。 硯恋か

(珍種貴種御品

△「かごめかごめ」=姑に突き飛ばされて流産した妊婦や吉原へ「かごめかごめ」=姉に突き飛ばされて流産した妊婦や吉原へ「かごめかごめがごめ」=対になら下がる怪異で触れると大病にかかる。=夜道の木の枝にぶら下がる怪異で触れると大病にかかる。=夜道の木の枝にぶら下がる怪異で触れると大病にかかる。○「狸伝の膏」=昔は狸や熊や河童を化け物と称し、それを原本の後した膏薬。△「舞首」=鎌倉時代の伊豆の真鶴の祭りで、村料とした膏薬。△「舞首」=鎌倉時代の伊豆の真鶴の祭りで、本がり」の大が口争いはつづいた。

歌 仙 -Ш

河 \mathbf{H} 水尾 捌

列 送 夜 庭

郷 関 を出で 後 0) 月 ビル 越 原田安

ラマの 準 備 万 事 了 河田

アンコール求 8 相 手の鳴り止まず

車 寄せ は 何 橇

豊 衣吐く息 白 < 居

上手な嘘に乗せられたふ ŋ

クラス会彼のマドンナに声をか 重きしがらみ解き放 H

四 面 楚歌沈みかけたる日本 佐々木允

蚊 り焚 く母 は 肩をい の姿を照らす月 から せ

自 ルヘンも寓 ーペを使 そめし花 さの 話も自 の大 ひ 細 北 在意のまま 枝 密 欧 賜 0) 阃 は 描 き

種川とみ子

とみ子

北川 水 稔 尾

安 恵

渡部葉 楠田よは

咲

昼

0)

旅

開

駅

弁

よは

んな

ナオ蜃楼 地 方空 を たしかに見しと漁夫の声 港 客 まばら

恵

あ 0) 舗この銘店も店じまひ

白 き 肌みせ破 れジーンズ

月

年下の歯医者ばかりをねらひ打ち マスクを取った顔をみあはす まく窓辺よりもる愛難曲 葉豊水安

足 なみ揃へ歩 むペンギ ン と豊葉水よはんな子二月尾

回転寿司ショートケーキを欲しがる子 韓 葉水豊安水

白 遠 秋 忌ゆけどゆけども草紅葉流テレビやや飽きが来て き 昼 月 今 ぞ窯

サゥ厚物を咲かせ手作りシャツの

新 丹

百号のコラージュ し抽 象 画

間 0) に伊勢の飛 ٤ 花 接

遷

0)

0)

寸.

とみ 月

月 尾二恵尾

一十四年十二 二月二十六日尾二月二十五日首

80 —

短歌行 が 0 春

臼杵 游児捌

燃 花 戦 後 鎌 連 ゴ 囲 研 天 ス ゆ 0) む に散りた 夕 ス る 子 究 月 恋 ーは女言葉 屏 ペ 义 火 風 づる盃 に に ル 消 に 才 土. 武 る女性 響 壺 来 ル く 尖 偶 には 雨 ぬ き ガ 双 の猫カフ カメラマ な 童 人を待 ŋ 影 納 塔 児 5 庭 古 竹 ま 5 ず 街 る 工 る 風 原田· 臼杵 種川、 柏 河田 とみ子 とみ子 元 元 惠

> ナオ・豚 謎 通 歯 めける微笑に何故か惹かれたる 信 医者ば 0) が 携 ちの 帯メー 最 かりが増えし 初 0 ルー語の 母 授 思ひ 町 並 元 尾章児 章

結 犬を 香 ば 匂 れ 通じて 大 立 神 近所付合 宮に夏の 月 ひ 袖

サウ合唱の最后 秘 訣 淡 々 と 述 べはいつも「ふるさと」を

長 道 を出 れば たちまち花吹

隧

じみ

0

店の

木の芽田

水 元

稔

章

元澄水元 筆 章 子 尾

平平 成成 年十月二十五日尾年九月二十九日首

短歌行 飛 騨 0 里

長 田 竹 風 捌

祖 芯 煌 文 小 ひ 思 荒 風 珍 秘 机 母 き 京 あ は 5 に郁 れ め 船 が るアルデンテのごと男ら 都 ク ず P 刺す絽 野 の遠音に暮 때 き 子の ラ 疎 に ŋ 肩に上 か 1 き 客 放 12 水 実 ح 刺 さ 0 うたた 町 ひとつ 0 古 な す薄 着掛け 馴 るる 煙 5 典 り冬 れ ま 0) 着 飾 飛 寝 月 L 絵 ŋ 騨 花 卷 0) る 河 物 艷 頃 渡部 崩 渡辺 長田 柴 子子 月 風 子 子 月

ナウか

まつか

0)

紅

燃え

んて

真

夏

過

花

越

対

向

列

車

暫

帰 È. こよ 座 夜 3 祭 鎮 の月鏡 敷 省 は Š 0 童 な H 0) 柔 た 載 子 倅 0) き 花 ŋ る 和 が 女工 0) 機 刻 0 置 耳 世 明け春の で新走酌 を新走酌 を新走酌 の を 涙 そ 白の 髪 残ば弥 曙み駅ぬむとつ円人宿て尽 橋本直 直竹知直澄柴知 樹風二樹子子二樹風子子風

平平 成成 四年九八 (於・藤が丘地区センター)-九日尾|-十日首

| 仙 | |
|---|--|
| 牧 | |
| 牛 | |

大竹多可 志捌

すれ

違ふシャネル

0)

五番ほのかなる

法

被

0)

水着

も持って駆

け落ちと言ふ

牧 大 き P Ш き 大竹多 幾 可

に帰 郷 の心 か た ま ŋ 早田維紀子

定

海 よりの月を待つ子はねむくな でこぼ こ道 を走る 1 ラ

か赤 蜻 珠 蛉 玉入 すいと止ま れて作 りし竿の る お手 玉

ロンドンのオリンピックで肩抱か 入 部 したのは彼に逢ふた n

かちんこの鳴 ッ ドシ 1 りて撮影終りた ンは 宇 宙 遊 泳

木 しに飛ばされさうな眉の 茶 香 ŋ 籠 る 地 街

П ŋ 当 番 拍 子木を

足にじゃれ P か な 母 つく猫のミーちゃ の写真を 酒 にほ ろ 本 棚

東

カ

は

陽

炎

小出民

屋

根

魑魅

魍

魎のうごめくと

は

早寝と電気消さるる

き

しどろもどろに「さよなら」の手話

ちりと柱時計の螺子を巻き

職

質の

女のポ

IJ

スにこやかに

初

物

すと土

瓶

蒸

L

出

す

ま

2

まる

の窓よりまるい月のぼ

n

미

く惚け

ることが願

望

ナウ瀬

高ま

てくる秋の

Ŋ

多

積

ま

れ

宿

題

卓

遠

思

出

る流

民

る

幾

神

樹

ひ

維

民

0) 子 が 0 ぼる ٤

計

ままに 叫ぶ若き漁 受ける速 達 夫

維民幾多 民 幾 幾多 幾 1/多 "

雛 花 巡 甍 こえ 咲き満 魅 ゆ 5 ち

十四年十二月二十三日尾十四年十一月二十五日首

(於·墨堤庵)

維

維

幾

民 83 —

歌仙『思惟仏』

大山とし子捌

ヴダ 停 原 衿 満 同 お 思 脳 納 力 お 棚 何 足 ロマンスカーで旅の始 4 発 期 染 惟 年 月 湖 物 メラ構えるうららかな午後 0 k 戸 め 0) のほくろに 0) 庭 に近づ 吹く風に乗り来る ٢ S 瓢 ッ か 0を叫びてデモに付 緣 0 小 の神に 京 開 とし ク あぶな 工房を訪ふ人の がぶらりぶら にすゑある将 都 Ш 終へ水の 放 似 とな は 芋 く齢 な手土産 花 あ 銭 触 揺 座 < い禁 が 0) の るる彼 ŋ 月 る 盛 河 る ぬ る 冴 断 旨 童 ŋ 赤 さ 繭 0) に 棋 ま ŋ 蜻 ょ き る 恋 ŋ 蛉 ٤ 指 玉 る 佐々木リ 坂本た 大山とし子 大竹多可 た 千代子 とし子 千代子 た 千 IJ とし子 1) サ サ

> ナオ義 なるさとに名残りの月の淡々とためらふは一夜の恋となる不安ちらと見せゐるあの鍵は何を杯のビールは汗を拭き乍ら 夢に 記 注 たっぷりと異 昔 通 跳 商 士 願 目 みるオ 摘 々介護 店 のことをまたも言はるる ね 祭を 草 0) みの唄の遠 る 街 お礼 さ 眠 維 仕 は 花 リンピ 緋 げ にアロマセラピー 新 る は 切 国の 鯉 乳 < 朝 詣の秋 る こも 寂れ に眼見開 ックの金メダ 話聞きもして る幼友 翁の長き 日に爛 母 嶺に消ゆ 車 押 漫 眉 と 千 と リ た リ た 千 代 子 子 子 み サ み 子

> > — 84 —

成二十四年十二月二十三日尾 (文音)成二十四年 七月二十一日首

平平

歌脇 仙起 雁 渡

羽 場桂子

大

物

知

雁 渡 羽場桂 大竹多

11]

夜せつせつお茶事始むら 小出民

母の 井より水引き込みし 朝一つ採る初生 紬 が 肩に りの茄

噴

が校 意 旧姓呼ばれどきり 庭 にも焼け 0 ラジオ体操よく揃 木杭に火が付 振り 41 向 て

避 孤 難 立. 所 無 に歌声高く響きた 援 0) 部 屋 で 産 る

除 む村 を視 察 す

寂 は 寞 イッリ 迷 ひただよふ雪ほた 空 路 旅 懸 の超 る 月

花

ŋ

世

0)

塵を払

ひ

仏

誰

も見えねど揺るるふらここ

民桂裕節千民桂裕節千民桂

一十四年七月十五日尾一十三年九月 十日首

(文音)

サオ鎖

曳 敗 犬 が ほ

話 膝 を 乗 < ŋ 目 借

出 時 す

夜 員 討 ち朝駆け意地を見 りくらり ٤ せ

者の

れず路 5 帽 地 子 裏で呑む冷し酒 風 吹き飛

もひきりシラノの役を演じき わ 35 n

お

耳元へ君ひとす 手に手をとつて ぢ 逃避行 と熱 いする

雲 ピーピー薬缶 割 れて月 煌 Þ 沸 き返る 海 照 5 米す音

サウ草 古 0) 絮ふはりふは 里 自 慢 尽 りと垣根越 き ぬ 新 え

媼 兼 腕 ね に派 金 手 環 なミサ 蝕 K 昂 ŋ ガ T

は 主の Ш

復 元 成 天 Ш

花

裕節千民桂裕節千民桂裕節千民桂裕節千

— 85 **—**

半 歌仙 -Ц 葵 咲 <

大竹多可志捌

兄 Ш 布 河 弟 葵 の手提 鹿 咲 は 笛 < 聞 水 げ 習 き 0) 塾 憩 息 使 š S 急 ひ 良 <" ٤ 山 さ さ 伊香 石井斐 大竹多可志 渚 子

片野弥

ルージュ濃くローマの恋に燃えに燃え る 斐

⁹色鳥をそつと見守るう

ホームステイの卓にシャンパ

まんまるの

月に

狸が

踊

ŋ

出

栗ひと

つ先

は

剥

きた

弥

11

弥

満

開

花

を

震

は

す

1

3

"

プに鰐

を見に行く

丹

塗

ŋ

橋

は

陽

炎

温

泉

如

噴

き

出

す

駅

冬

月に

真

向

て押

す

車

反

綿

寒

š

る

る

運

動

靴

が

垣

干

Æ

会

0

解

散

せ

まる

自

懺

悔

0)

言

葉

嘘

とまこ

ح

平平 成成 (於・日立市大久保交流センター)一月十九日尾

- 86 **—**

歌笠置 俳諧 『ゆうだちや』

土屋実郎 捌

豚

移り行く月に向かひてハーモニカ ブロンズの獅子をあきつの過ぎるらん ゆうだちやたをみめぐりのかみならば 酔芙蓉咲く蔭 たちまちおこる四囲の遠雷 に憩える 其角 桜田野 渡辺憲

ゥ飛行船スカイツリ**ー** 木漏れ 日揺るるお社 庭

混浴 别 前田明

削 る凍て空 登 利

天 駱駝 0) 瘤に揺られ揺られ

アルカンシェール聖堂* かとぞ一期一会の花

きりりとひかる少年の の上を航 大内善 鈴木ちかひ

に会ふ幼 馴染の薄 松澤龍

久

僧の凛凛しき瞳美混浴風呂の入りに

月 寒く未完となりし漢詩

岛田小

西川な

ワープロマウス機嫌良から 中に臨 時の 切 ず n

安楽明

マジット・ベンシーク

ナオ遡 ソバージュヘアー る は 霞 0) イレブンの群 中 あ

れり

諸江

昭

<u>H</u>

良

ちかひ

夫

ほ

安曇野に何故かカ マッコリ囲みは しやぐ女子 ップル道 神

し代の伝説に倣う蝉コーラン流れアラビア を飼う人の話の をかしく 時 朝 雨 宮司 宮木 翔

高下駄で比叡の山 チラシ冠って白 歯痛堪えて頬 々修行す 雨しの げ る る 明

る 猫 琴に耳立 て月浴 抓 ŋ び る 高山 英

眠 ブンガワンソロ 島 障子貼 りつ 启

87 —

の琥 珀の新酒 酌み合 て

どんと 一声音の詐欺 はれて 欺 に 御

調

人なりさすが発句 ガッタクルー ؞ڮ؞ 才 婆

平成二十四年九月九日首尾

(於・三囲神社境内)

注 *マッコリ…朝鮮の酒*アルカンシェール…フランス語の虹*美登利…「たけくらべ」のヒロイン

筆 夫 子 郎 幸 一 有 子 夫 京 水

歌 仙 『フェニックス』

小 池正博捌

初 空 や 翼 広 げる フェニッ 松永直

ス響く街に門 小池正

博

卵

呼 び慣れた古い地名で通じ合 伊藤

はばをきかせる 猫 のご隠 居 渡辺廣 内山尚

まるい夢見ようと月の露天風 訪 れた庭萩こぼれ散 宮地昌

菊 枕縫う指先に香の染みて

尚

美

正

博

似合っていると鏡ささやく

好きだから助けてなんかほしくない 煙に巻くことも外交北の トンネル抜けて進む機関 \mathbb{R} 車

どじょう鍋でもつつくとする

尚

直

子

夏 ドイツ語で書く恐い病 山 の 彼方に淡く昼の 月

禅をすれば旧友めぐりあ 址 花に あ 誘われ花に酔 れこれと聞

城

霞

な

び

く

福

島

0)

里

う 直

> まいやしばらく待てよその太刀+*倦怠を呑む三月のシュレッダー 清 盛 の母は誰かと問うなか

> > 之

火種抱えて白 拍子泣く

治之美博子

首を絞め合ってい ああそれなのにああそれなのに るよな夫婦岩 昭廣尚正直廣

ぬいぐるみどこまでついてくるのか 淋しい方の改 いぐるみどこまでついてくるのかな淋 し い 方 の 改 札 が 良 い焼 き 甘 味 塩 味 ひ か え て ね 之

フォーティエイト歌にダンス 12

三日月に想い流 糸瓜の水をためる竹 れて同窓 会 筒

治美治

88 -

ナウ秋 麗言葉と遊

ない後 悔もなり い酒

処女作のタイトルばかり思い付 り広告に目

を 花 奪 0) わ 色 れ 昌直正昭尚昭昌正廣

昌 代

ŋ

0

りも今年

博

清水昭

平成二十四年一日

(於・アウィーナ大阪)月九日首尾

捌

銀 Ŧi. 月 は 風 鎌田清 名本

7 ンテナシ ヨップ 賑ひ 堀元み

駅

前

メール打つ間も歩み止 れなづむ端 山に既望にほひた めざる 中田くに子 高木じゅん

忘 団 扇 に戯 れ

み

え

漸

寒

0)

漱

石

先生

枕

暮

げて来 み え

苦 労 み 譚 じゅん くに

りたい遣らずの雨で帰れな の写真はいつもほほゑ み え

帰

面

白

きア

ラブ滞

在

妻

友がみやげに酒提

あ 葛湯 スカイ これと子に夢託し春着縫 吹き吹き月の ツ IJ に 長 出を待 き ち 列 じゅん

1

松

葉杖ころが

0

てゐ

花

鳴

舌つたらずに巣立ち鳥

焙

じ茶

神

主

じゅん

平平 成成 一十四年五日

4月二十三日尾 (冷・公山市民会館) 月二十五日首

仙 小 晦

実郎 捌

Ħ

印

は

寺の大屋根

陽

に映え

て

観

並

V.

腐

守りをカップル

ついばん

で

八つ手ひっそり咲ける薮影 用 海 鵜 P 藤井弘

道

行

0)

相合傘

屋

号飛

び

炉

話やがて口

説

き

文

句

12

清めの酒に気

スケートのフィギュアー男女金獲って ハーブを摘んでステーキに添え 坂田酔

名 月に犬の鼾の高らか

°文化の日賞を狙って筆を持 る秋 所

お稽 古帰 り 皆 で 琲

テーブルの下を泳ぐや大きな掌 嫁今なったばっか ŋ

藤

英

樹彦

幸

郎

弘

雨 垂 囃 れの心のどこか疑心ある 流 る山

幸彦弘郎

歌

ソルの白き残照月白 将 棋 岡 目 Ħ

掏 摸もあ 預 り油 金 は 断 利息 めさるな置引 つかぬぞ

訪

花

0)

香りを持ち込んで

弘 郎 樹

平成二十四年十

一(於・横須賀市秋谷藤井邸)二月三十日首尾

イプリルフール騙し騙され

界はもう飽き飽

直

きと

昇る 0) 畦を塗 噴

弘 郎 樹

弘郎樹幸彦弘郎樹幸彦弘郎樹幸彦

ポマードで「ワイルドだろう」吾も よろ L 亦 き

民意聞かずに 民主 遠の <

さ めざめと仰ぐは二十六夜 月

か冬仕 翁 度オペラ見に行く未 媼 豐 作

携 張りはずれ集うイ に恋 人の顔 写 X 1

風 買 う た n

如 0 < は 展 な 覧

90 —

仙 一

小 Ш 廣男捌

巡

蛍

減

鈴鈴 河 恋 汗 翻 月今宵路地もくまなく照らされて 力 出 Ш 覗 末に生まれておきゃんお転婆 鋏 うすむらさきに淡き向つ嶺 ーナビに思わぬ方へ導かれ覗 き し 月 は 凩 に 痩 せ 多き女なれどもみのらずに 豚 虫 雲 鍋にとつとつ語る爺の背が 片手に懸崖 に亡き父偲ぶ刻もあ なる橋を鴎がついと抜 開 ハングル文字の苦労して の神に拾 し月は凩に痩 は の仕 様 わ 書 れた が欲 の 貝 n 菊 三笑亭笑 小鳥弘 東浦佳 小谷伸 磯 マサ子 小川 渡辺ゆきえ 廣 子 道

野

サォトンネルを抜け釜 サッ
興にのり忘れ団扇に書く戯 ランナーの脚たく 納屋はガレージ 民話たずねて重きデンスケ 色 水 JAZZ流れき 風が行き交い子 今日は明るくう 火に 反に貸農園 放 カイツ 即 人出 の香寄せて 着 の役者の化 义 く附属病 姿にどっ 想 是 0) 若者 い託 リーに んで歌 住 0) 0) 粧おぞまし 等が手を振 ましく大通 したの 飯を小さき旅 軽トラを置 きりと て深みゆく秋 増えること 帰りゆく 院 不逞に て花 0) は は n き る 街 昔 マサ子 ゆきえ 廣 ゆきえ 弘 直伸佳 徳 廣 直 伸 佳 徳 サ子 純 子 Ξ 子 道 代 男

91

月

平成二十四年七月二十九日首尾

花

青

雲の志を眉にのせ

永見

7

サ子

成

薄

き

をめざして跳

ね

上がる

弘

(於・永見邸)

歌 仙 -潮 0 目 は

陸への 旅

潮 Ħ は 静 か な 秋を へだ てけ n

昂 に昇 ŋ

から

蔦 紅 檜 ま 大内

道 草 る 子 が

か あさんが窓の内 から呼んでい 岡村和

毛 糸 を 5 佐藤澄

ゥ時 雨 きて五 百 羅 漢 は 眉 岩垂道

渡邊常

人前なれど 強く抱 き合

大 粒のダイヤ巻き上げさようなら 村上孝

穂 とん の先の切れ び 輪 し小筆の捨てられ を描く奥 0 細 道 小谷伸 詂

きくえ

事

枝

跡 茂 る 渡辺ハ

炎 に月 間 来

佐野と

ツエ

花

子

町 防 犯 取 n 佐藤治

川を 分 隔 植 ててショパンきこえ 樹 0) 宴にほ のと酔 小川 長瀬 長濱喜代子

花

通

院

足

ゆ

れ

る

炎

佐渡谷ふみ子

付

経

行

早 起 武 両 道

男 く行くは次の五 の しき ŋ 輪を目指すべ は ず さ 2 <

ビ ルを飲め め し想い る は 君 の隠 喉見 ず 太君治仁常伸と

羅

け ゆく公園なべ てビオ 1

拓

団 塊 世 代 趣

月 皓 ٢ 笹 蒲 <

ろを

ナウ爽 知らぬふりして ŋ ゆ 鳥

やかに鳥 ٤ 良 居 望 0) る ち山

局 0) 隠 功

孝

眠 る 児ごれ

ちてひっそり 方 0) 空 え てる る 74 蜜 阿

営は 父の 理念 を引 殖 き 0) 継 ぎ

守口

薫

福田太ろを

オ四四

月

尽

VI

れ

る

被

災

0

地

伊野口仁

小川理太郎

平平 成成 十四年八日 日日尾首

於·前班 半半 ==バホ ス車内 洋

92 —

道

きくえ

歌 仙 『江戸切子』

磯 直道捌

瑞

澄澄美

瑞

『なでしこ」に国民栄誉爽やか 猟 晩 生 の 男 慣 ら す 楽 し みウエディングドレスの君を乗せる夢 百 江 天 花 座 は 語 展示場にはベンツアウディ 涼 何 年 禅 空の軌 るばると湯治の宿 切子 時 尾をはしょって痛とばると湯治の宿で傷 下見 の記念の社 組 0) 香 三日 先たちて行く山の み 透 習いの巫女さざめきて 間にやら上がりたる 般若 かせ ほ 師 道違 風 月か 7 心経 冷 板 史を上梓 わ 酒干し 通 大河 書 ず 読 る す 月 る にけ 修 式 枝 高山 佐藤澄 東浦佳 舟木美代子 永見 長濱喜代子 高佳 東佳 高佳 子

此

は急な

石

段花の

高佳

時

12

0)

サウ画 ナオ若 嘆 生 母 顏 ヴェネチアングラスに月の光ヶ映えて また増えし鳥の群 銀 にわか仕込みでダンケ・メルシー 伸 形 夾竹桃 よ 架立てて日曜 駒 きっ 涯 見の び 声掛 りも頭のよき の 杏 活 に一度 し寿命に 駈 8 黄 終え 品 天 けぬ けられた夢昼寝覚 昭 の赤くもえ Ш のパイプくゆら 葉 和 河 は けてゆく広き 0) て 画 遠 が 家は秋惜し 桁 美 婚 華船 れは電線に < 好きと言 意 賀 活 しき 霞 る 気 0) 源 年 旺 の ち 2 金 原 径 め 孫 る 旅 内 11 服部早 高佳 東佳

子早子早子美澄美苗美〃〃

93 —

平成二十四年十月二十一日尾平成二十四年五月 二十日首

大

Š

りに

作る

草

餅

歌 仙 風 鈴

磯 直道 捌

塩 朝 夜 抱 戻 友 易 江 そ ごみ出 拍 顏 V 害 0) あ コ 擁 戸 り来て又すぐ 断 ぞ を 車 1 地 0) や 風 れば今宵の を を 震 を 鈴 ろ 田は不作 ヒ 誰 道 連 あ 鳴 か 間 かめ か P 具 神 わせて飛 ね る 0) け 0 にじ 迫 波 小 や るサ 香 憑 日は ŋ に て 月 多 田 脇 12 < ろり て落 嫁 と言うべ 0) 彩 映 に に イレン 鴉 誘 寒 びだす竈 いやまろ 地 る b 帰 湧 ち着 た 睨 わ 圃 月 舟 0 < 可 n まれ れ 0) き 0) じ き 0) る 動 か 灯 窓 ょ 頃 大内善 渡辺ハ 廣田 磯 永見 伸 徳 直 ツヱ 徳 道 道 徳 伸 子 伸 子 節 ナウ新 隠 防 月 黙 勿 遠 主 ね 薄 災 阿 豆 体 利 真 0) 役 鎌 黴

杓

子

は

右

往

左

往

ハ伸ハ伸徳

道

節

94

徳

善伸男

〃 伸

道

伸徳

道

お

さ

め

春

を

惜

8

n

埋

め

明

き

飛

花

落

花

ナオ凜 密 ねもすをしとぴっちゃんと戻り梅 どこか サプリ 色 然 P 弥は 即 ٤ 腐そっと掬 か にあ せ 古 素 是 ザ 生 13 メントに 生. 5 誰 けて取 都 き 逢 頄 え ド とな のこと りて偲 0) 様 瀬 で 老 堂 け る b マ 重 く響く 木 塔そびえ立 ŋ " ۲, 頼る明け暮 かと尋ね て ね また一 ぶ お 出 プ配 0 偶 株 て て ふる す酒 宝 を 恋 幾年 鍋 虫の 価 5 徹 果 0) 操 暴 n さ 0) 5 0) b ち 音 と 落 瓶 中 に n れ れ 7 軸 雨 小川 廣

平平 成成 年年十五

花

四

季

豊

かに

廻らせて

れ

ば

傘

b

ささ

ず

伸

袖

振

ŋ

1,

る

野

遊

び

北沢タウンホール)

ナオみ

ち

0)

くの

人

は寡黙に耕せる

ハツヱ

歌仙『胡瓜揉み』

磯 直道捌

ウ宮 晚 干 餇 可 天蓋に一人おわすはお 涼 引 首かざりして売ら しんかんとして冴えわたる ほろり ヒルズの夜 いネコが腹が減ったとにじり寄 窓 相 酌 柿 途 率 会外し振りとてハシ 撲 孫 風 な ひと 少 教 刻 軒 声を ほ る 渡 師 年 は にぎわ ろりとこぼる草 私 0) ま る すごい 0) 揃 明 部で だ 構 な 海 け えて な わ き 誰も居なく 沿 勝 h れ ず 漆 歌 イ 7 ち 胡 ゆ 彼 村 芸 ケ う す 月 瓜 0) す 不 豐 さ 揉 月 か 道 倫 実 h 星野秀 磯 堤 柳田 田村 吉田 廣田: 渡辺 瑛 直 柳 康 節 ツ

> ナウ萩 花 健 軽 爱 今 これから 高 青 2 た そこかしこにて H コンピュ 芒 鴨 診 0) オか かぶ 葉し う D の月雲の行き で 0) 巣 速 母 近 の親子は水面すいすいとの親子は水面すいすいすいとの親子は水面すいすいといったといったのがありまたる街のオアシスをはままがあるがある。 K な ら流 道 は余生 想 h き道に マンションのうち う 路 迫 吠え れ る曲にいやされ しば る 楽 郷 式 にあふれい しく未知の 雲雀 思 し渋 う V Ш 鳴 7 出 旅 ハ 外 絹 外 ツ 〃 ヱ 男 子 男 柳瑛外ハ康外 子子男ヱ弘男 男

> > — 95 —

平成二十四年十一月 十日尾平成二十四年 五月十二日首

遅

きの花は

よう

やく

開き始

康

テ

圃

面

12

地

震

速

報

ツヱ

雨

に

b

負

けず

啄

木

忌

と

7

森

登

·一月 十日尾 五月十二日首

仙 焼 酎

直道 捌

掃 書 塀 駅 好きだからかしづくことの楽しくて 煌 焼 手をつなぎ子供等幹をめぐらし 静かに暮れたひと日嬉し 廃校 細 Ш 下弦の 予定ぎっしり妻のメモ 耳をすま 眠気覚ましに啜るコー まさ 苔に語らいかけて水そそぎ を出る列車の屋根の厚い 々と辺りを照らす望の きかけの学位論文卓の 0 酎 の流 上窺う猫と目 0 ٤ 古 品 れの 風に気分くつ 月 河 定め な 道 せば の冴える 津 る山 ゆ ゆるく清 かな 桜の 虫の が合い の 花 旅 陽 早 開 き 帳 朝 佐渡谷ふみ子 佐藤治 岩本千 梅主ともえ 長濱喜代子 仁杉と ٤ 直 ともえ ょ 1 鎮 共 街 す 単 か の 途 の

のひびき

る

ナォ草餅のほのかな香 サゥやや寒くぽつりぽつりと雨の降 忘られぬ婚家に置いてきし吾が子ホコテンなれど裏にお社社学のほグスプ 街行けば信号待ちの交差点汗流しつつリハビリをして蝉の声ふととぎれたる昼下り惚れて一緒になって地獄に 蝉 ポタンと落ちし庭 つんどく本の整 マクドナルドの わ地震グラグラ 稼ぎ増えて男女は同権 かりの管理職にと告げられて れかぬる中 赴 任癒 独 匂いぷんぷ 揺 ウク り酌 理さっぱ れる窓の の れみるつ 柿 の 'n 月 と ん点 実 b h とと も も も まえ ふ 喜 直 治 ミ 千 ふ喜直治ミ

— 96 —

平平 一十四年十十 ·一月月十 四一 於日日 於尾首 北沢タウンホール)

歌 仙 秋 0 風

磯 直 道 捌

ゥお 自 退 満 爛 ね おなじみのデー 朱塗 蚊 待てど暮らせど 兎 転 じ回しそびれ 壁 職 社 天 車を 見 取 0) 0) 蔵 酒 りの ŋ ŋ 星 灯 技 0) 習う子補助器未だとれ 合う 線 ぞ ŋ き コスモ てよよ ひ 橋を 香 b 0) 霞 トコースと名の高 ٤ < ゆ T 助 細 き 小 女人来た 映 スよく似 時 ス る き とけ け ح 潮 お 計 さ す n 神 1) 舟 酔 P 騒 遅 き JII 湯 入 0 匂 0) が 合 ず る ず 愐 守 菜 町 達 < 伊野 宮崎宏 渡辺美 林田越 瀧 清 佐野と 笠井貴志恵 己 麻 子 道 き 越

校

花

b

び

0

— 97

旅

虹

執

寄

る

高

き

平平

一十 四四 年年

二月十日尾

か故 デ 美 停 病 や 瓦 時 社 袓 さしさが取柄の彼にふと惹 な 床 7 空 里 電 フラーの 地 H のか 母 礫 れど政 内 0) 0) 0) 下 脇 0) 0) 慰 Ŀ 味 雪 街 でやっ 投 にアルバ 散 げ 年 安 下 富 は自 が 局 りに猫 忌に 步 げ 女シャ で 0) 士: 折 ŋ r, はこれ と見つけた新素 去 す 首 慢 厳 ŋ 框 だ晴 4 年 がし と父のご 0) ッターを切 相 b 積まれ 0) き で 木 5 寄 撲 れやら 思 お手 虫 0) H 協 る 鳴 古 vi Z 添 た か 11 柄 2 る 材 会 出れり 月 て汁 き Vi 0 筆直美麻と越宏き仁直貴美麻と き 越宏

句碑を

直道

つむ青葉の濃

がきれ光りさしこむ三日の月 腐売る笛懐かしく 耳ピクと動

満

か仏

。会議果てて気楽に交す菊の

糸瓜ぶらりと影を落せ

间

う

雲足早く俄

围

寡

黙

な人のなめらかな

次

地デジ対策もうすみました

?

々とエコ商品にとりかえて

ガ

ード下人待ち顔の夜鳴蕎

月影

淡く酷

寒のビ

ば

りと初

恋

0

彼街

0)

友より届く花

[ii]

ぶき屋根に暖

か

後

期

齡

節久直昌佐節久直昌佐節久直

検 宿 もくもくと入道雲 地球儀を廻し夢見る春のは 本彫の熊はだいぶふるびて 相題のスケッチ孫は描きあげ」 では、の幸を見守る道祖 が入の幸を見守る道祖 をして、なった、なる水屋の でいい、なる水屋の でいい、なった。 でいいい、なった。 でいい、なった。 でいい、 でいいい、 でいい、 でいいい、 でいいい、 でいい、 でいいいい、 でいいい、 でいい、 でいいい、 でいいいいい、 でいいいいい、 でいいいいいいい、 でいいいいいいいい、 でいいいいいいい、 でいいい 震災 るず々て岸く去妻を刻め旗神らして旅

久昌佐節久直昌佐節久直昌佐節久直昌佐

— 98 —

ナオ暮れかぬるグランド

ゴ

ル

フ楽しみて

<

和

詩

鈴

美

れ

屋

美和美常

る

館

ゆ冷 胸 月 趣 た 更 濡 滝 牛 薄 病 カチン け び 0 ま こゑ木 たる ヤ 摘 咲 野 炎をおさえ 展にお れ 0) 茶 1) 並 歌 IJ き 2 月 š ア 自転 癒 て コ弾 仙 光ゲ さい かと 筋 近 狐 玉 0) 唄 妻 層 独 真 訛 車 散 が 銭 7 4 と暮 別 ば 漕 稜 ンネル愛 n 1/4 風 鳴 狙 政 な れ 口 ぐも凍 0) 線 直 方 気 夏 12 うこそ泥 らす け れ h 雅 ケ の手を は Ίj. かな 乗 豐 U. V. 新 すら は ŋ 気 ての 夏 快 伸 地 所 虫 る 怪 れ 調 1) 馬場 佐藤鈴 梁井和 渡邊常 美 常 鈴 玲 和 和 和 子 赤 観 省 奪 今 城 不 子連 遙 海: 手 短 H 1:1 4. 工 札 跡 月 も上が 際 も又対の上 蚪 子 か 峇 で求 地 な れ 群 ŋ 揃 で冷 花 断 0) 住 が バツイチ め つぶ 0 吹 捨 りてう 夢 お りて午 途 た戸 房 コン操作 て 雪 離 握 貘 着で き 混 舞 お 棚 か Ш み 後 相 で見 値 ぬ や Ξ Vi X 泣 華 性 打 仮 0) か 深 5 " ガ 田 加 菫 や 义 鰯 詰 b 設 ひ ち ピン な リー ま る 0 煎 よ 31 書 げ 0) 部 と B 5 H

一十四年十一月二十四年 八月二 九州市立貴船市民センター)二十二日尾二十三日首

99

"

る

美

K

0)

鈴

1)

<

和

里

7

玲

餅

"

常

刻

執

歌 仙 鳥 \equiv

大江 加代子 捌

が旅 炭 咲 猫 路 にっこりと物言 麗 青 き初い 眠 気 風 鉱 日に 地 原 3 れ 面 便ポ のシンボル・ボタの尖り失 r 随 荷 ŋ 裏 け る 中 めし花のトンネルどこまでも 明日 11 てしまえ 気 を 0) て冷 続 っぱ 長 ストひっそりと 辻を 儘 解 0 it 曲 it 屋 飛 遠 0) ぎに い炎えるかげろ る Ш いか ば 月 鳥 出を子等はしゃ 遊 岬 ば痘 洩 る 爽 澄 びぐせ けて軟派する れ 茂 れ れ やか船 Ш ば T 痕笑 ば H 月 くる 窪 き せ ち で 長 稲田 大江 山口 政 節 加 子 加 サウ朝 花 許 呼 在 配 夕 3 ずさり ŋ エッ は

ちび

た箒

で掃き

筆琴加琴安節政琴加節安加琴節《安加

-100 -

は

占

3

左陣め

トバラン

スボー

して子

逃

児

島

徳

Ш

水

執

ナオ箱 憧 寒 れ 0) 膳 薫きの ね 0) 終え テ もすの を 己が な法 1 雪 押 朱 香 たる がど して ٤ 塗 0 被 た 思 有り か は辺 さと落ちく ずことも クを夢みつ ŋ えど深 わす 椀 沈思 勇 打 り窺 の 0) ま 返 実 蜆 密 黙 0) す な る < 波 IIIL 約 考 汁 く忌仲 T

平平 一十四年(於・北-)十四年 八月二 九州市立貴船市民センター)二十二日尾二十三日首

歌 仙 鷺 羽

佐藤ゑつ子捌

| <u>.</u> | 美 | 雲の流るるうららかな刻 |
|----------|-------|----------------|
| 平平成成 | ゑ | 洛北の大樹の花のほつほつと |
| | 孝 | 部屋の灯を少し絞りて |
| | " | 亡き父の手捻り盃で酌む地酒 |
| | 満 | ふと見あぐれば涼し半月 |
| 夢は大 | 孝 | 鉦太鼓祇園祭の練習に |
| 花万杂記, | 美 | 坐るベンチは塗りたてのビラ |
| 遍路の | 孝 | 拗れたる領土問題右左 |
| 銘水のペッ | 満 | 遙か彼方に海の輝き |
| 太極拳 | Ž. | ハードルを下げて結婚決意する |
| が庭先で蟷 | 孝 | 湯上りの肌寄せるカップル |
| 推敲の | Ž | ッ雪吊りの縄目の美しき旅の宿 |
| 月今宵字 | 孝 | ビル風強く落葉舞いつつ |
| 職を退 | 満 | 愛犬の自慢ばなしはきりもなく |
| イーゼル | 土師満智子 | 日課となりしブログ書き込み |
| 味わう | 村上孝 枝 | 衣被大鍋のまま運び来て |
| 春近く再 | 橋本美智子 | 名残の月を待ちわびる子等 |
| 中年太 | 佐藤ゑつ子 | 3翔ちて刈田の陽を乱 |
| 信しきら | | |

鈴

に

ぬ

撮

りあ

トボ

を持ち歩

-101 -

慎重に合 はかなく消え 工 木 忌 製 古き詩 コンすれ 品 ヤズの流 螂 き趣 お 生 油 ŋ 茶 0) 鎌 ょ は し若き どれ 療 ど決められ く売れる 香 の生き甲 振 を ま 止. ー住み心 れる裏 期 ŋ 読 ŋ b る る 重 待 膨 み か H 未 漸 毎: 0) 返 ざ ょ 完 通 ず 恋 斐 成 店 寒 地 か 着 て ŋ H 孝満 美多孝 美 満 ゑ 孝 美 ゑ 満 美 〃 孝

(於・北九州市立貴船市民センター)|十四年十一月二十二日尾||十四年 八月二十三日首

歌 仙

松 \mathbb{H} 千佐 代 捌

芝 どこからか茶摘 ŀ 流 ラ る " る 立 0) 雲 0 過ぎ去り を 唄の聞こえきて 暖 め か お て b ゆ 廣渡雪 守口 松田千佐

う猿 噂 では 酒 は 彼 母 には妻子 頃 0) 自 男 慢 いるら 性 ょ 迎

Ш

にの

っと顔

出す

か

4

た

る

0 のオリンピックの 逃 谷 げ 間 て に紙 揺 れ る 夢のあ 雪 籠 る

清 掃 修 眉 行 月 Ξ 風 昧 す る

薫

花 晋三 て向 逃が 産 かう 7 か なるか ま 連 旬 0) る 首 除 相 初

城戸

平平

四四年年

十八

(於・北九州市立市民センター)月二十五日尾月二十三日首

憧

後 月 眼 光 き

ナウ カ ラオ 気 あ ケのお誘い v あ 笑 受けし敬老 顔 ほ ころ H

1) 賞 品 6 ٤ 思 込 CV み

薫

ときわ 楼 浮 港 高く舞 くは 花 いは る か あ 神 分 が 咲 合 る

並

サオ小 流 す れ 0) 猫 お 狙 玉 杓子 0) 0) 黒 V 刻 陣

T.

草 河 祖 豚 13: 鍋 隠 れん 集う 坊 司 胞 蔵 賑やか 思 0) 61 出 宝

筋 骨 凛 凛 しラ グ ピ 1 0) 君

愛してる死ぬほど好 言 われてみれば迷うじゃない きよほんとう か よ

れ 旅 をネ " で検 索

鞄 胃 鬼 瓦め

芋 田 楽 0) 焼 上凄 が VI る 2 ろ

雪雅蒸雅千〃薰〃雪蒸雅千蒸雪〃

— 102 —

半歌仙 山 法 師

名本敦子 捌

水 靴 Ш 鶏小屋に犬が キャンプうれしき子らの歓 法 平線離れぽつかり 下の穴不器 師 雲と遊 んでゐるや 用に締 う る T 平井繁 名本敦 松崎伸 山岡良 立花千代満

月

ウ虫 の 音 を B G Mに酒を酌 2

自然薯分ける隣づ

5

去りゆける又の逢瀬を願 濃く染みつける彼 の移 ひつ ŋ 香 高木幸

スポーツカーの吐ける排 間 の驕りに地球熱を出 ガ ス

門田真由

美

伸

惠

良

凍月ぴたと空に張

b

き

幸

咳 貧乏神の憑いて離 つこぼし芭蕉は枯 野 ず

ルルにて画友と競ふ若き日 井 裏 に 古 き 長 K 櫃

風

吹けば風

のまにまに花

筏

鍬

à

る

へば

土.

0)

匂へ

る

敦千真

幸

平成二十四年六月三十日首尾

サオ誘

は

れ

都

踊

を

楽

L

仙 『生きざまに』

尚 捌

恋

也 す ぜ … ぶ病なので変えぶ病なんて新たな恋でででし、嫉妬するのは好きといふ事嫉妬するのは好きといふ事

も恋

変

II

還

ハンドバッグは

ランド

0)

事と

の実降る音はいつしか譜となりて きざまに 疑 問 符 つけし 秋灯 紀伊郁

0) 腕を組む 川嶋七

何 代も続くよろ

井ノロカ

天

空の遥

かな尾根かなイ

根

に

望

0)

月

カ

織

筆郁玲眸郁玲眸郁玲眸玲ヵ郁玲眸カ玲郁

0)

高

鳴

\$

-104 -

ド

T

P P

界加

か非

を

湖

に浮かぶボート

0)

揺

か非ま

物すかずしえ

抱

瓜咲く道 辿りひもろぎ

度を越せば愛はうるさいストーカ 平家の裔と称し言ひ寄る

税 シャンプーなんて猫は迷 金は増えて年金減るばか

郁

てマスタ

カ

**やじろべえ作る団急 ぐ 家 路 に 鵙

栗並べる

子

傾

14

弦 月は凍てて我が身を射すごとく 今日はすき家で明日は吉野

船に偲ぶ 故 郷

杖 ささやき乍ら吹け になり苔むして立つ廃校 気は晴れ晴れと花の

获山

四

眸 七

薫が

佐

保

執

ラス

育

月十三日尾

於

川嶋邸)

止

まる

友

禅

歌 仙 逢 な

小布施とは逢瀬にちなむと伝えたるもなつかしく 山寺辰巳&矢崎 藍捌

ひらに青い 林檎 の逢瀬

子の列をなしたる信号に び 風 薫 る 栗原たけと

キャンバス立てしままのキッチン 問瀬

りかけの仕事を残し真夜の月 深津

がちゃがちゃ鳴 いて輪唱となる

白 のゲス トハ ウ スの 秋 深 稲垣渥 子

命 守りたき人見つ る は 西へ け 栗原良

な れど鍵 は ひ

押 すれちがいしは お茶とお花のお 座 敷 わら

え H の復 興 会議 届 0)

氷 河 期 ドネシ と笑いころげる白 7 か ŋ 寿に

サオ耕 チ は + 隅 から 迷 隅 路にはまる まで 品 念入り 流 次 れ 男 坊 る

しょうもない政 昼 は だかる 寝 0) 夢 奴 が 局がらみの消費 敵 か 後 味 力 か 税

鴻 羽 山 黒 蜻 妖 面 寸 か 扇 す め な る n

と辰

美

藍

明

渥美

お 百 度 て は ひ 恋 たむ の き 明

高 新 速 麦 りればそこが栗の なら ば 盛 は \equiv 枚 径

ŋ

渥美と合藍

-105 -

ナウ フルートのミニコン サート猫も聴き

航 海 校の子等はホ 動 プステ む 安 ッ プ

Ŧi. 輪 旗 風 わ

漫 魚 を 包 み 2 Ш

辰

明

重

爛

平成二十四年六月二十八日首尾

れ、一同感激の三日間を会」と合同で歌仙を巻く、 会」と合同で歌仙を巻く、まなともの皆さんの厚いおもてなしに触ころも連句会より六名が懸案の小布施訪問。長野の「まなとも連句 一同感激の三日間を過ごす。

歌 仙 「蚊 帳

女

合

オカ 水 Ш オ 哀史 川はさらさらよどみなく行く 天の鈿女のふくよかな笑 ハンガーまるめカラス巣作 丈の ちじくの厚い羊羹お気に召し 源 スプレー海上渡 里に月照らしをり木守 アールックの 物に やかに町営バスの発車して 0) 茶店には芙蓉活 リナの音色さやけく昼の 猫 の花の並 して母 の の だ 髪まつはりて手枕 好み 執 心なくて一生 取り合ひし蚊 こる村に け 木に句碑ありて 並ぶ に僕 犬のお散 先 り岩国 物 は 生 けら 帳 0) 過ぎ 0) n 身 れ 兎 繁原敏 由川慶 近藤とみ子 守 ナウ Ŋ 情 道 化 原 か 篭餅 月夜 灯 をたっぷ 鳴 新 品

はす

風

光

れ

WD

旅

b

ネ

"

1

菜壳

n

 \mathbf{III}

に

入

れ

女守と合慶守合女〃と合慶と

-106 -

並

55

春

平 「カフェコンセル」は 好きだ好きだはもう聞き飽き 雨 熱もオーバーヒ 発の先延ばし縁 台 将 棋 雪 き氷赤いシロッ 成 旨 を見 ありけりイク によ L 帽子に揺 ながら くぞ女 畳: らす 鰯 と生 喜 ートの三年 を れる する後始 隠 寿と卒寿 沁み込 マネの名 まれ 年 ンと云 肴 詰 羽 ٢ め 0) たる 飾 2 3 Ħ が 作 末 夢 た 12 h で

・豊田市青少年センター)四日首尾

平成二十四年七月二

二十韻 初 懐 紙

石川 葵捌

フス リーブ ス や猫も鳥 b 初 矢崎

藍

通 りの電車飛び 石i川 石川 桃 里

唄がみやげの孫の 月 深津明 M

片言

勉

実

直そ

れ

が

取

野葡

萄摘めば

染まる指

先

明

玉三郎の恋は深みに穴まど

雑踏を掻き分けてゆくスクータ

1

笛の

聞こえる六道の

辻

穂 明 藍

碗

サッササイダーで梅酒を割っている茶

何でも診

ます髭

0)

生

煙

乱

れる

蚊

収

線

シュプールを描くゲレンデ熱いキス

業を

継

いで半世

紀

過

月冴え冴えと

制

服の

はきょうも領海

線を行き

ナウ案 内 落 花霏々やがてこの身も花となる 風 柔 乞 刻は か 佨 防 の鳴くらしびく名跡寺 干す 母

明葵穂

-107 -

平成二十四年一

(於·桜花学園大学513教室)月二十四日首尾

横浜·柴庵》

連句詩 一日八日が宮野礼 夜八夜』

中尾青宵捌

酒折 の杜

日で雉とガボ 夜パル

懐の巻紙は所どころ虫食いで

文庫に籠ったが推し得ず

文芸への熱い情熱は

霜野の実南天より紅いのだが

あざ笑うように只

思わずさざれ石を蹴る

村 П の地蔵尊が

半眼で問うている

入れる袋は嚢と嚢汝の幸福指数は幾らと

人の幸と悲しみは

それぞれに入れる

嚢は大きく嚢は小袋だが

世界大戦一次・二次

戦を無くせぬ人間の歴史

何百万人が死んだ

そして

抑圧と苦悩 0)

戦後の長い暗やみ

恐怖の文化大革命の迫害 踏みにじられたプラハの春

戦車と銃弾と

それでもやがて

ベルリンの壁の崩壊

また

遠く暗黒といわれるアフリカで

ジャスミン革命が そして

ビルマ 今はミャンマ ーと改名の国で

アウンサン・スーチーさんが解放されたりした

力

アメリカの大統領は殊勝にも

広島に祈祷に来るといって

だが未だ実現せず

額縁を抜けて

馬が曠野へ走り去る

故郷の訛りを捨てて

都会人になってはみたが

いつまでも他人の居心地

今日はスカイツリー の目出度き開業

横目で見つつ

一百円の弁当を食べる

春爛漫だった隅田川も

今は初夏

相変わらず川舟は往来する

多くは荷船

殆ど見ぬ釣りのふね

昔は猪牙舟

行き交ふ愛憎

雨があって

風が業平橋を捲くる

やがて夕虹

誰かの羅の発表会の案内

露草の染め そは慰みか

その陰こそ

少しアンニュイ

老鶯を迦陵頻伽と聴く 五体投地の山道

古代人が茶を煮て汲む

遠くの狼煙台は

薪と粟を収めて静謐

沢では鮠が岩をくねり

風が清い

思い切ってショートカットにした

若い婆が

孫を抱けぬと嘆く

津波のあと なぜなら

原子炉が崩壊し

夥しいセシウム線量 0 拡散が:

髪にも

そは

奢りと油断と無能さ

焔の揺らめきを

- 109 **—**

今年は筍も掘らずに ひたすら窯を焚き守る

キの巣立ちを聞く

薄暑に坐し

ひたすら

これも絶滅危惧種という麦魚の

産卵の環境を整え

稚き生命の誕生を援ける

嚢と嚢 静かな幸の

十日 九 日

> 平成二十四年五 月

於 酒折宮社務所)

酒伊武小中東井藤枝林尾(連衆) 敬弥幸節青 子生子子宵 奥福淀鈴加 脇島川木藤 か和じ圭龟よ子み子女 小瑞鵜渡 島光沢辺 七八 七千 村子代植 関源水森 野川 桃 禾 淳 恵 子 甫 子

参考)

現代連句は、①非定型(総句数と節(章)数と節内句数の自由)②現代連句は、①非定型(総句数と節(章)数と節内句数の自由)②現代連句は、①非定型(総句数と節(章)数と節内句数の自由)②現代連句は、①非定型(総句数と節(章)数と節内句数の自由)②現代連句は、①非定型(総句数と節(章)数と節内句数の自由)②現代連句は、①非定型(総句数と節(章)数と節内句数の自由)② この作品は、 (紛らわしいが詩を連ね 現代連句の範疇で、 る『連詩』ではなく、 ではなく、連句部門である)。「連詞』 = 『連句詩』と称する。

注注 十年前(200 夜八夜…古事記 2)「桃の花」の巻の奉納に次いで、今年

(2012)再礼した。

二十韻 -蒲公 英 0

恒 Ш 暁 子 捌

蒲 春 服 公 消え を 英 残るつくば れ て 鼓 0) 音 田中絢 恒川 暁

マカロンひとつコーヒーに添 揃える母はにこやか

花

万杂

児

眠

ボ

ル

森岡しげる

カ

リヨンの

響く避暑地に月いづる

海

ほお

ずきを鳴らす少

年

お

やかな年上の人に憧れ

美 暁

味

ナオ震

それぞれの村それぞれ

災の特番ばかりのテレ

Ш

裾を縫ってハイウェーどこまでも

長編

小説

書き上げる午

後

熱

どうぞと誘

う

渡

りたく

実

ば

し犬

0)

紅さす雲に望

服

効

美 絢 し晩 絢

> 口 笑 ウィ いふ のパーティ ŋ ま き ー準備うきうきと

道化師がくる は風光る中 りお ŋ

美絢し晩

平成二十四年三月十三日首尾

-111 -

天

柴犬がチェックのシャツを着せられて ポケットを叩けば飴とビスケッ うっすらと筆でなぞりし眉 いかがですソーシャルダンス御一緒に 留学 ぱっしぱっしとペチカ燃え出 ひらがなだけ 捨離をめざす孤庵のそぞろ寒 凍つる宗 水を落とすせせらぎの音 人形は泣いてばかりで メラを 歌 先で双子たま 仙 先 関 そろえ 膝に磨く 谷 巻 0) 海 母 きざ 飯 峡 岜 て巻 0) 蛸 渡 手 る の月 側 頃 1 足 る 木之下みなみ \mathbf{H} 田中安 興 が団 サォのどらかな井戸端 咲く 袓 お K うつくしきけものと云う種に溺れたる貫 頭 衣 ご し 鼓 動 伝 わ り 今 石 Ш 深 熱 1 ひとの食べてるものを欲しがり 父 塊の世代ひそかに しゃべりな九官 籍を変えれど叶 宵また月と流 組 トロ もよ 山列 爪 の名の稲荷鳥居が有るという 燗 蚪 遡 平平成成 0) ちょび をした る 帳 し散るもよしとて花の宴 の森 (於・さいたま市浦和コミュニティセンター)二十四年七月 二日尾二十四年三月二十一日首 車にさっ 紐 段が は より 御 球を投 会議果てもなく ŋ あ 鳥は休みなく 離う 命 右 晴 わざりし夢 君 る つぎっ 乗 茱萸の 0) 流 れ を Ш げ込 ŋ に 枕 親 墳 込 頭 酒 塚 み ぎ 7 火 指

安み興安み盛

— 112 —

み安

興

2

2

が断

 \mathbb{H}

抱

花

月

『渇きの街』

大久保風 子

·大鳥居照葉の中にそそり立ち 彼 姑娘を乗せてイケメン車夫きり 陶 タイムオフ寸前ひよいとシュート決め 電 雷おこし手土産に買ふ 穴まどひして里に出演の余韻抱きて月の 月 恋の掟をポンとけとばし 方 狸 中 より思はぬ人の遠会 揭示板 天に昴 渇きの りして酒買ひ 冴えざえ 池田耕 治風興ズ風治ズ興治 風興

> 得意気に浄瑠璃うなり今日の月出しぬけに幼馴染みのプロポーズ出しぬけに幼馴染みのプロポーズと手紙を書いて宛名は伏せしをり絵手紙を書いて宛名は伏せしをりにすると、 の 戒 名 忘 却 の 涯 で 夫 の 戒 名 忘 却 の 涯 めくるめく万華鏡 の仔を持 耳に聞 廻しして下校の てズの家涯は体

口魚 の目の泳ぎ回れる地の上りから真実漏れる籠の出る はん た島の所有契続ははかどらぬま、秋深み 満ちて落暉に に 三脚据 えて る花万 初 る中者み鴨月 れり 風ズ治興風ズ興治風治ズ興治風興ズ風治

-113 -

ナウ原

(於・さいたま市浦和コミュニティセンター)平成二十二年七月十八日首尾

羽

田から四千

初

8

たる四囲の山蓙の番する花の

かしむ日

メ

検

オン座六句 忘

衆議判

第一連

ライトン ロッ クとりどり年 松島正

霜 は 天 0) 挨 拶 佛測雀

羅

新 築の駅舎煉瓦にこだわり て 松島アンズ

ホームに吊るす干 柿の 赤

月 餅と酒と猩々未だ酔え ず

落葉の山から子ども飛び出す フィッツサイモンズ西門 スチュワート鞠

第二連

熱 帯 森 0) 古 池 鰐

涙こぼ して 密 猟 0) 旅

ウォンテッドミニスカートは短かすぎ の向こうに投げる 文

退 屈 な薔薇 戦 争に 鳩

現れ出づる処女王の

花崎まんだら

浅質丁 真野 泰 那

松島 涉

羅

衛

注

第三連

文体とも様式と 氷人花聟を抱え敷居を越える もスタイルのこと訳す時

心移りしてごめんねでももう遅い 焼 け 0) ル ル

六角柱の土 手道を通う巨 神兵

那泰

5

鞠

門ア

跏 思 惟 0) 夢 心にし て

第四連

莱 Щ をひとま た 3

涉

衛

信が月遊遊 を 射 る 老 夫

厩 橋 妻 0) に b 春 雪

「葉とは怨念のごとき宝石陽のソクラテス青きを踏んで

門

ら

衛

-114 -

プラトン墨すり逐語書き留

平成二十四年十二月九日首尾

老虎亭)

ある。 ン名物の棒状の飴。グレアム・グリーンに同名の小説がブライトンロック…ロンドン近郊の海浜観光地ブライト

とも呼ばれる。 ウルル…オーストラリアにある一枚岩。エアーズロック

ON THE ROCK "A YEAR END PARTY"

Composed at William Blake's Inn, Matsudo, On 9th December, 2012

an ensemble

| Shoichi |
|---------|
| Jakura |
| Ann |
| Seiei |
| Saimon |
| Mari |
| |
| Mandala |
| Yasushi |
| Teina |
| Wataru |
| Jakura |
| |

III

| Style. La Mode. Der Stil. De Stijl. All these translations. | Ann |
|--|---------|
| The Iceman Cometh, bridegrooms carried across thresholds | Saimon |
| You promise me the Earth. Too late. My heart belongs to another. | Mari |
| The evening glow of Uluru. | Mandala |
| Causeway of hexagonal rocks trod upon by Titans. | Yasushi |
| The Meditation Buddha, one leg on the other, seen in a dream. | Teina |

Seiei

emerging into the Reign/of the Virgin Queen

IV

| Wataru |
|---------|
| Shoichi |
| Seiei |
| Saimon |
| Mari |
| Mandala |
| |

注 オン座六句「年忘」の巻は二名の英国人を連衆に迎えたため、一巻は英語 日本語同時進行で首尾いたしました。英語版は日本語版の直訳ではなく、 からみあって一つの作品となりました。

サオ小

III

に

て

お

玉

杓

子の

遊

びね

る

T

神

歌

仙

井 Щ

二匹

0)

チ

ワ

ワす

りよつて来る

サ

備

前

0)

 \mathbf{III}

に盛りて出

す

毎:

H

お

やべり続

<

 $\mathcal{T}_{\mathbf{L}}$ 郎 続 井門 可

上. 鮎 流 風 る 強 る Ш 立 12 さ T

椎 茸 を 輪

横 る 先

ゥお 母 手 h 0)

恋 恋 0) 席 12 4 牛 着 ビ たく 年

思 S 0) る ば か 1) 恋

飴 さ ŋ 7 迷 S

傷 ラ 後 0) オ 瘡 聞 蓋 き ٤ h て 孫 IÍIL 0) 便

秋 祖 13: を 読 た て 山 雀 0) 鳴

唐

Vi

b

を

洗

盥

写.

る

月

飛 寂 て 悪 花 書 片 積 続 治 b H K ŋ 7

咳こぼす(俵)万智の句集をとぢて寝る

か

しげな三味

0)

音色の流る

町

池

<u>v</u>.

柱

灯

籠

日も

H

彼

0)

T E L

待

ホ

直

す

還

暦

0)

妻

色香

あ

1)

U

夕

ーンをして

農家引き継

ぎ

千奈千奈千奈千奈千奈千奈千奈千奈

奈 千

月

光

限

h

0)

稲そよ

ぎ

を

誘

風

0)

過

ぎ

行

き

-116 -

奈 千

ナウ松

茸

鍋

を

囲

み

湯

気の

舞

は

鼻

ず

ŋ

ち

Ŧ.

才

選

手

次

R

選

出

"

数

Ħ

道

後

公

桌

花

記

録

ま

た

雨

に

誘

は

れ

ふく

奈千奈千奈千奈

平平

四一

月月十

十日尾十日首

壶

煙

る

春

0)

野

遊

ナオ故

郷

0)

Ŧ

鱈じっく

り噛み締めて

生

活

保

護

は

受

け

ね

頑張

b

歌 仙 蘭

尚 村 糸子

月 Ш 風 0) 元 宵 て 土 れ 酒も 手 す ま 寸 鈴 ま 笑 子も 蘭 残 鳴 る 意 面 小野 杉山 13 和田 西元百合子 里 苅 ひ 俊 ろ子

ヴ通 挑 来 て 的 蟷 螂 誘 狙 う う 迷 新 岡村糸 中村 恵

神 ビリの 社 0) 掃 太 除 極拳も 今 朝 b な 欠 め か 5 さ ず

艷

や

後

姿

0)

腰

細

<

夜 友 昢 0) 連 窓 れ 寸. 耿 月 \mathbb{E}

事 肩 凍 故 エイスブッ 調 T み花 で言 杣 0) クに 1 訳 道 ば 挙がる書き込み ネ か ル 影 ŋ 通 す h る 総 17 理

山

際

大

き

虹

が橋を架け

どこでもド

アードラえもん行く

ワイシャツはいつもしっかり糊をつけ

多種

スポ

1

ツジムに通い筋

1

V

ち恵糸耿百里苅ろ俊ち糸恵耿百里苅ろ俊

類

0)

サ

プ

リメントを飲み比べ

<

か

12

古

稀

の恋燃

え

天

に

7

ウェ

イの旗のうめつく

L

再

会は逢

重

ねたホテルにて

添える近

況

見

岡村 風 月

大村さ ち

映

闽

楽

患

の

ナウ

菊

形

並

ぶ

源

平

-117 -

駅

前

親

子奉

仕:

赤い

羽

根

押

のエ

レキギター

をチューニン

活

さ

ぼ

た

頃の懐か

苅

ふんわ

りと巻

のスカ

学

庭

12

咲

き

耿 百

平平

四年六月二十六日尾四年五月 六日首

(文音)

で

飛

ば

す

風

船

歌 仙 冬立つや

和 田 S

月 遠 ほ 高 0) し人気バンドのコン か に香るジンジャー 良 携え友 お 揃 0) サ 中村 尚村糸 小野 苅 耿 子 子

ッそ 年 ぞ 寒何 不 が 彼 が 何 でも 気に 解散 る 和田田

白 グルを習い 磁 0) 壷 を 競 恋文したため ŋ 投 資

つくり

街 集 道を 植 きて涼 Ø け進 み む 走るオープンカ 棚 瑠 \mathbb{H} 璃 眼 明

ンドラの箱 ックジャパンが挑 0 病 を 治 び夢をか むブラジ K

探

偵

してゆ

<

正張哀会すて相

気する

面

妖

凍

H

μήJ

求

め

地

模

様

入り

0)

聞

雲を払

月

入丸醐

最

終

П

ラ

個

0)

胡

願

世俗

抜

け

出

す

苅俊ちろ恵糸耿里苅俊ち恵ろ耿糸苅里

こえ

来る

読経

0)

声に身を正

と命びむに味し替れ員るも場け

ろ子

恵 俊

神

殿

和

臘

奉う

下納元桃

飛

花

料

h

た

廊

向

凝

ぎ

き

耿糸苅

故

0)

花

満

開

を

玉

杓

子.

0)

手

足

俊

平平

六日満尾

すず道 明

頃をやとって君を尾行する気する度謝罪されてよ妖な猫の目のごと株相思いる猫の目のがと株相思いまれる

大村さ

ち

-118 -

歌行起 『支考忌追善俳諧』

大野鵠士捌

贈 片耳をぴくと動かすペルシャ 汲 は IH 胸 洗 子ども 木魚のリズムややに乱る 積 春の名残 み置きの水に ンションの十三階の観月 ŋ ら 交を に 怪 濯 もる話 は むと真心を込 ŋ 物 温 はよ と しく迫る不知 開 き肴 田 風 日差し穏や 螺のつぶやきて 春 なれ たる 乾 め菊 梅 け る 猫 枕 火 る 新町恵 矢橋初 藤塚日 大野鵠 HI 奥山 武仲登志春 瀬尾千 1/1 美 草 ニゥポスターのアインシュタイン舌を出し オ湯 町 俤 雪だるまどつかと 化 風 跳 ホモサピエンス神を恐れず がらがらぴしやん閉まる格子戸 観 気 粧品彼女のために買ひ求め 中の皆寝静 0) 離 立てる棚いつ ね 渡 庬 た れたる恋の苦し る る鯉に は不易 野を駆くる スに英語北 まる夏の 座る四つ辻に ぱ 生るる細 の いの白子干 花

平成二十四年三月二十四日首尾 大智寺)

各務恵

紅

早野さと子

月

梅村五

月

後藤キヌエ

波

名和よちゑ

伊藤百

雲

さ

大山

北野たけし

寺鳥恵利子

渡邉義

弘

高松正

歌仙『翁忌追善俳諧』

大野鵠士揤

ッ婆 株 試 伊 淚 百 夏 青 拡声器 丸いポストのずつしりと立ち ちぎれむばかり両手振る 布を切 思ふがままに舞へる綿 の月丈を競べるビルディング 式のインターネット流れたる 太利の大理石積み荷の届 様 合待ち月出て麦酒酌み交す ぐみ埠 年 ットのあれやこれやと浮かびきて の燕 尿病の のパンツルックの 0) 柑壳 気 から昼のお知ら りたる形さま 頭の の 空 色を庭 身をなだめつ る声の 端 を斜 0) に佇める 落 御命 け ざま る 12 彼 虫 新町恵 藤井和 松原政 奥山ゆ 杉田道 宮本光 田邊桂 大野 大山 後藤キヌヱ 武仲登志春 早野さと子 名和よちゑ 樋口かほる 登志春 鹄 功

> サッ秋の川この身流せばたのしかろ 米の鳥居空の青きに月白く黒猫二匹のそりのそりと ボランティア城の案内得意としご隠居さまはちよつと早いよかららかに虫も魚も欠伸せむ 花は 闍 いつまでも恋の火種を燻らせ以 心 伝 心 以 心 伝 心 以 心 伝 心悟 かい 以 心 伝 心闇汁の箸と箸とが絡み合ふりたん池に陣を組む鴨 オムレツにトマトケチャップたつぷりと 1, 明 木目くつきり丸いテーブル 一緒の墓はいやと言ふ妻 らりひらりふは 雀 日を限 0) 声の玉と降る りの派遣社員か りといづこにか 小栗知 柚

> > -120 -

平成二十四年十二月二日首尾

杉山邸)

場

の広きを仔馬駆け

ゆ

高島順

清水青

Ŧi.

々人のにぎはふ花

短遺歌 行脇起 初 しぐれ

矢橋初美捌

. 庄. 赤 昼 飾 初 肩 冬 下 の上白きチャペルに月の 子背に ŋ ぐれ れ サインして記念 を ŋ 窓宝石などがふんだん ŋ さらさら 0) 抱きて虫の 度 猿も小 思ひ出 と枝を広 来たてパン 席 す あ る 蓑 0) 山里 をほ る 跳 げ 径 る 町 屋 る 色 しげ る の公 到 葉散 花 聞 な る < 光 影 魚 n す 袁 高木初 西田み 寺井淑 矢橋初 宮本 翁 早野さと子 市橋み 杉野ちゑ子 **宮田美佐子** 柳 \mathbf{E} さ 野

サウ野 粛 観 街 何 財々と御降嫁の興花吹雪間処へと大きな船は行くのやら何処へと大きな船は行くのやらとうすみ蜻蛉すいと軽やから か 向 か う は 震 災 の 跡 遥 か 向 か う は 震 災 の 跡 過 座 原 宿 六 本 木 な ど 解 座 原 宿 六 本 木 な ど デーの 列 小なか 雀雪でへ跡しからけくど 世典万里 中井万里 光 国 み さと子 当 さと子 野 雲 子 子 子 子

-121 -

遊

眠

ナオ汚

染さる

瓦

礫

供

ふ蕨

餅

広瀬雅

。 哈 脇 起 『ねぶかしろく』

名和よちゑ 捌

本 月 散 な 杉 珈 AKB元気なリズム好きにな ね やの秀の影真つ直うまい 勧めに… ながい睫毛の娘かはい番へ竹みつ磨く村芝 根気よくとる栗の渋 スーツが似合ふ 模型飛行機 かなかに糸の 風呂場の窓に守宮張り付く ぶかしろく洗あげた 天心ピアノの曲の流れく 琲 0) 紙と鉛筆たづさへて 香の中 影真つ直ぐに月涼 袁 通らぬ針のみみ 低き 要らぬ買 の木椅子 に寛げ ज る寒さか 塊世 る 代 b VI る 五十川直 澤井国 清水青 伊藤百 松岡裕 新町 田邊桂 早崎美弥子 惠

酒

新酒並べられたる飾

— 122 —

祝福のライスシャワ 電 Jj 内 ね 渋谷の街に 神も 留守番たのむダ \Box 展 長蛇の列は んねこに眠る幼 波 股を擽る風 象を遍く 付け上手に ぐ広告日 出 すスカイツリーは雲の 佛 海 照 らす望 0) ックスフン ーを浴びせら 児 Щ 青い瞳の 脚 憎から 向 すやすや 子 かう の --れ 中 ず に 1 人 緣 Ŀ. 多和田一 佐々木嘉 伊藤錦 北浦典 Ji III 加 赤塚つね み子 草代 美直 月 石 \pm

脳 永 i 細 けてどや顔 に湧くむす P 胞 S 右脳 左 脳 び文字な

平成二十四年十 一月十七日首尾一月十七日首尾

スマートフォンで探す名所の花盛

ŋ

集

め

る粋な着こな

Ш

霞

に

電

車包

ま

れ

宮脇

眞

吟脇起 初

瀬 尾千草捌

初 るもみぢの紅 ぐれ 0) は 翁

蹴 轆 0) リズム調 へ回 船渡文

望 0) 産 月水平線にのつぽりと 携 へ来た る 岡本満

か秋 祭りせがまれて買 ふ御 幣 餅 後藤キヌエ

年 頃 は ぬ

か 太 き き

板を並 べて古 本 を売

月 麦酒 暑く国の行方を論じ合 0) ジョッキ泡のむくむく ふる

のもとガーデンライブ開かるる 歴 つも心にふるさとの 書の賞罰なしとのみ記 Ш す

花

親

子

雀

0)

集

à

あ

ちこち

履

瀬尾千

社

成瀬貞

笛 宇野久

鳴らしてみようひよんの実の

街 道 走る電気 自 動 車

十三七つかもしれ

心と <

らくりの 人形 踊る時計 台

文

満

花

までとどけ

連

な

れ

る

凧

丰

満

草

竹内昭 III III 啓

女 防

犯

カ

かなそれとも 舞伎役者の 恋 男濃き化 のお相 粧

会鍋置 かれてゐたる銀座 手 裏

神山初

物 ぴたり 納と決めたる家を磨きを 重なる凍蝶 0) ŋ 翅

白 サプリメントを朝な夕なに 衣着て金 剛 杖 0) 道

大 樹の 下 に ほ 銀 杏

ナウ落 鮒の溢れる魚籠に蓋をせ む

こにこ顔 父 面

かなる表具師 下ル町 0) 技 受け継 内 が れ 义

りて流 れ 必

青木久

河合は

サォ思ひきりふらここ コンビニに和洋中華とスイーツも 都会に暮らす夢を追ひかけ

を漕ぐ風

0)

中

富田美佐子

江.

メラ絶えず見張れ る

昭

草满昭子江 生 子 初

-123 -

後藤嶺

伊藤弥

百子

文

執 筆 草 江

平成二十四年十

一月十六日首尾一月十六日首尾

平成二十四年六月十五日首尾

於·鋳物会館)

短歌行 風

竹内 昭子捌

薫 て笛とハモニカの音楽しげに シフォンケーキは上々の出 風 やどこからも 城見 W る 頃 田中啓 河合は 竹内

名

月

の光りに犬の落

喜

びに

悲

しみに注ぐ今年

酒

n

か

秋場所告げる幟

結

婚

の決め手イケメン財

旅立ちの日に愛を告げら

衣

はパ

ルグレ

0

児

ば

運

来 神山初

江子

後藤キヌヱ

<

昭啓キ

みど まほろばの古都に りの 信 音は H 人の溢 鳩 逢ひたき幾 る る 鳴 道 0

たぐり寄せたる 赤き糸結 るふ仏

豊かな水に紙 先し育児休暇 を利 を漉 用 す < 村

古 夢をかけたる 里は地図から消えて寒 ひ と筋 0 月 道

サウ英 国に女王陛 て

熱き紅茶にたつ 33 ŋ のジ

とひらもこぼさぬ 小川に 花に手を伸

執

筆 啓 キ 貞 初 江 昭 江 啓 昭 〃 江

-124 -

歌 仙

伊藤

名 紫 初 母 月 辛 老 べい独楽 プリマドンナと癌 物の生芋こんにゃ 煙 と子と夏越 恋というには遠 ゆるく南 巻く新橋パブで飲み明 靴 磨き汽 れさせ げ 遊びブリキ屋 しゃれな杖 印 天高く星とあ を 衣 祓 聴 車 < < VI 絞 0) 袖味噌 Щ 0) い悪太 を求め来 広 病棟 月 0) 雪 か it 角 印 郎 て で 启一 櫻田 75 鈴木ちか Ш ち ちか 野 英 か か ひ子 S 有

ナウ毘 サォ遠足の子ら 先 駘 白 絹 埼 宿 野 テン 数 窃 檀 身 大 纏 無 生 き月青 玉 0) 頃 理 から 和 しの 良 族 う t 0) か は箸 ガ 着 集 そろ ドクト 素 税 哲学 出 猫 口 飢えて のお き地 肌の 0) 0) め で食べますイタリア 理士も辞 た錆 ン ハッ て夜咄の茶 しゃ 伝 的 首 球を観る人 か 7 渇えて寒苦 ル 御赤いB う昔 らゆきさんに べり途切れなく な貌を 丘に花揺 ト粋に斜 鳴らす雉 ハの苦笑 外す眼 に万札 め旅役 伯 みせ 0) 事 鳥 3 鏡 ょ い爵 を ちかひ ちかひ子 ちかひ ちか 子有ひ子有 老

蹲

描

きて

花

儿

温

H

和

厳

死

0

命

魚

島

た

1)

賑

| 十五年二月 | 十三日尾 | 十五年一月二十三日首

ナオアネモネ

0)

風に戦げ

るアルカディ

歌 仙 煙 水 晶晶

伊 哲子 捌

満 弁 麻 会 初 ひ 残 W 煙 旅 鳰 葡 力 恋はテンプルち Ŧ る 天 者 服 る 月 キャラのオ 0) 萄 定 は 水 田を斜 つれづ 酒 離 浮 あ ル 季 Щ 晶 醸 ライ 亦 巣 節 脈 す 亦逢 見 めに 秘 望 0) は れ 杜 スで偲 やんにそっくり な な 清 色 包 る 走 わ 綴 が 命 カフエ 5 る 石 5 る 愛 0) 11 子 か É 中 橋 すみ 分 渡 月 な 箧 史 唄 弟 松岡 鈴木ち 源 櫻田 商 併 111 ちかっ 桃 桃 英 野 英 子 子 子

> ナウ 風 矢 月 神 競 Ţ 凍 馬 相 炉 Š 氷下 錦 覗 鶴 頼 稚 あ 0) 名残夜 く っと を真 風 性 肥 み H 供 書 魚 う 圭 はやぶさ」 歌 船 か < W 7 8 箱 出 田 航 の 豪 華 客 船田 航 の 豪 華 客 船で を か に 空 気 清 浄 を か が け て で が か け で が か が は と が さ が は と が さ が は と が さ が に 祝 言 が な く 既 に 祝 言 か な く 既 に 祝 言 か る 候 里 の 小 包 の しじまの秘めやかに ひ る 候 里 の 小 包 の しじまの秘めやかに 祝 言 か に 死 が が け て が な が に 祝 言 か る 候 里 の 小 包 か に 祝 言 か に 祝 言 か に 祝 言 か に 死 か に 祝 言 か に 祝 言 か に 空 気 清 浄 夜 民 目 0) 医者を を 色 父 ・ 手 伝 うを信じぬ健康法」 属花

> > -126 -

平平 成成 年年 (於・亀戸カメリアプラザ)十七日尾十八日首

高

円

木

犬

と

父

12

刈

撫

で

る

花

サオ杖

签.

き

遍

路

0)

IE.

装

枝

歌

式 \mathbb{H} 捌

ふは

ふはの

枕今日から取

り換へて

歳

0)

は

Ŧī.

D

D で

š

拍 子 むは じめ もかげ ŋ iúi 式田

スで行く家族旅行を企画して

宇 リンクリンクでやつとアクセス 宙にて眺むる月は如何なら

が道 0) 心地ためす 熊 架 熊

齲 歯の穴につい舌がい 駅木の実団子に長き

疼くのも悪くはないね恋の

消 謎めく美女の隠すばついち ゴムは角がとれればいつか丸

おみかんのたこ剥きへび剥き母と月 煮返すおでんけふで三日 B

舟 相 手 かまはず尻 む 言 葉 の海 取りをする 0) 航

ふ花をでんぐり返し拾ひやる 理 出

こつそりと冷し吟

酌み交は

山口美

絶

頂

をヨガのチャ

ラで永遠に

噂

の上司女子会に

呼

š

武井敦

大窪瑞 子

時

計

台ねぢ巻く人に

風凍つる

知

らな

い街の

開

か

ぬ裏

窓

枝路枝〃敦恵黄枝敦路敦恵路

みち

電

のくの月に土鈴をりろろんと車の 中ではずすマフラー

曼

珠沙華咲

地

震

0

碑

— 127 **—**

ナッお辞

儀する米の生る木を讃へ唄

プロ

ッサー猫に名前をつけないで

恵

集

团

就

職出

それぞ

れ

待ちきれず花咲く音を聴く夜明

0)

笑

顔を

て

連

凧

三十回はよく

噛

80

と言

à

惠敦枝敦枝路惠路枝惠敦枝

平成二十四年五

月十三日首尾

於·桃径庵)

見

や

う

な

枝

の

鷽

正愛

笙

年は少 更の 得て 果て 傘 <" け H 垂 筈 ょ と 歌 0) 雲 畳 0) 悔 ば れ 散 進 辿 X 名 1) 女 蔵 ぬ け 仙 鰻 払 座 る花 恨 か ぼ 0) る 復 進 夢 で 所 敷 重 ルど 群 資 S ŋ な 鎌 料 竹 わ 11 0) れ ね 料 紡 れ スに 0) n 5 倉 理 月 に K 越 ば 藤 明 <" な B 取り 畦 鼻 値 切 漁 な 呻 0 は 揺 乗 P 秘 蔓 を逸ら け II 青 ŋ b 土 る る n ŋ 竹 め 春 0 通 H 2 0) 橋 Œ 11 2 11 如 じま正 じま正 維野笙 是行 久我 修 捌 笙 修 妙 IE. IF. リオ振 酔 難 原 坂 掛 111 侮 半 厚 形 産 人 とにもかくにも け 聴 滞 ユ ŋ 0) 1) 発 に乗 と炎 焼 上この 地 ージ 車 ŋ 餉 平平 返 農 気 テ 0 き 成成 を た 角 神 は る る レビはい カル 暑 卵 # 商 0) 賛 ゆ 無駄 十五年二月十八日尾十四年八月十六日首 空 畠 落 0 独 馬 まんまる 闍 0) 何 否 ち 12 鹿 品 漁 は 護 n 辻 特 が 時 両 はなし河馬 别 符 屑 0 莨 に立ちすく キス一度だ つも字幕オ VZ れしき癌保 論 席を奮発 かな花 6 は 孫 野 なく良 Ŧ が望 相 に 0) 菜 財 猫 ŋ 缶 布 煮 + 挑 親 奴 明 0) 月 (文音) かけ 鼻 険 猫 詰 む 戦 草 に 凧 村 7

修妙正爱笙修妙正爱笙修妙

— 128 —

が宿

坊

津

浪

H

虫

見

居

た

時

仮

棚

深

海

雨

失

敗

か

寒

月

夜

少

名

白 韻

みの 一破 破 魔 魔 小 小林 静 捌 7 雨 デ 畦 パートは商魂も込め花氷アイスキャンデー鈴鳴らし来る道を肩組み合いて下校の子 噂 円 0) 日を足投げ 差

出実魂

回り淑 柱 は 直せる喜寿の揺れる度ごと数が 祝むぎ する のり 岸 裾 金 靡 がが大せ 靴 紐 広崎竜 土屋 今村 和田 実 苗

電

村 勘プ対践 芝居主役の殴でスタンバイへ 正琴の流れる 屋び を 直 出 せ れば蒼 々月 0) 影 和久井八 遠藤尹希子 音鳥幸 子

訛りに満ちあふ 糸頬れ曳イか 鈴木善

遅いして綾い 深いる して綾とりの赤い深いスッピンの

Ш お 絆 笑 ろ月入 鳥 0) 一字揮 高 を Ш らかに 鹿 に 男 b の 着きし船泊 š 鳴き交わ う 縄 板 女 蓋 0) を

朝

食

折

造谷八千代 春

カ

1

秋山よう子

黒

和三ひろ子 か代 重わ子

記

新

妻

と連れ

児に巨

きメロン切る

宮

春 春風を今日か明日一 本 松 が 刻 募 本 松 が 被本 松 が 被本 と こってパンスに焼き立てパンスに焼き立てパンスに焼き立てパンスに焼きが

業かる街てかみ証香縁るく

31

紙辻き 狐のものか残る足跡が、のものか残る足跡が、いいと覗く寒の目ががいいというできがいてが出るに、いいのが、いいいでは、は、は、ないのが、なる、は、は、は、ないのが、ないが、ないのが、は、は、ないのが、ないで れかと待ち望れたたいのゆれているがと待ち望れるかと

— 129 —

藤沼和

口

板 緻 狐 \$

月

跡

マ 逃 が す 学 ニッイソップを読み聞か 者 云見を開け与党 みは魔女の一覧 みの一覧

司ろ郎代わ重郎勝ヱ代尹苗竜春竜重幸代司う

| 音に心和ら | 蝕一と夜のショーを満喫 | 柚味噌伝来 | ビッシュ有豪速 | オリンピックの聖地大揺れ | ああユーロ行方も知れぬ奈落にて | 売約済みの赤い札貼る | 音もなく電気自動車垣を抜け | 隣りの屋根を越える風船 | 耕人に鷺舞い上がり舞い下りる | 畳鰯は軽く炙ろう | 病院に怖くて行けぬ再検査 | 姫さまだっこそれが願望 | 三統領は婿の相にてお人よし | 龍馬愛した出島珍陀酒 | 東山花灯籠をめぐらせる | 相撲の節会おだやかに済む | 枝豆は色鮮やかに茹であがり | 橋に月あり我が家定め | 芝浜の談志の語り夢の境 | 銅板画にはインク滲 | 髪洗う阿修羅のごとき髪洗う | みづくなる閨の駆 |
|-------|-------------|----------|-----------|--------------|-----------------|------------|----------------|----------------|----------------|---------------|--------------|----------------|---------------|------------|-------------|---------------|---------------|---------------|-------------|-----------|---------------|--------------|
| 重 | 勝 | わ | 代 | 春 | 工 | 尹 | 苗 | 竜 | 司 | 尹 | 重 | わ | 代 | 幸 | う | 尹 | 重 | 春 | わ | 苗 | 工 | わ |
| 0) | | 1学 始める溶鉱 | 踵を返す階の中ほど | 領導者物言わ | 双眼鏡の中の火取蛾 | | ティアラー狙うピンクパンサー | サオサーカスの象の使い手優男 | 遊就館はとんとひっそり | 帰り花二十歳で逝きし兵の墓 | 大納会に当る逆張り | 御神輿は軽トラックで運ばるる | 飛沫涼し | 方に暁けの | 幸せと言う哲学を識る | ブータンの王の衣装は袖長く | 戦火に欠けし蕉翁の句碑 | 鶏はゼンマイ仕掛かも知れず | 口移ししてごくり毒薬 | 笑 | 図の | 三王朝の文学という薄紅葉 |
| | | 白井暎 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 工 | 幸 | 子 | 尹 | 竜 | う | わ | 代 | 苗 | わ | 竜 | 郎 | 重 | 竜 | ろ | 郎 | 苗 | ヱ | 司 | 苗 | 竜 | わ | 幸 |
| | | | | | | | | | | _ | 130 | - | | | | | | | | | | |

サッ野生化の鴇の繁 時効すぎ名乗り出てるや時 眼 今年酒なる「越 どけ顔雪の僻 時 働 目立つことならめっちゃうれし まだけがれなき嬰のまなざし 宫 R 来 銃磨 ょ 一と筆 ŋ 蜂 友 地 河 内 6 豚提 描 迎 ゆうパ 集 き 花 えて月 殖いつなら 灯は嘘つかず 5 旅終 の寒梅 盛 ックに ぬ П 0) 膳 頃

外

遨

お

竜幸郎うわ勝春司う重ヱ代

歌 仙 一彼

和 \mathbb{H} 忠 勝 捌

ゥ衣 半 隣 凍 È. 初 今 彼 み豆 紋 婦 玉 世 Н 霜 0) 竹 る だけは 達のデパ地下 0 道 デモはやらせという説 て 影だけみえる京 開 腐月の も盛 で張る刑事に差入腐月の軒端に連なり 秘 届 不 る めたる愛を棺桶 用 かない幻 紳 遅 坊 乱 h 1 士淑 れ 0 È な て 僧 吊 巡 時 女 胴 は Н ŋ 0) 期 記文 月 0) 真 剣 茶 れ 学 女 b 松田 和田田 白井 秋山よう子 暎 ぼ 忠 勝 暎 ぼ暎 う ほ う ナゥ美 花 月 人 かき氷トッピングにはチーズの カボチ 破 惜しげもなしに しかこの香りは名 ベンチでしばし 万杂笑顏笑 術展頭 態の二人は見ら の宴はてなく 垣 魔 0) 矢で射

ャのお化け余興ひ

っぱ

h

続

<

婦

人

会

傾む

理

解

不

II]

暎

-132 -

タ

1

0

誇

ŋ

風

格

高きものなら

ぼ勝う

夢にたゆたう

る

お

は

細さに

螺☆満

顔

ち

あ

れ

暎

喝采や

や

猿

抜

く恋

0)

振

袖

宿

は

湖

0)

ば

ナオピクニック イチロー魅力ヤ 世 紀どんどん狭 病 児等 は が ンキースでも 歌えば < なる 山笑う 責 地 任 球

自

0)

勝ほ 暎 3 ほ 勝 う 暎

裸身さらし

7

せ

れ燃え上

が

1)

平成二十四年九 生涯学習センター玉縄分室)十三日首尾

付

属中

見

格

花

工

ス

レーター

右

側

を

う

お

玉

杓

子

手足

ょ

う

歌

新

盆

月

0)

友

デ

ジ

閏

秒

Ŧī.

ゥハンモックモーツァルト聴く昼さがり 今日もまたおキャンな娘とやり合っ しきたりの多き旧家に嫁してゆ 白馬の王子やってくるか じ茶にくつろい しもや 輪 山 悠 夕 生まれ 夕 仕 岩を 埋 に 供 ル 仙 け 久 立てお ーネ 蜂 え 向 力 の 赤 пŊ 金 け 0 てぼくは育 メ 新 き b " 追 ラ ろ 守 で読む週 母 ある 悼 L 狂 ウ 株 盆 る 手 0 は 直 洞 直 向 X 刊 \$ 誌 き 訓 秋 山よう子捌 浅沼小 鈴木善 松本華 秋山 よう 葦 う 幸 与 葦 春 う 幸 春 サオ軟 ナウ 「天然の美」の樂のさやけしり まだき 回転 木馬残る月お の 佐選 学 と 姦 しいん は皆 選 学 選 学 と 姦 しい と は 皆 選 学 選 学 と 姦 しい 明 まだき 回転 木馬残る 月期 まだき 回転 木馬残る 月期 まだき 回転 木馬残る り ロットに任せ 事の 顛末 腹 が の 梅 酒 まったり に 任せ 事の 顛末 花 拝 寅 力 東 さんにヨオ ーナビで雁 東 想よろ 件 脱 風 平平 0) 12 成成 坊 解 稚 一十四年五日 ロオッと肩を叩かれるのしきたこ焼きの鈴棚児行列の動き出す が 決 渡る 身 尽 月十八日尾 沼 日指し行 げ名 上ろ 所 (文音) 爺 草末紙にる す 胸 < し月鮨いり 店駄 b 執 筆幸与葦春う幸与葦春う幸与葦春う幸与

-133 -

花

焙

が

歌

| 四日市市文化会館) | ルートインリー・トンド | " | お裾分けとて貰ふ蛤 |
|------------|---------------------------------|-------|------------------|
| | P.成二十四年九月十一日満尾 平成二十四年八月十四日起首 | 沙 | 明日を待つ衣桁に架けし花衣 |
| | | " | - |
| | | " | 流鏑馬の奔馬となりて遁走し |
| | | _ | |
| _ | 麓の坊に囀りを聴く | 沙 | |
| " | この憂さをしばらく晴らせ飛花落花 | _ | あほうあほうと寒鴉騒がし |
| 沙 | 日ごと夜ごとにかはる風向き | 沙 | 王手飛車かけて七歳ほくそ笑む |
| " | 難問の数学理論誰が解く | " | 今更あとへ引けぬ後悔 |
| _ | 解散見据え変はる眼の色 | | 落書きの主も嫁いだ四畳半 |
| " | サゥ好物のいま炊きあがる零余子飯 | " | 仲人口は割り引いて聞く |
| 沙小 | 菊人形がひそと伸びする | 沙 | ッイベントがあれば率先世話を焼き |
| ,, | 限もなき池を鏡に望の月 | _ | かそけき軒の風 |
| _ | 涙をしぼる男純情 | " | 夏料理主賓は黒の三つ揃ひ |
| " | 宿六の浮気ごころの憎らしさ | 沙 | ひとさ |
| ,, | 庵主病と青比丘尼来る | " | 新しき町開くら |
| 沙 | 床の間の軸は南無阿弥陀仏なり | 西尼泰 | に流るる清く澄 |
| ,, | 鯉の洗ひに舌鼓打ち | 西田青沙 | 伊勢俳諧や守武 |
| | 見渡せば城址とりまく樟若葉 | | |
| ,, | 変な日本語しやべる外人 | 西田青沙捌 | |
| W 2 | 陶芸の趣味が高じて脱サラし | | 自信等信 |
| " | 骨組みばかり藁葺きの小屋 | | 次 山 『尹 岑 非 皆』 |
| | サォ木の洞に足長蜂の巣は育ち | | 《四日市·泗楽連句会》 |

-134 -

仙 『コスモスや』 ŋ 内 捌 白 勘 内 郎 供 逝 口 を 治 けしが後 0) だ の町沙羅の花型の がおいりを がおいりのうど、 がおいがのかど、 がはばボランティア、 はほとんどがいる なれている なれている ないののでいる ない。 て河 袋 銀 に 鹿 3 0) 女

声向

途き

えぎ

す

b

妻

皴

鵙 璃 モス 倒 置 n ぬ 加 のと 减 知 包 刺 大内 曲

夏 の浜 足 跡 題 しるき犬と 問 我 遠藤尹希子 直

総 汗は 選 挙 先 送 ŋ 濡らすワイシャ 論 強 ま ŋ

もつれたる 妻とな りて 影 からみ 逢 瀬 重 あう闇 ね

凍てし手でメールの [ii] 会 キー 準 を叩きたる 備 近

Ш 赤 城 る 月 光ゲ

賊 て夢 叶

唄 < 昭和はじめの写真見 虫 出

道

自

転

車

0)

+

取る

と曲んた散絶

格子戸

由

満

月

に

晒

さ

る髑

宴雪土かめ婆猪髏てり屋ちり

休日な

ればボラ

人目

しのんで

芝居客はほと

だより

布

曲にをでにん餌

たつ

ح

里

の者顔

水花出

の吹す

小川 廣 男

殉

柳田

康 弘

平平

月月

記

暖

座 銭闆

歩

它

於二十 国際善隣協会会議室)日首

-135 -

道善由直廣道善由直廣道善由直廣道善由

サォ這い進む蜷はげまして観て飽かず

森川与志雄

歌仙『宗祇句碑』

長田友子捌

御

わ

新 橋 爱 朝 宗 良 カ 障子 休 眉 支えられつつ長とな ラオケはプロかと思う いつも昭和を 藁 き祝 P 冴えて差 祇 妻 0) 宇も を敷けば ッ 暇 っと へ心を込 月 クネ 辞 真 かか 市民参加 架 さやか 取 す手引く手の ク け終え役 白 風 牛の仔生まれ 0) KZ なつかしと言 イそれ 中 め 帆 に 聞こ のイベン 街 旅 に 船 場 鎮 道 出 0) 贈 年 りた 点 節 舞 航 計 ŋ 検 落 п 美 う 物 る 圃 す 1) 望月康 横手 中村雄 井上 田村吉 名波秀 島沢 中西 袴田 加藤 桜井 中村 花月乙千 陵 輝 由 豐 基 譲 介 夫

> 篤 秋 鴎 止. 空 金 が 交わす音波 か \mathbb{R} 利 0 ラソ 間 ける 0) 影 な 環 0) 青か る 0) 女 る ろ ル 危 餌 食 裾 天 遠 腹をよぎりし蛇太く 第五 神 機 捨てて 第五札所は島の 原 揃 野 の岩 は 共鳴優し を決して見捨てずぬのことば調査班 0) 太 子 の文 it 足 岩屋にこぼれ萩り土産籠に入れて 単 単 に の せ 鼓四 炉憂う電 0) 笛で整 夫に抱きつ 化永久にあ 奉 仕 暖 る < 中 力 れ 列 岬 か 久保田松 升 水野森 大庭初 長田 友 有 竹井英 門 宗 小林春 高木千代子 大西 望月やゑ子 久保 圭 溝口喜代子 勝又美代子 晃 江 幸

> > -136 -

閑

南

鐘

平成二十四年五月二十一日尾 (文音)平成二十四年五月 一日首

面

売

1)

声

掛

けらるる花の

スマートフォンを使いこなし

内

٤

外

孫でう

5

5

小林富

北嶋秀

芹澤

充

花

輝

歌 仙 『エンディングノー

臼杵游児捌

っ信 不 塾 辿 月 工 味 町 ŋ VΦ 通 篤 添 す I. つくり タイを持てど 噌 婚 す 合 0) 酒 ひ < ゆ 1 へる肩 やと夏蚕 場 し島山 饅 せ か 今 式 な 帰 ょ る 頭 とて誇 親 りは 背 は 年 歩 漆 更 0 が の 搖 む H B 伸 す 躾 細 不思議 香 熱 る 眠 鎌 木 ベ 0) 講 Т. 使 る ŋ る き 燗 暇 か 0) 所為にさ は て事 ず 0) ひろ き終 な縁とな 軒 月 を 花 実 姉 ぬ お 御 1 0) を b 頑 Š 手 命 風 講 坂 n る 長田 片山 佐島 割田 原田 荒井 游 児 児 子 惠 ナウ 再 花 海 蜂 汗 ひ け 絹 鯔 1 万 鳥 ま 稼 b 和 中 働

ス

ツ

IJ

を

包

0)

天

に

3

大

志

胸

に

秘

8

出

原

発

霧

深

V.

す

地

球

儀

筆

探

伊

東

ナオ組 あ る 文 まごと遊び ラ 情 やうでないの 0) 0) IJ 帽 0) 0) ホ れ 土 草. 旅 か 歌 龍 バ み 偶 月 š をくち 1 虎 彼 ち 0) ŋ 0) 風 1) ゆ を 曠 て 眼 猫 9 気取る安文 が ŧ 野 あ 仰 ずさむ もまらう 見 觸 恋 薬 に た 事 は ウ の掟に れ たか 掘 なる 物 美 去 る 2 思 L 体 技 1: 人 ふ き < ど る に尻 T L 坂口 執道容茂容游典和 茂安竹安和道茂 典 子 筆生子樹子児子人慈樹恵風恵人生樹

平平 年年 九八 7十三日尾

(於・成城クラブ)

サォ胡沙きたる防災グッズよく売れ

r

時

容

子

歌 仙 鬼

和 捌

が街 風 渦 稀 月 たちまちに鍍 鬼 燻 あぶくしゆわしゆわレモンスカッシ 誰も責 玩 今宵フルートの音にきき入り 潮に 流 覯 角 具箱 つてゐし思 仇 蓮咲 観 を 並 にはおもち 鞴 任 光船の巻き込ま 蓑 待 ぶ老舗 祭 くを待つ残 を とら 金 0) ひ火のつ 剥げ ぬ やさまざ お 奥 猿 役 所 月 ユ れ 佐島和 割田容 原田安 荒井 111 慈

サッ急斜面蕎麦白く咲き 黄 冬 舞 子規忌を修 闇 つつかけて出る 決 Ξ. ラ 金 イッター嘘も本音もんな処にプロの ロマキャンド しか ス会傾く月 仮 < ifii に脇 ダ 妖しき ネ す 無 て る 狙 本 途 ル灯すひと 片 伊 陣 も入り 梟 s 拳 限 0) 工 减 0) 語 子 は 雑 ス 過 ジプト 大 ŋ 銃 0) 岩 の松 疎の ŋ 料 誌 カ の下 鳴 あ き 亭 記 ウ 駄 光 n 村 山 尼音 る 展 1 S 12 < 省 道道和茂 執和容 和爱容和道和茂 生生人樹慈人子子人生人樹慈 筆 人 子 慈

二月 十三日尾十月二十一日首

猫

三毛

喉

して膝

幸

兵

衛

皆

Œ

座

て名墨を

る

花

0)

庬

鏡

溢

る

春

けられ

たる旬

11

どんでん

返しドラ

故

郷

集

ふう

か

風

呂

敷

抱

え

出

替り

茂

(於・成城クラブ)

サオ春の

夢まだ覚めや

らぬ

朝

ま

だ

き

秋

桜

歌 仙 あぢ 3 か

場 健之捌

花 秋 辻 読 あ 大リーグゴジライチローダルビッシ 思ひ出をたどれば恋もそのひと 子 名 届 籐 何 2 名所これはこれはとばかりな 三夜 つぶて K 0) 椅子 さね 聞 規 らかれしまま もな 番 ぞと聞 け に 空 かせ好み は 乗 いとこはとこと帰 物 5 は の藍をとば ならべ尽 蔵 投手よ V ŋ 頬 売る声 れ けば亀 i と で行く旅 に \pm 星に幸せ ^ た 駈 当 し子供 連 る け 碧 ね ŋ 0) きぬ 0) 炬 新 梧 込 て雨 響 鳴 燵 親とな 桐 0) き む 雲 くな 茶 0) あ 祈 心 る る る n 1 道 る 月 る よ 圃 阿部み 三上秋 若生芥 佐藤 ()t 佐藤 亞場双魚尾 滕 双魚尾 双魚尾 どり女 芥 Kir 阿 無 阿 南 南 秋 南 鈍 鈍 桜 桜 風 子 子

殺

ぼろ

おぼ

ろ晩

鐘

か

すか

無

サゥ秋庭にあれはいつも 音 月 灯 花冷え 女 厄除けのさよなら 写譜 I 塾 天心 好きと言へずにまたも飲み込 さ 楽 高 台 当てのCD買 河 れ 菅 会 将 生. 0) 0) にスカー にそびゆ 0 眉 東西いくさば 帰 た欠伸 白さ引き 丹花 詰 越 インクが顔に染み づらを爺さんもら 描 りの ま き忘れ 0) ı ŋ フふ 淚 屋 唇 鴎と か となっ だけが 古 立. 台ラ はり首に巻 口 はず のすずめか 城 1 0 か ほ 1 夏 0) て出 ŋ 人生 メ 肌 0) 歴 ラ 付 H な 1 だ < な ン 寒 < 影 る 1) む 史 双芥 双 芥 南 秋 秋 阿 311 南 阿 無 魚尾 魚尾 鈍 鈍 鈍 子 子 房 風桜 桜 房 風 房 風

一十四年九月二十 (於・エルパーク仙台特別室)十三日尾十五日首

-139 -

胡 蝶 『開店バーガー』

四 III なほ 捌

奪ぎ 砧 斯 を ク き 如 きとむ 牛 カ 蔓 たぐる III 地 春 眠

月 割つて宇宙の核 を 取 ŋ 出さむ

海 は 色

チンパンジーコインを入れてジュース飲み

麺

毛のアン切妻屋根の 麭焼ける香で目の覚める 風 見 朝 西川な

か赤

あちらこちらへ走れ走れ 高松

面 伏せて自動筆 記の文交わ す

土

竜

草

霞

ほ

煉獄なほ数大雪坊主 JAZZのバラード指 散り止まぬ 来 るな 勝てな 笛で吹 椿

浜崎

浩

ナオ 晚 釜山哈爾浜祖父のトー飯開店バーガー 無料 野村

必

かり

湖

定

史

碧 眼 0) 托 鉢 僧 が辻に立 ラン

昼 防 蛍 犯カメラにあかんべえする 月 が降るのを待つのです

鉄管ビールをバカラグラス

定 史

> サッ揚 巻 啖 呵 に惚 れたのがご

ごめんな 操 る 手首 v 足 首

へる空 さい貝 殻骨が痒 投 げ 砲 0 丸よ

か け分け 電 車 着

子

花 つけに 岩 草 0) 野

る 定 春眠子 定 春眠 史

平成二十四年 九月十五日首尾

(於・北とびあ)

ナオ春

泵

0)

支

那

鉢

濃き魚の影

仙 迦 陵 頻 伽

夜 は 催 眠 る 落 から 葉も降 市 洩 0) れ ŋ 止 111

箱に 6 月と丸 つて 猫 す 彫 び 西川

地地 どう握 方紙 12 くるめる父の つ洋 新 h 小池

もいい

高岡

粗

淚 ドラム か とた 缶にて湖へ沈 ましひかとも勾 る

重 迦 ね 植なかなか出来ぬ文字摺草で合う髪ひと筋にいたるまで 陵 頻 伽 0) 声 のかす れ 7

う いてこいお月さま早く昇つて来

粗

屋

霞

花

ファーブル死して蟻の行 目傘 は 白 ひらいて受ける花 き裳 操 裾 作 を で絵巻復 打ち上げ 吹

海

蛇

111

倒

0)

清

明

果

小 捌

騎

士出でて虚空を斬りて颯と去る

ツチノコ狩りのツアー繁盛

こんな所で寝て

はいけ

ない

楪 拾つたひとに捨 をゆづつても

てられたひと

らふ元の嫁

また泣いてしまふトランペ ットがやさしいから

広 特 場には 急 電 天使の 車風 像の佇みて 0 駅過 ぎ

月 でんぐり返し 光に濡れて庭 椅 子よそよそし したる生 涯

ナウ 記 時 憶 雨ホームズさてと言ひたる 0) 中をもみぢかつ散 る ょ

 \mathbf{K} 0) 行方は謎 と知るべ

ほ

ッシュロレーヌ フェスト少し文語の混り入る 通り抜 焼いて隠し

たる脳

平成二十四年十 一月十七日首尾

(於・北とぴあ)

粗俊な 俊 定 粗 宏 粗蓼宏俊な蓼 粗 艸子彦ほ 艸濫 子 濫 浩 史 濫 彦

-141 -

子

歌 仙 -秋 時 雨

石 Ш 光 男 捌

遺 小 バ 寒 面 絵 駒 3 炬 の柱 短 言 白 月 地温時球上 は 燵 き ち 0) 思 ス 傘 で 影 Vi 中 は ż 寿 万学け 番好きと言われ が 0) う 0) 7 濡 0) る 丈 月 話 闍 猫 細 を 反 を 語 を蹴 る 小 明 Τ. は を 書き込 待 抗 ŋ 国点の H 梅 ち 刻 期 部 5 が 渡 泗 膊 め さ で 女管神 る る て 中 柏原知 赤坂信 町田 市川 柏原 美代子 美代子 草 草 節 知 節 子 郎 笠 子

> ナオ新 巡 退 読 月 産 Ĥ Ħ. 優 風 或 4 ラ H 金 礼 明 院 絣 振 たての ム 種 摘 さも手 宵 0 曜 0 1) 男 ネ む 棒 で読めな < 込 弱 щ 行 限 垣 盛 大 投 喇 鎌 電 地卵ぐっと飲み干し めと言 0) か 根 ŋ 練 方 ŋ げ 叭 0) ŋ I. せ 手管 K い句碑 か ٤ を で ŋ 0) 育 解 との れ の れ み を党 中の わ と赤とん 靡く穂 れオロオ 0) 柔ら れ墨 首 婦 < 剥 みた 口 光 小 始 笑 が つとか 善 れ初 討 立. 龍 討 1) 哉つ 論 T 紐 U め音 石川 節 知 知

平平 成成 一十一 四四 年年 十 二十六日尾二十四日首

於・よりい会館)

風

雅

0)

1)

花

居

畑

0)

見

え

辨

郎

歌 仙 枯 枝

石 Ш

また来てと目に訴えてひさぐ情防人の詠む相聞の歌がすすの龍虎の襖秋気満ついがいの。 方 疲 勝 Ti 瀬 白 歌ぶらりと棚に 郷を早み河童の皿に 電車一輌ゴトり 心象を 青き 山分け山頭火消れたる靴濡れ縁に干してあ御下り辞書に彼のイニシャ 負 乱 浮き 山 中 囲 ょ チッと打込む香のすおみくじの文で す ŋ 場 ŋ 1= こぼ に月 出 足 揺ら行 れ 情 駒字 歌 ゆりル つる 光 知辨草 柏原和 町田節 柏原 市川 草節 節 和 知 子郎 笠 子

> ナウ大 サオ空き罐に入れて 虎。 落。口 東京の大で生きた八十路身の丈で生きた八十路 の本が、でするとまたのの の本が、でするとまれる。 の本が、でするとまれる。 をないですねと行いる。 をないでするときれる。 をないでするときれる。 をないでするときれる。 助 虚な 道 過 風 花 更けゆく程に 屋 神 り良ければる ŋ の戯 地等游戸 舞 台 Ш れ 尊。飛し越極 持ちくる蝌 きは堪え難 行商の義理堅 一人死ぬる を外の。 は飴路馬 の角 鹿 がと 蚪 0) 0 月 妻 鉢 る 味れ夢 き ぼ 紐 原 H 美草和光節知草節和美辨草節 知 代 一 宏 子 郎 子签宏男子子签子

平平 五四 一月二十二日尾二月 二十日首

気

りは

H

の花

見よ月の

傘か

つも滑

泥

跳

供

等

美代子

ね明

歌 仙 芽 雨

前 田高

利 三日 添 麗 野 呼 溢 わ 酒 び 出 れ れ 月 0 ぬと知りつ 蚊 b 造 市 しメ 童 匂 ŋ 行 児座 び 酒 ール心ときめ 満 < し細 S 屋 つ恋に身を委 ŋ ち 0) Ж 2 た て糸を垂 き 士: 誘 ŋ 脛 間 わ 木 暗 れ 芽 き き う ね 橋本 斉藤越 1 1 水上 野 П 季 潤 由 枯 由

静 窓 街 R 灯 辺 ح に 0 港 綴 下 る 演 旅 歌 る 師 が 思 <

壁 は 掛 った 記 いのおや 念 写. 真 つせがむ幼な b セピ 子 色

唐

0

 \mathbb{E}

偲

š

御

月

潤

佐

保姬

城

由

見る 蔭 値 参 花 WD

欄

に寄

ŋ

か

か

ŋ

画

を

親

と

連

れ

立ち

お

ŋ

ナオ新 Н 電 め ロンドン 築 < りのひと日 0) 不 畳 Ŧi. 0) 輪 青き 期する若 ひと日に心入れ 春 障 きら 子 島

越潤

枯

由

紀子

周

客 П りに行くと爺 0) 力 な 足 雪見舟 さま寝惚けお 悩む 列 漕 1)

夜

拗 0) ねてい 差を忘れ 0) 11 がすぐに鼻 しか甘 潤

少

女

0)

音

荒

し宿

0)

段

枯

野

き

月 年 漫 Ш 喫 琴 茶 12 調 れ逃 蔵 れ 町 7

越

子

ナウ ス 棚 田 横 で秋の 切 る 七草買い り坊 0) 揃え 影

聞 ク ズ

枯潤越

子 二

野

同窓会派 右 手にも地味 にもならぬよう 携

出でてう П 廊 ららかな世に 風

平平 成成 四年四日

越前市生涯学習センター)六日尾一日首

-144 -

潤

き

パントマイムで愛のささや 余 油 意気に客をもてなすきりたん 肌 煙 浅 を 元 韻 問 蝉 歌 胸 世 う宇宙 んで 0) 託 維 仙 0) し上げ 史を 残 新 奥 る 戦 拾 ま 産 ビ 湖 _ ح う 12 で抱き 1 放 沿 0) 仕 ル ゆく月の 記 どん 花 立 0) K 馬 味 ŋ 如 き る ぼ b 何 \mathbb{H} 田部井 部 相沢弥 笠原 箭内 井 窓月 捌 怡枝月 枝中喜 生中怡 ナオワゴ 飽 城 先 12 D やさしさがきしむベッドに燃え上がり 栄 小 狸 お茶とおにぎりコンビニで買う ナースのうな 芝居村長課 食 端 イツリー月に棹さし聳え立つ 枯 迦 0) ねこの 説 0) 平平 ズたっぷり 盛 車 親 ょ X 抗 で家 用 あ 衰 仔 りも お ガ 貧 ŋ 身 庭 ね ĸ 乏ち 長が 飢 族 て じ心ときめ 奇なる現 揃って潮 剤を点滴 まりの面 届くピザパ ひょ 入むことよ の国 見栄を切 並 ド巡 もあ 干狩 É b n < 実 で 礼

得

噴

釣

春

柔

月

大

· 館林市文化会館)

中月怡中生月枝喜中生中喜生怡生枝月

けず朝寝して

夢の余

韻

に

ほんやり

規

液

状

化

膊

1

応

援

光規サ陽千光し陽サ

リ気分

b

約 威 北 新 月仄かデータラボッチは水 雉 ハイウエー後追いかけて昇る やは 魚が飛ぶよシャガールの テレビ占い中吉とやら 支度の程には仕事はかどら 鮮 東の彼と逢う日の待ち遠 ひと息入れて啜る 社員オリエンテーション真剣 し銃ぴくりぴくりと猫の 鳴 ートボ 策をするのどらかな午 の発射施設にミサイル 歌 り合わない百円眼 侮 元 麺 仙 の喉 にも る 憎 「雉 どらぬ 越しの ķì 溢 休 珈 耕 0) ず か 月 3 蚊 琲 阿 部しづ江捌 篠原光 若林規 加藤陽 須藤サ 鈴木タ 商島千代子 阿部しづ 易 光 規 陽 江 夫 7 すうり坊の仕業か菜 妖 花 定年後メタボのお腹もてあまし 枯 新 ひたすらに愛もないのに産みつづけ 忘れられない彼はバツイチ 消 ジャズのライヴ 案山子の足も 葉踏 ひょんな場所から落ちるへそく 大樹 いたずら書きを消 オセロゲームに負けて泣き出 九 精の 築の たずら書きを消すが 色い声でサ त्ता む並木そぞ の果てに限 友好映える 我が 明月の下 家傾 税 贅 量 ろにパ 12 ポト ボランティ ま < 疲 荒らされ カ 否 なき だ 陶 V.

労

困

憊

- 146 -

遊

35

す

覚

束

無

7

ッ

世

酔

0

浆

光しサ陽タ千サタ

て

平成二十四年二月二十五日首尾

復

興

0)

絆

は

無

住寺の

海

٤

続

陽

炎

ナオ権

揃

ヘボートレー

スは合図待つ

螺

歌仙『遅刻坂』

半田有杜捌

党 卓上に残されしドンペリニョン 心 平 どうしてもわりきれぬもの恋なんて 月 車 石 格子戸伝ひ低き三味の 何はなくとも真心が あ わがもの 舞ひ立 には祖 無花果ジャムが出 窓には揃ひのブレ も香もどこかはかなき北の花 成 虫 仏 遅し裾 つという間にメール送 は小枝に揺るる絆あ 昭和もあら 畑 肩 母がゐますと磨き上げ 野の灯 Ш 顔に路地 わ は 敷 鶴 5 0) 0) たる軟 来上がるころ ŋ 強きひと ザ微笑み 裏 り仄々 ぬ波暑 の黒 あ ٤ 月 猫 ŋ 音 る 小林 武井蛙 半田 田中安 秀島一 横田思案人 谷口螺々子 思案人 蛙 有 々子

> _{ナウ}ヨ ガ 岩陰にゐないゐないばあのだれかさん 花 黄 睦 1 狭庭にもそれぞれの 堕ちるなら奈落の底 金。博 鏡 寒 お みあふ野のけものらに雪は降る き夜道にす ックナンバー の 稲 物館のお子 眼 0) の粉こぼれ な 荷さんが 型もひと に大漁 玉 肪 たすらに ネ ら ば 十 はす 計朝 の魚詰 はう べて逆さま つ学ぶ若 四季めぐり来て まで堕ちようぞ 積まれやや さまラン ねて甘えて て月は東 守るこの町 は 浴び 兵衛 陽 めら 5 遅 左 冲 チ 膳 山 一安喜螺思蛙有喜安生 芸一子人女杜一芸 安蛙有 杜生

> > -147 -

平平

のスカーフちよつと派手めに

思案人

T

辺

歌 仙

。香も高き落ち葉踏み締め尾根目指 擦り寄る三毛のこゑもかすれ んけんぱ つまでもからだ震へる夢 せ来る波に泡と消 衣捨てては にトンネル穿ち橋を 明 0) 響く 谷 け は で 間 んけ す 『雲 12 b 富 言 んぱ 重 群 前 洞 や二児 ペ 嶽 探 ね れ は して帰 ル 0) P 黄 花 る 短 涼 0) h け す 母 7 杯 鴒 塙 横田 於 玉 陶 辺 子二水玉池 陶 子 捌 ナウ遅 ナオ春秋 周 月 燃 封 え 心 印 色 竹 き 式 復 変わ カ つけをつ 目をじっと見つ の不思議不可思議雪しんし の表紙にジグソ に灯るほの 内 0) な 平平 じ 工 スを拾ひ集め 0) 炎には 古へと急 り死に代わ レキギター 妖 H き 差しを 面 町思 風 0 0) 包 辺 写 *I*i.— 歌 りし 方 十一日尾 月二十八日首 ほ 3 をかき鳴 のせ てまた燃や 渡 める茶色の <" 11 E. ゆ コラ て又も修 取 る 庬 届 ズル 理 自 に 5 ŋ 佐 け 転 В 0) ゆ 薄 0) 出 保 5 0) ち 花 氷 す В 瓢 床 5 Ħ 車. 郷 ん X2 (文音)

執酔千童敬主お於酔千童敬主於お酔童

-148 -

辺子二水池玉陶辺子二水玉池陶子

石

始

教

け

眼

砂

Щ

羽

仙 久

風

ポンせんべい ひよこひよこ進むペンギンの 雑魚寝をきめ からむ目線 無心にあそぶ十 うたるの光は月に吸 ああ憂き世 の涙嘘と知 りかへす海の 千羽 笠をあごまでおろし風 広野外 虹 椋 鳥 道 玉 な を りつつ逢 向 人に売 り足掻くものあ る富士 波 何 堂 せては 動 旨 ŋ が紡ぐも 車 Ŧi. 委 寄る子 ひ込ま 2 T 大久保風子捌 山中土 稲葉和 高井 新田 透 辛 風 六 筆 舟 舟 子 風 リオすくと立つ年ふる海 弦 鏡 降 食 体ひね Ш 1, 二百 長 宿 ほくほく線はトンネルの お \mathbb{H} 潜りたくなりやマンホ つからか祖父の絵 りやまぬ雪の夜中はむつまじ 次 月に つて寝 距離ドラム叩けば との 稲 餅 げりなく日の 距 エイスブック りフリスビー獲るポインター てきほ 飛 0) て少し働 3 び 朝 スをしば 移 財 ŋ 5 ひ か 布 手紙来なくな 女もをとめらも 胸 び 足 ば穴ま は る 世 あ は のざわめ 操 か し見 b る 界 ŋ ールとも 動 か ŋ 宇宙 軽 花 広 が 薄 な か 人 ど 送 0 た P S ず 形 き か塵 る 3 n 船 中 ŋ 埃 < L 和風土透辛祥透土和風辛祥風透土和祥辛

平子筆舟六風舟筆平子六風子舟筆平

-149 -

<

叉

ほ

あ

幾

荷

夕

稿

か

歌 仙 『鴻

仲本 お 池

海 原 る 鴎 よ 夏 塙

ゆ ラポ かに紋付袴着こな ットにそよと青東 仲本.

げ たる格子戸の 脇 谷口螺々子

連 のいろはにほへと良夜なり

なに蓑虫の 急

稲 干せばますます高く八つの 밥

捨て台詞書かれた文の紅のあと きみと一緒に雲になろうよ

恋 のフーガはエンドマークに

そぼ降りしイスタンブールの裏通り どこからともなく香るスパイス

水 神に供へる飯の凍てるまで

脚 眠 の遺伝子しかと受け継がん 仲 く文字は 間よ 蟇と 三日 金 釘流 月

刻

々と花に染まるる

遊

ごとく

蝶

0)

径

行

辺

捌

遠

チェ

口

0)

横田思案人

池

干 辺

思案人 螺々子

È.

ほ

ろにひび

亀

看

ドア・2・ドアの推奨」
**若鮎のきらりと五輪のアスリ あ 0) ころは学割

がきく 赤

思案人

ケース で運ぶ 美 前 お於主辛

汽笛踊子草は 0) 夢 手 を 折 重 ね る 思螺 々子 池

このイスはグッドデザイン賞をと b 案人

末は ひらめくままに描くふるさと 書類の嵩にうづも れ て お螺主辛千

辺

週 世 界遺産 で 戱 れ る 猿

氷 山 並 4 かすか白 す糸杉 0) 秋 黒き 忌 な 1) 影

ナウお むか ひはこども病院障子 贴 る

車 場には 台

条人

辺

辺

焼 の煙の土手 てのフラン ス ほ 0 5 紙 袋

花 爛 漫の この と き お辛主千思千

一十四年十一月二十四年 五月二 八十 日満尾 文音

イドブック。 ア・2・ドア」は 欧米人旅行者向けのプノンペンの飲食ガ

池

々子

水

歌 仙 明日は ハレルヤー

前 \mathbb{H}

初 有 野 明 秋 分くる に 0) か 桜 0) さ かと急ぐ玉 明 わ 星 げ b ŋ 隠 大久保風 姫野恭 华田

哀

教 口 室 ボ のうしろ " 1 7 1 に並 絶 栽 横田思案人 III

背丈に あ まる夏 を 刈 1) 山中主

峰 入りに修験の 法 螺の 響 きあ 稲葉和

か たなび き

ふるさと遙 煙 仲本お

乳 た 飲み子の夢は 息つけ ば 何 あ V ろ片笑窪 空 瓶 12 恭 安

,

子

今夜こそモンスターとなり窓を閉

大 間 女 凍 泉 湖 ح を ま わ が き ŋ s は 番 月 風

子

8

して

H

は

ネ

ぢめ給ふな「明 は とひは ゆ つく 洗ひざらしの花模様 h 淹 れ 日は るものといふ ハレルヤ」

珈

末

黒に生

る

緑

ぼ

ぼ

ナオ緑 側 か しこま 度 にそつと りたる孕み 胃 薬 猫

会千

杜

が よ りなれど ろしき酒 君 に惑 は 市がは 振びさ れ b

年齢の差を踏み越え ル ーハワイの ゆけば恥のも かき氷溶け 2

しみは揺れる影なり鳥の名は 場 は 重 る 風安

草 寝て 風 と雲とをわが 友に

爺 Ø 婆 びでくるりとまんまるの月 鼓 納 降 め 0) 縄 零余子 文 飯

ナウ崩 < 1" り抜 け る たる魚 迅し 里

情 ま さらに還暦 報 誌 には 過 付 ぎは 録 いろ 無策

クタイ少し なほ W 赫 る むあ け

喜主和千お風和安お 一水平辺池子平芸池子芸池風一辺風辺

平平 成成 一十四年九日 -月二十一日尾 八日首

· 九段生涯学習館)

-151 -

歌 仙 『のうぜん高く』

脱 海 初 新 我 凍 ゴミ箱をあさる鴉 小指 だあれ 子に折 調 恋 め H が 月 ル ポ 戸 月は よき紅 母 ガンの鳴る午後ののどけ から 0) 彼 校 もい う ッ 晒 か駅 隣 紙 ひたと止 0) ぜん高 百年 入 トに ック背負いて颯 のベンチは木 0) 葉 を 8 瞳 ないカフェの す かつ散る毛越 屋 玉 教 て秘めし約 はうるみた と止まる蟷虫根に沈み込 しまう果 配 祭の花 の気 影 狭 く揺 え に手をやい き れ 配 に 街 黒 あ 万 寸 製 け る 束 n 螂きみ K 生田 片山 臼杵 背山 H 游 苗 苗 苗児義紅満 苗児義紅満 苗 捌 汗 花 風 満 金 中 「それから」に明治の メダ IÍIL 翻 八千力 月 東 明 聞まるめさてとパチンコの民主化いまナギ 実降る静寂の中をひとり行 舞うビニール 訳 0 雨 鮎 平成二十四年七 ガルガンチ 稼 カ く胸 上がり 0 書 1 ロリー 業 なぜ 0) き す 彫 とか身に沁みナユアの深呼吸- 日々の食卓 6だ緒につかずて 博多山笠 7 鬱屈果てしなく 袋ビルを越 物艶っぽ に挨 たか

え拶

き

-152 -

苗義満紅児義紅満苗児義紅満苗児義紅満

_{ナオ}永き日にスタント 二度も空き巣 マンは大欠伸 に坂下の

<

嬢

(於・港区生涯学習センター)月十七日首尾

敦

仙

呼

サキソフォン月の森より聞え来 筆 太 抜き手を切って赤い水着 条を 際にペアで巴里行き最終 の島 ップコーンを手から離さず 眼 冶 厳しき教へ身につき で来る質 巻けば小犬の歩き出 って飾 嫌 使 畑 向う鎚 0) 電 って 作りに精 『菊の福寿会』 出 居 中 打つ甥若 通る 高 菊 詞 汲 月 0) の — 校 出 凉 せる 寿 行 す 孫 便 衆 土屋 池田笑 土屋 実郎 笑敦実笑敦実笑敦実 笑 捌 が拍 ナウ抜 昔 1111 唐 拉 丹 逢ひたくてスキッ 突に君を襲ひし。症染キューピッドの矢あきれ届かぬ 雁 け路 地 知 致もまだ解決され かれ オスプレイ来て A T M でおろ 手 精 か 木の道は夢 湧 蔵 苑 らんぷりして ら村 て埃立つら コ く役 地に簾名 始末が 盆 ビー玉貯 花に日 へは に偲 者 冥 伝 宝 む其処ここ プの足軽々と 0) 残の 利 去りし高 ぬままにを ふえる 母 る ねもすの は 0) そ 月 ごとく 0) ば 歴 る 笑 0) そく 俊 風 0 史 逆 寬 か 通 騒 か あ 官 音 忌 ŋ 蓑 雨 S 2 C 1)

実 笑 敦 笑 実 敦 笑 実 敦 笑 実 敦 笑 実

— 153 —

ウ歯

発

窓

色

初

鍛

湖

ポ

それはそれ

花の都

にようこそと

た

び

5

雪

0)

飾る

叡

山

笑

平成二十四年十月十 (於・港区生涯学習センター)六日首尾

短歌行 派 の荷を

峠

旅

鈴木美奈子捌

花 見せびらかすな盲牌の胼胝髪結ふと亭主はいつも肘まくら 神 びらは有為の波間に泛き移 訬 アルハンブラの夏の想ひ レモロのギター爪弾く喜遊 0) れねむれと揺るる野の のごとあなたの愛に浸されて の与へし心棒げ て月光りそむ馬子の背に を小さくまとめて吾亦 の声に独りどぶろ 歌の 愁ひよ 出 る IIII 坂川酔 宮地 鈴木美奈子 奈 ナウ サオ戦 あれが巴里リンドバーグの目に 常ながら外で待 月の夜にわたしを奪ひにくるのすり あ 咲き満ちて舞ひ散 風 狐 ストーカー坊主かんざしを手に 銭湯の富 り余る金でも買 な 人なれども の提灯遠く 曳き流行 き世 やは の永か らか 人気集 0 る花もなき夕 鞘 ぬノーベル 娘の長い髪 ひらひら と昭 細 を る 塗る 紡 和 め **〈**" 淚 才 る 賞 街

奈崇彦崇彦奈崇彦奈崇彦奈

-154 -

平成二十四年十 (於・港区生涯学習センター)月十六日首尾

箙 機関車広場』

功刀 太 郎 捌

肝 好き 咲 古テレビ欲声上がりウェーブも 秋 ドライブで寄る小夜の中 掻 色 試し初めのひとり決まらずに 蝶 ル ですと言おうとすれど金縛 即 路 の静 かしき 是 0) た氷に頭ギンギ を 空それ かに生 子 狭 機 前より風 間 **〈*** 関 尻 蜜 に 車 がどうし 尾 杣 淡 広 吸いおえて 人 は 場 花の 天 高 Щ 色 た 月 ŋ 和田忠 功刀 門間レイコ 布田三保子 太忠太忠太 イコ 郎 郎 郎 勝

> が拡 月 写. 快 0) 声 気 影眠る真珠を揺らし 河 器 祝い 運 動会を盛 ほ の酒 細 稚 ٤ 道句 児行 り侘 眼 の身に ŋ 碑 列 上. 0 城 げ てむ 0 跡 **** V

花 あ 炬 雨 0) 春うからやか ころは天狗話に興じけ か 潜 かる りう らのうち揃 た 遠 た寝 川 0) い夢 b 峰

太忠太忠 保子 イコ 郎勝

-155 -

保子 イコ

頬

ば

ナオ蜃気楼

スカ

イツリーを吊り上げ

る

北原春

屏

歌 仙 師 蝉

奥村富久女捌

ウ伝 滝 孫 花 余 振 抱き合ひ永遠誓ふラストシー 金 旅 猫 生 小 角 月 バルセロナまで追ひかけてきた り向いてくれれば声をかけ 一心不 説 0) 壺 生. 部 に千々 0) 前 0) う 出た 屋漏 渡 曲 と杖送 組 0 < が 紐 顔 H て行 乱 な れくる六段 れ 0) 射 を 間 る 5 ば 潮 鮎 技 か ほ 見 るる歳 0) 海 弱 思 ひとすぢ 0) 時 う ど ては 几 Š へゆ る 匂 苔 n 月 とな ひ 0) 法 たい 師 Ш と 坂 長尾信 品部二 高岡裕 千 子 惠 恵 ナウ落

好 酱 病 抹 どこか クシマの収 ワ 粘 H 笑 れ 魔 物 上 の片 士. 茶を点てて 様心 は ŋ 自 違 0) K 波 なほ を s マ 紫 慢 作 肉 練 恋 華やかに燃えたた の 喜 寿 の 同 公 こめし平家 は 獲時 泵 め 粋 0) 期はままなら な色 殿 目 経せ 窓 酒 子 ٤ ょ 興 上田真而子 香 千 三 裕 富 人 女 音 子 子 本 弦

-156 -

談

屋

平平 ·一月三日尾

鈴

ひ

2

舞

が

とく

(於·京都·京新山)

サォくつついて一緒に割

れてしやぼん玉

春

屏

歌 仙 『露ひとときを』

奥村富久女捌

地地 宴 新 露 老 本 みぢんこの雄は カフェア 晴 象は 当にほんとに好きか押 ぽこぽこぽことできる 雪はしんしん音もなく降 果てて寒月吉良 下 0 酒 着は アから大統領がゐなく 道を出て並木路人を待 逝く 0) 終 ートくづしかねたる小猫の絵 む 子 孤 嬉し君に見せ 出 へし老 古 5 S とき 高 月 里 番 ٤ の なくとも数増えて は 0) 群を去ると 遊 花 悪 きを 舗 文 望 ぶ 声 0) デ 前 0) 珠 月 しまく 陣 に 玉 す 1 ば な 太 ٤ か る h る n P 面 鼓 高岡裕 北原春 品部二 長尾信 井原 與村富久女 井尻香代子 上田真而子 富久女 香代子 春 子 屏 子 屏

> ナウ落 笑ふ 未来 散 笛 物 菰 長 近 月 照 籠 Ш 飾 か お捻りわたすタ 被 患 る 吹 らせ とき より今日が大事と引き寄せる り維 の鸚鵡がじつと顔見るひ癒えて家郷に帰りきて夜となるも蛍可愛ゆし をすれば色 紫 はず棲めるものあり木下闇 価 松 < 雅新の志士の身をやつすりわたすタイミングあらさ木偶は上向く慣ひとか \$ 証 明 信ず 0) 券 久 0) 現 は 気のいや増 る と和 に変 富 金 今も新 君の に換 は す か ず 節 鮮 峰 b 出来干 丸山 富久女

平成二十四年十二月一日尾平成二十四年十一月三日首

名

残

を

惜

(於・京都・京新山)

花という華やぎが守る師 重 湯 を描き紙ヒコ セ 庭 たかたの恋を 月 仕: 人 配 東京・筑波東京連句会―その一》 アスを落 ぶねに 倦み 1 フィ 度 たき が音を消 Н れ 垣 歌 夫の T 美 ラ 夜 記念 仙 0) 女 淚 1 開き 溶 街 ح とすポケ 肌 る 傍 服 瓶 け ーキはゆ しさる は で辨 飾 痕 H 着 百人の美女』 吟 る 名 に 窓 ŋ 太 を は 紛 濃 英 醸 水 [急 に 残 当 う 别 飛 P 嘘 月射 ツ る 風 今 ったり 0) す を に す き 藤 騨 1 の墓 11 0) 移 根 香 齢 8 赤 東海林さくら 田玖實子捌 三浦康 鞠飼佐. 朝倉 尼崎 赤田玖實子 知子 子 子 康 5 佐 雄 佐 和 ナウ 花 虫 双 H 判 念 ゆっくりと背ヶのファ 髭 情 好みのタ 理 甲斐はバ 願 標 騒 じ ョウインドウに肥えたマネキン 字に 持 屈 0) 死 < 0) は b ぐフェンスの穴は猫の道特であますおくんちの龍はイスカンダルか月の空 平平 の 0) 仕上 とガム Ł 成成 よ 0) 秘 ッ 弱 北 ŋ 通 ーゲンセール又も買う 思 げート吹きプアゾンを そ 海 出 航 の 船グス粒子みつけたぞ h (於・ハイライフプラザいたばし)四年七月五日尾四年五月三日首 で旨 イプ 醒 は 姫 考 め パパとママなの を 何 め遠 ح П の遠雷をきくアスナー降ろす時 震災の地で 処にでもつく 競う景 路に躓いた 0 れ お 虹 品 でに船 澤田知 小田英美子 子 康佐壽明壽ら佐〃 康 佐 壽 明 和 ら明 康

-158 -

旅

宅

百

う

余

お

化

け

屋

敷

0)

バイト

佐

肥

凍

弧

脇起半歌仙 認 恩 春 色

赤 田玖實子捌

岩 白 Ш テニスコートでペアーを組め 鮎 来忌を見物し 門 の <u>||</u> 天 慈 映 ン 抜 地 恩 に蓼酢 悠 遊 も添え 悠 色 てる š 月 尽 水 浪 女学 耿 れ 生 ば 耿 風 三浦康 朝倉和 É 赤田玖實子 **鵜飼佐知子**

和

安楽明 小田英美子 郎 英

h

の時に言えぬ一言悔いとな

後家とな

ŋ

チャンス到

来

して歌を唄いて酒

飲もう

真

珠

短

夜

佐 "

たくないものみたくないの

月

回れよまわれ

観

車

康

税

とは

な

した事だと

法

痛

歯

痛

弱

故

郷

忘

難

牡:

丹

年

初

玖 和 明 和

花

平成二十四年八月二日首尾

— 159 —

歌 仙 笑

ここだけ

話

いろ

ろ尾鰭つ

3

折

飾

ルー

"

サラダ

抱

き

入

学

0)

児

等晴やか

ゥカ 砂 月 親 絵 塗 笑 夏 恋文もらい ラ あ 浜 卷 畦 アノの音色 とさきとなる 地 ほど違う年 か フルなステ 物 を 0) 蔵さ 1) 裸足で犬と駆けくら 繰るごと池の月お 新 置 棚 ŋ か ま H 調 れ 0) 胸 屋 の差 " しまま 微 蝶 枚 キ嬉 のときめ ずことも 久 笑 とた な 煌 みて立 島 0 んのそ き 散 わ 鎌 ほ ち き 旅 0) 3 山本比 村上 細山 多田 Ш 藤江 芳 町 俊 史 利 佐子 雅 子 虹

ガ元 淡 海 委 私 利 凍 おしゃれも楽しふれあいサロンおしゃれも楽しふれあいサロンよ 生 丸 々 太 る 小 望 引 と 吹く風にな る 小 望 引 ま 吹く風にな ま た も 再 が と ま で と ま で に れ て 出 直 せ り そよ吹 お 再 気 た 酒 割 山 メラ て企 どれが 神 phj 花 手 豐 業 グル 供 戦 士: 気と爽やかなびく草の 0) を やら陶然 する る 上んの 捧りる 辺り 道 観 世への とん 駅々に 3 鮎能と

平平

花

秘

8

る

古

俊

脳

る

故

郷

友

垣

長

を

語

ŋ

試

作

品

5

十五年二月 五日尾 (文音)

-160 -

智虹史雅香利町比澄俊史虹雅智香芳比町

スワンスワン もす

八尾晚吉女捌

面

ね もす を 音 清 や鮎 飯沼三千古

き 矢崎硯

木 出 で 荘 袁 ぎやか 字野恭

形 が 何 か 言い げ

り向けば思わぬ方に月 現れ 砚

振

忘

れ 寸 扇 にお b ろき

二面

放

浪

の旅にスマホとカ 1 K 持 晚吉女

を追えば逢える気もす る

ともすると焼けぽっくいは燃えやすく

帳

場に居てもこいさんの 恋 顔 砚 子

Œ. 月 は べる雪 の 蹲

晓吉女

鬼 色 やらう声 7 くと豆 の聴こえるこの辺 のぽ ろ ŋ

蔵にネズミ穴

つの間に

お

 \mathbf{K}

鳩

翼

休

遺 伝子のそれぞ しくまぜて美 ス味なビビンでれ 違う兄

から軽快な曲流れ 来 ぐてバ弟

遍 \mathbb{E} 路 は 笠 花 82 盛 ŋ 晓 恭 三 恭 砚 吉 子 古 子 水

山 麓

弓

8

十四年七月二十五日尾十四年七月 七日首 (文音)

歌 仙 神

木紫晓 捌

天 Ш 0 内 重

通 知 受 河端

出 本 帆 b 観 光 料 船 理 は

虫 浜 時 雨 知 る P テ 知 5 ず やわ が 隅

ほ 6 b 上 気 盃 紅.

と 2 ほ 0) 眼 鏡 鼻 0) 嬌

大 胆 な 決 断 世 界 揺 る

森 きもだめ 林 を 墨 絵 しとて に かえ 無理 て に 月

足 薄 元 明 たずら 0) ŋ 碑 座 過ぎて叱ら ま 仏 で枝 像 垂 0) れ花 笑

褞

袍

着

て大

座布

团

にどっかり

٢

胡

Ħ

王.

0

海

商

転

び

覗

浅野

宮

詣

n

橋

0)

炬

燵

0)

裾

b

合う

猫

森田

子

ぼ

とりと落ちる

赤

いかんざ

八木紫 風

婿

1)

\$

間

近

娘

陶

芸

師

欲

声

を浴

び

て月

夜

舞うバ

1

柿

さ

が

る

嶷

屋

根

軒

高

高

v

と吾

は

囃

さ

れ

峰

越

穂 哉

風

原

として

ア

フリ

を

出

で

広

る

史

え

遺

跡

掘

八晚

花

て笑

顔

もこぼ

れ

地

0)

奥

にも

0)

八穂哉洋暁

夜 0 痴 態 思うも 恥 ず

あ

0)

錆 び た線 路 0) 先は 1

妓

帯

を

揺

す

か

ぎ

平平

年年十十 (於・福岡 一月十六日尾 日十八日首

サオ曲

水

0)

宴

短

册

さらさら

カ

ラ

男なりゃこ

-162 -

行動医学研究所)

洋月晚穗風哉洋月晚穗風月哉洋穂晚洋風

ナ オ ||||

に盛る湯掻き田

螺に祖

日:

偲

仙

膝 送 n

器

0)

て幕末

太

でる

蛇

掃きもきらずに火山灰の積む屋

根

釣 人数 天 神 並 植 浅野 穂

月 坊 高 È < 頭 未 にそっ

心忘 列車 れぬ ız 雌 乗 阿 りて一人旅行 寒岳 お 0 よ ななか š ま

児等 Ŧī. 十路 来し方のぞく話しぶり

足許にふつふつと吹くクレータ 絵 芝居 12 護 古 熟 睡 飲 年 み込 0) 恋

見 は裏 方 精

代 れし 原発 民 廃 映 È 墟 える 凍 付

世

0

II.

Ħ

集め

人

船出

7

トラ

福武光 洋

遠

ざかる

鐘と太鼓

のちんどん

屋

洋風穂曉風洋曉穂洋風穂暁八風洋穂暁八

速

道

恋

道

行

くる

りひらりと

かわほ

ŋ

0

舞

Ŋ

涼し

掛

不

露

地

奥

っか

覗

八風

暁 穂

ゆ

ŋ

八風洋

求 苞

うすもの

の嫦

娥ゆらめく露天風

呂

サウ指 折 牡 鹿 は ねて

Ш

0)

瀬

を越

え

-163 -

慌 て 秋 0) 嵐 七 草

近

<

数えお

1)

下 なく活断 0) 廃 水 層 ゆるぎだ た す

地

庭 に 絾 毯

花

吹

こともなき世を ば

(於·福岡 月十六日尾 月十五日首 岡・

行動医学研究所)

歌 仙 『竹 落 葉』 傘寿祝伊藤哲子様へ

杉山壽子捌

花 短 武 抱 金 横 竹 雑 月 蔵 夕 秘湯でともに早稲酒 何 が 0) かれて優 町 け 鈴ふ ば 野に古きを尋ねウォ らしの やら 0) ワ ば 追 細 1 の 広 議 艷 林 りふり虫 を ち屋 す S 香 しくなると 点 論 帽 伴奏に乗り月出 ま C 研 は 抜く長針果て 西 に 丈に つづら屋 へ猫 0 せ 身 究 炭 12 ょ 寂‡ 室 を ろ ŋ のすだくら ŋ を が 車 競 ば し主 ど 素 0) 知りました 傾 à 委 ふ 並 走 焼 ーキン ぎ の酔 b ね びゐ < す 愛 Ħ 束 松尾博 伴野末 斉藤佳 古田憲 古賀幹 島田裕 古質 水野弘 古田 くの 青島 杉山 俳 田中 水野 渡辺多美子 中森美保子 あ ゆみを 哲 治 子 子 雄 や 季 成

> ナオを 留 定 凡 仏 わ 北 かたまりてスキップしてゐるランドセ 脱 縞 色 海 Ŧi. が心 塔 0) 家 3 は なき風にふたり吹かれ 老チリソ げ 微 郎 0 島 0) 流 攫 Ж た佳 凡は ŋ 鏡 たる靴 お カ 南 葉 習 の期待を背負ひ込んで つておく 12 前 届 0) 方 叢 1 ふ墨 非凡 は 飛ぶ 1 島 テ に沈む二日 H r スあとをひく味 K とまとめ と言ひつた のを探したよ れブーメラン 鎮座する は乾杯 メーバ 五輪 光包めい 買 0) 群 月 秋 表 ル 1) 7 日下部喜 長谷川芳 天野収 宮川尚 大旦元 足立 古池五十鈴 徳 通 を幹雄裕保尚侊季や

> > -164 -

平成二十四年六月二十四日尾 (文音)平成二十四年六月 六日首

帝

さ

ま

b

顔

かに

生きて遊んで花の

清水春

執

水

琴

窟

か

5

春

を

聞

き

宮川

二十韻 咫

古賀幹子捌

床 咫 間に侘助活けて愛でるら ぬ か Ŀ. す 0 建 \mathbb{R} 大口元 田中初

子

刊

0)

本

部

積み上

きりと冬月

映

す

花

の下そぞろ歩

っんこ漕げば笑ふ 童-そぞろ歩きに癒されぬれる 来ねて夢の欧州

季幹初通

報

道

1

口

ルと円のこと

ナオ湘

南

0)

浜

K

大きく

虹

越

れ

初幹季

終電に乗りそこないて街を行

<

座

通季幹

舗

初

向かうの路地にしやれたケーキ

り添うて口づけしてるシルエッ

は

ひ

孤

を

悶

ż

けふは買物あすは歌舞伎

ロンの後ろ姿に惚れ

直

す

燗

通初

工

熱田神宮文化殿)

四四 年年 三二 二月二十二日首(於・

歌仙 金 環 食』

宮川 尚 子 捌

月の出にはたと鳴き止む虫しぐれ 新 立ち漕 緑 願 や ぎでゆく急な坂 男 食 る 0) 生. 影 寿 あ 道 T 長谷川芳 古賀寛 宮川尚 杉山壽

ひ

秘

夜叉と菩薩の甘い誘

められた奈落の底は蜜の

んやりと壁に耳たぶくつつける

ウッドデッキにつまむ枝豆

最

北端へはやて号過

池

<"

哉芳尚哉壽尚芳壽哉芳尚哉壽

国会のなんじやもんじやに凍てる月

しつぽから噛む主義の鯛焼き

元気ですプラセンタとふ注射して

フルマラソンをみごと完走

持ち寄りのごちそう広げ花の

仰

ぎ

乾

杯

0)

話

き

ない

春

耕

0)

と

節

電

のややほの暗き非常

平成二十四年五月二十三日首尾

一十韻 『みちのく路』

磯 直道 捌

谷あいに咲く片栗 もしろや春雪に逢うみちのく き踏む子等の歓声こだまして 花 利根川たらう 秋山柿 磯 直

は 酒 き **矢野徳三郎**

今宵格安航空島に着 れ宿そっと窺うへこき虫 のとろろ汁吸 き 太田里 田島吞 直

隠

友の土産

こうなるのわかっていたわ泣かないで

家無き人になつく亀の

子

夜道をしのぶ今更の

恋

里徳直た里呑徳柿た

サッホいきまいて末は社長と遠花

恵子の空か残るちぎり

凍

月信

号待ちの

街

か

わ

31

越

娘の髪に豆し

 \pm

の嫁

は

魔薬

ひそ

遠忌了 け と笑 たてば香るの女の国訛り 猫

式 0) 花

た吞直柿

平成二十四年三月二十五日首尾

— 167 —

半歌仙 陰

磯 直道 捌

自 復 笹 愛 土用の波に子等のはじ 色とりどりのデモのいでたち 犬 興 食べるパンダ の里に月光きらめきて めて父母 陰 選ぶきの 励ます人 は健 it か 利根川たらう 尾形弥 太田里 田島吞 秋山 吉田けいこ 柿

逢えるかと外を見つめて待ちわびて 許されざりし妻を伴 にさやか秋の彼岸に菊乱 れ 生方孝 岡田

柿

き

月

み

卷

いつもの顔とすごす立ち呑

紙に薄き最後の賀状書

金

Ŧ.

朝いま三代目

餓

白く染めるは淡き

直孝た弥呑け里

帰

る鳥スカイツリー見下しつ

春

闇

٤

旅

路

Ø

夢よりさめて産土神

女

ぶり

男

ぶり

をも競う

才

リンピックに原

発も消

平成二十四年七 月二十九日首尾

仙 戸白

歌

天 É 転 1 車 0) ス 列きりもなし

ふくよか な耳 にビー 褐色の

坂根慶 子

昼 0) ば 庫 裏 か に ŋ

村 九

蒸 飯 オ 0) 力 香 ス合 宿

Ш 俳 句 のよう

月 浅 傾 VI 河 お 底) けた南瓜積み上ばばけ煙突立つ街に成すってんころり. ば げにん

サウ商 Ħ 鼻 は を 島 祭、原のア

ひ 筋 光 管り

擂 鉢 押 さえ し記 憶ずんだ 餅

てば 名 残 ふわ に淡 はチラシ使っ ŋ と軽き花の 口

さ昭慶さ昭雀 やり か旦子か旦羅

応 É 天 13 辺 泰

伊藤

付

П

甲

戦

スキ 援 " 歌 プ 観 らんらん傘を 席 谺 振 ŋ n て 高 渡部 111

高 瀬 舟 月の 運 散 河 る を 滑 ŋ 径 小太刀昌 中村

が地 居 0 小 屋 が け できて 旗 渋谷盛

酒 段 忙 世 長田竹

銀 工 母 宮 は か 洋 5 行 届 帰 n 西川 高山

年 0 腰 Ш 線 ٤ ŋ 戻 桃

往

陋 屋 ヤ 千 1 両 万 スYのス 両 年 う る ル 安楽明 八田

資 本 口 論 ダ Щ ブ 思 K さり 届 Ŀ < げ 凍 月 木之下みなみ 自石 渡辺さやか

稲 花 \mathbb{H} 満 業 す 山地春眠

魔

師

き

H

に

早

平

平平 年年八五 月二十三日尾 (文音)

-169 -

歌仙『合掌し』

付回り

とりあえず飛びだ 滝 背 影 玻 酔いしれて酒に浮き名は立ち初め 心 吞 逢魔が 草の穂の 四 お洒落 負 璃 上. いたる 戸越し時の 北 者 ない女と街ですれ違 0) 花みなぎ なシャッポトレード 翔 疲 時 頭 乾 け の不意のときめ 実も揺らす歳時 紋 頭 夢 か 酔 れ 坤 る ٤ 0) 癒 0) 移 垂 ŋ して来た秋遍 先には哲 [ii] 蟻 りを 噂 す 7 れ て今年ま 擲 丰 大 朓 足 る 朔 巴 色 河 マーク むら 定 湯 き う る 消 b 申 佛測雀 4 松原 自石一 大城 商山 ili 野中 太田 安楽 高山 伊藤 中村 鵜飼佐知子 鈴木ちかひ 渡辺さやか 宗 武 邦 明 信 星 志 有

> ナウ松 サオ媽ュ 定年 窃 晄 きっか 欲 ポーターは ココア入りバターク 青 一書 矢を 闇 滅 のどらかな日々ドアの開け閉 儿 祖令 しきもの 手 0) た を かに花のティ ば 0) を修 柱 ざる 時 の余韻 た 放 りと三時ま 月 見 熟 高 代 神 め 職 メガトン級のおのこにて てども 灯 語 を のピ て清 b 恋 に め 0) **|||** 尽きることなく の迷い路羅針 Ą b 0) 気 らしわがこころ 禅 きょ カソデッサンクッキー舌つづみ Ø る禅 なぶる春 イ質 一服・獺祭忌の・ らぐ中 負けぬ激 で鳴く夜の蝉 彼に届か る 初 情 ず 風 富永十 内田和 安東明 白石 櫻田野 瀬甸佐 桃 ちかひ 子 ち英野 哲十和 か 知子 ひ子老子有 子 老 無韻

> > -170 -

平成二十四年八月二十六日尾 (文音)平成二十四年五月二十二日首

H

打

歌

声

b

高

赤澤水

仙漢和行 新 豆 0 印 七

鵜 餇 佐知子捌

収 赤田 玖

う で 風 葛 翔 桜田野 鵜飼佐 知子

辺

長田竹

本

離

遠 0

堀 頬 つかう It れ も良し

色 0

0

霧 氷 シム

Ŧi.

b 雀

衣

0

竹佐玖竹玖游《玖

年年八八

月月

相模原

桃夭椒)

復

原 油物由卵

海 掘 探 旅 石鉱行染

0

5 揺 口 ぎ 0 る デ の古 れ ば 金 5 床 想 う 閃 相 順 獄き 聞 N 歌 調

期 蓄

学

道 星 下がずった の月 燃 祖るたえ注修検 粉泛悲占銀穴つ 部のまき酒と香どる か毬い秋杯悠可

丘 渓 謳

野游玖野游玖佐游野佐游佐玖〃游玖野

-171 -

一十八宿 『クリスマス』

14 條裕 子 捌

転 花 商 投 月 定 校 人での 置 げ揚げる 所 ふたり密か \mathbb{H} 職 0) 庭 ひ 刻 気まばる暴張る 地 も政にも の部下のその後は爽 を き 客 蔵 食 忘 さま 杏タ ブー るも 笛 れ らな春荒 ースが b ん吹いなって に交はすアドレ は ケは飛んで誰 豊 v る 麦 車 倦。 7 混 釣 遗 み K 戦 れ 1) ŋ ざ お ŋ 暮 11 微 を やか ス 抜 2 け 許をス 竿 ŋ 8 西條裕 竹内 満 裕 満 裕 子 子

> 鴉 前 耐 向 0) きに 計 楽天主義 金 阃 b 遅 ŋ 者蚊遣る 堅 占 焚 < る 裕 満 満 璃子 菊

どほどが 臭

恋ごころ思ひ暮れ ールに冷酒ほ ばクレー

かうなれば解けぬ嫦娥 死んで見せる ٢ 0) 走 もつれ 薄 糸 野

る

満 裕

ナウ īE. 院 は 曝 涼 のと き

スタンドに満 つ応 援 芋 S

足 踏 響る 焼い

満 裕

4 鳴 5

しき 祖父 母 0 写真 懐

菊

懐

か

爛

漫

花

を

映

T

水

アスカ

1

トふらここに舞ふ

菊

武

者

絵

0)

凧は

空

子 璃

菊

子

璃

菊

ゆつた b 12 鏡 裕

璃 子 菊

璃子菊璃子菊

-172 -

平平 成成 五四 年年 一月 (於・交流プラザ&文音)二月二十三日首

第三起短歌行 青 葡 萄

鈴木 漠捌

美

瓢 朱 遠 3 牽ひ 牛:刹 花 幼 綾 愛 哲 箪 る ふれ 火既視感のごとく揚がりゐ子 の 瞳 の 奥 に 涼 し さとの桜咲くとの便り来 星世那と利 学と 取 炎 のからりからりと笑ふらん 别 と 刹織が那 りをする もえて遠ざかる には 離 ば いふ 姫ひを 苦 ん 星が揺 のしづくの青 b 無 なり の夜に我ら逢 姉 るるコスモ 先 益なる 妹 取 坐 よく似 ŋ る しく b H 葡 ス 恋 S 0) 葡 東條士 高川 紀野 美 芙 美 漠 恵

> ナオ受 相 かはせみの声透き こだま言 浴 卵 洗 性 せ 割 姿で 頬 し悪 霊 か 往 待 ^何が孵が が何や易 通る山や瀬の きっ 戻 きん客つに上てか祭 芙 美

ナウ初 杯は 湖の勢 重 校舎に ね かき立ち踊っ は に 渦を巻弦 月の 戻り 1

-173 -

漠

郎

美

美

11

還 仮 暦を遥か ベビーブーマ 越 目 えて 揃 花に酔

〃 漠 美

士美 〃 恵 郎 美 〃 漠 〃 美

孰 筆

平平成成 一十四年十二 -月二十三日首 (文音)

ナオ春

潮

は

異

 \mathbb{R}

歌

をうたう

か

浅沼

小

跪

座

が

波

打

コーラン

堂

遊谷八

千代

3

和久井

重

松田

ほ

近藤

蕉

子

蛭海停

雲子

式四 『師を偲ぶ』
式俳諧興行俳諧連歌四回青時雨忌追悼

入 れ 歌 0) 朱 仙 記 多 き 書 師 を 偲

林 風 定 劇 層 さ は < 茂 ル ね 12 纏 月 生 揭 横山 和田 土屋 秋山よう 忠 郎

が持 ち れ か る 聴 菊 き 花 ま る 細 ŋ き 0) 虫 Ŧi. 鉢 高島幸 今村 コ 苗 " 子

火 酒 ホ が 心 テ 体 円 を 描 廣野 中村

順

古 楽 物 しんで 市 遊 雅 13 C る わ 騙 たる さ れ る 坂田 村井

ユ 1 口 見 え び

和田

3

ろ子

IE.

は

抜

き

花

0)

筆

酔

昭

槍 寒 オ ンテッ 散 弾 銃 0) X 的 ラ凍てつ る

白井

暎

猪飼

投 根 細 父 子 開 代 カ け る T で ス 気 ぞ 1) ま 静 松本 村上 飛樹· 寿美子

花

る

P

に

舞

う

中野みち子

忘 焼 世 れ É まじオ 渡 餅 1) 0) Ŧ 祟 ル 手 ŋ シ 恐 離 8 を ず 神 る

夢 仏 ま 洞 で る 流 故 絶 ż ず 海: 地知 赤田玖實子

頑 口 な " 是 丰 ŋ 無 < チ は I. 7 な 遊 3 恍 S 0) 惚 ざ 男 0) 0) 44 猫 人 広崎竜 速藤尹 藤沼 和 希子 工

П 遊 庭 载 る 발 月 意尼 秀 14 郎

新 る 族 お Ė に そ 舌 寒 鼓 青木秀 次

樹

伏せ 8 髭 ま 瓢 左 揺 0) 遺 影 笑 冠 倉本路

平成 十四四 年七 月

座執知脇宗 宗 配筆司匠匠 松鈴今抱松 虚虚 使 (於· 日首尾 田木村虚涛 は著 る春苗勝司浅 声配配香花 明硯硯元司法 関山海和横大 口本津田山書 ひ 院 真恵桂ろわ) 流子子子こ 院

— 174 —

| 3], | 幸 | 方丈の池覆う囀り |
|---------------|-------|-----------------|
| 平戊二十四年 | う | シェパードに引かれて登る花の山 |
| | 郎 | このごろ流行る女性探偵 |
| | た | 選挙前似たもの同志民自公 |
| | = | 「笹の雪」出て路地に冬月 |
| 蝶を追いかけ | 幸 | 柚子味噌に心ひらける夕餉時 |
| 古城址に心ゆ | う | 妙見さまに揺れる灯明 |
| 子の日わり | 郎 | よくもまあ夫婦漫才笑わせる |
| お父さん四角 | た | 幸せ黒子口元にある |
| 流通ルー | Ξ | 海越えて相思カップル誕生し |
| が大漁旗たて | 幸 | 焦がれて買いしゴルフセットよ |
| はきだめの | う | ッアメ横の兄の声のしわがれて |
| 秋麗ゴール見 | 郎 | 晒鯨でひとり晩酌 |
| わだかまり | 猪飼たかし | 水浴びも年を重ねりゃ冷や水に |
| 思わざる鬼の | 村井昭 | プラネタリウム親子連れ満つ |
| タヒチに老さ | 高島幸子 | 枇杷色の月皓々と雲もなし |
| 美人画におくれる | 秋山よう子 | かさこそかさと小鳥来る庭 |
| 恋心秘め | 上屋実 郎 | 到来の讃岐うどんや涼新た |
| どこからか天 | | |
| 宇宙の基地 | 土屋実郎捌 | |
| 何狙う鳶の描く | | 哥 有 「決 亲 犬」 |
| 遠き背の | | 山『討斤 |
| サホ風光るスカイ | | ≪東京・都心連句会―その二≫ |

スカース の見った。 の見った。 のを主は、 のを主は、 のを主は、 ののを主は、 のので、 地 将 を見上 らり床に落 師 美 M の音楽 は 0) 越 屹 げて 文 0) [ii] 然 が は と ち 舟 瑕ん船月 に水 ラ 郎た た郎三幸う郎た三幸う郎た三幸う

平成二十四年九 (於・港区生涯学習センター) 月十五日首尾

け

抜ける子

で花を

间

が

玉

— 175 **—**

惑

知

命

歌 仙 『雑

苗

捌

気

御 夕 雑 急 何 何処かで誰か秋刀魚焼くらし月の上りて終わるかくれんぼ 暖 り出船 飛び立つ公 炉 を焚きて の汽笛 響き来 とりな 園 松田ぼ 松本 広崎 池田 紅

ネ 聖 今じゃ逢えない人の女近所の造り酒屋で新酒買 クタイを結んでくれる白い 母 子像 を守る燭 指 台

国境へ流離う旅はまだ続き月 涼し 鼠小僧の目が光る月 涼し鼠小僧の目が光る大型のバスはブロードウェイを抜け大型のバスはブロードウェイを抜け 場け る

湖 床 を は ぐる タイ ŋ と包み さ 花

遠

足の子ら声

b

う

き

う

き

苗

初

ナッ捨 月 寮 て団扇 歌 とうの昔 朗 帰 12 る 見

香 加 齢 るとと 師 0)

庭 無 欲

苗る魚与竜苗る魚与竜

は掃 舎暮 かず花幾片の 0 뒘 舞 聞 v く 午 込め 後ば淡み断

甲 遺 胄 木 0) 11 間 隠 ればの

リオ昼

か

は

招

魂

相

撲

見

ミサイルならぬ 宇 宙 に 十 ロケ 字 ッ 軍 1 戦

にかかるメタ 馬の 趣 味 きは ボ 体 今 型 親 健 譲 n

乗 恋 の人と続

春 に火 着の 陰 花を散 のあ らの す時 静の年 電手賀 れ野て廊気よ状在

真暗 闇 寺 回

る苗魚与竜苗る魚与竜苗る魚与竜苗る魚

見酒 飲 んで雨 月 0 旬の 会 薄 果

苗

限ら

Ш 人

方二十八日尾 一月 十一日首 (文音)

-176 -

サォシャボン玉意のままならずみぎひだり

仙 -0 香 9

 \mathbb{H} 島 竹 儿 捌

燃

と

呼

が松 携 ダ 満 太 勘 集 初 女性総 伽 野分を 帯 H 茸を肴に 月 ŋ リンと迎へるなんて夢 羅 の 待 1 眠 ば 理 兆 ち受け 弾 妻テレビ ŝ 0) か 5 く掌 せ す 披 り墨をふくま か 出る日ある ふ漁夫 ŋ 梢 に 0) 圃 都 百 磯 と急 0) み 町 面犬のポ みる 0) そ 緊 0) 香 離 く家 耿 張 世 ŋ れ や 0 6 役 ず 机 汗 山本 田島竹 西尼 西岡美代 波 美 波 づみ 郎

ナウ

浦

뒘

花

絵に 運 鳴 背ヶに子を負ひ若布干しゐる 退 先 ゆる 虫 Ħ. 止ん せ いまだに君 筵 2 毎: 描 色のテ る 動 のものさし老 を 院 か 円 祖 血を治めきれずに自暴自 やも知れ 格 咥 で尖塔っ うみ た餅とは 陣 会 応 差 ープひ は 11 隣 0) 赤 ならず功を成すが雪吊りの弦 末 る つ直るの るがへす東 後さまざまに 面影を抱き なぐ秋の 状を 隠 は 居 棄 森田 美代女 蓉 美代女 美代 波

— 177 —

平平 一十四四年十十 二月三十日尾二月十九日首 (文音)

生.

名

何

詠

ま

と花

仰

ッチ

イ

ク

0)

麗らかな午

半

歌仙

松

虫

3

眠

ŋ

ゐる山へ実弾撃ち込め

h

空のどこまで伸びる蔓の

初

産の電話男子

来たる日の湖

の静け

Н

本の領土

奪ふ奴ど

\$

松

虫

や金

琵琶と言ふ

别

0)

Ш

高竹

田

舞も終えし一家の安らぎて

の香しるく走る月の

九九

落

び呉越

同舟肩を組

束

園

b

陽

炎

駅

弁を食べ比べする

な

風に乗る球イチローが捕

がながと会議は踊る夏の

月

段

る

振り向けば見知らぬ犬がついて来

ゆふだち叩く螺旋

バーボンを飲んで悪女の深情け

化

粧

濃いめに勇み出

勤

月十二日尾 (文音)

ナオト

T

佐知子

仙 可 を 拈 る

近藤 蕉肝

ッお 遠 空 年 携 放 句 黄 天動説を犬も 袴 つばめに貢ぐ金 一夫多 レモン水やらコカコーラや 帯 蝉 花火嬰児 を 浪の王子乗せたき月の 供 上に甘え上 棋士 の折り目ちょ 葉の は月の衣を脱ぎ捨て 0 えは 四節 はコンピューターと勝負して 履 妻はモルモン腹歴消去は完 海 笑 神も仏も新 薩 に踊れジプシ みも 0 気め が 瞳うるみ + 手な 守 っと乱れ ぐる大 歳 信 ŋ P 出 走 お 7 る 船 b 5 処 男 常 12 て 横山わ 近藤 竹田竹 林 聪甸: 福島 吉野 狩野びんや 佐 鬼 わ ジョウ 鬼 佐 ジョウ わ 知子 知 火 火 凡

蓬

島

は

花こ

たけ

歌

浅

き夢見し酔

もま

た佳

蕉わ鬼竹

肝こ火凡

字

池塔

の古色

深まりて

— 179 —

サゥがちゃがちゃは陛下 唐 世界 はいた はいかり 涼む 川 保 と 別の 鰰なべがぐつぐつと と 別の 鰰なべがぐつぐつと か と が と が に は 後 と か た だ く 盃 の 旨 さ 怖 さ と か た だ く 盃 の 旨 さ 体 さ と か た だ く 盃 の 旨 さ 体 さ と か た だ く 盃 の 旨 さ 体 さ と か た だ く 盃 の 旨 さ 体 さ と か た だ く 盃 の 旨 さ 体 さ と か か が ぐ つ ぐ つ と か か が ぐ の が ぐ つ と の か な で が ぐ つ ぐ つ と か か が ぐ の が に は 従 え て か け 鉄 を 春 の 旅 に は 従 え て か り 涼 む 川 床 牛 送 総 有明のかくれもあえぬ富士の雲 浮世の果ては 風 ゴルフボールに止まる蜻 浮世の果ては上人となり獅子に抱かれて汗の白き肌姐 さんばかり 涼む川 床 梢 もな の声を混ぜ返 びく渡 ŋ よと れ敵泉 蛉 中 鬼わび鬼わ竹 びんや 雪

平成二十四年十 一月三十日首尾 九段生涯学習館)

Æ.

の辺の白詰草をカチューシャに

バイリン

ガルで亀

の

鳴

く声

びんや

Wソネット 『余 白 の水

大西素之捌

厳

寒

古

城

S

IÍI.

鬼

蝋

形

術

教

育

伊

初 \mathbb{H} 0) 0) 余 透 白 0) き 水 0) ささ ほ る 声 n 名本敦 大西

子

餌

を

投

げれば

鴎

寄

ŋ

来

る

敦伊西素

不

器

用

な

生

き方をし

て

半:

世

雲の峰追ひてモーターバイシク

サングラスして

彼はなま

き

ル

幼子のすまし顔なるチマ・チョゴリ

儿

駆

を駆

つて山

坂

を越

え

夕 風 月 0) 妻 籠 0) 宿 揺 は る 静 る 迎 火

b

ŋ

向井

週

刊

誌

記

者

は

秘

め

事

暴

きた

梨

克

嫁

せば

重

き

肩

0

荷

大 南 テレビ 瓜名告りをあげぬ 阃 面 12 脱皮する 31 取 海 ŋ 手

恋 女 優 0 獲 ŋ 演 技 賞

春 実子連れ子の 泥を踏んで出 肌 か b け る ろ

Ŀ. の霞 める IJ 才 デジ ネ

花

咲

け

ば

ま

たア

ル

コー

ル

依

存

通

る

狭

路

症

大月西 岡田伊勢子 由 利 素 由伊 14

死んでから言はれ「い

い人だつたのに」

縁

りくる

片

猫

描き

ては

鎮

返

る

陰

楯

敦由

【Wソネット】

平成二十四年七

B 神 0 中

留 政 守 治 献 て 金 消 え 入 る

月 <

由

敦

-180 -

素西敦

月十七日首尾 於·道後白水亭

f/egg) e/fef)B・抱擁韻(abba/cddc/efa゚押韻はA・交叉韻(abab/cdcd/efソネット形式を二つ連ねて構成は二十八宿に準じ 西素由

ナオ龍

の巣と不可視の

ひばり交信す

恆.

仙 0) 雛 祭

坂 捌

梅の香 京 ほの 須永 剛

場所の触れ太鼓遠く響かせて 吉田松

東風 温 む川 吹かば月は水面に笑みこぼし にはだるま船行

喜怒哀楽もスマホじゃ記

ゆ 簾 越 や酒を蕎麦すすりつつ堪能 しにも首すじ白 す

十八のビーチの恋に掟な

夏いとしや狂乱

兎 身に沁むや身をも財布も固くせむ 馬は肥えたり亭主もメタボ 海

盆 とも美女とも見えて月の

燈 いら立つ首 頭落とした地震のりの輪次第に広が ひ 相おびえる長 とっ待っ 爪

富岡悦

弾き初めのチゴイネルワイゼン甲高し

「消えた男の日

記」を焦がす

の歴史書く

和悦恆和悦恆以松剛

底冷えにラインダンスの切なさよ

寒紅うっすらさす通夜の客

風邪をひいてもスターの貫禄

悦

和

松以剛

ゴールドのドレスで受けるオスカー像

ニースに一月保養に出かけ刀浅蜊桜貝など愛でにけり

只など愛でにけりす ゆるい 大潮

有象無

象がジ

ンで騒いで

来

世には月で地球

悦

な。杜松の垣魔除けに

巡らす荒涼館

モザの門を

語り手探しミ

益子和 子

上村以和於 剛

ジェット気流乗る花

もあり散る花も

池田

果

追う蝶々

夢

楼

肱枕して目

のどけさに塀から転げハンプティダンプティ

め

鳥

雲

平成二十四年三月十日首尾

(於・神田

竹むら)

-181 -

三輪 和捌

棒 水 名残 ベビーカーには赤子微笑 鱈を干したる軒を訪れ 底 K 0) 霜も 村 0) 消 あ ゆ ŋ 堰洼山 む て 東條士 和 郎

西條裕 子 竹内 菊

二橋満 佐藤清 瑚 幸

見てごらん月が綺麗と呼び出され

舟

漕

ぐ 頬

に

風

の爽

やか

関

真由子

カメラ据ゑシャッターチャンス狙ひをり

の林

蝴

0)

声

がみなみとグラスに注がれ今年酒 新入り選手ホームラン打つ 曲線美僕の心をわしづかみ 曲線美僕の心をわしづかみ 点滴に繋がれながら歯を磨き 点滴に繋がれながら歯を磨き がの脚絆に絡むほうたる がの脚絆に絡むほうたる がの脚絆に絡むほうたる がの脚絆に絡むほうたる がの脚絆に絡むほうたる がって三分の距離 がようマン万朶の花を取り囲み カメラマン万朶の花を取り囲み ながら歯を磨き

子

へみ離りるす中きり行団みつ酒

日本 章 乾 京 朱 宗 久

-182 -

ナオ家 猫 宝 0 な 寝 る 顔 螺 12 鈿 癒 蒔 さ 絵 れ 0) 春 火 鉢 栄 幸

ŋ

挫

折

越

え

Ŧī.

輪への夢たぐり寄

せ

恭宗久

友

٢

連

れ

寸.

ち

鬼やんま追

S

イ

H

曜

日にはフル稼

働

幸

0

鐘

鳴

す 早

朝

菊子郎和子美恵幸

ル

リン

に原発と

お 地 節 族 料 高 齢 化 右

团

理 0) 並 š ス

ル 1 ル 切なき 曲 を 繰 ŋ 返

才

君 ٢ 出 逢 V 恋 0)

お 大 互 社 を 0) 芸の 庭 に 肥 や 神 しと 集 ひ 結 ま 婚 せ

が T Š ル りとぶ バイト 0 にと か ŋ 稽 通 古 寒 相 掻 撲

崩 落 0) 跡 C 恐

塹 郷 壕 0 向 霊 眠 ŋ

故 先 急 か せ

を

る

野

IE. 恭 宗 幸子 美 和 惠

菊

敏

子

1:

郎

徒

遍

路

金

剛

K

花

謳

杖 雉

敏 士

足るを

知

れ

りと

と雉の居住まひいふ文字のなく

清

真 満 曲 璃

成成 四四年年 (於・パークウェストンホテル)八月十日尾四月二日首

平平

-183 -

短歌行 『ペルセウス流星』

各務恵紅捌

ッ落. 登 医 秋 太 Ŋ 柱 月 師 ル 狂 か 小屋ランプの といふ孤 を 架を胸に き の里は 時 ウス流 に流 待 腕 ŋ 計 に 寝 獣の 佇 れ 独癒せる君の 星 仰 今宵 来 時 灯りうす暗 げる 住むばか 顔 端 たる 語 碧 刻 空駆 涼 花大 き る ŋ 音 き 湖 松尾一 杉浦真 各務 奥山 大野 堀部比呂美 恵 ゆ 功 歩 美 功

榾

燃

ゆる炉辺を淡く月照らす

宝 溜息をついて見せるもいぢらしく 狐 況 D 頭 0) 求 K 付 風 む 鎖 いたマフラ 0) る TE 直 め 線 長 る 恋

癌 0) 一つも 注げるコップラ 宿 す 内 … 酒 臓

三。酔ひて泣き泣きては

古希 太宰 祝ふ恩師へ花の便り出 全 集セピア色な る す

田

紅紀い紅功美功

時

一十四年十月十二十四年八月十 三 日 日 尾 首

(於・日本海庄や)

サオ歯

0)

繑

と

勘

違

歌 仙 『ダモクレスの剣』

西 \mathbb{H} 舟 捌

根 落 さ はじめての手料理愛のクリームシチュ そっとカバンに文しのばせる ころ 雪ありあちらこちらに絵のごとく 庭 拼 極 肩を抱かれて胸ときめ 寄席 釈 楽 を 灯 燃え足 醸 0) ス う は す 蓮 剣 せど名 古 る は 抹 咲 裏 ク多くもまた拍 供へ 備 舞 に は 茶 Š 前 な る萩 熱き夏 風 に 旬 前 ŋ 床 湖 お し南部 0) 忘 摘み 鹿 か 間 か 浜 7 藤本 和田田 14 Ш HI 則 子 花 子 白 菜 ょ

Ħ 谷 6 りそひし二人を引農 婚 で 逢 ひ 仲口花園スカイツリー 秋 紅 ベル賞『iPS』てふ ぬぎぬ 蝶 は 井 葉 惚 知 b き 正 舞 0) け ŋ れ 宇 とても 柑 3 艷 ちゐる りと合 せ本 たと思ふ る 宙 ほ め 友 好 0) [iii] なほ赤 か 白る か 2 が 覗 は 観 吽 族 再 7 お 包 b ある す < 砂 始 音 生 旅 7 S ち Ш 夏 同 名 き蜘 細 2 ま 詣 矢 0) を 窓 物 胞 月 会 n 療 蛛 2 を ŋ 松 C で 酒 \pm H ^ 則澄秀澄愛 秀爱澄舟 則秀愛澄則秀 爱 花子子 子 子花子子子花 子子花子子 人

— 185 —

平平 年年九 月月 一三 日 日 官 首

花

ぎ

か

に騒ぎ出

美

山

Ł

も千

鳥

ゆ

於·大阪狭山市金剛)

歌 仙 『横浜といふ』

城倉吉昭 捌

唇 留 しぼ 神 ったんこハンサム・ウーマン飛び出せば 座 金 石 震 b が 灯 卓会議はてんでんばらば 多し岩絵 0) 月 守 横 った 紅 テ新 ももいろ のほくろも ね 糖 振 葉 浜 み たみの 製 渡 的に鉄 して夢 剥落つづきる 影もかそけ りつつ水 珊 5 0) 知 売 瑚 のふ 重 紙 は ŋ b き 砲 母: 尽く 放 綾 0) 風 玉 絹 5 H < 伊地知義 鈴木圭 森川 酒井 小林 龟 節 子子子甫 女子 子子女

地

が

る

ょ

岜

蕉

庬

落

宋

夏

ゥば

わ

抹

サオ州 横 牧 負 墨 円 S か 自 文 う ひとよ で か る 打 を 哭と るりと 描 あ殿下も手の 問自 さん長 た子のまどか も株 里 は 閉 く南 0) ビ か 0) ぢ T カ 答の五 り多き 安 ル Ė 柿 画に似 ŋ ル ふは風 もま く 園 0) 鳥の 0) テに 屋 剥 る 平 たや 上ビ たる富 な 車 0) 湖 0) Ш 頬 動 ん Ħ 幕 内茶わ じろ 沙. オト 舟 투 マシー に芋名 5 2 をゆ ろ ŋ 士:の 0) 舞 な 2 < 月 Ш 酒 1) 11 初 棹 敬祐圭禾節淳亀義淳敬圭禾吉圭節義敬祐 子子子甫子子女子子子甫野子子子子

平成二十四年十 神奈川県民サポートセンター)月二十日首尾

歌 仙 『十二月八日』

加 亀女捌

爽 碧 対 松 月 大 二月八 憂き 夢のコスプレけふは姫 蔓 梯 源 使 重 やかなムーミン村へ旅をし 岸に渡 0) v 風 漁 茱 萸 た 姑 氏 蝉 0) 瞳も金 き夜 世なげくな恋はきまぐ 講 0) うしろに何 抜 網 慣 虫 H 海に 座は締 噛んで染 ょ りきるまで甘き揺 母 歯 の 音 れ 着 たるもの り魚のこぼれ 0) 継 にくるむ昭和 オ 攻 b ス 80 防 る 習 ま は 切 か仮面 き プレイ ふ公民 割 南 める舌 た月の 火を炊 りまし ŋ 部鉄 0 0) た 先 館 れれ 様 影 H て 城倉吉 小林節 鞠沢八 渡辺祐 加藤 酒井 堀尾一 H 祐節一節亀祐 敬 知 子子夫子女子 子 子

那準

乃

甲斐

花

開

が組 すり荻 思は 遺 ピ 役 念 ビルの端にはづかしさうな小望月紙 の コップに 薄い 珈琲役員の椅子は消えたりM&A番鳥 にも順序 あるらし 胡 伝子の組 0) 電 ヤンクアートに立ち止まる犬 ずに五条の橋 0) 店 桃 声湖へ小舟をちりばめ の灯もひとすぢと森 0) 車 の古書にも とって 転 純 いめ 手 息 んで泣 み替へしたき下戸上戸 吹 配の 10 誰も 0) と にたたら踏 探る生き様 てどんな果 背ナ 届 知 7 と < Ш 漂 島 笑 A 形 4 宿 月 琲 3 伊地知 水野 禾 祐 節 禾 祐 亀 吉 禾 節 千代 野 子 子子甫子子子 甫

平成二十四年十二 神奈川県民サポートセンター)月二十五日首尾

※那麻余美乃…甲斐に懸かる枕詞

花

満

ちて

屋

根

0)

鳳

凰

翔

つ

さ

ざ

れ

石

K

B

吹

け

る

軟

東

風

八千代

- 187 **-**

源 心 初 霜

成 田 淑美 捌

短 極 親 声 長 春 初 星 双 火 現 大 赤 を捨て故郷を捨てて瀬 高 小 霜 夜 子に続き三つ子産ま 阪 0) き 役 を 場 点きそうな 荷 1 花 苑 西 所 上げ 胞 7 っぷり ば ま へと急ぐ は 見つ 1 表 ま ま 0) を 情 けノ 逝 衆 丸 付 負け 変 0) 吊 熱 器 わ 集 夏 ŋ き ŋ n 戸 恋 n 0 け 島 賞 月 る 文 る iin 仲澤 成田 加藤 Ш 淑 輝 子 子 美 子子 サウ腹 花 顛 明 タン ゆるキャラの着ぐる 演 Ш 兀 0) 月 スリ 末 列 塩をつまみに ふところに 歌 虫 0) 車 跡 治 面 ーサイズを確め を 0) ほ 真 サ 6 接 Ħ 先 聞 実隠 l が を継 頭 けば は ぬ 場 新 みを着て近く寄り 加賀の「天狗舞」 ΣÏ ぐと誓いた もわきまえ す御簾 狭 戸 の 男 花 脱 懐 に来て」 鹿 黄 0) 0) 聴 草 H ず

内 大堀春 湯口 ゆみ子 W 輝 淑 み子 子 野 美 子子 — 188 —

平平 年年 (於·東京上野東京文化会館) 二月 十九日尾 十月二十四日首

オン座六句 寒 禽 や

成田淑美捌

連

寒 禽 や 無 性 に人の 恋 1) 柿沼喜美子

着 ぶくれて行 < 秩 父 田口清

華

移 ろえる世相と共に写され T 荒井智恵子

ひ ねもす喋るラ ジ 送 羽田野由

H

本の

名

誉とな

ŋ

i

P

S

病

治

して船の

旅する

四

連

月光浴 河 石 成田淑

煌

Þ

遊

歩

道 は 金 木 犀. 0) 香 小池弥 生

二連

Ш 合 駅 弁 0) 声 <

智恵子

宅配

の手作

りジャムと花

便

ŋ

も夢みる

辛夷咲

仮

の夢に故里

の

母

村を 挙げ て 0) 嫁 隊

年の差を情熱で埋めペア ル "

氷 室に は 献 딞 0) 菰 包

闹

前

おひとりさま」になりしこの

頃

由

紀

清

華

淑

東

喜美子

大 きく ても 河 馬 仔 伝説となりしビートルズのラブアンドピ

三連

淑 弥

古伊万里のあまりの高値に目玉とび出る

5 れ な 駄 菓 子

智恵子

紀

由

紀

ゃんけんに負けても双六に勝つ

麗

喜美子 曲

智恵子 由

紀

喜 淑美子 美

なみなみと赤きワインをそそがれて

弥 生

由

(於・富士見市みずほ台コミュニティーセンター)二十四年十二月十八日尾二十四年十一月二十日首

仙起 夏 0) 夜 P

间 吟

波

か

る

島

国の

極

道

ゴ

で

使

7

脱

税

つ母

鱗

0

帯

0)

b

0 崩 明 冷 翁

先 代 0) 形 8 け 継

嫁 歌 詠

月 障 高 子貼 実 りをへ焙 相 観 人 じ茶 師 を吹

百万回生きた猫」ゆく露

お メルヘン残しいづち行きけ 気に入り美形 美容 師 噂 あ h

人を想 分史の空白 ひて 部分こそ重 わ れ ٢ <

自

伊万里にたつぷりよそふ干菜 言 海 」の縁っ擦り切 れてゐ 汁 る

金 剛 寒 月 0) 色

花 敵 0) あ 墓 殿 れ 石 下 はどなたじ 何 肩 を並べ 思 や女紋

風

薫る「出雲風

土:

記

」のセミナー

葉

少

0)

大工よ

き

く宮

内田さち子

心

柱

女サ子の

如

る

12

甘えきつた

ŋ

名

圃

座

に「夫

婦

無に 一様 一様 一様 一様 一様 一様 でさす

뒘

善出

きついが好

き

٤

壶

ちゃちゃちゃちゃちゃちゃちゃち

名札を

反す

0)

S

やや

か

-190 -

半

玉はわざと

カ

ラ

橋

ち

ナウ退

院

の患者に

もら

ふ奈良の

し柿

真

illi

H

放

送大

浄

机

去来

抄

読

む氣

駈

抜け

昭和

じみ花

消

る

羽

平平

一十 四四 年年 十

月月

三八

日日尾首

傲

ŋ

0)

春

のうつくしきか

はっ

サオ東

切

 \pm 椿 一御

(文音)

用 達

サオ朝

寝

て

駅

まで

釦

掛

け

違

子の足音

は床

突

き

抜

け

ル来る

よりの無二の

歌

仙

品 Ш

長 絹 糸 強 弾 き 野口喜久子

甲 寝ころびて月 仰 小原みどり

連

冷

奴

生.

まれ

育

も箸

 \mathbf{R}

店

0)

町

にあ

さる

下

手

物

地

球

儀

廻

る

ツ 子 押

両 を 過ぎて蛍は火を 手 に め ざす山 屋

み代み

月

明

り忘

れ

ボ

のゴルフ

戦

つづき衆

院

選

9

み妙代喜妙み代喜み妙代み妙喜み代妙

酒

の銘

はずばり

とほろ酔

歩

0)

万

札ぬ

賞

0)

菊

福

助」と

呼

-191 -

逢ふたびに気さくな詩を交し合

彼と目くばせクンパルシータ

1

ひ

れ添ふて受けしお札をふところに

ゥポ ケ ット の謎 め く文を解きあ か

ぬ < ŋ 残る服を 脱 ぎ 捨

りの 薬 膳 料 理 古 恋

伊

訛

0)

1

帰

7

どこからか飛び出

しそうな手品

鳩

後の

句

座にて

かみ

花

節 1 レス増えて又太 る

み う み 月 と攻 水 鳥 が め か る 舌 戦

觔

拍

放

色 ٤ ŋ ど ŋ 0) 毛 糸

花 本 席 な b 句

> 奥田 妙

平平

年年十一

柿衞連句教室)

み喜子代み喜代み喜代

逃

げ

道

忘

る

雷

猫

ナォ見えずとも見えた気になる御

歌 仙 稲 0)

積 後 化 版 ん読に か 木 す 町 ぬ b 足 おこ す 5 の踏 棲 しとてポ む て摺 み場もなくなり る て 3 ŋ 有 士: を スタ 明 橋 重 稲 ね 0) る 長谷川 竹下 勝野 小松美保子 野 昭 鮎 子

かか 帯 it を解けば 込 2 0) 厚 X 塗 1 ル ŋ 娘 r 玉 ド 汗

豆

扇

風

壁

n

茅 11 鯛 0) 睦 間 み に 合 人をらざり 3 瀬 戸 0) īī 海流窓 底言会

焼 作 和 算 駆 使

藤 ヤルドネ ンタク ŋ る 母 返 U 形見を ワインの さる 1 ス役 る 縫 目終 瓶 ひ を枕に か る

崖

Ŀ.

1)

る

春

蝉

美

平平

一十四年十

(於・神戸新聞KCCセンター)一月十五日尾八月三十日首

恵

鮎 惠

緣 側 12 わ て Щ 鳴

屋 呼 び 込 む 路 地 0) 月 b 更

美

鳥

0)

尾

0)

美

なるこ

昭

惜

薫

蕉

惠

鮎

骨 派 ちくり 朝 暮 度 手な包装ブ もまた 董 天 講 店 b と 誘 軒 È 義 刺すも 18 粋 抜 法 な

難

it

ば

虹

重

鮎

床

几

薫

今

焼

く匂ひ芳し

<

薫

螺を吹

<

開

帳

ランド

文字

美

野

手

鮎

俥

屋

to

恵

月 幾 舟 0) 水尾 若 曳 くご 拳表 雲 出 伴 間 迎 ょ n Š

厨 隅 醸 す 猿 酒

ナウ洋 梨をパイにと数 中 廊 下ちよつとぐらつき 多買ひ占め て

ヨンの余韻重な るファンタジ

カ

ちやらんぽらんでも情に厚い げ く花 散 敷く 躙 1) ょ

恵洋昭

薫子美 鮎 恵 薫 美

師岡洋

— 192 —

歌 仙 投 網

三輪慶子

だんじりの屋根の勇

姿にほ

れなほ

す

寿章と

通

り に エ

事

始

ま

る

戦

争

語

ŋ

部

٤

な

る

村

長

離 投 义 月皓々ガジュマルの森包みこ れ 9 にたつぷり茹でるもろこ 館 0) 飛 0) 男 び 西 絶 つで異次元の 0) 出す絵本 向き え 軸 窓 確 大きく に秋 か 旅 簾 1) 三輪 市橋章 北島 後藤とみ子 岡田あや子 寿美子 明

磨

かれて玉杢

S

かる

裁

縫

台

とてもおしやれなり

ハビリの

靴

何

事も

占

ひ頼

財

を

慶

尾

崎

紅

葉

更

12

読

む

指

を

か

5

め

て

婦

滝

ま

で

昂ぶりをおさへうつすら紅を引 あら ぬ噂 に不安重 な < ŋ

意 運 視 地 線をそらし交 を 転 捨て領 土問 や はす 題 穏 便 拶

鰭

酒

h

K

酔

う

て仰

神 0) 田 JII 大 猫 遊 根 覧 笊 寺 外 す

列

なして花

のトンネルくぐ

り抜

H

写

生.

0)

子

等の

走

る

弥

生

野

章

あ

明

平平成成

一十四年七日

鮎

飴 煮 0) 並 š

迷

会

訪

問

あ明

社 物 産 展

章

明寿章と明 寿 明 -193 -

サッそぞろ寒辞令を見 金 伊万里 つまでも庭に出 \mathbf{x} 箔 神 0) 色 の鉢 期 紙 を 限 仮 風 迫 族 てお 衣 め 育 て 行き惑 0 0 り月今 は 花 半 預 連 蟋 額 5 0) 宵 綿 蟀 宴 ŋ

明

生

章

青山ウィメンズ・プラザ)四日尾 ح

半 歌 仙 火 吹 き 竹

衆議 判

弦 商 火 美 社ビ 脱ぎしコ 吹 月を き竹 術 ル 翼 口 \mathbb{R} ートにもぐり込む 復 籍 か ラ ル 棄てし息 靴 けて海 で往き交ひ を を 越 籠 ず 品 Ш 木村美 竹下昭 州 森田 鈴 子 加

見 いくら待つても現 覚えの母 話 0) 絣 を着て は れぬ 彼 子

蓉

昭

留

守番電

12

洩

れる

望にあはれト スカ は身を投げ

絶

眠 膚 段 5 れず九九を数へて行き詰 粗 れにも便秘ぐすり 畑 山 0) 上 ま を ŋ で 河村泰 岡本幸

ば 車 らくは簾を上げて月今 がる 賀茂 典

猫

隕

石

か

け

5

高

値

に

花

h

つこみ

鮒にふえる

鷙

た

ち

クト

振

りつつ酒宴たけ

は

せの

け

さらんぱさらんお

宝

光昭 幸

泰

蓉

枝子光

泰

平平 成成 十五年二月二十七日尾 (文音)十五年二月 七日首

-194 -

床 手をつなぎポーズもきめて離婚 水 臨 銭亀出せば 生 茄 上菓子あればジョ ▲大阪・ひよどり連句会―毎日≫ 着きて内股 みすすむ 栗 下 1ベル賞に国 時ニュ 子の 垣 0) 歌 内に 知ら する 塊 Щ 仙 ースの字幕気 窓 これ 候 せ 白 T ど 月 部 寄 -新 野· 文に惑は となる男 陶 っと振るま 陶 届 あ 屋をもそも ŋ は 1 祖 が 聞 祖 L が さ 鼻 ク浮 ぬ 0) 沸 ば 7 0 影 ŋ 寒 き立 神 開 かび 神 何 さ あ 店 ち そ 子 式 れ n H 中田 東谷節 武田ともこ 田中千代子 H 寿子 寿 捌 2 ٤ 節 寿 寿 節 節 寿 節 サオ曲 サウ石 恋句にがてと相棒が言ひ流し眼がいやに効いてるブロマイド猫の欠伸を網戸ごしにした 過ごす八合目やっと当選渾名うらなり 天 月 忍びつつ灰になるまで追ひかけ 名 冗談でコイン抛れば 白 孫 苛め笑 信 たたき始発電車 水 明 空 オ 号待ちでお 揚 0) 0) 磁 ŋ 0) げ 盃 奨 0 城 翁 に ほ 上座は め 趾 は 欠片 Ø とほ あ で め る す が対流テ V っけらかんと りと口をつけ をめざまし 帰 さし メジャー入 菊 姑 る テレ 0) が š 象 ん花 占 膾 造 ぱ万 ŋ n 杖 h め 12 て S K H

読

秋

ने

平平 成成 一十四年十二月十三日尾一十四年 十月十一日首 外

をちこちをさすらふばかり甲斐の花

練

ŋ

膏

薬

で

治

す

雁

寿

於·毎日連句教室)

— 195 —

千寿と

寿と節寿と節寿節と寿と

節寿

5

節

歌 仙 Ħ まり

議 判

片 うかうかと仲人口にほだされて ま 信 サスペンスドラマの山場鍋焦が 軽 舞 母 「ちょつと待て」てふ崖 階 先づは 女 飴 熊のすつてんころりん月遠 段 逢ひて新 長 裏擬音にちちろ和するら 同 0) すりへる 隠 行 士: 小さき日だまり芋茎干 < して犬 れ 波に乗 機 切 0) 列 献 温 を たな る 御 絆 泉 宝 ひ は 神 り V かたち花 村の の月 ょ 石 渡 カ そ 0) 3 蚤 あ す 院 12 市 中村吟 小原みどり 岩田登美子 吟 登 登 2 猫 公 2 猫

力

1)

3

ンの街の

祝立て親

経

最

中に

出ば勢

-196 -

朝

なき世賛ふ

る挽

珈

琲

絵文字

ぎ

決

ま

ŋ

配

る

き 札 き

ぬけに

砂場をお

巨ほ.ふ

隕

花ふぶ

太

ね

公登み猫吟公登み猫吟公登み猫吟公登み

サオ黄 情 成 丸 皺と傷わざと作りて ・熱は早き門限ものと ・熱は早き門限ものと が外れ醒めるうたた が外れ醒めるうたた が外れ醒めるうたた が外れ醒めるうたた が外れ醒めるうたた う 陶 唐 政 砂 来焼のあせ る栗月げずれち寝形

成成 (日日 於尾首 小原みどり邸)

厭

は

ず

雲

丹

を

割

子 明 月 記

鈴木 漠捌

サゥ逆 サォアテンション・プリーズですよ埋み火は ゥゆくりなく明月記てふ日記読追討の 使が 花野 去り 行 草 桐 Ŧi. ときめいて妹がりへわが馬首向け 追,下 よみがへるやう新 美 決して譲らぬ恋の なんぢやもんぢやも芽吹く境内 討で駄 は き とも 乱 使な地点 花 た正 ててて 財 調 戦 0 が展く海 社の墓に寒の か 茶会を始 夢 淡 百 か 雨 雪 合 を 酒汲 朝 š 鴎 鞘当 0) 占 天系 め 啼 松本昌 宮崎鬼 永田圭 鈴木 服部恵美子 恵美子 鬼 漠 子 持 介

注

平平

二十四年七月十七日尾二十四年七月 七日首

(文音)

神宮外苑のフタツバ*なんぢやもんぢや。 「明月記」。藤原定s獅子形式。 故窪田 当主夫人貴実子さんの直話による。 イゲッキ」ではなく、 家の日記。定家の子孫京都冷泉家では、「メ 薫の創案。4句4連で構成、 促音で「メイゲッキ」と訓む由。

バタゴが有名。

その地方では珍しい樹木の総称。

明治

ナオよく

揺

れ

る

郊

電車

目借

時

尚子

釣天狗と

さん

のこ

と

歌 仙 虫 の音や

弥 生 捌

パ 被 相 棋 S U 虫 村 古 午未まで言へる十二支 と言がふた言 急 災 FOの有無を論じる縄のれ 性 士: 稀になりても捨てられぬ を気にする母を説き伏せて 地 な 社 コ 0) 2 ンに 新蕎 騎手道は違 や 転 た 0) 知るや 仏 勤 屋 題 頼る賀状の 麦 0) 根を 学 出 KZ を 知らずや子 式せぬ なる今 会 映 字太くし へど闘 摘 пП す み 幼 日の < 作り た ま 愚痴 燕 2 夢 ま 達 立. 像 は いぬじま正 宮尾弘 村戸 官村千鶴子 正尚 尚 千 IE. 1. īE. 子

> ガウ百 チューインガムの香るくちづけそれぞれに子供を連れて結ばれて一 年 毎 に 変 る 宰 相 大会荒し趣味のマラソン百姓を捨てた男の秋経神診の少し難ある心拍数検診の少し難ある心拍数を かの 南瓜ごろごろび かり と飲まうと誘ふ先輩 ある い 山腹流あれは討入り 裏木戸のあたり狸の目が光る 仕 検 裏 中 流 ボケの方 虹 と皆が 前 か 方がよろしと笑ひつっか よろしと笑ひつっく たり 浮 てた れし頃も る あ 3 b 1) 月 輩 数 ろ n 尚 弥 正 千 尚 千 美 鶴 子 子 子 名 正千弥尚正弥正弘一等子生子生一美

平平 成二十四年十二 (於·富山市星井町公民館)-六日尾 九日首

役

職

0)

順

に座り

て花

月

弘正

名

演

な

れど傷

0)

風

船

0)

糸

5

手

放

美友紀

-198 -

花

歌 仙 越

北野真知子 捌

ケー 寸 年 タイ 扇 をく きざしう 広 台 を簡単服のポケッ 生 場 れ ٤ の子ら 置 る ピ れ 行きつけ < 声 越 か 路 朝木飯 広瀬みき子 片原真幾子 Ш

党 気 出 恋 が 転 入 け ŋ 左 ば 0) 遷 婿 同 き 涙 並 様 ひと 預 ぶ 送 に 金 扱 帳 北野眞. 真幾子 文 妖 知子

托 才 鉢 1 0) プンカフェに 僧 深 深 ٤ 人 最 0) 礼

真知子

飛

生

んか巧みにかは 理 お 湯 融 す すべを知 け る 粉 n

松

明

0

滑る

ゲレン

デ

月

バケツの中を蝌 蚪がぐるぐる 視 野 樹 花 八木孝 みき子 眞知子

幹

太

<

伊 H 実 験 や 室 蹴 0) 式 起 1) 年 3 は 伏 遷 鋭

<

文孝

5 0) 分 まで 猫 0 餌 宮 や 1)

みき子

縄 セピアに褪めたポスタ 0) れん突出しを 待 つ昼 1 寝 に紙 覚 魚 め

敏 文

"

風 情がか 特な を 切る若い野郎の 1) 5 ス ク でとれぬ身 管 理をする 会 動 ŋ 社 肩 真知子 敏

客 独 こって を 甘 月 v 大 庬 福 0) が 好 き 柱

文

子

ナウ涼 船 新 形 たにはかに上 火 を 真 がる役者 向 S K 振 n 7

英 学 士 称 뭉

子

酒

粕

ほ 香 ŋ ど ょ B < 酔 š 家 足 系 取 ٤ か 妖敏文

る 道 抱 静 け 眞 知子

平平 成成 四四 年年 二八月

(於・富山市星井町公民館)十六日尾

-199 -

眞

知子

11

ナオ平

成

0)

憲

法

九

条

青

き

踏

む

コンピューターに

ウィルスの

毘

歌 仙 『今日のかたち』

狩 野 康

石 乾 淡 格子戸を残し駄菓子屋 腕 ゆくりなく逢ってはならぬ 年 天 豹 うそか F " 垣 島 枕 杯 1 もキリンも眠るサバン 校 越 番 12 マン気取り 0) 石工 0) 海 0) 蕎 藍 系 H 児 らまこ は 賊 0) 麦 譜 0) 等 の技 ぜて 0 か 機 0 本 裔 長 は て銃を抱く土 が す 点 嫌 と拾 住 覗 秘 紅 リフォーム う 線 12 や 8 寒 か う 人に逢 ح <" 秋 すら が ナ 道 用 う 運 松ノ井 谷田部弓 熊坂昌 秋田て 狩 野 てる子 子 て る子 る子 子 子

> 花 待 晚 颯 うずくまる少女の木乃伊生ける 鈍 命 結 席 轟 詰めのこすみは 鐘 爽 酒 行 令 弟 うららかに食 納 ぼ 覚 0) 0) 12 生 新 0) 0 を な 0) 流 ハーレ たてて氷 窓 振 酒 従 代 押 れ 儀 れ どび 辺に揺 う 花 ば は名古 さえた る大 は 金 鸚 を びろと ダ 1 月 頼 鵡 星 地 蟻 妙 く〆に猴 下の 飼い んと 屋 チカウン 河 12 は 穴 手なりけ K る 圧 祈り 場 初 海 御 を 樺 桐 馴 師 峠 め 所 忘 細 5 0) 0) 越 後 酒 却 え 2 如 に花 る ち h 妊 昌弓洋康て昌弓洋康て昌弓洋康て昌 る子子子子

> > -200 -

平平 成成 四四 年年 (於・北仙台コミュニティセンター)十一月二十七日尾・九月二十五日首

桜

花

ア

サ

1

Ŧ.

に

捧

げ

ル

降

ŋ

だ

知

恵

の輪はずす縁の

あ

た

弱

b

好

ŧ

な

球

团

Ħ

借

時

歌 仙 『ゼウス 神

狩 野 康 子

先 蝉 限 鍵 ゼ 時 見 行 赤 塾 垣 付き 2 n 合 告 カ 殼 幸 な げ 0) 子ら自 V なく宇宙 て新 神 あ く延 部 合 ン る H る 切 屋 鐘 コ 裔 覚 にか 慢 に麝香を燻 は と れ ン v 麦 長 げに見せ合 縁 漫 す 噂 辺 戦 5 せ は phi する めく ŋ ちら 0) ネ 詰 P 探 8 " 月 5 ほ 込 せ る 物 5 漢 客 浜田 高橋玻 13 川村 狩野 とく子 良 則 斗子 子 宇 子

月

連

れ

て遊

説

0)

僧

佐藤千枝子

玻

銭

数

える

着ぶく

訳

はそ

ろりと灰汁

0)

抜け

頃

隧

0)

前

た

たずむ

精

ス

テ

ールに善と悪

育

7

て

青

帝

ナウ 巷 畳. 影 朝 遠 秋 結 婚 障 陽 満 膝 小 跏 約 0 市 踏 子 世の 趺 工 魚 に 月 衣 贴 は 坐 よここよ ス 駆 笑 0) 0 桁 8 風 ŋ つきり 池に咲 芭 紙に戻 声に混 か 顔 昔 骨 が 替 和 て の林 蕉 遊 先 喉 え 掛 = す 戻すだけのこ いきたし大賀 いきたし大賀 の できたし大賀 び 部 故 悪 17 ングして通 か枕物言 橋屋がの 太 鄉伝 て旅 る満 陽 の授 だび明 茶 ち 0) 流 仕 る 摘 る る声てき 女花り 蓮 税れて 痣 度船 るう ح と 紀 班 千 良 紀 千 とく子 子 子 子 子 子 子

-201 -

平平 成成 年七月二十四日尾年六月 十九日首

(於・仙台文学館)

ナオ結

歌 仙 『パンダ二世』

大 久保風 子 捌

月 漱 重 旅 火がついた「変らないね」の一言 ひ 立ちのぼるシャンパンの泡飲み干し 竹 ダイアの杓がギラリ眼を射 年 K 夫を残 もみじの小舟 は 本もせ たひたと二十三夜の人力 たげにほ 石 茂 レスアップし客を 越 下 の「倫敦塔」の る が なきものを悼 蕎 18 紙 してそっと抜 一心の 尊 去を置 麦のすする音 ンダ める道 縒 ってり枝 徳 ŋ 旅 ゆらり流 片 く島 世や を企 あり女 垂れ花 門 肌 裏 む 母 け 出 phi 0) 寒 迎 す で 岳 る T 平良木遊 和田ひ 和田忠 伊東あ 森脇甘 竹崎 岡村 宮澤 遊 忠 風 う さぢ ろ子 虹 蘭 子 か

蒼

折

・ は ず す 人 影 に かりそめと思い恋路の闇に入る かりそめと思い恋路の闇に入るかりそめと思い恋路の闇に入る かりそめと思い恋路の闇に入る 声 は ず す 人 影 ご 左 倒 れっ からすみは天下 二部 手入れ 末 々に は 0) 湊 どんでん返し万 0) 養 唱 良 課 脳 生 き 0 へっ ٢ 訓 庭 唄 笑 三 彦 桐 算 0) 数 閑 け花 足 0) 愚 節 跡 活 遊忠甘う梨糸風あひ遊忠甘糸梨う風虹勝蘭か野子子ぢ子虹勝蘭子野か子

-202 -

平平

合

戦

境

内

池

あさぢ

航 Ш やや寒し手紙のウソは忘れます 浮気 ピアニッシモとたたくマリン 空便子等の写真の添えられて 間 0) 並 下伊予街道を僧ひと 種 み 1 な君 り夕陽こぼ 狙 長い う 12 走る 涙 軒 連 黒 翅 前 涸 れり霧 な 犬 0) れ 栗 干 氷 柿 h 林 大久保 竹崎梨 梨 風 糸 風 風 子子

満

月に卵

産

み

終え赤

海

亀

宿

う

羅

梨糸風糸梨風糸梨風糸梨風

野子子子野子子野子子野子

-203 -

愛してるその場かぎりと言わせない

クルーズ船でカジノ覚えて

フランス製ロゼのシ

ャンパン泡はじけ

と団十郎逝く

時なき世」へ

症

P

M

5

_{ナウ}カルチャーにパソコン講座オープンし

不

乱

励

む

道

室

はシ

ンと

静

ま

n

花

勲

宴に招

か

届

け

歌 仙 靴 0 闇

水 渕 丹 捌

逆

さ

睫

毛

が

未

ほ 岜 蕉 b み る た ŋ

菊 展 覧そつと見 111 村

床 紙 0 L 間 コ に 1 犬 牛 顔 0) が に 飾 縁 か 1) か る 佐々木游 高山

茄 地 下 教会に 運 び れ

無 爪 で ゆ は 0) じゐてコ 過ちなり 1 歳 S

革 あ え 0) か アラビアンナイト小 な 影 をひ きず か 机

H 月 Ш 並 仰

跳

ね

7

転

6

で猿

0)

口

ボ

不 屋 過 0) ぎ 隅 孝 置 息 き 子 炬 燵 ま

花 唱 文 を 包

虻

覗

長

靴

丹

高

僧

0)

木乃

伊

<

白蓮

華

下

駄を突つ

か

け

雨上がり待

0

月

Ш

る

にずら

٤

1

トフォ

着

信音は君が代に

ショ

ツ

波

に

柔肌をピアニストの手メゾフォル

テ

船

Ŀ

月光

び

康

群

飛

š

け

が

居

衣

装

見

のに

魁

残照」広がれ

3

花は

4

な

海

向

かひ

て咲くなら

跡

る

連

凧

床

養

祖.

ぬ

<

n

康丹記游康記丹游康丹游

年年十

二月十一日尾十月三十日首

ば

は 昔 0) 鰊

れ アレッ 味 ょ ポの 石 裁 鹸泡立てる 断 機 買

切

相

達平丹記游康丹達康游丹康游達丹康達游

Ė T

て溺れ気 好 1)

-204 -

遠 春 薄 ル谷 来 近 ッチ 間 友 酌 ワ 把 は電 ぬっと昇るる月 な 車 棟 が 増 バッグすてきに を乗 路 梁 や ŋ 嫌 ぎ 円 82 か 中村 榊原由 中北 西山嘉代子 ひろみ 伊都

伊み嘉美伊み嘉美み嘉伊み

この想ひ遂げん覚悟の

紅をひ

秘

伝

味の

鳥

賊

0)

塩

辛

よ

き

月

涼

陀

半.

眼

北

0)

ミサ

ル

発

射

敗

ŋ

K

ットする度に別れる歌手がを

邪

恋なれども芸

のこやし

介

助

ひ

たすら

褒

め

る

訓

葉若

大

和

う

爛

漫

花

が

る

城

町

語

1)

雛

飾

る

海

女

0)

磯

笛

風

流

る

る

年年五一 五月十七日尾一月三十日首 (文音)

— 205 —

松 過ぎて』

中井 淑さ 子捌

残 松 過 ぎて針持 つことを思 ひ

話雲をふちど 三昧かまくら

か くし妻何も求めずつつまし ゼ 袓 父 肖 像 佐藤和

リーダー交代世界どうな 燃えて寂しきサルビアの 声を追ひかけ走る る 犬 野口 子 和

内田さち子

佇

ちつくす千古不

変の月

0)

色

Œ.

倉

院

曝

涼

観

に

郭

公

0)

熊

手

かめ

0)

笑

顔

泳

恵子の山は安達

山

放

射

能

故

郷

は日々に遠ざか

割

ŋ

勘

して

端

数

金

ロリ願ふ媼ら菊

0)

へ酒

鐘

近

降

り込むや河馬

最

中

餡

0)

あ

た

か

き

平成二十四年一 (於·東京女子大学同窓会館 月十四日首尾

- 206 **—**

玟

笑い声とお酒が香ります。式目は笑って笑って蹴飛ばし っての帰路、 東北 花に酔いました。 の花の名所弘前・角館・北上展勝地・石割桜を巡 興にのって作る花づくしの巻。 行間から、

句を連ねて 『花づくし』

花 の精捌

三色 世 月 桜 中 ちてさやさや揺れる 前 は に添える 花見団子は秘伝に 犀 花 線 0) ほ 追 香 か には何 る 美 路 b 北 地 萩 上 薄 栞 堀江水 高木遥 宮本茂 简井 根本美茄子 香 城

菊 刺 人 形 細や 大 か小 K ラ 花ちら 0) 清 岩下秋

虞 弥壇を飾る螺鈿の牡丹百合 蠲 美 の間」にて影はひとつ 草 12 遊 ぶ 風 雨宮文 黒澤かすみ 江

須

ステーキの脇を固めるカリフラワー 花 庭いっ ホテルの名前クリスマスローズ 莚 现 は は ばいに四季咲きの薔 潮 升 弘 瓶 騒 前 聞 くや月の 舞 んと据 は 剣 え 薇 片野弥 遥 かすみ 秋 子 蒲 惠 月

花

河 長澤矢麻女

恋しさをトルコキキョウの絵手紙に 上条洲 大山とし子 紅

平成二十四年四月三十日首尾

樹 夏 丰 朝 0) 師 達 ネグリジェのファッションショーは好評 抓 仕 伊 ひよいと飛 んび 凩 友 顔 月飲み られ スターのスーツの の忌ちさく 呂 豆 ょ 0) 歌 りと 欲 波 ぼ ŋ 木 垣 ンド 仙 開 小 屋 く仏 馬 鈍 を 花 Š 飽 腕 0 紋 び 出 巡 と噛 H 行 0 達 か 隠 な き を 吉 馬 れんはためい 使ふ 間 誌 ŋ れ すミサ 包 を す讃 広 7 0) 磨 胸 行 を友とつ ガ に赤 旅に出 間 女 列 0 昼 子 岐方 風 舞 い羽 ス 来 T る 根 で 生田 高 土屋 75 III. Ш H Ш 鄭 鄭 和 郎 義和 和義ゆ和 郎ゆ 義 う 和 捌 朱に 輩 終 誰 会 敵 新 採 待 秋 ふと思ひ出 が H お 役 のいい 時 建てし芭蕉の句碑か月に読 デ 染 つてましたと桟 異 興 石 ŧ う 平成二十四年十 皆が に拍 ィズニーシ を 뒘 ŋ 政 ね 来てバ のしし課 島 多きこ と神 党 てよ 認 し飲 続 噴 す 鑿 ス 8 煙ま Ш 汗と髪の へと出す辞 る で夢を追 生ま 祭の宵 どな 4つすぐ [ii] 駆 過ぎの 敷席 響い

辺

0)

ひ山

け込

2

-208 -

む

7

令

花

き

先ずお ス 牛 1 試 昔とつ しとキャ たる杵と ッチコピー が 柄

郎

郎ゆ義和郎ゆ和義ゆ郎義和郎ゆ和義ゆ

に

香

ilii

構

え

か

5

契

に

就

け

朝

餌

雀

0)

歌 仙 『見えぬもの』

狩野 康子捌

駅 見 月 小 照準をピタリと決めて金メダ ゆきずりの美僧の後を追いかけて 朋 瓦礫 二足步 噂の端をくわえ去る 遠目にしかとベニテングダ え 西 仮 ぬり絵線から少しはみだ 弁を買って月夜の汽車に乗る 千草の靡くかつての理 光のさやに漏れくる簾越 * 蘇 ぬ 瓜の 馬 設 に雀と子等の もの見つめ今年の始まり 刻 をひと口ごくと鳴る 武者 ず の山 種を飛ばしっこす 党首会 酒 行の恋 となり は が 尚 談 並 更花 神 の行 動く 忍 旗争 想 猫 郷 末 る ル 幻 谷田部弓 佐々木嘉 佐佐木ら 阿部堅 山田史 狩野康 菅沼 横山浜 田中裕 山崎博 川村紀 鈴木良 佐藤千枝子 中村 高橋玻斗子 菊池 北村多喜男 討

> ナウ付 サオ雑 岩 花 奥 君 なにやかや言いて初老の痩せ我慢 かくれんぼ鬼置き去りに帰る 昔覚えしファゴットを吹く 新 寄合いつも末 編 雪像ひとつご 潮 あだ名を呼ばれはっと振り向 笺 Ш 合成香 のこと裏切ったから受けし罰 御 都会静かに暮 の院長 笠 妻 貼る夜学のノート我が宝 に狼煙上げ 坐す箱開け 抱え 高く 深くさ 油似て 邦の人 石 ぬまま弥生 玉 んと駆け登り 段まだ続 ろと転がる れて敷松 非なるも 席に着 兎 傾 さ踊 あ < < 尽 き 秋 銃 漕 久保田千 佐々木游 小野寺妙 松ノ井洋 子 鈴木文 中村記 简井草 高山達 浜田則 熊坂昌 子 笹川圭 永渕 秋川てる子 荒山美子 小岩秀 子 **本田眞智子** 航 丹 平 康

> > -209 -

5

ŋ

と

サオ寝

転

び

て

朓

む

る

春

の雲真

白

ジュリーアンドリュー

スの姿態のびや

しましきフランス屋根の雀た

歌 仙 冷

新谷十音捌

魔

法

使

むと云ふ家

洗

夜

に肩を寄せ合い思ひを残しつの

酒 還

タイをスマートフォンに買ひ換 ス K 汗 0) 高島すかんぽ 岡本

過 疎 地 0) ょ 月見 2 の宴で村おこ 先 達 0)

降 1) てきてな つくう

灯灯 す 火 親 しまたも 繙 西 遊 記

早 起 き 0 彼 が I 覚ま し代 n n

とんも

どきを

闍

ıļi

島 夫 婦 船 都 だ 知 す 事 鼻 H 息 荒 う せ る 活

ス 7 金 銀 銅 に b 夢 \mathbb{R}

朝 月 VD る 3 病 必 癒 < え 塞

服 孫 花

洪

水

٤

津

波

備

るゴムボ

1

E

D

0)

社

内

講

罠 習

自

留

守

番

0)

婆にふ

h

こめ詐欺の

も作

5

ず

草

千

里

茫

月

渡

b

聞

きわ

け

れ

ぬ

虫の

鳴

3

-210 -

し声

豊

秋

民

俗

を

畠

と

置

自

車

凪音

駅

0)

映

圃

館

通

れの

T

W

風

雨

樽

珈

琲

0)

香

凪 12

花

句

賑

は

で

8

伊

勢

樽

凪ぽ音

遍

路

0)

旅

0)

支

度

٢

平平

五四

月十七日尾

樽ぽ音風ぱ樽風音樽ぽ音風ぽ樽風音樽ぽ

#

歌仙

丘. 七澤春 早田維紀子

遠き異 2 馴 後藤林

風

磨

1)

れ未知の扉を 開けてみ

空を 鮑 とる海

対親 友 0) 妻 0) 日傘に無理に入 ŋ

心の男追うなよ捨てちまえ胸 の 谷 間 に 眼 く ら く ら

校舎の上をオスプレイ飛ぶ

母 イ カサマのカードの城は崩れ去 連 ーベル受賞マラソンもする れ ŋ

銘 は 問 わ ね ど欲 燗

報

恩講に細き

月

御 酒 隠 居は 折 トイプー 卒 ひ ドルと病院 町 に 花 笛

白

鳥

帰

る

天

空

涯

林維苗林維春林苗春維苗林維春

平成二十四年十月十四日首尾

-211 -

半歌仙 青首 大 根

功刀太郎 捌

連 公然のキスが許されここはパリ ぎりぎりと時計の螺子を巻き納め 魚 任地の彼に便りせっせ 今宵の月のいやに眩し 三尺寝から起きる棟 お神籤いつも良きばかりな 選 売る軽トラ声を張り上げて 首 の香の古き 山に雲の影なく田水湧 の下戸が強いらる新走 H の 伸 出す川 飯は ば し月浴 何食うたやら 沿い ぶ大根 か ŋ 白杵 功刀太 小出民 内藤よ 大山とし子 とし子 よしみ よしみ 太民 民游太 游

平成二十四年十 二月十日首尾

杖

曳いて樹齢二千の花に会う

湯

治

0)

う

か

5

包

む

春

雨

民

よしみ

学会は異

 \mathbb{E}

の言葉飛

び

交い

T

音

裏

0)

道

ちょんと柝が入

り開く南

菊

都は去来の

郎

郎

— 212 —

洗 泰 濯 然 虫 連 š 0) Щ や 賑やか 清水光 伊藤稜 後藤、 はるよ

灯も入りて湖 儀 0) 良 畔 き 離れず月見 靴 揃 船 伊藤則 寿美子

お行

る 柿 増田徳

軒

庇

か

L

が

る

殿

様

飛

蝗

ぴ

ょんと飛び乗

美

男子と思

ひ添ひとげ五

+

年

視

線

を

胸

感

る

埋

金

増

す

通

帳

寿

稜 徳

は稜徳寿光は則

菖

蒲

月見つ一

杯の酒に酔

の浴

衣

で街

繰

出

す

アノニマス白い仮面が笑ってる

フットサルでもカズが活

則

俳

宮埋

め尽くす飛花落

花

さ

渡

る

猿

ポ

ス

1

来

る

陽

炎

口

ケ隊が武将の墓にライト

当

て

平成二十四年十 (於・勝沼ぶどうの丘)一月十七日首尾

— 213 —

歌 仙 底 砂

捌

ひ

坪

庭

菜

泵

草.

3

居

0)

地

震

遅

か

りし

会ひたき父

母はすでになく

放

浪

癖

0)

兄

が

戻

ŋ

来

底 砂 ま 切 ぎ h 3 翡 翠 る

紋 錦 紋 美 織 n 若松歌

月 え 月 見 女 0) 影さ

供

が

描

<

似

和田

子

爱

さ

れ

7

爱

してや

がて玉の

興

激

動

時

代

を

ほ

っと生きる

人

南

捕

虫

網

持

ち

見

合

S

相

手

は才気

煥

発

か 飯 炊

か秋 天 飛 行 機 雲 0) < 2 き b

ア ラ イン 引 < 紃 き 指 先

リー ダーの落ち着きぶりにふと魅か れ

彼 のた め な 5 苦 労 厭 は ず

や

み

くもに解散といふ

刀抜

き

葆容歌葆芳歌

H 早く 前 過ぎ は 明 た る 長 広 き き 1 雪 原

īi b 寒 月

見 堤 右 災 to \mathbf{E} 元 定 気 忠 花 治 勘

> 歌 容

芳

芳

平平

成成

葆

風

P

は

か

に

頬

を

撫

紅

容

芳

0)

ス

カ

1

ツリ

に高

Þ

٤

葆

朝

口

マンの

ドラ

マ評

判

葉 家 持ち寄 0) 狩 庭に ŋ り宴 自

慢

の菊

並

はべ森

な

3

軸

産

士:

0)

民

壷 高 値 才 はたけ 1 クシ

骨

董

0)

侶

が

地

酒

桜 前 のひ伝 来

花

旅

3 虹 立け

ま

ぼ

年年十十 一月 二日尾

於

和田容子宅)

サオ応

援

歌

ひ

び

ガ

ッ

早

慶

戦

歌

容葆歌芳葆容芳歌容歌葆芳歌容芳葆容 — 214 —

歌 仙 羽

持 乳 三匹の猫 洞 Ш おだてられつい乗せられてしゃべり過ぎ 城 新 涼 金 イニシャルメール妻にのぞか 毛糸編む手を孫に急かさ からくり時計ふいに鳴 敵 打 らえぬ悋 峡 窟 工 は 剛 ち 車小さき足を突き 風 党 ッ の落人の 0) 杖の どぶろ 湧 0) トフォイルは佐渡へ一飛 乱 がじゃれ合う月の 滴 古典 きて揺 緒 寸. 煙 気 先は 伝 遗 噺 紙 く抱え現れ える 里 渦 に泣き笑 面 すり 月冴え 0) 近 賑 花 直 り出 屋 す n 江美江美江美江美江美 漱

分 嘘 别 友 が 知らず結婚許 真 いう仲 常 良 0) 好 ウェデ 間 あ $|\mathbb{R}|$ 欺に填り込 し資 ŋ ŋ 境 昭 を 届 源 和 0) えみ

るくると回 石 うぜんかずら 眼 月 0) 船 絶 版 ŋ 作 灯 る 直は 浪 主. り事み節て物るれルむ

ナウ秋 収 開 け 族 揃 ば 0 声 止 花

オリンピック招致に 理 動 快

宮 願掛 す け 席 麗 馬

執

筆美久江久江久江久美江久美江久江久美

雲

を

映

二月 八日尾八月二十七日首 (文音)

サオ猫

0)

子を抱

1

T

の瞳に心射貫かる に眠れる賢夫人

保

歌 仙 書 昧 土屋 土屋

実郎

捌

ショ

ートホールに得たるバーディ

郎

想

い

出

は

汚れしものをみな消して

フェルメールの

宵

山

に年に一度

のお札あ

ŋ

熱中

症

に先

ずは

点

滴

0) 残 が 2 書

縄 鹿 文 月を芒 聞 が 寂 揺 0) り 上 げ

Ŧi. ح 放 牧 牛 Ш

今置きしばかりの物が見当ら 火鉢 0) 横 とひとの 指 ず す 小張 池田

耕

治

いじめられっ子

長生きという

兎も月の

ほ

奈落に墜ちしなる酔いの帯の

役者うそ寒

-216-

武

雄

結

審

は

被告

席

にて死

刑

げ保一彦一げ郎保雄彦

烟

過

眠

禅

組

む

僧

欠 坐

水

着きて自転車に乗り又走

b

雪雪 見 酒 碁 敵呼 びて談 す

坂田

彦

サウ毒

とパ

ーカッションでジャズ奏で

映え義臣

の花と称えら

放

吟

明

す春

0)

と保

存

震災の

松

治郎雄彦

茸といわれて急に恐くなり

かず飛ばずのオカマコオロギ

追い出した女房よ 今宵 座 興の りも子の恋 落 話 席

かち合いし眼と眼は何を語るの 親父やきもちボーイフレン K か

海 総 亀 裁 の退屈 選 0) そうに月を待 候 補 四 で

手して龍 馬うそぶ

女 二本とも義足で得たる金メダ 狙. った古 徒 0) 応 物先 援 に買 引 長 花 る

一郎保雄治げ保雄

治彦

平成二十四年九

(於・東京新大橋小張居) 月十三日首尾

雄

備

会

社

に

就

職

歌 仙

れしやな直立不動 引すら 川寒の八つ目 には き ぐっと飲み T_j . 届 太 ゴ 0) ŋ 船 紐 郎 り彼 き 閣 間 ŋ 0 霊 0) 0) 老 12 興 明 旗 様 聳 笑 声 猫 下 を追ひかけ はすてき 遗 を Ø 干 にロ か を 0) b しまた議 0) る 祀 加 0) 振 説かれ n 屏 は 膝送 足 風 か 竹 ね る て 生田目常義. 生田日 鈴木美奈子 高 ili 加 朱 う 郎 美 義 和 う 美 義 和 郎 ナオへそみかん摘まれてへ 決済の万策尽きて宵の闇はや古びたり寓の表れてグニッションここよと教へてあげやうか脳裏かすめる恋のライバル 取 決 瓦 イ 五欲とは財・色・食 洟 り仕 討 文 斯 ち入 アーで回るス 1 聞 ょ 書の 切る癖で推されて世話人に の冷たい床 き れ坊主 きしかや田螺鳴くとりサーの称号授かり りと回 冷たい床に触れてみるりの日を待ちし大江戸 名 ベンよりビートルズ売 残 V, 転 ・名・眠といふ そのピラミッド ペインの 抹 木 茶 花 T れ 義美郎和美義和郎義美郎和美義和郎う 美

う

股

東

海

林

大

月

吉

野

H

В

S

飾

ŋ

0)

鰯

食

義

郎

花

贈

娘

夜

友

邂

け

船

尖

平成二十四年十月六日首尾

-217 -

絶

14

のテレビキャ

厚

化

粧

2

に冬の陽 射 しの やは 出

露 は Ħ りと舞へる の賑 高山

初

月 だけが袋小路を通 頭 É 慢 り抜

ゥべったらを藁稭で吊り手土産と 活ける 奥 0) 床 間

破れ戸叩くいとほしき影

アミダにて成りしカップルゴールイン

なぜなのか石原さんが維新とは ガラスの靴のサイズぴったり

紅. 橋 々と提 灯 吹えて り道

肉 河 筆 童 祭 ŋ 0) ば 月 か 1)

服

玉ぎょろりと炭焼きの

友

ン

身を犬に曳かれて枯野

る

0)

移築した古民家しゃれたレストラ

S

とMいづれ似たも

の同士な

9

狂の立

補

る

す三日

0)

月

爽

籟

いつ終わるのか

長

き口づけ

盃 発 に浮かべ飲み干 明

オリーブの実もたわわなり白き家 道 行く 馬

和 笑み懐 を放 ち て き

II 尽 π して 0) 声衣桁

連

英和山洋郎英和山洋郎英和山子郎

戦

蛙

便

近

騒

平成二十四年十

山洋郎英和山洋郎英和山洋郎英和山洋郎

ひの春帽

呼

ば

れ

7

-218 -

(於・横浜市磯子区杉田劇場)一日首尾

ッハロ 背 伝 ギ ま 湯 れまでの ベ返子・ラピロ 価 の名で親しく呼んだ人いづ 平 ち葉を踏 IJ ヤツに鼻 蕎麦を涼しく ょ 負 つすぐつづく草原の な 桶 ほ 百 口 1 爪 り昇る大きな月を賞 イー ちの る香水まとひ旅立 投 られずに濁 う 出 韻 カ げにて 口のパズルめきた 剣 > 洗 振る象のアップリ ス連句会》 弾く処暑の縁 1 梟月 んで開ける枝折 準備整ふ古 来 ド残高け 『四万六千日』 を 白 P 啜る を 筆 運 174 义 三ノ折名残折 初折二ノ る 0 酒 りを付 息吐 復 ち 教 活 道 H る 側 服部 橫 浅沼 服部 出 永島 城田 徳住 古川 西原 111 秋 和 小 賢 直 咲 玉 生 オ風 読 岬 頼 夏 新 枕 蝋 花 謎 П 絆 能 逃 凍 バスジャ 党はいつたい幾 4 解き 天 辺 移 4 燭 炎の怒 みか つた キブリ 0) ま 霜 し寒 を か 仲 lt どどどどどつと山堂の鬼女の仕っ る 七 灯 昇 か 2 そこは駄 肩の小 0) 里 間 九の 醍醐 ŋ ッ いねと縫 きたき 剥き閉 に聞く ケ浜 推 さつ うと 止 優 深 0) 理小 淵 味 水 伝に で行かう天 り が 嘘をついまる かっと 駆 けっと い 嘘を から は から は がっと は の は 手 めるカ 満 5 生き残 ど るみり 降 s. Ħ 母 説 ぬ づも つる ŋ 别 な 0) 0) U れ 敷 ス抜テり 故宝あ る 抱 出 S き 0) 夜ル参 りて術らけ音舞ひれく国 箱 て郷 め脛

地

猫

高

II

生賢こ生桂生賢こ扇桂賢こ扇生扇こ生扇〃賢生こ賢

| 那須の裾野に牡鹿を追ひ | 現るるマフィアのドンの黒メガネ | 煙草くゆらす非常階段 | 五線譜のおたまじゃくしは宙を飛ぶ | 妖精の吹く喇叭水仙 | 朧月寝覚めの床に夢を見て | 車座になる漁夫の酒盛り | 味噌汁は薄味にして具だくさん | どこか遠くで犬の鳴き声 | かはたれにこやし掛けられ瓜盗人 | 厨子に光を放つ玉虫 | ふたりとも閨の上手の家系なる | 帰らぬ理由は微震激震 | *嫁が君家の外こそ恋しけれ | 三年日記雪とのみ書く | 返り花ひとつ叶ひし願ひ事 | パンが焼けたと客を呼び込み | 画廊出て画廊に消える夏帽子 | マリアの像を刻む町角 | ベネチアの細き運河に沼太郎 | 仮面のごとき片割の月 | 縞柄の後の袷を着こなして | 秋刀魚を食らひ日本満喫 |
|-------------|-----------------|------------|------------------|-----------|--------------|----------------|----------------|-----------------|-----------------|--------------|----------------|-------------|---------------|----------------|--------------|---------------|---------------|--------------|---------------|------------|--------------|---------------|
| 桂 | 良 | 生 | " | 玉 | 咲 | 桂 | 賢 | 生 | 玉 | 良 | " | 賢 | 2 | 生 | 桂 | 賢 | 生 | 扇 | 桂 | " | ٢ | 賢 |
| 瓔珞 | 鍋囲む | か稼働か | 赤旗振らぬメーデーの列 | ディも | 魚を祭る獺の川端 | 貝塚に太古のままのされかうべ | 瓦礫の山に群れるゼネコン | **時鳥夜の明けたと虚偽を告げ | 汗の迸る矢数俳諧 | 揚花火ずどんと胸を貫けり | ざつくばらんに膝を叩いて | 性分は堅忍不抜親ゆづり | いぶりがつこは音を立てずに | 太子忌に棟梁どもが弟子となる | 紅梅一枝手折る若武者 | 白魚のやうな指もて目隠しす | 惚れて候洗ふたふさぎ | 熊の胆は百歳パパの常備薬 | 砂漠の湖は茫と消えゆき | ージア | 取線の | 言いざよひに胎毛筆の草書体 |
| 哲 | 良 | 生 | 良 | 玉 | 良 | 咲 | 生 | 桂 | 賢 | | 玉 220 | | 伽 | 賢 | 玉 | 良 | 高田明日伽 | 生 | 扇 | 咲 | 生 | 良 |

平成二十四年七月十三日首尾

逢ひたさに絹のパジャマを裏返す だんまり芝居道 兄 猪 紅 たつみに散る花びらは蒼く透 起きて半 天 多情多恨 人 光 様 茶 守かすめて飛べ形殿の面影 妹五輪 立ちの窓 12 狩 に背 棚 0) は 田はゆるき 中を向 ポ を目指し笑み溢 のかまつかの 村 畳 ッ に映す師の 寝て 1 け 御 偲びっ 行 て拝 行とな 総 弧 は 用 船 を描 Ø 彩 ょ れ畳 る き くつ 月 恩 <

名ウ菊

逆

神

咲扇桂咲良扇〃桂賢伽扇咲伽

田中イスズ捌

桜 茶店に並 ぐ木々や奥 ぶ手摘み草 Щ 板倉

合

春ショールねじねじにして颯爽と

塚本益

花

淚

きら

水

まで

続

空

H

・土用うなぎ東と西の食べ比べ 君がほんのり白い夏月 古稀の祝いにもらうアイフォン

森田美耶子 合

好きですと打ち明けられず時が経ち

武藤美恵子

海はるかゴッホの愛したジャポニスム

和布の端切れのアップリケ展

尖閣諸島買ってしまうか

益

サォ鱈ちりで酒酌み交わし策を練る

形

見にな

ŋ

し詩集一

#

ストレスで曲がらぬ指をいとおしみ

けば夕化

粧

今宵貴方待つ夜は眠

られず

坊防

巡

田中イ

け 同 人秋

て る 軽 青 安 遍 路 ラ

文益耶益

平成二十四年四月十九日首尾

(於·竜神交流館)

ナオ放

哉

忌

奨

学

金

で酒

買

ひ

康

子

士:

ケ

浜

に瓦

傑やま

積

歌 仙 『氷 面

狩 野 康

ゥ美 待 S お 握 新 金 ちわびて寝入りし子等に月明 さげ 術 手 豆. 見 環 展 離 腐 ŋ 歓 万 蝕 せ は とて桶 迎 景 葉仮 ば 0) 0) 3 と 香 と零 1) 輪 語 D 名 ŋ に 0) 白 5 ビ で せ ほ お 拡 初 さ が 氷 3 面 上 n 萱原邦 横山浜 小岩秀 中村 木田眞 菊池 1/1 智子 江 子 夫

ぎ 復 0) んぎんと市場の魚は 活 5 0) ŋ 三社 5 祭 ŋ は と 江 跳ねさう 総 理 戸 弁

つ花 しめ b 0) 随 椅 小 昼 火 懐 浜

勇

立.

天

愁

絾

張

独

活

0)

煮

つれづれに古文書繰

ればか

ほ

ちや

裕

子

뉌

月も

粋

9

ワ

見

邦

応 発 義 援 芽 足 歌 率いま 0) 才 人も 1) ンピッ 混 ٤ るジョギン クへつなぐ夢 つなり寒 菫 真智子 孝. 裕

史 子

A K にんじんジュ Bめざしてギャ いも若きも 1 ルのダイエット 品定めする スのみの朝 飯 領藤智恵子 孝 康 子 史

月 は へ朱鷺はゆらりと羽ばたきて てな 実に触れた の茶 碗 しと青比丘尼 高値 札 邦 浜 江 夫 宏

禁断

ソリ 美 H 男か 道 英語あや づらの千々に つる結 乱 仲 れ る 間

ŋ 合ふ児らはゲー 中

孝

史

眞

智子

浜

江

ご自由に」老 便 眼鏡 を置 場

受 け 偶 0 溢 る

転

地

見 上ぐ花 飼 吹

邦

- 四年六月十日尾- 四年三月八日首

-223 -

宏

朧

崩

れ

残

1)

防

堤

純

越

え

る

D

力

ップブ

ラ

歌 仙

怒 涛

聞 え 来 無 馬場

帳点版 き ひ 辺 ま 見 Ŀ. げ h

森 孫 抜 お や É 転 にカ 車 を プ 漕 サンド ぐ月 道

"

う

来て物 いたげ かまどう ま

夢 昔 地 との す を 思 許 l, 出 す

魔 薬煎じて 祈る ヤ

英

純

幸

英

11: 5 つに灯火もれる んころ んと 足 丸 が

明 け 祖 め 頭 1 行く 0) 肩 ょ 月

気 が つけ ばばもスマホ片手に花見なう 堂 ば 尻 け 0) 財 布 が消えて居 問 h

1

ダ

を

た

春

一十四年八月一

++

四九 日 日 尾 首

(文音)

議 判

进

寄

波

小

島

凉

風

お

ŋ

肌

熱

くル

1

ジュに燃え

け

吐

息

0)

違

い教えら

じりとトタンの

屋根で灼ける

純

来

ぬ

筈

0)

便

りを待っ

砕

遂

げ

跡

火

輝

き

ス

筆幸純幸英純幸純英幸英純幸英純幸英

月

K

践

す

X

鱗 持 雲 ち 重 摩 b する 堤 珍草 びのからす をたずね ジアムずね シアム湧

ħ. が 終流 かのれ

ンと見つ 年 死 票 0) め る を 追 IJ ケ 霖め のけ栖行 艦者でかくみ覇くかて昔松猫でれ

山 ゆ

幸

英

英

辿

幸

執

-224 -

歌 仙 鏑

中 村

待

ち

進

水ぞいま

被

災

地

0)

祝ぎ

歌

性

叱

る

策

味

を

塞

移

築

民

家

0)

茶

振

舞

流 鏑 産 0 あ 地 番 酒 え ŋ 旨 飛 いと褒 二 の 矢 められ 小野寺妙 小野寺 中村記

童 謡 0) 時 を 報 せ る

ガ若 冲 0) 墓 碑 る

石

榴

0

色

紙

掛

玉 妓 揺 ら 蕩 ほ う b 角

鈴木文

男

レス

1

高

記

録

残さん

と

ベル賞にジャ

パン湧き立

夫

ナウ溶

解

除染茫

茫そぞろ

寒

子 康

鉈

打

肉

伐る

に

月明

1)

3

地腕

Ħ

鼻

0)

消

え

蔵

露

— 225 —

郎

磯

の香気

放

浪

能

登

 \mathbb{H}

筆郎成男子康郎夫男成夫子康郎成男子夫

帯

解

<

婀

娜

ぼ

柱

掛

る

羽

笠.

子

髪

搗

ける水車

やあやめ

咲

<

世 瀬 地 浮 0 無 き沈 思 案をよそに 用 荷 届 縄 新 宅 れ 鋭 端

着 月 くれの老いにはきつい 凍つるな ŋ 湯 屋 0) 道 高き 連

風 ぐれも待ったは 球 児 花 旗 舞 無しと王手飛 や S 尾 根 辺

> 子夫郎康成 成

> > 混

合

て今が

頃

0)

花

0)

わ

る

岩

風

道

深

執

平平

十四年十月二十九日尾

(文音)

餅

遅

れ

届

里

サオ天 心

へ競

て

絵

凧

舞

い上

が

n

速華尹希子

歌 仙 雲

和 \mathbb{H} 忠勝 捌

夏 病 郷 新 流 二人してサラダを作る夢 さりげなく傘を差し出すダンデ 長の ミレーの絵 テネシーワルツ夜が明けるま 凍てるトナカイ角をふり上げ 人混みの中 走 マラヤへ再三挑む心意 n 癒 深 ーツでそっと初雪 道 り小ぶ 子 え今また し池 持 の中 沿 湖 h Ŀ 味 す う 间 を 線 視 宿 仰 Щ 祈 飾 雲 Ŀ は 線感じ 口を に h る P 九 寿 聞 靜 大 彼 傾 0 イズム か 部 で 肉 年 刺 7 下田幸 中井淑 高岛幸 山本恵 岡本貞 宮下瑩 坂井 練武 松本 下田 藤井恵美子 海津 中井 和田 和 秋山よう子 H 玻 忠 博 子 サウ 孫 浮 化 名 河 甘えん坊 童 の手は 槈 に 羽 JII 羅 吉 麻

生まれ来て輝く刻をフィナーレ 何時 月も目に入らない碁が負けそうでんぐり返しの森光子逝く ラジオ聴きつつオヤジうたた寝 ケ 111: メン 忌を色とりど では政権交代かまびすし 美 かかってもがく太刀 のまにやら の異 歌 読経の 歌 K b う 0) 王に招か ハーレムの主 りの供花節 続 H 蛍 < 曜 紅葉 合 0) れて 魚 戦 1) 朝 大橋飯 宮坂和 内海鉄 和田品 土肥暢 春日久 宮脇昌 辻 大駒 小川里江子 木谷 賢 誠 藍 次 淑ろ勝郎 子

平平 一十四四年十一 二月二十一日尾十月 三日首 (文音)

旅

行

算

奮

姑が語

源と知る可笑

戯

间

— 226 —

がお

んぶお

ばけに

郎う

包

散

步

道

に

遊

玉生うめ子

仙 東 京

和 H ひ ろ子 捌

睡 学 秋 月 天 研究 白 村 職 蓮 渡 0 0) 宝 VI る 言 実 1 見 古 京 わ 連 n 0) 1 < 初 駅 老 島 辿 0) 酒 根 れ 工 1) 0) 0) 開 付 1 は 消 着 1) 群 店 1: F. 使 月 Ш 1 う ス 綴 口 る 折 紅 旅 原 山本恵 速藤尹 大橋敏 春日久 木谷 和 宮下 藤井恵美子 小川里江 主生うめ H S 3 子

Ш

0)

渕

瀬

0)

ほ

鮭

柚

き

お

漬

ナオ満 最 廃 無 マニフェ 清 そろそろ ΙΉΙ 霊 終 校 エン 識 楚 ウ 0) 0) 0) に な 1 笑 ス 演 知 電 窓 2 美 ト未完の は らぬ 界 せねば に 車 で 無しでア 女 平 ほ 同士が手を取り で 映 和 お ままに破り捨 断捨離とや 燃える応 を祈念せ ばる草団 し 下 も若きもんがっぱり も若き る 雨 餅 < らて 夜 援 月

花 わ 歓 る飛で れの交体の る上うみ舞物

-二月十九日尾十月 三日首 (文音)

平平

花

代

交

が

病

薬

朝

— 227 —

敏里恵美久尹谿藍め瑩桂敏里美恵貞久昌

仙 1

和 \mathbb{H} 忠勝

糖 若きより見果てぬ夢を追 柔 ぼ 揃 流人 さあいらっし 具師一人見 掛け 待 肌 曜 V 月 ょ かりと空地が出来て近道 抜 方 H 0) 0) 臥 の豆はとりどり極彩 1) 熱き は タツゥー見えぬところに 志 ン目指 床の 0) 高 祭 足 功 島 太 IÍI. 世 子等に ん で しセ 鯉 やい新党ですよ 刻 鼓の 物小屋に月 潮に ほ 残 稲 む 側を 寄り添 化的触 ほ 稽 刈 る れ 古 ŋ る かけ ŋ 薩きぎ え H 佐藤玻 内海鉄 松本華 大駒誠 土肥暢 和田ひ 中井 和田田 宮坂和 FIII 和 秋山よう子 Ш ろ子

> 手をがり出している。 ままり と 迫 る 側 が の 浴 衣 美 人 は 尻 軽 で る 隣 の 浴 衣 美 人 は 尻 軽 で が ランティア異国の浜に月待ちて ボランティア異国の浜に月待ちて ボランティア異国の浜に月待ちて ボランティア異国の浜に月待ちて が の 一本 た だ そこ に 立 つ な め は 尻 軽 で が の 一本 た だ そこ に 立 つ が の 一本 た だ そこ に 立 つ が の 一本 た だ そこ に 立 つ が の が な 美 人 は 尻 軽 で が の が な 美 人 は 尻 軽 で が の が な 美 人 は 尻 軽 で が の 返 留 の が な が か し の 返 留 ナオ茶 花 ユ 文鳥はお 摘 盛 ッジ 工 女 U が しくらまんじ の海 段 R ル 外店 畑 にあ にあがる欲っ ち 勝 す 舗 0) 5 温 増え 利 炎 ほ 度 確 5 続 つ声に留て け信

> 郎幸枝う暢ろ輔児瑠淑弥与一晶和枝郎幸

平平成成 一十五年二月十日尾一十四年十月三日首

 \mathbb{R}

を込

めて花

F

陰

遠

(文音)

— 228 —

仙 検 入 院

和 \mathbb{H} 忠勝 捌

新 家 観 星 花 月 口 笑 星. 遠 過 フ 光 凍 系 流 き茅の 門「どなたもどーぞ」野点 る 地 ランス仕 カ ル 顔 疎 条 隔 図に入る 計 掏摸 る ル線小 K で が 杜 ス K 旗 0) 報 氏 続 検 0) 作 待ち ₫. 輪く 0) か 1 は 屋 型 っぱ " 22 内 て 込 て登 根で鳩 子 <" プは 車 ームスト み 0) りに 5 輌 感 + 継 院 ぎぬ 幼 業 い怖 の往 名 彼 0) スは が 誘わ き鼓笛 0) 所 称 蔵 れ く裾 ロン Vi え 0) μij 大 れ 札 る 罪 胆 物 親 跡 大駒 中非 秋 和 和 III 山よう子 III 賢次 ひろ子 淑 忠 郎 郎勝ろう淑 う 郎 勝 3

> サオ後 拉 故 ラ 輩 致 郷 0) ボ 1 新 脈 政 開ざするかんな ースを応 援 雲す切 12 子

> > ろ

外 慕 慣 仄 老 わ か れ しき先生の \mathbb{R} ず安れ持し鯵宵中て慣みで

ナウ廃 就 す 活 屋 は 0)

明 反 <u>v</u>. 花 転 見予報微 ち 近 きた 妙 で落ちつ ぼ

二月二十五日尾十月 十三日首 (文音)

小

さな犬がシャボン玉

追

平平

一十四四年十一

-229 -

淑一う郎勝ろ一郎淑うろ勝淑一う郎勝

母:

兄

弟

0)

顔

が

あ

1)

175

静

12

極

ま

る

る

る糸ざく

5

池

廻

宵

旅に酌む古酒に故人を偲びつつ秋冷ことに目立つこのごろ 耳もとに口パクパクともどかしく 身ぶり手ぶりの大きジェスチャー ヘリコプターの音のにぎやか の並ぶ町あり月今 寄せた 形 韻 さまざま流 苔 謎 3 0) 解 田屋 山本房 瓢 郎 他 冷 麒 番 携 時に役だつごい 人喰 頭を使ひに出し 麟 までしだれてゆ 児のもて余 忍 ふ芸も 0) 父

腹

0)

内

な

1)

T

知ら

ぬ

à

b

隠

居

0)

知

惠

3

0)

#

總

苔

古梁房古梁房古梁房古梁 歌 明け方の五輪に 窓元らしく麻のれの奴 独 薬 縁 に 溢れて いらぬものまで見える口 忘れ どっとこたへる寝 ドーヴァー海 声は「世界はひと 三夜月の非情 扇 にの 峡 L あ をうらむべ がる つ」肩組 波 た 不 れ 静 る 足 3 口惜し れ 2 \mathbb{H} 0 か 長 け 掛 章 V な H け K 1) 旗 3 首 る 跡 0

初ウ

白

壁

言が目当ての書を訪 外 み 新婚旅行の途が車とて安全祈りダブルのスーツは がき たて靴の 旅行の 光る 途 威 ね 願 を 中 儀 ゆく芸術 幣 伏 を 寄 を Œ. 目に ŋ 振 道 T

遺

伝学意

パンダの赤ちゃんまた待ってます一伝 学 意 見 を 交 す 研 究 者

見を交す

ば転

半ば羽

金

婚の

記念に地球ひとまは

夢かうつつか魔笛ひびか

東

方の

無限の空よモッアル

句集に残る

恋句なつか

故郷より届くお女子大寮聖夜の声

餅いろいろ

梁房古梁房古梁房古梁房古梁房古梁房古梁

| 房 | しまま帰らぬ主待ちわび | 古 | 山彦かへる秋の |
|----------|-----------------|---|------------------|
| 梁 | 網干の玉のさてもなまぐさ | 房 | もらの流行のパジャマ月の |
| 古 | 赤錆びし夏月かかげ漁師町 | 梁 | 円空佛のなほ残りたる |
| 房 | が闇の中か | 古 | 峡ふかく逃れて来たる秘湯の里 |
| 梁 | 水 | 房 | ますますつのる不安原発 |
| 古 | くるりと廻す卓の地球儀 | 梁 | 目を閉ぢて十六世紀のうすら闇 |
| 房 | 若者のメール絵文字が読みとれず | 古 | 茶房の卓にかをる姫百合 |
| 梁 | この言無くば源家絶えしを | 房 | 鈴鳴らし迷子の仔犬ついてくる |
| 古 | **池殿に盃酌み交し春惜しむ | 梁 | 息白く吐く黄昏の道 |
| 房 | 古代に遊ぶ陽炎の舞 | 古 | 呼び止めし赤いマフラー人違ひ |
| | と朽ち | 房 | 予備校生は慌て眼そらし |
| 古 231 | 昔の唄を口ずさみつつ | 梁 | いつの間にハッと息のむ胸の線 |
| | こっそりと細い煙の落葉焚き | 古 | 湿りおびたる竿の干し物 |
| 梁 | 冬の木立に月のかかりて | 房 | 三水来客の多き日暮れて四月盡 |
| 古 | 琴線にふれし言葉を医師より | 梁 | のれ一重の朧占めつ |
| 房 | 71 | 房 | 花片はいつか茶室へ舞ひ込みて |
| 梁 | 灯台の消えては狂ふ真の闇 | 古 | 庭に知足のつくばひを据ゑ |
| 古 | 又逢ふ日まで別れせつなく | 梁 | 比叡晴れ僧坊近く鳥の声 |
| 房 | 衣装代全部あなたの為のもの | 房 | 干大根の並ぶ軒先 |
| 梁 | 美の追求に何を惜しむや | 古 | 月皓々枯草そよぐ古戦場 |
| 古 | 評判のエステに通ふみちすがら | 梁 | 縁取り文字の踊る売店 |
| 房 | ー と 漂 | 房 | 大仰な記者会見に鼻白む |
| 梁 | 言声澄みて佳き人の行くこぼれ萩 | 古 | カメラ向けられしゃなりしゃなりと |

サッ行き来する人さへをらず道標 うるしの香しるき木彫りの 幼 雪 庭 窓 持 朝 山 かぶら寿司とて酢味のいや濃 袁 先 吊 服 病 暁 な は 12 ŋ 0) は 降る 切れずに 0) 迫 隠 0) 神 彼 発 な ŋ 千条月の影 腕 れ 0) 花 方 作 し大 さ 片を 恵み に 押へか す 蕉 据 淡 る枝 追 が 樹 急 ひか 見 は る を ひと 飾り 陰 開 曳 き 膳 洞ヶ盆 堂 < け 虹

占房梁古房梁古房梁古房梁古

歌 仙 百

愛用 節 何 S 知 うほ たすらにあ こっちのものよ惚れてしまえ 百 気なき優しき仕草心し たふりをしてそっと耳 ッグの遥か彼方にスカイ ックスフン の入れ歯にガムがくっつ 行 涯 どに しゃい 話 0 合 泉 題とな 弁はさわ 児 を なたを頼る木守 招 ト梳かす念入 星 冴 釣る 拒 ŋ 出 2 ゆ し扇 やか 馳 さ る 濁 月さん ツリ み 月 萩本 橋本 原 H 実郎 捌 郎 夫 子 郎 夫 Ξ サウ行 若 流 映 濁 邪 初 原 千二百 相 魔 ŋ 句 れ 画 ダルは 師 なき水 合 行 肌 会 平平 風 村 ても ビ < 花 冥 傘 御 恋 論 口 題 語 面 金 見 義 溶にり の月を ょ 入 九八 絆 0 尽 夜 睦 か 何

ナオ風 沈 光 H る ま を惜 谷 ŋ 0) 返 吊 む り橋 る が にきく鐘 落 お お 人 揺 0 れ 0 音 里

る

興

行

し伝

戻る

蟻

0)

道

鳴

が

何

で

題

感

合

士官室) 三夫郎三子夫郎子三郎夫三子夫郎子三

ば

甲

行く手さて

も見

事

な花

床

聞

鴬

声

二十三日尾 一十二日首

柳川ビル

ま

じ

オ

しが枕

寒

朝

寒

歌

に

詠

みも

今野福子捌

稀 挙 有 る 今野福

ゲン少 笹川圭 伊藤 航

俳

軒

を

巡

ŋ

立鳥

ゆ

走 め て感嘆 しきり月冴 親 子 マ 小野寺妙 笹本美恵子

ウ名

句

が合図となってカギを開 にまた寝酒つ け 安斎厚 井上せつ子

厚

圭

サォ桑苺くちびる染めてさような

水着

別人

0)

う

民

主

れ

増

税

命

野

田

理

闇

0)

深

さに犬がとびだ

す

笛

独り寝

買

て

満

足

体

脂

肪

計

囃

さ

う

さ

乱

れ

萩

ほ

れて焼け

棒杭にな

んとや

月

り兵等

る

供

養

雨

草

森

美せ航せ

(於・仙台市中央市民センター)四年六月二十七日尾四年五月 十七日首

-234 -

連句年鑑 平成二十四年版

「私の好きな一巻」上位発表

多くの作品を読んで連句作品への理解を深

め、そのことでよりよい作品を生み出す創造

力を培いましょうと、連句年鑑掲載作品から

「私の好きな一巻」を投票していただきまし

その結果上位三巻は次の通りです。

た。

・きさらぎ連句会「ちぬの海」 小池正博捌

・草門会 歌仙「ターナーの雲」大橋俊彦捌

・北杜連句会 歌仙「忘れ雪」 狩野康子捌

れ三票ずつの同点数が入りました。次に二票

入った連句が五巻、あとの十六巻に一票ずつ

投じられました。

一票を投じた方は、作品のどういうところ

が気に入ったのでしょうか。一巻の流れ、句

の表現の巧さ、思い切った転じ、巧みな付け

筋、機知に富んだ句材等、どこに目をつけて

鑑賞されたのでしょうか。

皆さまも再度お読みください。

応募総数は35票でした。右の三巻はそれぞ

歌 仙 『ち ぬ 0 海

小 博捌

山山 告 舞 月 丰 ち 遺 ここにも平家落武者の 帆 牛馬童子の 夏やせもする着ぐるみのな すすき野にふと立ち止まる かげの雲の切れ間にあらわれ テレフォン 台 白の言葉を探す夕まぐ ャンプして月の光に り声も弾みて市場にぎやか 裾 ぬ 袖ステージママの瞳 伝 0) 子 ふく 軒を連ねて柿すだ 海 操 錨 カード五 らむ初 首 作 あたら で若 年使 風 Ш 紫 あ れ れ b を 里 ず て 松永直 外山安 渡辺廣 品部二 吉澤久 伊藤 杉田宏 小池 上西紀代 良 酔 之

> ナウ間 サッタシャボン玉こわれないのもツマラナイ 月よ 花 故 凍 アナログのテレビの似合う隠れ 陸 引菜の根にか 文 夜 夕 炬 付いては 蝶 ティーニの苦さを好む年にな かの山川に住むひともなく 郷 イ 尽きて旅番組をプロデュー 球 学館も沙 来 食 燵 のかすかな 0) 奥 の落ちるところに居を定 少年レギュラ ガーマスクは い不死の 8 にミカ 仲よし りも 摩 離れ ン 昭 り食べて徘 汰やみにな 息をきいている らみつく砂の 薬は要らない 一直 小道どこの 浮雲 和香れ ーになる 隣の親 線 0) 道 宿 恋 粒 徊 が ŋ る 父 12 ŋ 紀代美 正宏直正直 直久宏廣 正廣 良 子 良 子 之 酔

緋

毛

氈

野

立ての席は花

雀

0)

声

0)

遠

<

か

す

マクドナルドでね

ばる

内

顔

触

れ話

ちらほら

の背中が伸

びる

のどかさ

平成二十三年一月十日首尾

ナオ遠

足

の列

やゆ

よんと蛇行して

俊

仙 『ターナーの雲』

大橋 俊彦捌

神 迷 花 鉄 上 カ オカモトもサガミもみんな薄つペ さうですここは地獄への うふふふふふと亀鳴いてます クテルに月の欠片の涼しさをスイングドアを押さば潮騒 ながーく生きてすこし愛し たまごみたいになつて 塩 俄か作 弦のまなざし杜へ降りそそぐ 代から蓑虫と吾れ孤独 びらの軌 ひ犬曳網つけて雑 ナー 煎 ャボン玉に 児 をIT株に 餅 制 の雲 を りのお化け 服 通 跡 は を見 のやや大 は りは も映 Y 乗り りと噛 11 る 换 梅 踏 紅 な 5 7 む 月 角 n 鶸 篠原詠 葛城真 山下宏 大橋俊 山地春眠子 小池 春眠子 春眠子 詠 真 宏 詠 宏 真 子 美 史

花

力

ーボー

ルに触

るる淡

ひて抱

き合ふ

且

ナウ皇 帝 抜くに抜けない腰の錐気お釈迦様ケータイが壊れつちまつた! 那 痒 種 闇 ビタミン摂 か П 悩 軍の波割つ か 馬 こらDDTをかけられいところに手が届かな さま三つ違い 天 0 すか 痘 0) 0) の気晴 底にて嗤ふジョーカー 0) を挿 螺旋 0) 片脚 跡 の に 階 兆す火山 す芋のひと つて恢復を待 ち雪晴の 走り自慢 しとして茸 愛しがらせる つてそれほんと? て行く月の 段這ひの 爆発 ぼ n 狩 T T ス 浜崎 真宏定定詠真春眠史子史史美史子 春眠子 定 浩 浩

頭

水

煩

竹

平成二十三年二月十九日首尾

(於・北とぴあ)

舞

仙 忘、 れ 雪

狩 野 康子

幻

えを点し盲導犬強力 ひとりまの 魚得て今っ

雲

海

を

抜

H

0)

菖

酒

強力

思

い出の転がるドロ

ッ

プ缶

振れ

ば

写

楽

麿

灯

跡 忘 佐藤千 狩野康

瓦 礫分け咲く水仙の 花愛で 鈴木良

ボランティアから笑顔いただ <

避 難 所 の体育 館に真夜 月

釆 ぶをためらふ窓 蚊

康

太

鼓打つからく

ŋ

時

計月

0)

出

に

赤い羽根売る

ボー

1

ス

カ

ウ

1

旧街

道を塞

き止

め

る

石

教

師

力ためさ

れてゐる

通

知

票

身重となれ

ば

乳

房

豊

か

犬と妻を

待

につけ

宣 縞 着て地芝居の客とな る ŋ

IJ 白化粧した忠次見得き ムジンと義 理が行 手を遮り

美 すぎ る 君 が 配

〃 玻

無

食芥

JII

賞

と

る

ま

で

は

遊

2

る

ショ

0

効

覿

面

寿

袖

ナウ福

捥が

れ

残

る

次

郎

柿

異 正 玉 の甘ひ響きに夢を乗 リストス教会 0) 塔

宇

金

ツレうらら

橋

掛

ŋ

良

氷 柱 は昨夜 の月 光籠 るら

鉛 お 筆 やぢバンドがCDを出 をく るり 殺す くる 仮 面 りと回す ライダ

花

杂

望

叶ふと高

刺

さ

る

る

杣

0)

軒

康枝良玻枝康

主 急行 列 車 に 総

立.

ち

す

追

š

病

み

母

ナオ葱

坊

菅原泰 浜田 則 玻康宇玻枝宇子良玻子〃 枝玻康宇良枝玻

平成二十三年上平成二十三年上 -九月十三日尾-七月十二日首

(於·仙台文学館)

連句年鑑 平成二十五年版

平成二十四年に初めて企画したもので、各平成二十四年に初め好きな一巻」大募集

グループの作品投稿締切りと同様に二月末日

まで投票をお待ちしました。

一八〇巻近くの作品を全部読まなければ

読まなかったので投票はしたくても出来なか「好きな一巻」は見つけられない、すべてを

った、という声を聞きました。

こうした意見は確かにもっともなことで

す。年鑑の作品すべてを読めなかった方は、

エックしてみてください。「うまいなぁ、私

読んだものの中から一番心に残った作品をチ

賞ができました際には、是非今年からご投票もこういう付け合いをしてみたい」という鑑

下さいますようお願いします。

六年版連句年鑑誌上で発表します。 投票数の多い上位三巻の作品を、平成二十

○この年鑑掲載の作品の中から、あなたのお

○投票は「作品名」、「捌名」、「結社或いはグ

外は無効)

ください。 ループ名」、「掲載ページ」を楷書でご記

○投票には「住所」、「氏名(ふりがな)」、「電

○投票締め切りは平成二十六年二月末日厳○匿名での投票は無効といたします。

守。(当日消印有効)

山梨県連句協会

会 長 後藤臣彦 副会長 功刀太郎・後藤はるよ 事務局 後藤臣彦 〒400-0814 甲府市上阿原町1258 (055-235-1653)

秋田県連句協会

会 長 伊藤恵美子 副会長 佐々木昇一 茂呂雄太 事務局 伊藤恵美子 〒010-0905 秋田市保戸野1-34 (018-864-1770)

福岡県連句協会

会 長 八木紫晚

副会長 守口 薫

事務局 八木紫晚

〒816-0931 大野城市筒井3-13-12

(092-593-2575)

大分県連句協会

会 長 中森順和

事務局 南雲玉江

〒874-0902 別府市青山町8-72

佐々木方

(0977-26-9407)

連句協会広島県支部

支部長 高橋昭三

事務局 同 上

〒731-0223 広島市安佐北区可部南

4-5-47

(082-815-1914)

宮城県連句協会

会 長 狩野康子

副会長 中村孝史・永渕 丹

事務局 狩野康子

〒981-0924 仙台市青葉区双葉ケ丘

2-5-12

(022-271-0005)

鳥取県連句協会

会 長 音田淀治

副会長 新田幸子・永江重昭

高野重子・山崎君子

事務局 田中史郎

〒682-0402 鳥取県東伯郡関金町大鳥

居 関金町教育委員会内

(0858-45-2111 · FAX3961)

岡山県連句協会

会 長 米林 真

副会長 花房八映

事務局 米林 真

〒700-0904 岡山市柳町2-2-1

(086-222-6176)

山形県連句協会

会 長 内田素舟

副会長 浅沼葛子・三浦和枝

安部英子倍

事務局 内田素舟

〒996-0035 新庄市鉄砲町3-71

(0233-22-1285)

連句協会群馬県支部

支部長 伊藤稜志

事務局 同 上

〒371-0811 前橋市朝倉町3-5-37

(0272-61-2297)

茨城県連句協会

会 長 堀江信男

副会長 西 幾多・城 依子

事務局 根本美茄子

〒319-1225 日立市石名坂町1-31-9

(0294-53-6635)

やまぐち連句会

会 長 諏訪欣二

事務局 中本蒼水

〒746-0025 周南市古市2-3-43

(0834-62-1400)

静岡県連句協会

顧 問 石渡蒼水・中根明美

会 長 宮沢次男

副会長 久保田静男・飯田紫苑

事務局 久保田静男

〒410-0822 沼津市下香貫280-1

(055-931-7219)

徳島県連句協会

会 長 東條士郎

副会長 竹内菊世・梅村光明

事務局 東條士郎

〒770-8051 徳島市沖浜町東畑589-1

(088-622-3745)

地方連句組織

愛媛県連句連盟

会 長 井上雨道

副会長 岡本 眸・戒能多喜

名本敦子

事務局長 山口博三

〒791-0311 松山市白水台1-1-9

(089-927-3231)

連句協会石川県支部

支部長 藤江紫虹

事務局 宮嶋 茂

〒929-0327 石川県河北郡津幡町字

庄チ65

(076-289-4214)

連句協会三重県支部

支部長 西田青沙

事務局 同 上

〒512-0921 四日市市尾平町3768-188

(0593-32-8931)

埼玉県連句協会

顧 問 金子兜太

会 長 磯 直道

副会長 白根順子・福田太ろを

事務局長 石川光男

〒369-1203 埼玉県大里郡寄居町

寄居535

(048-581-5943)

岐阜県連句協会

碩 問 伊藤百雲

会 長 大野鸽士

副会長 瀬尾千草

理事長 清水貴久彦

事務局 松尾一歩

〒500-8415 岐阜市加納中広江町68

横山ビル

(058-274-9479)

連句協会千葉県支部

順 間 上田渓水・下鉢清子

浅野黍穗

支部長 斉藤一灯

副支部長 東浦佳子

幹事長兼事務局長 伊藤貴子

〒264-0006 千葉市若葉区小倉台1-12-3

(043-233-3555)

連句協会岩手県支部

支部長 小原啄葉

副支部長 志和正巳 菅原多つを

事務局 沼田和子

〒020-0875 盛岡市清水町1-33

(0197-622-7907)

連句協会栃木県支部

支部長 中尾硫苦

副支部長 高井利夫・田中きみ

田浪富布

事務局長 富田昌宏

〒329-4406 栃木県下都賀郡大平町

下皆川721

(0282 - 43 - 2664)

富山県連句協会

会 長 山本秀夫

副会長 大西紀夫・藤縄慶昭

事務局長 野島清治

〒930-0114 富山市茶屋町59-61

(076-436-0677)

香川県連句協会

会 長 鎌田孝義

副会長 植松晴子・広谷高士

西岡恭平・今井 盗

事務局 鎌田孝義

〒763-0013 丸龟市城東町1-3-26

- 1. 事業計画および収支予算についての事項
- 2. 事業報告および収支決算についての事項
- 3. 役員の選任
- 4. その他この会の業務に関する重要事項で 理事会において必要と認めた事項

(総会の議決方法)

第22条 総会の議事は会員である出席者の過半 数をもって決し、可否同数のときは議長の決 するところによる。

第7章 会 計

(会計の種類)

- 第23条 この会の会計は次のとおりとする。
 - 1. 経常会計
 - 2. 特別会計

(経常会計)

第24条 経常会計の収入は会費、協力金その他 とし、これによってこの会の経常的運営の支 出にあてる。

(特別会計)

第25条 特別会計の収入は連句グループ、会 員、関係団体等よりの寄付金とし、これを基 金として積み立てるものとする。

(経常会計の剰余金)

第26条 経常会計に剰余金があるときは、理事

会の議決および総会の承認を経て、その一部 もしくは全部を特別会計の基金へ繰り入れる ことができる。

(会計年度)

第27条 この会の会計年度は、毎年1月1日に 始まり12月31日に終わる。

第8章 規約の変更

(規約の変更)

第28条 この規約は理事会において理事現在数 の4分の3以上の議決を経、かつ総会におい て出席者の4分の3以上の議決を経なければ 変更することができない。

第9章 解 散

(解散)

第29条 この会の解散については前条に定める 手続きを準用する。

この規約の制定、施行は昭和63年10月1日と する。

平成2年9月1日 一部改訂。

平成8年6月23日 一部改訂。

平成16年4月18日 一部改訂。

平成18年3月19日 一部改訂。

『連句協会』顧問・役員名簿

(願 問) 土屋実郎・上田渓水・小林しげと・ 磯 直道・宮下太郎

(役 員)

会 長 臼杵游児

副 会 長 青木秀樹・伊藤稜志・品川鈴子・ 中尾青宵

理事長 和田忠勝

常任理事 井上雨道·今村 苗·狩野康子· 近藤蕉肝·白根順子·高尾秀四郎·

二村文人

理 事 伊藤貴子・梅村光明・大久保風子・ 大山とし・岡本 眸・小池正博・ 小川廣男・竹下昭子・東條士郎・

> 福田太ろを・宮澤次男・森川淳子・ 矢崎 藍

会 計 高尾秀四郎 (兼)

監 事 石川光男・東浦佳子

『連句協会』規約

第1章 総 則

(名称)

第1条 この会は連句協会という。

(事務所)

第2条 この会の事務所は会長の指定する場所 に置く。

(支部)

第3条 この会は理事会の議決を経て必要の地 に支部を置くことができる。

第2章 目的および事業

(目的)

第4条 この会は連句文芸の創造的発展とその 普及ならびに連句実作者、連句愛好者の交流 を図り、連句文芸の興隆に寄与することを目 的とする。

(事業)

- 第5条 この会は前条の目的を達成するために 次の事業を行う。
 - 1. 全国大会および地方大会の開催
 - 2. 会報(隔月)の発行
 - 3. 連句年鑑の出版
 - 4. ホームページの運営
 - 5. 国民文化祭への後援と参加
 - 6. その他前条の目的を達成するために必要 な事業

第3章 会 員

(種別)

- 第6条 この会の会員は次のとおりとする。
 - 1. 正会員

(入会)

第7条 正会員になろうとする者は、入会金2 千円と所定の会費を納入することにより入会 できるものとする。

(会費)

- 第8条 この会の会費は次のとおりとする。
 - 1. 正会員 年額3千円

但し1月から12月まで

(資格の喪失)

- 第9条 会員は次の事由によってその資格を喪失する。
 - 1. 退会したとき
 - 2. 理由なくして会費を2年以上滞納したとき

(退会)

第10条 会員が退会しようとするときは退会届 を会長に提出しなければならない。

第4章 役 員

(種別)

第11条 この会には次の役員を置く。

- 1. 理事 35名以内(うち会長1名、副会長 5名以内、理事長1名、常任理事若干名)
- 2. 監事2名

(役員の選任)

第12条 理事および監事は会員のなかから総会 でこれを選任する。会長、副会長、理事長およ び常任理事は理事会の互選でこれを定める。 (理事の職務)

第13条

- 1. 会長はこの会の業務を総理しこの会を代表する。
- 副会長は会長を補佐し会長に事故あると きは、あらかじめ会長が指名した順序でそ の職務を代行する。
- 3. 理事長は会長、副会長を補佐してこの会 の業務を掌理する。
- 4. 常任理事は会長、副会長および理事長を 補佐し理事会の議決に基づき業務に従事す る。
- 5. 理事は理事会を組織して業務を行う。 (監事の職務)
- 第14条 監事は会の会計を監査する。

(役員の任期)

第15条 この会の役員の任期は2年とする。但 し、再任を妨げない。

第5章 顧 問

(顧問)

第16条 この会に顧問を置くことができる。顧問は理事会の議決を経て会長が委嘱する。顧問はこの会の業務について意見を述べ、また会長の諮問に応じる。顧問は会費を納めることを要しない。

第6章 会 議

(理事会)

第17条 理事会は原則として年3回会長が招集 する。理事会の議長は会長とする。理事会の 運営については別に定めるところによる。 (常任理事会)

第18条 常任理事会は原則として隔月に会長が 招集する。常任理事会の運営については別に 定めるところによる。

(総会)

第19条 総会は毎年1回会長が招集する。また 必要と認めたとき会長は臨時に総会を招集す ることができる。

(総会の議長)

第20条 総会の議長は会長がこれを務める。 (総会の議決事項)

第21条 総会は次の事項を議決する。

連句協会規約

悠の会

花輪 芳子 連絡先113-0032文京区弥生2-4-12花輪芳子(03-3815-9737)会員 4名

夢々連句

静 壽美子 連絡先166-0003杉並区高円寺南 5-15-8静 壽 美 子(03-6313-6791)会員 4 名

ヨーク連句会

土屋 実郎 連絡先233-0012横浜市港南区上 永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059) 会員8名

瑶沙連句会

上屋 実郎 師系·清水瓢左 連絡先233-0012横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)会員 15名

葉門連句会

福島 時子 師系·宇田零雨·木村葉山 連 絡先155-0033世田谷区代田2-9-1福島時子(03-3414-8426)会員 11名

よみうり文化センター川口

磯 直道 師系·宇田零雨 連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯 直道 (048-251-3033)

横浜ベイサイド連句会

高山 貞和 連絡先221-0831横浜市神奈川区 上 反 町2-21-7高 山 貞 和(045-320-2367)会員18名

ラピロス連句会

本屋 良子 師系・東 明雅・國島士雨 連 絡先248-0008逗子市小坪2-12-6 本屋良子 TEL& FAX (0467-25-5139)

落柿舎連句会

奥西 保 連絡先616-8395京都市右京区嵯 峨小倉山落柿舎 奥西 保 (075-881-1953)会員9名

竜神連句会

武藤美恵子 連絡先473-0908豊田市宝町十三 塚94-2森 田 美 耶 子(0565-26-4482)会員10名

連句ななの会

土屋 実郎 連絡先223-0012横浜市港南区上 永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)

鈴峰連句会

北川 英昭 連絡先513-0012鈴鹿市石薬師町 35-1北川英昭(059-374-1784)会 員7名

連句会ひらめき

新野 康子 連絡先981-0924仙台市青葉区双 葉ヶ丘2-5-12狩野康子(022-271-0005)会員8名

連句会未恋座

金枝 純 連絡先459-8004名古屋市緑区有 松南501-E-102金枝 純(052-624-5149)会員 4 名

連句会遊子座

和田 忠勝 師系·清水瓢左 連絡先223-0052横浜市港北区網島東5-22-4 和田忠勝(045-531-7174)会員30 名

連句会「遊」

中村 記康 連絡先982-0003仙台市太白区郡 山6-3-33中 村 記 康(022-248-6071)会員 5 名

連句倶楽部

城 依子 師系·字咲冬男 連絡先300-1636茨城県北相馬郡利根町羽根 野800-55城 依子(0297-68-4424)会員10名

連句「笹」

伊藤 敬子 連絡先465-0083名古屋市名東区 神丘 町2-51-1伊藤 敬子(052-701-5050)会員7名

連句研究会

小林 梁 師系·松根東洋城·野村喜舟 連絡先214-0012川崎市多摩区中 野島4-23-14小林 梁(044-922-7868)

連句パワー

浅沼 璞 師系・眞鍋天魚 連絡先241-0825横浜市旭区中希望ヶ丘97-14浅沼 璞(045-362-2717)

鹿吟舎

池 央耿 連絡先216-0006川崎市宮前区宮 前平2-16-2-502池 央耿(044-855-8546)

若泉連句会

川田 章夫 師系·宇咲冬男 連絡先372-0842伊勢崎市馬見塚町1121-4川 田章夫(0270-32-8410)会員8名

和光大学

深沢 眞二 連絡先195-0071町田市金井町 2160和光大学 深沢眞二(044-989-1431)

若笹連句会

笹川 圭子 連絡先984-0825仙台市若林区古 城1-2-1-704笹川圭子(022-294-7498)会員8名

風蘭連句会

岡田 陽邨 連絡先514-0058津市安東町1941 岡田陽邨(059-228-0962)会員 4 名

富士裾野連句会

中村 雄爾 連絡先410-1126裾野市桃園154 中村雄爾(055-992-0264)会員16 名

葡萄連句会

内藤 芳生 連絡先184-0011小金井市東町1-10-16内藤芳生(042-384-8626) 会員5名

ふらくたる

藤井 清 連絡先655-0007神戸市垂水区多 聞台5-3-34藤 井 清(078-781-7766)

紅の会

神山 愛子 連絡先502-0017岐阜市長良雄総 195-2神山愛子 会員5名

ほほほ連

大久保風子 連絡先330-0053さいたま市浦和 区前地2-9-21大久保風子(048-881-2756)会員11名

ほれぼれ座

永渕 丹 師系・狩野康子 連絡先981-0952仙台市青葉区中山7-4-14永 渕 丹(022-278-7387)会員6名

北杜連句塾

狩野 康子 連絡先981-0924仙台市青葉区双 葉 が 丘2-5-12狩 野 康 子 (022-271-0005)会員15名

勾玉連句会

中村伊都夫 連絡先516-0008伊勢市船江1-2-46-1203中村伊都夫(0596-22-8801)会員5名

松山連句協会

井上 雨道 連絡先791-0127松山市藤野町甲 329井上雨道(090-4970-9865)会 員10名

松山連句教室

武智 紀美 師系·宇田零雨 連絡先791-1111松山市高井町4-36-2武智紀 美(089-975-4119)

摩天楼連句会

星野 石雀 師系·野村牛耳 連絡先262-0046千葉市花見川区花見川2-6-105星野石雀(043-286-0725)会 員6名

窓連句会

高月三世子 師系·名古則子 連絡先167-0041杉並区善福寺1-21-26高月 三世子(03-3390-4567)会員11名

丸亀連句会

今井 水映 連絡先763-8619丸亀市土器町1-18平和写真印刷(株)気付 今井水 映(0877-23-1300)会員6名

三重県連句協会

西田 青沙 連絡先512-0921四日市市尾平町 3768-188西 田 青 沙(0593-32-8931)

宮城県連句協会

新野 康子 連絡先981-0924仙台市青葉区双 葉ヶ丘2-5-12狩野康子(022-271-0005)

三河連句会

斉藤 吾朗 師系·宮下太郎 連絡先445-0806西尾市伊藤町伊藤前15-1斉 藤吾朗(0563-57-8332)会員12名

三豊連句会

植松 晴子 連絡先769-1613香川県三豊郡大 野原町花稲907植松晴子(0875-52-2137)

水無月連句会

根本美茄子 連絡先319-1225日立市石名坂町 1-31-9根本美茄子(0294-53-6635)会員12名

美暗連句会

土屋 実郎 連絡先233-0012横浜市港南区上 永谷3-20-34土屋実郎(045-943-8059 · FAX846-1526)会員6名

未来図連句会

鍵和田秞子 連絡 先108-0074港 区 高 輪2-1-51-302鍵和田秞子 会員13名

メヌエット若い現代連句の会

川端 秀夫 連絡先152-0035目黒区自由が丘 2-15-9-302メヌエットの会事務 局(03-3724-4263)会員3名

メロウ連句塾

新井 樽 師系・筌民 伸 連絡先244-0801横浜市戸塚区品濃町564-1-6-1205新井みちを(045-824-3443)会員7名

藻塩連句会

松井 郁子 連絡先519-0608伊勢市二見町今 一 色206松 井 郁 子(0596-43-3519)会員2名

「もん」の会

川野 蓼艸 連絡先182-0035調布市上石原2-27-9川野蓼艸(042-485-5480)

八千草連句会

山元志津香 師系·宇咲冬男 連絡先215-0006川崎市麻生区金程4-9-8山 元 志 津 香(044-955-9886·FAX 9882)会員30名

耶馬渓連句会

三宅 繁代 連絡先871-0202中津市本耶馬渓 町曽木1978-1(0979-52-2422)会 員15名

山利喜会

粒針 修 連絡先364-0014北本市二ツ家2-51粒針 修(048-592-8957)会員 8名

やみつくば会

下房 桃庵 連絡先690-0823松江市西川津町 1060島根大学文学部内 下房桃 庵(0852-32-6206)会員6名

弥 生 会

林 道子 師系·岡本春人·岡本星女 連 絡先563-0341大阪府豊能郡能勢 町宿野1507林 道子(0727-34-0023)会員5名 0496) 会員10名

日本作家クラブ連句会

市村美就夫 連絡 先150-0012渋 谷 区 広 尾3-17-4-205中 島 ま さ し(03-3407-5368) 会員20名

猫蓑会

青木 秀樹 師系·東 明雅·根津芦丈 連 絡先182-0003調布市若葉町2-21-16青木秀樹(03-3309-0953) 会員170名

拈華連句会

近藤 蕉肝 連絡先243-0434海老名市上郷3-7-86林ジョウ(046-232-9449)

俳諧田園 (協会主催)

中尾 青宵 連絡先227-0043横浜市青葉区藤 が丘2-25-2中尾青宵

俳諧文芸考究会

中尾 青宵 連絡先227-0043横浜市青葉区藤 が丘2-25-2中尾青宵(045-973-1760)

白水台連句会

大西 素之 師系・宇田零雨・寺岡情雨 連 絡 先791-0113松 山 市 白 水 台4-12-12大 西 素 之(089-923-3993) 会員 7 名

白塔歌仙会

吉田 剛 師系·西川清之 連絡先204-0004清瀬市野塩5-292-4-606早 坂七緒(0424-91-7214)会員13名

巴世里連句会

各務 恵紅 師系・東 明雅・國島十雨 連 絡先500-8367岐阜市宇佐南1-2-5各務恵紅(058-273-0539)会員 20名

八戸俳諧倶楽部

名久井白好 連絡先039-1114八戸市北白山台 3-6-8森 きよし(0178-27-0311)

はつこゑ連句会

 東浦和7-8-2-211澁谷盛興(048-875-1909)会員12名

花音連句会

西條 裕子 連絡先776-0031吉野川市鴨島町 敷 地178-4西 條 裕子(0883-24-2993)会員20名

花野連句会

小出きよみ 師系・根津芦丈・東 明雅 連 絡先390-0821松本市筑摩東2419 小出きよみ(0263-25-5436)会員 11名

はねだ連句会

内海 良太 師系·名古則子 連絡先216-0001川崎市宮前区野川3138-17 山口和義(044-777-2460)会員16 名

羽曳野連句会

西田 舟人 連絡先583-0864羽曳野市羽曳が 丘3-16-9西 田 舟 人(0729-56-3576)

浜 風

城倉 吉野 師系·加藤龟女 連絡先241-0831横浜市旭区今宿2666-1城倉 吉野(045-391-2362)会員15名

B 面

内田さち子 師系・名古則子 連絡先176-0023練馬区中村北4-23-4内田さ ち子(03-3970-2468)会員5名

嫪連句会

植松 晴子 師系・鈴木春山洞 連絡先769-1613香川県三豊郡大野原町花稲 907植松晴子(0875-52-2137)

菱の実会

厳 師系・中尾青宵 連絡先210-0824川崎市川崎区日ノ出1-15-11-202巌 涼江(044-277-5143)

美々っと連句会

成田 淑美 師系・宇咲冬男 連絡先354-0018富士見市西みずほ台3-6-1-402成田淑美(049-252-6318)会 員15名

ひよどり連句会茜

陶山 泰子 師系·品川鈴子 連絡先769-1601観音寺市豊浜町姫浜1358-1 陶山泰子(0875-52-5131)会員15 名

ひよどり連句会柿衞

品川 鈴子 連絡先546-0042大阪市東住吉区 西今川4-34-5野口喜久子(06-6702-7875)会員12名

ひよどり連句会 KCC

品川 鈴子 連絡先594-1111和泉市公明台3-9-1竹下昭子(0725-56-3603)会 員12名

ひよどり連句会産経

品川 鈴子 連絡先569-0074高槻市本町15-5 岡本幸枝(0726-75-4307)会員 9 名

ひよどり連句会鈴の会

木村 美猫 連絡先655-0827宝塚市小浜3-6-23-602木村美猫(0797-86-1872) 会員6名

ひよどり連句会東京

静 壽美子 連絡先166-0003杉並区高円寺南 5-15-8静 壽 美 子(03-6313-6791)会員8名

ひよどり連句会縹

花房 八映 連絡先702-8006岡山市藤崎77花 房八映(086-277-7511)

ひよどり連句会毎日

品川 鈴子 連絡先549-0041和泉市いぶき野 3-5-13-801中田寿子(0725-55-5162)会員10名

ひょんの会

松本 昌子 連絡先650-0046神戸市中央区港 島 中 町6-2-1-2-912松 本 昌 子 (078-303-0780)会員 4 名

風狂連句会

二村 文人 連絡先839-8783富山市西中野本 町5-14いぬじま正一(076-421-3494)会員17名 連絡先273-0005船橋市本町6-16-9佐伯俊介(0474-22-5782)

武生連句の会

水上、潤子 連絡先915-0824越前市武生柳町 4-38水上潤子(0778-22-5115)会 員22名

館林連句会

笠原 童中 師系·伊藤 稜志 連絡 先374-0005館林市花山町3315笠原童中 (0276-73-5492)会員10名

多摩連句会

宮下 太郎 連絡 先206-0034多 摩市 鶴 牧2-26-1-112宮 下 太 郎(042-374-7002)

遅刻坂連句会

大久保風子 連絡先330-0053さいたま市浦和 区前地2-9-21大久保風子(048-881-2756)会員20名

中央連句会(協会主催)

連絡先108-0073港区三田2-3-34-901今村 苗(03-3451-1861)

千代の会

奥村富久女 連絡先606-8433京都市左京区永 観堂西町20奥村富久女(075-771-0767)

土筆・有楽帖三吟会

遠藤 嘉章 連絡先214-0039川崎市多摩区栗 谷1-14-16遠藤嘉章

筑波・東京連句会

朝倉 和子 師系・今泉宇涯・引地冬樹 連 絡先145-0074大田区東嶺町38-10朝倉和子(03-3750-0671)会員 12名

筑波・津幡連句会

二羽 智子 師系·今泉宇涯·引地冬樹 連 絡先929-0343石川県津幡町南中 條ト-154-2二羽智子(076-289-3656)会員8名

つばさ連句会

八尾暁吉女 師系·磯 直道·矢崎硯水 連 絡先678-0232赤穂市中広841八 尾暁吉女(0791-43-6117)

津幡連句クラブ

藤江 紫虹 師系・今泉宇涯 連絡先929-0327石川県河北郡津幡町字庄チ 65宮嶋 茂(076-289-4214)会員 26名

天神連句会

八木 紫晓 連絡先816-0931大野城市筒井3-13-12八木紫晓(092-593-2575)

東京義仲寺連句会馬山人記念会

師系·野村牛耳·高藤馬山人 連絡先182-0035調布市上石原2-27-9川野蓼艸(0424-85-5480)会 員10名

桃雅会

杉山 壽子 師系·東 明雅·式田和子 連 絡先464-0032名古屋市千種区猫 洞 通1-5-1-409杉 山 壽 子(052-782-3751) 会員15名

道後連句会

井上 雨道 師系·宇田零雨·松永静雨 連 絡 先799-3111伊 予 市 下 吾 川 1783-41鎌 田 清 隆(089-983-5468)会員 8 名

刀水の宴連句会

田島 正夫 連絡 先108-0074港区 高輪1-1-11-1103田 島 正 夫(03-3473-3160)

稲門連句会俳諧西北の風

伊藤 哲子 連絡先136-0072江東区大島3-26-1-911伊藤哲子(03-3637-8990)会員40名

桃天榭唫聚

赤田玖實子 師系·根津芦丈·清水瓢左 連 絡先228-0818相模原市上鶴問本 町8-3-6赤田玖實子

徳島県連句協会

東條 士郎 連絡先770-8051徳島市沖浜町東 畑589-1東 條 士 郎(088-622-3745)会員30名

徳島連句認話会

鈴木 漠 連絡先650-0045神戸市中央区港 島 中 町3-1-47-202鈴 木 漠 (078-302-2230)

都心連句会

和田 忠勝 師系・清水瓢左・大林杣平・土 屋実郎 連絡先223-0052横浜市 港北区網島東5-22-4和田忠勝 (045-531-7174)会員30名

栃木県連句協会

中尾 硫苦 連絡先329-4406栃木県下都賀郡 大平町下皆川721富田昌宏 (0282-43-2664)

富山県連句協会

山本 秀夫 連絡先930-0114富山市茶屋町 59-61野島清治(076-436-0677) 会員40名

とよあけ連句会

荒川 道子 連絡先470-1114豊明市新田町広 長13-8荒川道子(0562-92-4418) 会員18名

なでしこ連句会

村橋 公子 連絡先874-0902別府市青山町8-13村橋公子(0977-23-6526)

長尾連句会

砂井斗志男 師系·渡邉陽行 連絡先769-2302香川県大川郡長尾町西683-10砂井斗志男(0879-52-4391)会 員10名

渚の会

西岡 恭平 師系・長谷川ひさを 連絡先 760-0011高松市浜ノ町60-25-705西岡恭平(087-851-9006)会 員9名

南草連句会

田島 竹四 連絡先517-0506志康市阿児町国 府1120-69田島竹四(0599-43-1846)会員9名

にほんご連句会

岡本 康子 連絡先182-0006調布市西つつじ が E-2-5-2岡 本康子(03-3326行所 藤野鶴山(0775-25-9159) 会員100名

正風大府支部

久野 渓流 師系・寺崎 方堂 連絡 先470-1143豊明市阿野町上納91-6鈴置 一花(0562-92-4521)会員25名

正風和気支部

桐山 北天 師系·寺崎方堂 連絡先709-0441岡山県和気郡和気町衣笠 171桐山北天(0869-92-0807)会 員10名

上毛連句会

伊藤 稜志 師系·宮下太郎 連絡先371-0811前橋市朝倉町3-5-37伊藤稜 志(027-261-2297)会員15名

白河連句会

売井美三雄 連絡先330-0841さいたま市大宮 区東町2-203-1-502荒井美三雄 (048-644-6446)会員5名

しらさぎ連句会

武田 健 師系·寺岡情雨 連絡先799-1302西条 市 楠1506武 田 健 (0898-66-2212)会員3名

白魚連句会

岡本 耕史 連絡先511-1112桑名市長島町大 倉1-450岡 本 耕 史(0594-42-1469)会員3名

泗楽連句会

西田 青沙 連絡先512-0921四日市市尾平町 3768-188西 田 青 沙(0593-32-8931)会員 9 名

城

瀬尾喜代子 師系・名古則子 連絡先514-2317津市安濃町前野24瀬尾喜代 子(059-268-0267)会員5名

尋 牛 会

連絡先460-8445名古屋市中区栄 4-16-36株電通中部支社内(052-263-8324)会員8名

信州大学連句会

宮坂 静生

師系·根津芦丈·東 明雅 連 絡先399-0025松本市寿台4-5-3 宮坂静生(0263-57-2461)会員40 名

新庄・氷室の会

水沢 安栄 師系・笹 白州 連絡先996-0082新庄市北町5-19永沢安栄 会員6名

新庄北陽社

井上 玲虹 師系·春秋庵幹雄 連絡先999-4605山形県最上郡舟形町長沢 300-1井上玲虹(0233-33-2631)

深大寺連句会

吉成 正夫 連絡先179-0085練馬区早宮3-34-22吉成正夫(03-3994-8055) 会員20名

篠

岡田 史乃 連絡先107-0052港区赤坂6-9-4-301岡田史乃(03-3582-0081)

裾野連句会

宮原うた子 師系・小林静司 連絡先410-1127裾野市平松611-1宮原うた 子(055-992-2932)会員8名

駿河台白雲連句会

大内 善一 連絡先274-0063船橋市習志野台 6-20-15大 内 善 一(047-466-2521)

成城連句会

回杵 游児 連絡先227-0047横浜市青葉区み たけ台2-22日杵游児(045-971-3293)会員6名

青 波

黒田 耕三
連絡先790-0056松山市土居田町
622-10二 宮 → 知(080-56655709)会員 9 名

清流連句会

成能 多喜師系·宇田零雨·松永静雨 連絡先791-0312東温市則之内乙2590-3成能多喜(0899-66-3096)会員7名

浅春連句会

谷敷 寛 連絡先112-0003文京区春日2-25-2谷敷 寛(03-3811-8519)会 貝9名

せんだい座

伊藤 直子 連絡先981-8003仙台市泉区南光 台3-3-9伊 藤 直 子(022-233-7732)会員9名

宗祇白河連句会

福原 重吉 師系・狩野康子 連絡先963-7825福島県石川郡石川町沢井五 反分115田 畑 剛(0247-26-0615)会員13名

宗祇法師研究会

林 茂樹 師系·金子金治郎 連絡先521-1200滋賀県神崎郡能登川町泉台 215-24林 茂樹(0748-42-2037) 会員8名

草門会

川野 蓼艸 師系·野村牛耳 連絡先112-0006文京区小日向1-1-8-505村 松定史(03-3943-6494)会員10名

啐啄会

柏原 和宏 師系·石沢無腸·森 三郎 連 絡先369-1203埼玉県大里郡寄居 町寄居958-2柏原和宏(048-581-0087)会員11名

染井の会

蒲 幾美
 師系・中村俊定 連絡先215-0013川崎市麻生区王禅寺767-36
 蒲 幾美(044-955-8726)

大智院連句会

岡本 耕史 師系·名古則子 連絡先511-1112三重県桑名郡長島町大倉1-450岡本耕史(0594-42-1469)会 員6名

第六天連句会

浅野 黍穂 師系・上甲平谷・清水瓢左 連 絡先272-0836市川市北国分1-2-19星野恵則(047-372-6448)会員 30名

高田馬場連句会

佐伯 俊介

連絡先739-0646大竹市栗谷町大 栗 林739永 野 薫(08275-6-0344)

ころも連句会

矢崎 藍 師系·東 明雅 連絡先448-0803刈谷市野田町東屋敷112稲 垣渥子(0566-21-6316)会員22名

柴 廊

中尾 青宵 連絡先227-0043横浜市青葉区藤 が丘2-25-2中尾青宵(045-973-1760)

栄連句サロン

間瀬 美美 連絡先471-0066農田市栄町6-6-10間瀬芙美 会員15名

佐久良連句会

非門可奈女 師系・栗田樗堂・宮田狸通 連 絡先790-0853松山市道後上市2-6-9-101 井 門 可 奈 女(089-904-4040)会員2名

さくら連句会

中世古正郎 連絡先519-0601伊勢市二見町松 下2085中世古正郎(0596-43-3177)会員4名

さくら草連句会

小林しげと 連絡先339-0926さいたま市緑区 東浦和7-8-2-211澁谷盛興(048-875-1909)

サザン

岡村 糸子 連絡先251-0031藤沢市鵠沼藤が 谷3-6-18岡 村 糸 子(0466-26-8468)会員10名

さつき会

中森 順和 連絡先874-0902別府市青山町8-72南雲玉江(0977-26-9407)

里の会

菅谷 有里 師系・清水瓢左 連絡先248-0017鎌倉市佐助1-14-9菅谷有里

清の會

下鉢 清子 連絡 先277-0052柏 市 增尾 台2-13-5下鉢清子(04-7172-7549)会 | 獅子門麗水社

員30名

清の會なでしこ

松島アンズ 連絡先271-0064松戸市上本郷 2810-3松 島 ア ン ズ(047-362-0081)

三川連句会

磯部 摂子 連絡先501-6242羽島市竹鼻町錦 町35磯部摂子(058-391-2288)会 員23名

鹿の会

實下 太郎 師系・松根東洋城・野村喜舟 連絡先206-0034多度市鶴牧2-26-1-112宮 下 太郎(042-374-7002)

慈眼 舎

赤田玖實子 師系・清水瓢左・三好龍肝 連 絡先228-0818相模原市上鶴間本 町8-3-6赤 田 玖 實 子(0427-45-0407)会員7名

獅子門

大野 急士 師系·各務支考 連絡先503-2216大垣市星飯町377-101堀内 洋子(0584-71-0654)会員100名

獅子門又玄社

成瀬 貞子 師系・國島十雨 連絡先501-1159岐阜市西改田松の木157成 瀬 貞 子 TEL&FAX (058-239-1762) 会員10名

獅子門源氏連句会

文子 船渡 師系・國島十雨 連絡先502-0817岐阜市長良福光2521-12船 渡文子(058-231-1716)会員8名

獅子門花わさび

森川 淳子 師系‧國島十雨 連絡先509-7205恵那市長島町中野829-3森 川淳子(0573-25-4864)会員11名

獅子門藜杖社

瀬尾 千草 師系·國島十雨 連絡先502-0857岐阜市正木1979-25瀬尾千 草(058-231-2400)会員23名

名和よち系 師系·國島十雨 連絡先503-0962大垣市入方2-101-3名和よ ちゑ(0584-89-6435)会員19名

獅子門友楽社

矢崎 初美 師系·國島十雨 連絡先503-2213大垣市赤坂町2072-2矢崎初 美(0584-71-0298)会員8名

静岡県連句協会

宮沢 次男 連絡先410-0822沼津市下香貫 280-1久 保 田 静 男(055-931-7219)会員25名

下町連句会

伊藤 哲子 連絡先136-0072江東区大島3-26-1-911伊藤哲子(03-3637-8990)会員10名

紫薇の会

澁谷 ili 師系・橋 間石 連絡先558-0002大阪市住吉区長居西1-9-2 渋谷 道(06-6691-1395)会員8 名

四宮会

式田 恭子 師系・東 明雅・式田和子 連 絡先167-0034杉並区桃井2-14-5 武田恭子(03-3390-4446)会員10 4

朱の会

柴田 由乃 連絡 先503-0937大 垣 市 釜 笛1-177-2柴 田 由 乃(058-273-4499) 会員9名

樹氷連句会

いぬじま正一 連絡先939-8083富山市西中野本 町5-14いぬじま正一(0764-21-3494)会員6名

湘南吟社

小林 静司 師系・根津芦丈・清水瓢左 連 絡先141-0031品川区西五反田6-23-8小林静司(03-3492-2983)会 日10名

風 IE

藤野 飽山 師系・寺崎方堂 連絡先520-0822大津市秋葉台35-9正風発

兜の会

山下七志郎 連絡先923-0938小松市芦田町2-2松下京子(0761-21-3464)会員 18名

からむし庵連句会

根津 美紗 師系・根津芦丈・東 明雅 連 絡先396-0000伊那市山寺区山本 町3185根津美紗(0265-78-4723) 会員18名

歌林連句会

坂手 手留 連絡先185-0011国分寺市本多1-11-13小 向 敏 江(042-321-0825) 会員20名

カルテット

永田 吉文 連絡先194-0013町田市原町田2-11-20永田吉文(042-722-3809) 会員4名

歌留蓑連句会

金子 鳴陣 連絡先220-0061横浜市西区久保 町46-26-203金子鳴陣 会員18 名

観音寺連句会

野口 雅澄 連絡先768-0040観音寺市柞田町 油井 野口雅澄(0875-25-0979) 会員8名

願成寺歌仙の会

田中 雅子 連絡先969-6411福島県大沼郡会 津美里町立石田上台甲457田中 雅子(0242-78-3212)会員7名

神田分教場連句会

川名 將義 連絡先232-0076横浜市南区永田 台48-16川 名 将 義(045-713-1388)

きさらぎ連句会

小池 正博 連絡先594-0041和泉市いぶき野 2-20-8小池正博(0725-56-2895) 会員10名

樹の会

土屋 実郎 連絡先233-0012横浜市港南区上 永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)会員5名

其 角 座

土屋 実郎 連絡先233-0012横浜市港南区上 永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)会員13名

義仲寺横浜戸塚連句会

八木 荘一 連絡先245-0067横浜市戸塚区深 谷 町671八 木 荘 -- (045-851-1655)会員17名

義仲寺連句協会

師系·斉藤石叟 連絡先520-0802大津市馬場1-5-12義仲寺 (0775-23-2811)会員15名

岐阜県連句協会

大野 鵠士 師系·各務支考 連絡先500-8415岐阜市加納中広江町68松尾 一歩(058-274-9479)

錦心会

渡部 伸居 師系·野村喜舟 連絡先791-0241松山市小野町15渡部伸居 (0899-75-1532)会員10名

句華苑吟社

吉本 世紀 連絡先328-0036栃木市室町1-13 吉本画廊内吉本世紀(0282-23-3665)

くさくき

職 直道 師系·藤井紫影·宇田零雨 連 絡先332-0023川口市飯塚4-4-7 磯 直 道(048-251-3033)会 員 240名

くさくき川口支部

磯 直道 師系·宇田零雨 連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯 直道 (048-251-3033)会員25名

くさくき北九州支部

守口 薫 師系·宇田零雨 連絡先871-0811福岡県築上郡吉富町大字広 津915守 口 薫(0979-23-3145) 会員25名

くさくき松山支部

吉金 白水 師系·宇田零雨 連絡先791-0101松山市溝辺町720-1吉金白 水(089-977-1722)会員10名

草笛連句会

名本 敦子 師系·大西素之 連絡先791-1114松山市井門町40-1立花千代 満(089-957-8538)会員8名

郡上みよし野連句会

天野 收一 連絡先501-4216岐阜県郡上郡八 幡町本町 天野收一(0575-65-1591)

くすのき連句会

牧野 正弘 連絡先158-0098世田谷区上用賀 6-3-8-103牧 野 正 弘(03-3426-4698)会員8名

くのいち連句会

内山 秀子 師系·暉峻桐雨 連絡先101-0047千代田区内神田2-12-5内山 回漕店方 内山秀子(03-3252-2941)会員8名

兼載忌記念連句会

田中 雅子 連絡先969-6411福島県大沼郡会 津美里町立石田上台甲457田中 雅子(0242-78-3212)会員15名

耕

加藤 耕子 連絡先467-0067名古屋市瑞穂区 石田町1-36加藤耕子(052-841-5054)

興聖寺連句会

岡本 眸 師系·宇田零雨·松永静雨 連 絡 先790-0856松 山 市 南 町1-5-21-604川嶋七重(089-945-1308)

高知癒しの連句桜蓼会

山崎 曙 師系·寺田寅彦 連絡先780-0010高知県高岡郡窪川町窪川 1145-5山崎 曙(08802-2-2097) 会員15名

神戸の風・海岸通連句会

内田 美子 連絡先650-0024神戸市中央区海 岸通6-2-14-2305内田美子(078-958-8278)会員7名

小瀬川連句会

永野 薫

五十鈴吟社

山口 圭子 師系・清水瓢左・名古則子 連 絡先519-0502伊勢市小俣町相合 605山口圭子(0596-22-2877)会 員3名

いさよひの会

鈴木美智子 連絡 先177-0032練 馬 区 谷 原5-20-14鈴 木 美 智 子(03-3925-5930)会員 4 名

石手寺連句会

岡本 眸 師系·宇田零雨·松永静雨 連 絡先790-0053松山市竹原3-5-26 紀伊郁子(089-973-2663)会員 8 名

伊豆芭蕉堂連句会

石渡 蒼水 師系·斉藤石叟 連絡先414-0014伊東市弥生町3-2石渡蒼水 (0557-37-1831)会員10名

市川俳諧教室

伊藤 貴子 師系·宇田零雨·今泉宇涯 連 絡先264-0006千葉市若葉区小倉 台1-12-3伊藤 貴 子(043-233-3555)

いなみ連句の会

山本 秀夫 師系·東 明雅·二村文人 連 絡先932-0211南砺市井波2077-1 山本秀夫 TEL&FAX(0763-82-0270)会員31名

茨城県連句協会

堀江 信男 連絡先319-1225日立市石名坂町 1-31-9根 本 美 茄 子(0294-53-6635)

いわき文音連句の会

林 義雄 連絡先185-0014国分寺市東恋ヶ 窪2-29-3林 義 雄(042-324-1831)会員4名

岩手県連句協会

小原 啄葉 連絡先020-0875盛岡市清水町1-33沼田和子(019-622-7907)

Web BBS めぎつね座

雨 乞 小 町 連絡先471-0822豊田市水源町41-16矢崎 藍(0565-26-9324)会 員不特定数

NHK文化センター青山

和田 忠勝 連絡先223-0052横浜市港北区網 島東5-22-4和田忠勝(045-531-7174)会員12名

大分県連句協会

中森 順和 連絡先847-0902別府市青山町8-72事務局南雲玉江

大住連句会

竹村 左京 連絡先257-0024秦野市名古木 111-16竹村左京(0463-83-2208) 会員15名

桜花学園大学連句研究会

矢崎 藍 連絡先471-0822豊田市水源町4-1-16矢崎 藍(0565-26-9324)

桶川連句会

福田太ろを 連絡先363-0028桶川市下日出谷 西2-6-4福 田 太 ろ を(048-787-4477) 会員10名

丘の上連句会

中尾 青宵 連絡先206-0031多摩市豊ヶ丘1-40-2-203塙 於 玉(042-375-2543)会員15名

小郡連句会

河野 玄麿 師系·松根東洋城·阿片瓢郎 連絡先754-0000山口県吉敷郡小 郡町津市上 河野玄麿(08397-2-0599)会員5名

おたくさ(OTAKSA)の会

鈴木 漠 連絡先650-0045神戸市中央区港 島 中 町3-1-47-202鈴 木 漠 (078-302-2230)会員8名

小野連句会

渡部 伸居 師系·松根東洋城·阿片瓢郎 連絡先791-0243松山市平井町 1319-1渡辺就子(089-975-8569)

海市の会

鈴木 漠 連絡先650-0046神戸市中央区港 島 中 町3-1-47-202鈴 木 漠 (078-302-2230) 会員 4 名

解 纜

別所真紀子 師系・野村牛耳・林 空花 連 絡先166-0003杉並区高円寺南5-23-8服部秋扇(03-3314-0655)

蛙の会

中尾 青宵 連絡先227-0043横浜市青葉区藤 が丘2-25-2中尾青宵(045-973-1760)

香川連句会

鎌田 孝義 連絡先763-0013丸亀市城東町1-3-26鎌田孝義 会員20名

雅秀会

小川 邦昭 連絡先999-5201山形県最上郡鮭 川村京塚3430小川邦昭(0233-55-2401)

風の香連句会

三浦 和枝 師系·澁谷 道 連絡先996-0082新庄市北町4-6三浦和枝 (0233-22-2280) 会員6名

河童連句会

矢崎 砚水 師系·宇田零雨 連絡先392-0004諏訪市諏訪2-10-22矢崎砚 水(0266-52-0251)会員15名

花扇会

宮 県人 連絡先344-0116埼玉県北葛飾郡 庄和町大 衾600-4二宮方 宮 県人(0487-46-1443)会員5名

桂の会

回杵 游児 連絡先227-0047横浜市青葉区み たけ台2-22日杵游児(045-971-3293)会員16名

金石公民館俳諧研究会

松本 苔花 連絡先920-0337金沢市金石西4-5-32松本苔花(0762-67-1045)

かびれ連句会

大竹多可志 師系·大竹孤悠 連絡先116-0011荒川区西尾久8-30-1-1416 大竹多可志(03-3819-1459)

全国連句グループ概況

①グループ名 ②代表者氏名 ③師系 ①連絡先(住所・電話番号) ⑤会員数

(五十音順)

ああの会

市川 千年 師系・村野夏生・川野蓼艸 連 絡先789-1201高知県高岡郡佐川 町甲1452-1市川千年(0889-22-1604)

会津の会(超結社)

磯 直道 連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯 直道(048-251-3033)

青葉連句会

八島美枝子 師系·宇田零雨 連絡先145-0061大田区石川町2-32-8八島美 枝子(03-3728-0712)会員9名

赤のままの会

本屋 良子 連絡先166-0003杉並区高円寺南 5-23-8服 部 ま さ 子(秋 扇) (03-3314-0655)

茜 連句会

竹内 茂翁 連絡先516-0036伊勢市勢多町 915-31冨田方 竹内茂翁(0596-24-7673)会員3名

紫陽

藤田 明 連絡先514-0114津市一身田町 285藤 田 明(0592-32-6438)会 員6名

あした連句会

白根 順子 師系·宇咲冬男 連絡先360-0014熊谷市箱田2-13-5白根順子 (048-521-3422)会員40名

あした梶の葉連句会

山司 英子 師系・宇咲冬男 連絡先364-0035北本市西高尾7-83川岸富貴 (048-591-5208)会員12名

あした芭蕉記念館連句会

自根 順子 師系·宇咲冬男 連絡先135-0003江東区猿江1-2-2-501松澤 晴美(03-3634-4094)会員17名

あした本庄連句会

白根 順子 師系·宇咲冬男 連絡先367-0061本庄市小島1-4-11田口明子 (049-522-5825)会員7名

あしべ俳諧塾

東條 士郎 師系·吉岡梅游·片山多迦夫 連絡先633-0077桜井市大西834 森 智子(0744-42-5248)会員11 名

梓川連句会

金井 教子 師系·根津芦丈·宮坂静生 連 絡先390-1700長野県南安曇郡梓 川村杏 金井教子(026378-3808)会員25名

天の川連句会東京支部

大谷似智子 師系·三好龍肝·福田眞久 連 絡先242-0001大和市下鶴間4266 大谷似智子(046-274-3420)会員 13名

天の川連句会新宿西塾

芹田 恵子 師系・三好龍肝・福田眞久 連 絡先330-0015さいたま市見沼区 連沼873-17芹田恵子(048-686-6549)会員10名

彩連句会

鈴木美由紀 師系・磯 直道 連絡先330-0052さいたま市浦和区本太5-17-10鈴 木 美 由 紀(048-813-7477)会員7名

鮎可部連句会

久保 俊子 連絡先731-0202広島市安佐北区 大林町315久保俊子(082-818-2719)

鮎倉橋島連句会

奥田恵以子 連絡先737-1314広島県安芸郡倉 橋町鹿老渡 奥田恵以子(0823-54-1296)

鮎須川連句会

藤本 幸子 連絡先737-2100広島県安芸郡倉 橋町須川 藤本幸子(0823-53-1255)

鮎連句同好会

高橋 昭三 連絡先731-0223広島市安佐北区 可 部 南4-5-47高 橋 昭 三(082-815-1914)会員35名

あらくさ連句会

連絡先294-0006逗子市逗子2-4-5北沢義弘(0468-71-5393)会員 限定

阿吽の会

梅村 光明 連絡 先770-0868徳 島 市 福 島1-10-16梅 村 光 明(088-652-1989) 会員 6 名

安津濃連句会

湯浅 重好 連絡先514-0823津市半田934-47 湯浅重好(059-225-3094)会員3 名

飯田連句会

吉池 保男師系·東 明雅 連絡先395-0806飯田市鼎上山3181-1吉池保 男(0265-23-1484)会員10名

伊賀連句会

山村 俊夫 師系·清水瓢左·名古則子 連 絡先518-0878伊賀市上野西大手 町3687-9山 村 俊 夫(0595-21-5068)会員12名

伊勢原連句会

近藤 蕉肝 連絡先259-1141伊勢原市上粕屋 1766大津博山(0463-94-3402)会 員13名

全国連句グループ概況

○編集

〒33-05さいたま市浦和区前地二―九―二

(電話・FAX 〇四八一八八一一二七五六) 大久保風子

○購入申込·発送 〒37-88前橋市朝倉町三—五—三七

861 相下草須田三 三十 伊藤 稜志

(電話 〇二七—二六一—二二九七)

〇会計・送金先 〒33-93桶川市下日出谷西二―六―四

福田太ろを

(電話·FAX 〇四八—七八七—四四七七)

郵便振替 〇〇一三〇—二—四六二〇七九

加入者名

福田 太郎

○連句協会会員名簿担当 〒23-05横浜市港北区綱島東五— 二一四四

和田 忠勝

(電話·FAX 〇四五—五三一—七一七四)

Ш 後 記

く六月中の発刊に漕ぎ着けました。御協力に感謝申し上げます。 の意義を果たすべく皆様のお原稿の締切を二月末日として、ようや

嬉しくなりました。また、本屋良子氏の茶事俳諧で、大久保先生のエッセイの 教え子の学生相手に連句を実践していらっしゃることを垣間見ることができて *巻頭の文章には連歌研究者の奥田勲先生、比較文学専門の大久保喬 樹先 4:

*作品は一八一巻の投稿で、形式は歌仙が一二五巻で6%です。 中の茶会の仕組みの分析と合わせてみると一層おもしろく読めました。 オン座六

獅子、連句詩

等が約1割で、新たな形式を楽しんでおられるようです。 スワンスワン、Wソネット、箙、 胡蝶、 源心、蜻蛉、 二十八宿、 大久保風子

た中での編集でした。Nは突如入院騒ぎを起こしました。皆、暮らしの波をか *編集部の日は足の骨折に耐えがんばりました。 Jは結社の仕事を山ほど抱え

いくぐっての仕事でしたので六月という計画通りの発刊を嬉しく思います。

試みの一つが新企画「私の好きな一巻」でした。本文をご覧くださればお分か いつも新しいものを発見し古いものを大切にしたいと心がけています。 その

りのように、 応募数は三○幾つでした。これを多いというのか少ないというの

の出さなかった人に聞くと、全部の作品は読み切れないからという返事が多か 受け取り方は様々でしょうが、私たちは有難くいただきました。 私の周

ったのですが、好きについてもう少し軽く考えてくださるといいなというのが

なりました。机の上で文字と向き合うことなら、 *十年前のことです。連句協会の常任理事会で「一人一役」を遂行することに 自分の好きな時間に様々な形

私の感想です。

たが、毎年どーんとゲラが届けられてからの一カ月は、 受けいたしました。 式の連句の勉強も出来るのではと勘違いして、『連句年鑑』 それから十年、二千巻を越す作品を読ませていただきまし ノルマを熟すことに精 の校正係をお引き

詞だったりします。 り電子辞書の「漢字検索」を叩くのですが、どうやら当て字だったり、固有名 一杯、まして「素読み」の立場の私は、浅学ゆえに怪しい字画の漢字が気にな ルビの多用の作品とあわせて、連句界も変わってきてい

と思うこの頃です。

白根順子)

平成二十五 年六月十七日 印刷

平成二十五年六月三十日 発行

平成二十五年版 連句年鑑

定価 二、五〇〇円

編集人代表 大久保 風 子

発行所 〒23-05横浜市港北区網島東五-二二-四

連 句 協 会

和田方

電 話〇四五十五三二十七一七四

印刷所 〒34-00埼玉県草加市稲荷二十二十七

株式会社 朝陽会

让 FAXO四八一九五一一二八三九 話〇四八一九五一一二八三一

